

Title	ブラジル日系社会言語調査報告
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2004, 44(2), p. 1-460
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

### ブラジル日系社会言語調査報告

工藤 真由美



# 

(はじめに】	1
⟨謝辞⟩	3
記録・保存事業について】	4
· 研究調査結果概略】 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	7
〈論文・報告編〉	
· As línguas faladas nas comunidades <i>nikkei</i> do Brasil (Segunda Fase)	
<ul> <li>Da pesquisa sobre o português falado pelos nikkeis (objetivos e processo)</li> </ul>	
	15
· As línguas faladas nas comunidades <i>nikkei</i> do Brasil (Segunda Fase)	
— Da pesquisa sobre o português falado pelos <i>nikkeis</i> : avaliação e	
resultados preliminares	
Sonia Regina Longhi Ninomiya (UFRJ) / Elza Taeko Doi (Unicamp) · · · ·	31
· Breve perfil histórico das escolas japonesas das Comunidades Alianças	
(município de Mirandópolis) e Fukuhaku-mura ou Vila Ipelândia	
(município de Suzano)	
Leiko Matsubara MORALES (USP) / Junko OTA (USP) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	65
· BIBLIOGRAFIA SOBRE A LÍNGUA JAPONESA E SEU ENSINO:	,
TEXTOS PUBLICADOS NO BRASIL (livros, dissertações, teses,	
artigos em periódicos e publição em anais, escritos em português e	
outras línguas, exceto japonês)  Junko Ota (USP)	100
Junko Uta (USP)	103

· BIBLIOGRAFIA SOBRE O CONTATO LINGÜÍSTICO: TEXTOS
PUBLICADOS NO BRASIL (1,2) (período de 1974-2001). (livros, dissertações, teses, artigos em periódicos e publiçãcao em
anais, envolvendo o português e outras línguas, exceto japonês)
Elza Taeko Doi(Unicamp) / Arissa Saeki (Unicamp) ······ 115
・ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言説
— 1908年から1980年代末まで —
(資料編)
【ブラジル日系人の言語生活調査票】
【「ブラジル日系人の言語生活調査票」実施マニュアル】 177
【言語生活調査データ】
【談話収録調査の概要】 387
【談話収録調査データ】 411
【サンパウロ人文科学研究所所蔵ブラジル日系社会日本語・
日本文学関係文献一覧】 453

はじめに

#### (UUBC) and an action assistance at a management of paid of conject a reden-

本稿は、大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」・「言語の接触と混交」研究事業の一環である、ブラジル日系社会における日本語の実態に関する国際共同研究成果の一部を公開するものである。

全体の構成は「論文・報告編」「資料編」からなるが、最初に本共同研究のあらましと研究調査結果概略を、「論文・報告編」ではブラジル側研究班による研究発表を、「資料編」では研究調査データを掲載している。なお、本稿の具体的な内容に関しては、平成15年度刊行の大阪大学21世紀 COE 報告書の方もあわせて参照されたい。

最初に、本共同研究推進に向けて作成された研究事業趣意書掲載の挨拶文(日本班代表: 工藤真由美、ブラジル班代表:Elza Taeko Doi)を掲載する。

#### 研究事業の推進に向けて

- 1. Program - 1.

1

このたび、大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」・「言語の接触と混交」研究班におきましては、ブラジル日系社会の言語に関する総合的研究を組織することになりました。日本とブラジルとの関係は、2008年にはブラジル日本移民百年を迎えるなど、今後ますます重要なものとなっていくことでしょう。われわれは、この総合的学術交流を通じて、真の日本・ブラジル友好に貢献できますことを切に願っております。

本研究事業の特色は以下の三点あります。

第一に、総合的な言語調査研究を実施する点です。これまでのブラジル日系社会の言語研究の成果を踏まえつつ、奥地農村と近郊農村との比較という総合的な言語生活調査を実施するなど、本格的なブラジル日系社会の言語調査が計画されています。

第二に、言語調査と並行して、文化人類学や社会学、地域研究といった学際的見地から、ブラジル移民に関する文献資料調査も実施される点です。特にブラジル日系社会の日本語を記述した言語資料の探索は、他の学問分野との交流を可能にする上でも大いに期待できるところです。

最後に、包括的で緻密な研究事業が組織されている点です。本研究事業は日本とブラジルの日本語研究者が協力し合い、共同作業として歩調をあわせるという、人文科学研究にとっても大変のぞましい姿を先取りしているとも言えましょう。

われわれはいくつかの試行調査や文献収集を通して、本研究事業のあるべき方向について 多くの検討を行ってまいりました。今後とも何卒皆様のご支援、ご鞭撻を賜りますよう宜し くお願い申し上げます。

#### Sobre o Projeto : A Língua Japonesa da Comunidade Nikkei no Brasil

Elza Taeko Doi

Decorrido quase um século desde a chegada dos imigrantes japoneses ao Brasil, podemos dizer que a língua japonesa falada no Brasil, conhecida popularmente na comunidade nipo-brasileira como Koronia-go (lit. "língua da colônia"), não tem ainda merecido uma pesquisa abrangente que cobrisse as várias áreas de estudos lingüísticos. O que se tem verificado são análises de alguns aspectos particulares da língua.

Embora a imigração japonesa tenha ocorrido também em outros países 9 Estados Unidos, Paraguai, Peru, Bolívia), podemos dizer que não há ainda uma documentação organizada do japonês utilizado em cada um desses países. Além do caráter pioneiro no que se refere ao registro de japonês fora do Japão, o presente projeto apresenta também uma importância na caracterização de uma língua que sobreviveu (pelo menos até o momento) como uma língua minoritária no contexto brasileiro, por quase um século.

Além de seu valor documentário, esta pesquisa traria contribuições para compreender a trajetória e as mudanças sofridas na língua japonesa ao longo da história da imigração japonesa no Brasil e, em uma perspectiva mais ampla, para a reflexão sobre o comportamento das línguas de imigração no mundo. Nesse sentido podemos pensar tanto em termos de línguas de outras imigrações no Brasil, como é o caso do italiano, alemão, polonês e outros, quanto do japonês em imigrações japoneses a outros países.

Temos grandes expectativas de que o presente projeto, que ora se inicia como uma realização conjunta com pesquisadores do Japão e do Brasil, venha a propiciar outros desdobramentos para pesquisas futuras que envolvam não apenas a análise e descrição de fatos lingüísticos, mas também a reflexões sobre a manutenção e ensino da língua; além de contribuir para a formação de futuros pesquisadores na área.

(共に研究事業趣意書より転載)

#### 【謝 辞】

本調査研究においては、様々な方々のお世話になった。とりわけ、言語生活調査と談話録音調査を行ったアリアンサ、スザノ福博村の方々には、心よりお礼申し上げたい。また、文献調査にあたっては、宮尾進氏(サンパウロ人文科学研究所)、大井セリア氏(ブラジル日本移民史料館)、サンパウロ大学日本文化研究所のお世話になった。国際交流基金サンパウロ日本文化センターにもご尽力いただいた。柴田実氏(NHK 放送文化研究所)には談話収録の件で温かいご支援をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。さらに中川康弘氏、今井美登里氏、飯塚往子氏、石田由美子氏、畠中みゆき氏、松田香織氏(以上、桜美林大学)、熊崎さとみ氏(信州大学)、大槻清美氏(京都外国語大学)、高木千恵氏、Paiboon、Patjareesakul 氏、Ponsan、Tanan 氏(以上、大阪大学)、岡田ひとみ氏(大阪外国語大学)には、調査の実施や事後の文字化作業などにおいて大変なご尽力をいただいた。直接お会いしてお礼を申し上げる機会がないままに現在に至っているが、この場を借りてお礼申し上げたい。

(工藤真由美)

#### 【記録・保存事業について】

本研究事業の名称は「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」である。ブラジル日系社会における日本語の実態について,ブラジル諸大学における日本語関係学科所属の研究者と連携して遂行される国際共同研究として組織された。具体的には,

- (1) ブラジル日系社会の総合的言語生活調査研究
- (2)ブラジル日系社会の日本語談話資料の記録保存事業・予備調査結果概要
- (3)ブラジル日系社会の言語および言語教育に関する先行研究・文献資料調査研究
- (4) ブラジルにおける日本語研究業績紹介および日本における日系人の言語研究業績紹介
- (5) ブラジル年少者に対する多言語下日本語教育の開発的研究 上記五項目を中心に、日系社会の言語に関する問題を立体的にとらえていこうとするものである。はじめに、この研究事業についての概略を示す。

#### 1. 研究調査に向けてーシンポジウムについてー

研究調査に先駆けて、2003年3月11日(火)に「越境する日本語―ブラジル日系社会の言語をめぐって―」(13:00~16:30 於大阪大学文学部中庭会議室)と題する国際研究会(シンポジウム)が開催された。開会挨拶には真田信治(事業推進者)があたり、工藤真由美(事業推進者)から次の特色をもった研究事業である旨の説明がなされた。(1)総合的な言語調査研究を実施する点。これまでのブラジル日系社会の言語研究の成果を踏まえつつ、奥地農村と近郊農村との比較という総合的な言語生活調査を実施するなど、本格的なブラジル日系社会の言語調査が計画されていること。(2)言語調査と並行して、文化人類学や社会学、地域研究といった学際的見地から、ブラジル移民に関する文献資料調査も実施される点。特にブラジル日系社会の日本語を記述した言語資料の探索は、他の学問分野との交流を可能にする上でも大いに期待できること。(3)包括的で緻密な研究事業が組織されている点。本研究事業は日本とブラジルの日本語研究者が協力し合い、共同作業として歩調をあわせるという、人文科学研究においても大変望ましい姿を先取していると言えること。以上の三点である。

各報告者から以下の題による報告がなされた。

馬瀬良雄「急がれるブラジル日系社会の言語研究」

Doi Elza Taeko「ブラジル多言語環境における日系社会の言語 |

森幸一「ブラジル日系人の「日本語」と「コロニア語」をめぐる動向と主要言説-1908

年~1960年代まで一」 佐々木倫子「ブラジルと日本を結ぶ言語調査研究」

#### 2. 研究調査事業の流れと概要

初年度においては、共同研究者との第1回研究会を2002(平成14)年12月15日に,さらに 日本では第5回研究会を2003 (平成15) 年1月18日に、第7回研究会を2003 (平成15) 年2 月17日に実施し、次年度における本格的調査の準備を検討した。具体的には、在東京ブラジ ル日系家族に対する予備調査を1月に実施(中東靖恵,レオナルド・メロ),昨年度にブラ ジル側において収集された談話資料の一部文字化作業を試行しつつ,文字化原則の方法論を 検討(中東、李吉鎔)、さらに社会言語学的見地から本格的に構成された言語生活調査票の 考案 (エレン・ナカミズ, 李) がなされた。また、ブラジル日系社会の日本語に関する先行 研究並びに文献資料の調査を実施(山東功)し、約100件の研究論文を収集した。同期間中、 ブラジル側においても Elza Taeko Doi (ブラジル側代表) の指揮下のもと、ブラジル内研 究者共同研究会が4回組織され、言語調査に関する具体的手順や方法論について討議が行わ れた。討議の結果, ブラジル日系社会の調査研究に関しては, 談話録音事業と言語生活調査, 文献調査の三点が最重点項目であることが確認された。さらに、いわゆるコロニア文学と称 されるブラジル日系社会の文学作品や、日系日本語新聞、日系移民一世の自伝や伝記といっ た文献に対する予備調査もブラジルにおいて継続的に実施されている(森幸一)。2003(平 成15)年3月10日には日本側とブラジル側との合同研究会を実施、翌3月11日には、先述の シンポジウムが開催された。以下に具体的な調査研究内容についての概略を示す。

#### I. ブラジル日系社会の総合的言語生活調査研究

表題研究は本研究事業の根幹をなすものであり、ブラジル日系社会における本格的な言語生活調査研究として位置付けられるものである。具体的な言語生活調査に先立って、在東京ブラジル日系家族に対する予備調査を1月に実施し、その過程で言語生活調査実施上の問題点に関する総点検を実施した。この結果は中東靖恵、レオナルド・メロ「ブラジル日系社会における言語の総合的研究に向けて(1)」(『岡山大学文学部紀要』39、2003)で公表された。さらに社会言語学的見地から構成された言語生活調査票(エレン・ナカミズ、李)を考案した。

#### Ⅱ. ブラジル日系社会の日本語談話資料の記録保存事業・予備調査結果概要

ブラジル日系社会における言語の記述と分析に先立ち, ブラジル在住の日系1世の談話録

音資料(ブラジル・カンピナス州立大学所蔵:ブラジル側研究代表者 Elza Taeko Doi 収録)を文字化することになった。約1時間の録音テープを4名で分担し,文字化作業を行った結果,ブラジル日系1世のフォーマル場面における日本語運用と日本語とポルトガル語が接触・混交することによって生まれた言語事象の実態について,その一部を明らかにすることができた。

#### Ⅲ. ブラジル日系社会の言語および言語教育に関する先行研究・文献資料調査研究

ブラジル日系社会の日本語に関する研究史的定置とその検討を行い,成果の一部は山東功「ブラジル日系人の日本語への視点」(『女子大文学』54,2003)で公表された。ブラジル日系人の日本語に関する研究については日系人の手による生活誌的記述から出発した関心の時期(1960年代以前)から,日本からの研究者派遣による国語学・言語学的研究時期(1970年代)を経て,社会言語学,日本語教育学的観点からの研究時期(1980年代以降)という展開が見受けられる。また,本論文では書き言葉資料の有用性可能性についても言及した。

#### Ⅳ. ブラジルにおける日本語研究業績紹介および日本における日系人の言語研究業績紹介

ブラジルにおける日本語研究業績についての紹介を主たる目的としている。ブラジルにおける日本語研究文献は多数存在しているにもかかわらず、そのほとんどがポルトガル語によるものであったため、日本国内での紹介が十分になされてこなかった。本研究事業は、世界の中の日本語という観点から外国における日本語研究の意味を総括的に検討していく上でも大いに有意義なものである。

#### V. ブラジル年少者に対する多言語下日本語教育の開発的研究

表題研究については、本格的な実施を平成16年度以降に予定しているが、本年度までに「ブラジル年少者に対する日本語教育に関する調査研究」が2003年1月に予備調査として佐々木により実施された。

(山東 功)

#### 【研究調査結果概略】

#### I 言語接触・方言接触への包括的・動態的アプローチ

グローバル化の現在, Cambridge Approaches to Language Contact シリーズが刊行される等, 世界の様々な地域での言語接触あるいは接触言語の研究が, 大変盛んになってきている。日本語を中心に考えれば, 現在これが最もダイナミックに起こっているのは,「ウチナーヤマトゥグチ」と「コロニア語」というような名称が使用されていることから判断しても,国内においては沖縄地域であり,国外においてはブラジル日系社会ではないかと思われる。本プロジェクトは,ブラジル日系社会における,日本語とポルトガル語という系統の異なる言語の接触状況に、包括的かつ歴史的(動態的)にアプローチしようとしたものである。

言語接触論をめぐっては、大きく言えば次の3つ(アイデンティティのレベルを分けるとすれば4つ)のレベルの相関性を考慮した上での「統合的アプローチ」が求められるであろう。

- ① 政治,経済,社会的レベル
- ② 言語行動レベル (言語使用と意識)
- ③ 言語構造レベル

また、これらの3つの側面は、極めて単純化して言えば、①のレベルの変化が②のレベルの変化をもたらし、②のレベルの変化が③のレベルの変化を促すことから、「歴史的・動態的」に把握していく必要があろう。

さらに、言語の問題を中心に考えれば、ブラジルへの日系移民は、2つの障壁に直面したことが考えられる。1つは、ポルトガル語というブラジルにおける優勢言語への対応の問題である。もう1つは、(移民時の年齢や教育歴の問題等を考えても)様々な方言を母語とする移民間で日本語によるコミュニケーションを行うにあたっての地域共通語としての日本語の生成の問題である。従って、ブラジル日系社会では、単純な日本語とポルトガル語の接触ではなく、日本語内部の方言接触とポルトガル語との接触が重層的に起こったと考えなければならないのである。(なお、ポルトガル語内部でのバリエーションについては、今回の調査研究では取り上げる余裕をもたなかった。)

以上のことから,本プロジェクトは,日本とブラジル双方の,文化人類学,社会言語学, 応用言語学(日本語教育学),狭義言語学を専門とする研究者による国際的・学際的プロジェクトとして,予備調査を経た上で,次のような系統的調査を実施した。

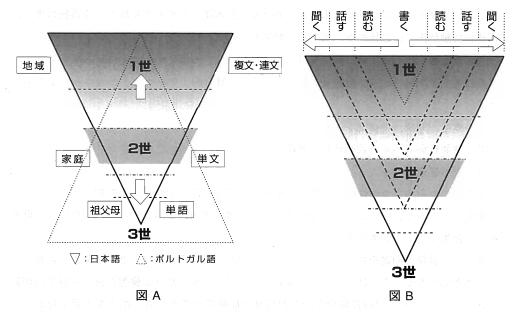
- (1) サンパウロ人文科学研究所において2000~2001年にかけて実施されていた 『日系社会実態調査』に基づいた「言語生活調査」の実施。
- (2) 「言語生活調査」に基づいた「談話収録調査」の実施とその文字化。

#### (3) 同時並行的に、文献調査や日本語教育に関わる聞き取り調査等の実施。

精密な分析とモデル化等はすべて今後の課題であるが、以下では、日本語の側面を中心に、世代差を軸とする「言語生活調査」と「談話録音調査」の結果の、現時点における概要を示すことにする。なお、本データは暫定的なものであり、詳細な検討は今後の重要な課題である。

#### Ⅱ. 世代の移行と日本語の動的諸相

極めて単純化して図式化すれば、次のようになる。



まず、左の図を見られたい。太線の逆三角形は「日本語」であり、細線の三角形は「ポルトガル語」である。「1世」「2世」「3世」ごとに、日本語からポルトガル語への移行の連続性が示されている。同時に、日本語とポルトガル語の能力と使用において、1世と3世が鏡像関係にあることも示されている。典型的なかたちで、日本語とポルトガル語の二言語話者が生まれ、文レベルのコードスイッチングが頻繁に起こってくるのは、網掛け部分で示した2世である。左側の「地域」「家庭」(「祖父母」)は、ドメインであり、右側の「複文・連文」「単文」「単語」というのは、言語構造的側面である。ドメインの縮小化と言語構造面での単純化が相関していることを示している。太線の逆三角形の上部は、4技能である。複雑化を避けるため、これを取り出して図式化したのが、右図である。ここでは、1世では4技能が揃っていること,逆に3世では「聞く」能力に限定されてきていることが示してある。

以下,上記のことを踏まえて,少し詳しく説明することにする。(ポルトガル語に関わる 言語生活調査の分析,ならびにブラジル側研究者によって実施された談話録音調査の整理が まだ進んでいないため、日本語を中心に示す。)

- (1) ここで「1世」としてあるのは、(現時点での分析結果において、成人移民と戦前の子供移民の間に顕著な差が見られなかったため)日本生まれの移民すべてを含んでいる。 (戦前の子供移民が、教育歴に関わらず、成人移民と変わらない日本語を身に付けているのは、地域における日本語の機能やアイデンティティの問題、あるいは国語としての日本語意識の問題などを含んでいると予想されるが、この点の分析は今後の課題である。)この1世の特徴は、次の4点にある。
  - ①家庭ドメインのみならず家庭外ドメインでも日本語を使用
  - ②日本語は聞き話す能力のみならず,読み書く能力も備えている。
  - ③上記の点と相関して、複雑な構造をもつ文を単位としての(日本における日本人と基本的に変わらない)談話構成能力をもっている。
  - ④出身方言は明示的に出てこず、様々な地域出身の移民間で地域共通語としての「コロニア日本語」とでも言うべき方言接触による日本語のバリエーションが生成されている。
- (2) 「2世」には,様々な様相があるのだが,1世寄りのタイプ,3世寄りのタイプ,その中間の最も2世らしいタイプに3分類してモデル化している。2世のバリエーションをもたらす要因としては,(a) 言語形成期の言語が日本語かポルトガル語か,(b) ブラジルにおける教育程度の高低,が絡んでいるようである。基本的に,言語形成期の言語が日本語であり,高くない教育歴の2世は,日本語能力(聞き話す能力)が高く,言語形成期の言語としてポルトガル語が関わり,ブラジルでの教育歴の高い2世は,日本語能力は3世に近くなっている。大きく言って,2世の特徴は,次の点にある。
  - ①ドメイン的には、日本語使用は「家庭内」への限定化が進む。
  - ②聞き・話しの2技能への限定化が進む。
  - ③上記のことと関わって、コミュニケーション活動の単位としての文の構造の単純化(複文よりも単文を多用)が進む。そして逆に、ポルトガル語が、基本的に単語レベルの借用にとどまっている1世とは異なり、2世では、文レベルの日本語とポルトガル語のコードスイッチングが頻繁に起こってくる。日常的な話題では日本語を、抽象的な話題ではポルトガル語を使用するというような切り替えも見られる。
  - ④「コロニア日本語」とでも言うべき接触方言としての日本語のバリエーションは、1 世と同様に使用されている。
- (3) 「3世」になると、基本的に日本語からポルトガル語への移行が完成している段階である。(ただし、今回の調査では、3世の調査対象者数が少ないため、絶対化はできない)

日本語能力に差がでてくる要因としては, (a) 日本語教育歴の有無, 長短と (b) デカセギ 経験の有無, 長短が, 絡んでいるようである。3世の特徴は次のようになる。

- ①「祖父母」がいる場合に、「祖父母」との会話において、日本語を使用、習得している 。 (これは、日本語が一定のドメインで機能しなくなっているということを意味しよう。)
  - ②4技能のうち、聞く能力が最後まで残っている。(逆に、3世では、ポルトガル語は4技能すべてが揃ってくる。)
  - ③コミュニケーション活動は基本的にポルトガル語によって行われるので、日本語を話せる3世でも、文レベルの使用はできなくなっており、基本的に単語レベルの会話が中心になってくる。(格助詞の使用の限定化、動詞の基本形とテ形の使用への限定化、終助詞ネへの限定化などが連動している。これは、コミュニケーションの単位が文であることを考えると、もはや正常な意味での日本語使用ができなくなっていることを意味しよう。)

以上が3世の特徴であるが、現実には祖父母のいる家庭が無くなりつつあることから、1世における「国語としての日本語」ではなく、言わば「外国語としての日本語」教育が必要な段階に至っていると言えよう。

#### Ⅲ コロニア語をめぐって

マクロな観点からの「コロニア人アイデンティティ構築と絡み合うコロニア語の発見」への歴史的プロセスについては森幸一論文を参照されたいが、ここでは、(社会) 言語学的に見た、現時点での概要を示しておくことにする。

コロニア語はブラジル日系社会の人々の間で、「日本語とポルトガル語を混ぜて使用すること」と意識され、言語生活調査の結果では、肯定的、否定的、中立的な3つの評価・態度が見られる。(その実質的内容についての分析は今後に残されている。)

言語と言語が接触・混交を起こす場合、単純化して言えば、①接触関係の質・程度と、② それぞれの接触言語の実態とがまず問題になってくるであろう。①の点について言えば、大きく、ポルトガル語と日本語とに2分割した場合では、1世における単語レベルの言わば浅い接触段階から、2世における文レベルのコードスイッチングが起こってくる深い接触段階を経て、3世におけるポルトガル語への移行が観察できる。(ただし、急いで3世におけるポルトガル語使用のなかに、日本語の痕跡がどのようにあるかの点はまだ全く分析できていないことを付け加えなければならないし、また、個人レベルの接触関係と地域社会レベルの接触関係のきちんとした分析もできていないことも付け加えておかなければならない。)

以上のような考え方では、日本語内部におけるバリエーションは不問に付しているのであるが、上記のようなポルトガル語との接触とおそらく同時並行的に、日本語内部での言語

(方言)接触,あるいはそれに伴う単純化や類推形式の生成などが起こったと考えられるのである。ブラジル日系社会の1世,2世の日本語に特徴的な点は,下記のようなものである。

- (1) 東日本方言的要素(あるいは標準語的要素)と西日本方言的要素の混在・併用 イルとオル、~テルと~トル、~ナイ(~ナカッタ)と~ン(~ンカッタ)など
- (2) 西日本方言形式のコロニア共通語化(1世の東日本出身者でも普通に使用) ~ヨル、ヨウ~セン、~シキランなど
- (3) 単純化 すべての動詞の5段活用化,ラ抜き可能形式や〜シナイ(セン)デス形式の使用 男女差を示す諸形式の不使用
- (4) 類推による生成形式

行カンキャナラン(行かなければならない)のようなモダリティ形式の使用など (ただし、日本における方言における実態については未確認)

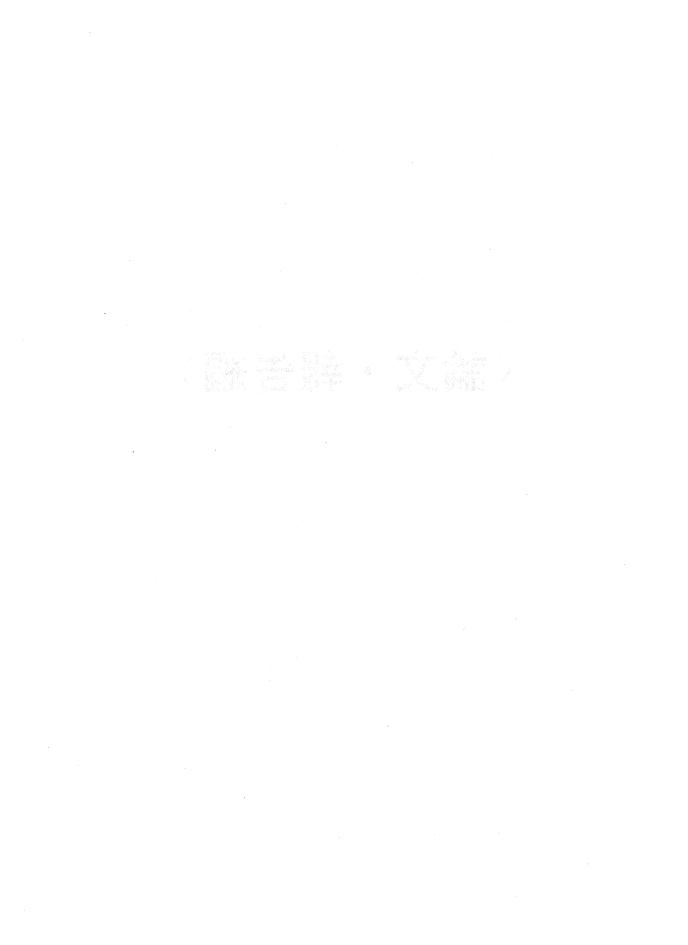
日本語内部の方言接触と同時並行的なポルトガル語との言語接触という重層的な展開プロセスを今後の分析においては考慮していかなければならないであろう。あくまでもまだ憶測にすぎないが、標準語あるいは東日本方言としての~シテル形式が、「死による、行きよる、12時になりよる」では簡単に表せてしまう「変化過程」の意味を表すことができないとすれば、ポルトガル語との接触状況において、この形式をコロニア共通語化したとしても不思議ではない。昨年ブラジルを訪問した際、「日本語の死ンデイルは結果を表します」という私の発言に対して、「今死ンデイルなら、死につつあるという進行の意味になりますね」と確認した1世の方(長らく日本語教育に携わってきた)の質問は印象的であった。この事実は、日本語内部の言語(方言)接触とポルトガル語との言語接触が、無関係に進行したのではなく、相互影響を引き起こしつつ進行していったのではないかという推測を促すのである。

言語接触論は、最もマクロな政治・経済・歴史的観点から、最もミクロな複数の諸言語 (諸方言)の構造的実態の観点に至るまで、複眼的に追及していかなければならないであろう。 · 网络伊拉斯 电电路 特别

「「Bender of Section of the Community of Manager of Ma

- 1996년 - 현실 등 현물 등 학생 이 이 분이 한 경기에 보고 있는 이 바이 되는 이 분석이 되고 있다. - 1998년 - 1997년 한 한 전 보고 있는 이 분석이 이 중요한 경기를 받는 것이 되는 것을 보고 했다. 표현 관계 전

## 〈論文・報告編〉



# As línguas faladas nas comunidades *nikkei* do Brasil (Segunda Fase) – Da pesquisa sobre o português falado pelos *nikkeis* (objetivos e processo)

Elza Taeko Doi (Unicamp, Campinas, Brasil) Sonia Regina Longhi Ninomiya (UFRJ, Rio de Janeiro, Brasil)

Abstract: This research project was designed to document the languages spoken in the nikkey community in Brazil, focusing especially on the Portuguese language spoken in the State of São Paulo. The research was conducted in Aliança (Mirandópolis) and Ipelândia (Suzano), in the State of São Paulo, with 37 informants of 40 subjects selected. Using semi-structured interviews, we collected data for a linguistic analisis, as well as information about the awareness of these Japanese immigrants to Brazil about their feelings as nikkeis, their attitudes towards the language spoken in their communities, their bilingual condition and their cultural values.

#### 1. Introdução

Este projeto é parte de um projeto conjunto de pesquisadores japoneses e brasileiros denominado "Pesquisa sobre as Línguas Faladas nas Comunidades Nikkei do Brasil" que faz parte do "Programa COE — Século XXI — Projeto de Pesquisa Contato e Cruzamento Lingüístico", liderado e financiado pela Universidade de Osaka, com verba captada junto ao Ministério da Educação e Tecnologia do Japão. O presente relatório refere-se à pesquisa desenvolvida entre 21 de julho a 01 de setembro de 2003 nas comunidades nikkei de Aliança (Mirandópolis-SP) e Ipelândia (Suzano-SP)

Como membros da equipe brasileira participaram nesta fase as pesquisadoras Junko Ota e Leiko Matsubara Morales, da USP, Sonia Regina Longhi Ninomiya, da UFRJ e Elza Taeko Doi, da UNICAMP, além de Arissa Saeki, graduanda da UNICAMP, como colaboradora.

Os objetivos que motivaram este projeto específico, desenvolvido pelo lado brasileiro, seguindo o mesmo enfoque do projeto geral, foram a documentação das línguas portuguesa e japonesa faladas nas comunidades de imigrantes japoneses no Brasil e a organização de um banco de dados com as formas gramaticais e lexicais recorrentes que, disponibilizados,

viessem a servir de subsídio para o estudo, a pesquisa e a compreensão 1. da trajetória e das mudanças sofridas na língua japonesa ao longo da história da imigração japonesa no Brasil e, em uma perspectiva mais ampla, para a reflexão sobre o comportamento das línguas de imigração no mundo; 2. do registro falado da língua portuguesa dos imigrantes e de seus descendentes.

Considerado o país ultramarino com o maior contingente de japoneses e seus descendentes, a imigração japonesa no Brasil tem merecido a atenção tanto nos meios acadêmicos, quanto em publicações de caráter informativo e muitas vezes pessoal. Apenas a título de ilustração, podemos citar 1. na história da imigração e do imigrante: Suzuki, 1969; Nogueira, 1984; Handa, 1987; Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 1988; Kiyotani e Yamashiro, 1992. Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa, 1992; Mita, 1999; Sakurai, 1999, 2000; e outros; 2. na sociologia e antropologia: Willems, 1948; Saito e Maeyama, 1973; Saito, 1977, 1978; Mori, 2000, 2002; Pereira, 2001; e outros; 3. na psicologia: Imai, 1956; Hashimoto, 1995; Carignato, 2002; e outros; 4. na lingüística, incluso tanto a abordagem da análise lingüística quanto a do ensino da língua japonesa no Brasil: Doi, 1983; Kato e Bárbara, 1983; Suzuki, 1984; Joko, 1987; Mase, 1987; Nawa, 1988; Suzuki, 1990; Takasu, 1999; Kuyama, 1999, 2000; Jo, 2000; Takano, 2002; e outros.

Em termos das línguas utilizadas pelos imigrantes japoneses, tem-se observado nas últimas décadas, um interesse, nos meios acadêmicos, no que diz respeito às questões relacionadas com as diversas manifestações lingüísticas, quer em termos de descrição e análise, quer em termos de ensino de língua japonesa, contemplando a sua história, a sua metodologia, o material didático empregado. A presença de pesquisadores com conhecimento em ciência da linguagem e que dominam as línguas utilizadas pelos imigrantes (o português, o japonês e suas variações) tem contribuído para o desenvolvimento desses estudos. Por outro lado, tendo os descendentes dos primeiros imigrantes chegado à quarta geração, esses pesquisadores puderam incluir no espectro de suas preocupações também a língua portuguesa utilizada por esta comunidade.

Decorrido quase um século desde a chegada dos primeiros imigrantes japoneses ao Brasil (1908), pode-se dizer que o japonês e o português, aqui praticados, não têm merecido um estudo sistematizado e abrangente, que fosse contemplado pelas várias áreas da lingüística. Como anteriormente mencionado, análises de alguns aspectos particulares da língua japonesa tais como, fonética e fonologia, expressões de tratamento, empréstimo, mudança de código e ensino já têm sido realizadas, mas são poucos os estudos no tocante à

língua portuguesa por eles falada. Cumpre, assim, ressaltar o caráter pioneiro do registro proposto, registro este, aliás, que urge ser documentado antes que se percam as oportunidades diante da inexorabilidade do tempo.

O presente projeto limita-se à documentação das línguas faladas pelos imigrantes japoneses no Brasil e seus descendentes, mas espera-se que os dados coletados venham a propiciar outros desdobramentos em pesquisas futuras que envolvam não apenas a análise e descrição lingüística, mas também possam abordar questões que se relacionem de alguma forma com a condição e o comportamento dos imigrantes japoneses no Brasil, o uso das línguas, a manutenção e o ensino da língua japonesa, a manutenção e a transmissão da cultura japonesa.

#### 2. Do objetivo e da metodologia da coleta de dados

A equipe brasileira responsabilizou-se por coletar dados em português, preferencialmente, e em japonês, em ambas as comunidades alvo: Aliança (Mirandópolis) e Ipelândia (Suzano).

O objetivo desta coleta foi obter dados que propiciassem 1. uma análise lingüística do português falado pelos imigrantes e seus descendentes, e 2. uma análise do pano de fundo dessas realizações lingüísticas que pudesse elucidar o que pensam os imigrantes e seus descendentes sobre a língua japonesa, sobre a sua história de aquisição e aprendizagem da língua japonesa e portuguesa, sobre a sua condição de bilíngüe e sobre os valores e os costumes das duas culturas em questão.

Para a coleta de dados, foi elaborado um roteiro (anexo 01) para as entrevistas que foram semi-direcionadas, mas que possibilitassem a expressão informal e livre do entrevistado sobre a história da sua aquisição das línguas japonesa e portuguesa e sobre sua atitude em relação às línguas e seus valores culturais.

Foi elaborado um roteiro amplo e abrangente que pudesse garantir uma certa unidade das entrevistas a fim de propiciar um espaço para cada entrevistador propor perguntas abertas como: fale sobre...; como era...; etc., tentando evitar, assim, que a entrevista se consubstanciasse em um interrogatório com simples respostas afirmativas ou negativas.

Na entrevista, foi solicitado ao entrevistado que assinasse uma das duas autorizações (anexo 02) para que esses dados pudessem ser disponibilizados para pesquisas futuras.

Acompanhando o roteiro, dispúnhamos, também, de uma ficha biográfica de cada

entrevistado selecionado, cujo conteúdo resumia os dados coletados na primeira fase desta pesquisa, a Pesquisa sobre os Hábitos Lingüísticos das Comunidades Nikkei no Brasil (Gengo Seikatsu Choosa) que fora implementado entre abril e maio de 2003, nas comunidades aqui especificadas. Dentre esses dados, podemos destacar, além dos pessoais, os referentes à escolaridade, ao uso das línguas, à opinião sobre valores lingüísticos e culturais. Esta ficha foi importante, pois o conhecimento prévio do entrevistado pelo entrevistador não só contribui para direcionar a entrevista como também tornar o contato mais ágil e profícuo.

Foi estipulado um tempo máximo de duas horas para cada entrevista, contudo a conduta do entrevistador pautou-se pela concessão ao tempo e às formas de expressão de cada entrevistado.

#### 3. Dos informantes e dos critérios para sua escolha

Da lista preliminar, elaborada conjuntamente pela equipe brasileira, constaram primeira e segunda opção para entrevistados. A definição do nome foi efetivada quando do agendamento telefônico, resultando em uma lista com dezoito nomes para Aliança e vinte e dois nomes para Ipelândia (anexo 03).

Quanto aos critérios que nortearam a escolha dos entrevistados para esta segunda fase da pesquisa, foram consideradas as seguintes variáveis, tendo como apoio apenas as informações da primeira fase da pesquisa sobre os Hábitos Lingüísticos das Comunidades Nikkei no Brasil (Gengo Seikatsu Choosa), relacionadas com os dados pessoais e a auto-avaliação sobre a proficiência em língua japonesa no uso cotidiano.

#### 3.1. Com relação aos nisseis e sanseis

i) Embora a base para a análise dos dados fosse a língua portuguesa, baseamo-nos primeiramente na proficiência auto-declarada referente ao uso da língua japonesa em contexto cotidiano. A escolha dessa variável como um dos critérios para a seleção dos informantes nisseis e sanseis para a segunda fase, foi motivada pela hipótese de que, a partir da auto-avaliação sobre a própria proficiência em língua japonesa no seu cotidiano, poderíamos ver a influência e o papel que essa língua exerce no desempenho do português, em termos lingüísticos e em termos de atitude em relação a esta língua. Ou seja, poder-se-ia esperar uma relação entre as características/marcas verificadas

na fala de alguém que se auto-avalia como tendo uma proficiência boa (os níveis 1 e 2 do questionário) ou não muito boa (os níveis 3 e 4) em língua japonesa em relação a sua proficiência em português e à postura quanto a sua condição de nikkei e quanto à cultura de seus ancestrais? Além disso, em termos lingüísticos, esta variável poderia apontar dados de mistura de código, empréstimos, organização frástica, etc;

ii) Indivíduos com esse perfil foram selecionados por geração — segunda (nissei) e terceira (sansei)-, idade e gênero. Tais variáveis poderiam apontar tendências dispares ou não entre os grupos, nos aspectos lingüísticos e na postura em relação à cultura japonesa. Quanto à idade, no caso dos nisseis, a separação em três grupos, com faixas etárias distintas, mas não obedecendo a um espaçamento uniforme de anos, se deveu ao fato de termos uma variação grande de idades com poucos informantes em cada extremo. Assim sendo, tivéssemos nós optado por uma divisão mais igualitária, teríamos perdido muitos informantes que se mostravam representativos da faixa etária. Quanto aos sanseis, geração mais jovem, foi feito o agrupamento em apenas duas faixas etárias tendo como divisor a idade de 35 anos.

#### 3.2. Com relação aos jun-nisseis

Foram duas as variáveis que consideramos na seleção de informantes *jun-nisseis*, definidos como aqueles que vieram ao Brasil com a idade de até 12 anos: a) a época da chegada — na pré-guerra ou na pós-guerra — e b) a escolaridade no Brasil, tendo como pressuposto graus diversos de interferência do japonês em todos os níveis lingüísticos do português, bem como a sua proficiência em japonês. Além disso, como foi proposto no item 1, acima, um dos objetivos era conhecer, também, a postura do informante, enquanto *nikkei*, em relação às línguas e às culturas japonesa e brasileira com as quais tem contato.

#### 4. Da transcrição do corpus

As normas para a transcrição da língua portuguesa foram discutidas e alguns critérios exercitados. Chegou-se, finalmente, a alguns critérios (anexo 04) para cujo estabelecimento serviu de base aqueles adotados para a transcrição do corpus levantado pelo Projeto NURC/SP – Projeto de Estudo da Norma Lingüística Urbana de São Paulo, realizado em

1987.

No início de cada transcrição há a identificação do número da transcrição, do tipo de inquérito, da data do registro, do informante e do documentador.

#### 4. Da realização da pesquisa

Com relação à segunda fase da pesquisa, baseada em entrevistas, em cada comunidade, Aliança (Mirandópolis) e Ipelândia (Suzano), a estratégia adotada para o primeiro contato com os informantes foi diversa.

Em Aliança (Mirandópolis), após a escolha e listagem dos possíveis entrevistados, foi estabelecido um contato com as lideranças locais para se formalizar a atuação nas comunidades. Esse contato demandou duas viagens ao local, após o quê passou-se aos contatos telefônicos para o agendamento das entrevistas com os informantes que concordassem em oferecer dados mais aprofundados sobre algumas questões levantadas na primeira fase do projeto e outros. Naquele contato primeiro, foram dadas informações sobre o projeto e sobre a importância da colaboração para a pesquisa. As entrevistas foram, então, agendadas entre 22 e 26 de julho. Em um segundo contato telefônico, duas semanas antes do trabalho de campo, foram confirmadas as entrevistas e marcada uma hora mais adequada, segundo a conveniência do entrevistado. No inicio da noite do dia anterior a cada entrevista, houve nova confirmação de horário por telefone e feitos os ajustes finais para a pesquisa de campo.

No caso de Ipelândia (Suzano), a lista dos possíveis entrevistados foi entregue às lideranças locais em uma visita de cortesia em 05 de julho de 2003, quando foi formulado um pedido formal de apoio à pesquisa. As lideranças locais, portanto, se encarregaram de agendar as entrevistas entre 29 de julho e 01 de agosto. Também em Ipelândia as entrevistas agendadas foram confirmadas no inicio da noite anterior ao seu acontecimento.

Dos quarenta informantes selecionados, foram entrevistados dezessete em Aliança e vinte em Ipelândia (cf. lista de entrevistados, anexo 03). Em Aliança, um importante sansei masculino não pode realizar a entrevista devido a problemas no serviço e não houve tempo hábil para a efetivação do contato com o suplente. Em Ipelândia, dois informantes declinaram da entrevista por motivo de nojo familiar.

Com relação ao processo das entrevistas, podemos destacar que os isseis, com exceção

de alguns informantes, não aceitaram falar em português alegando quase total inoperância na língua. Quanto aos nisseis e sanseis, os mais idosos se recusaram a falar em português, fato que creditamos ao seu bom desempenho em língua japonesa. Contudo, muitos foram extremamente cooperativos falando as duas línguas; inicialmente em japonês (alguns com proficiência regular) e posteriormente em português, língua na qual, percebia-se, sentiam-se mais à vontade. Convém ressaltar que alguns informantes dessas gerações, com boa proficiência em português, mantinham a conversação em língua japonesa, não obstante a mudança de código para o português e a insistência no novo código por parte das entrevistadoras. Nas discussões da equipe sobre as entrevistas, foi aventada a hipótese de que, por se perceberem entrevistados por professoras de língua japonesa, por se perceberem falantes também de japonês e por ser uma pesquisa sobre língua, podem ter interpretado que o quê se esperava deles era o uso da língua japonesa.

#### Nota de agradecimentos:

Agradecemos ao "Programa COE – Século XXI – Projeto de Pesquisa Contato e Cruzamento Lingüístico" e à Universidade de Osaka (Osaka, Japão), pela oportunidade de realização de um projeto conjunto com os pesquisadores japoneses, e ao Centro de Língua Japonesa da Fundação Japão, em São Paulo, pela concessão de auxílio para a realização do treinamento aos pesquisadores da primeira fase do projeto relativo aos "Hábitos Lingüísticos das Comunidades Nikkei no Brasil (Gengo Seikatsu Choosa)", coordenado pelo pesquisador Koichi Mori, da USP.

Agradecemos, também, a todos os informantes, que gentilmente se dispuseram a fornecer valiosos dados para a pesquisa e a todas as pessoas que se empenharam, direta ou indiretamente, para que esta segunda fase do projeto se concretizasse.

#### REFERÊNCIAS BIBLIOGRÁFICAS

Carignato, Taeko Toma. Passagem para o desconhecido, um estudo psicanalítico sobre migrações entre o Brasil e o Japão, São Paulo: Via Lettera, 2002

\_\_\_\_\_, Rosa, Miriam Debieux e Pacheco Filho, Raul Albino (orgs.). *Psicanálise, Cultura e Migração*, São Paulo: YM Editora, 2002

- Centro de Estudos Nipo Brasileiros. Pesquisa da população de descendentes de japoneses residentes no Brasil. São Paulo, 1988.
- Doi, Elza T. A interferência fonológica no português falado pelos japoneses na região de Campinas (SP). Dissertação de Mestrado, Unicamp, Campinas, 1983.
- Freitas, Sonia Maria de. *História Oral: Possibilidades e Procedimentos*, São Paulo: Humanitas/Imprensa Oficial SP, 2002
- Hamers, J.F. e Blanc, M.H.A. *Bilinguality and Bilingualism*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000 (2ª edição)
- Handa Tomoo. O imigrante japonês: história de sua vida no Brasil. São Paulo: T. A. Queiroz e Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 1987.
- Hashimoto, Francisco. Sol Nascente no Brasil: cultura e mentalidade. São Paulo: HVF Arte & Cultura CERED/UNIP, 1995.
- Izumi Seiichi. Aspectos da vida dos japoneses no Brasil. Estudos de Antropologia Teórica e Prática. São Paulo: Ed. Escola de Sociologia e Política de Sã Paulo, pp.36~43, 1956.
- Joko, Alice T. Análise Contrastiva dos Sistemas Fonológicos do Japonês e do Português.

  Dissertação de Mestrado, UnB. Brasília, 1987.
- Jo, Cecília. Interferência da Língua Japonesa na Língua Portuguesa falada por nipobrasileiros – a concordância nominal. Tese de Doutorado, USP. São Paulo, 2000.
- Kato, M. e L. Bárbara. Línguas asiáticas. Abralin Boletim, 5 (1983), pp. 95~111.
- Kiyotani, Masuji e Yamashiro, José. Do Kasato Maru à década de 1920. In: *Uma Epopéia Moderna*, 80 anos de imigração japonesa. Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa. São Paulo: HUCITEC, 1992.
- Kuyama, Megumi O uso da língua japonesa na comunidade nipo-brasileira: o empréstimo lexical do português no japonês falado pelos imigrantes o caso do Distrito Federal. Dissertação de Mestrado, UnB. Brasília, 1999.
- Burajiru nikkei issei no nihongo ni okeru porutogarugo shakuyou: sono keitai to unyou. The Japanese Journal of Language in Society, vol.3-1, 2000.
- Mase, Yoshio. A Língua Japonesa dos Imigrantes Japoneses e seus Descendentes no Brasil. Estudos Japoneses, São Paulo: Centro de Estudos Japoneses da USP, 1987.
- Mishler, Elliot G. Research Interviewing Context and Narrative, London: Harvard University Press, 1991
- Mita, Chiyoko. Bastos, Uma comunidade étnica japonesa no Brasil, São Paulo: Humanitas, 1999

- Mori, Koichi. A Imagem dos Nikkeis (nipo-brasileios) O Significado e o Posicionamento da Categoria "Japonês". *Anais do XI ENPULLCJ/IEEJ*, UnB, Brasília, 2000.
- Esunisiti to haiburiddo na Bunka Burajiru no Okinawakei jin no jireiwo chuushinn ni shite. Mini-curso proferido no XIII ENPULLCJ, USP, S.Paulo, 2002.
- Nawa, Takako. Bilinguismo e mudança de código:uma proposta de análise com os nipobrasileiros, residentes em Brasília. Dissertação de Mestrado, UnB. Brasília, 1988
- Nogueira, Arlinda Rocha. *Imigração Japonesa na História Contemporânea do Brasil*. São Paulo: Massao Ohno, 1984.
- Pereira, Ronan A. O Budismo Leigo da Soka Gakkai no Brasil: da Revolução Humana a Utopia Mundial. Tese de Doutorado, Unicamp. Campinas, 2001.
- Ribeiro, B.T. e Garcez, P.M. Sociolingüística Interacional Antropologia, Lingüística e Sociologia em Análise do Discurso. Porto Alegre: Editora AGE, 1998

#### ANEXO 01.

#### FICHA ROTEIRO PARA AS ENTREVISTAS

NOME_	
GERAÇÃO	(entrevistador:
IDADE	
Comentários sobre a abordagem:	
and gast a comment of the	garan kan ang mang kanalang ang kanalang ang kanalang kanalang kanalang kanalang kanalang kanalang kanalang ka
Preliminares: agradecimento pelo tempo ceo	lido, explicação sobre a nova coleta de dados
– aprofundar algumas colocações e obter nov	vos dados.
1. Aprendizagem das línguas	
2. Uso das línguas	
3. Falar as duas línguas	
4 Walance, da léa ma ionomose / da condice	a da mildasi
4. Valoração da língua japonesa / da condiçã	o de nikkei

5. Manutenção da cultura e dos costumes de origem
\$\$\text{\$\texitt{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{
6. Incorporação dos usos e costumes brasileiros
PAROTE TARTERS CONTROL CONTROL (1991) AND CONTROL CONT
7. Sobre a participação na comunidade
and the second of
ne vans en wategewaarwa na enfantsie, nge endantaatan ni en maagangkere ei dingiwate
per en en protessiment entre de la companie de la c
8. Oportunidade de retorno ao Japão / escolhas segundo a etnia

ANEXO 02 - 1.

#### **AUTORIZAÇÃO**

Autorizo a utilização dos depoimentos de caráter lingüístico e documental, gravados em áudio e/ou vídeo, que prestei aos pesquisadores do Projeto "Línguas da Comunidade Nikkei do Brasil: Documentação e Estudo Interdisciplinar". Esses dados poderão ser divulgados e publicados, para fins acadêmicos, com a ressalva de sua integridade e indicação de fonte e nome do entrevistado, resguardando, porém, os dados particulares das pessoas comentadas na entrevista.

Local e data
•
Nome do entrevistado

ANEXO 02 - 2.

### AUTORIZAÇÃO

Autorizo a utilização dos depoimentos de caráter lingüístico e documental, gravados em áudio e/ou vídeo, que prestei aos pesquisadores do Projeto "Línguas da Comunidade Nikkei do Brasil: Documentação e Estudo Interdisciplinar". Esses dados poderão ser divulgados e publicados, para fins acadêmicos, com a ressalva de sua integridade e indicação de fonte sem, contudo, mencionar o nome do entrevistado ou das pessoas comentadas na entrevista.

Local e data			
THE RESPECTATION	Section 4.8		
No	me do entrevis	stado	

#### ANEXO 03

#### LISTA DOS INFORMANTES DE ALIANÇA (MIRANDÓPOLIS)

Issei	-	82 anos	Sunao Maeda
Issei	-	79 anos	Ai Ichikawa
Issei	-	76 anos	Massao Shimazaki
Issei	·-	76 anos	Kikuno Tsutsumi
Nissei	-	$72 \mathrm{\ anos}$	Maria Kamano
Nissei	-	70 anos	Rikizo Miyahara
Nissei	-	60 anos	Teruno Yaoita
Nissei	-	57 anos	Nobuko Hirota
Nissei	-	44 anos	Clara Yumiko Kumamoto
Nissei	, , <del>-</del> .	42 anos	Hemi Shimoyama Honma
Nissei	-	$35~{ m anos}$	Eduardo Yuji Hasuike
Sansei	-	48 anos	Áurea Massako Koga Yamaguchi
Sansei	-	39 anos	Airton Itsuo Omori
Sansei	-	35 anos	Carlos Kamano
Sansei	-	32 anos	Lucimeire Hosano Okui
Sansei	-	30 anos	Luci Naomi Takehara
Sansei	-	30 anos	Massaaki Shimizu
Sansei.		24 anos	Luciano Niizu

Total de informantes : 18 Total de entrevistados: 17 Entrevistadores: 04

#### LISTA DE INFORMANTES DA VILA IPELÂNDIA (SUZANO)

Issei	-	89 anos	Tomo Wakamatsu
Issei	-	86 anos	Masaru Tani
Issei	-	85 anos	Kenryo Dói
Issei	- :	76 anos	Eruko Hirasaka
Issei	-	53 anos	Masanori Morita
Issei	_	49 anos	Machiko I. Ueno
Nissei	_	66 anos	Thereza M.H.Watanabe
Nissei	_	61 anos	Júlio Okuda
Nissei	-	60 anos	Maria Tieko Nakamura
Nissei	-	57 anos	José Masao Doy
Nissei	_	54 anos	Elza Uwada
Nissei	_	48 anos	Lídia M.Nemoto
Nissei	_	41 anos	Shingo Aya
Nissei	-	42 anos	Amélia T.U. Shimada
Nissei	-	31 anos	Arthur K. Shirakawa
Sansei	-	46 anos	José Tanaka
Sansei	_	46 anos	Mario I. Kono
Sansei	_	46 anos	João Kazuya Ishibashi
Sansei	_	35 anos	Helena Koga de Almeida
Sansei	_	28 anos	Meiko Hayashi
Sansei	-	20 anos	Priscila Mitsuko Ishibashi
Sansei	-	19 anos	Hugo Seiji Ishibashi
			· •

Total de informantes: 22 Total de entrevistados: 20 Entrevistadores: 04

#### ANEXO 04

#### NORMAS PARA A TRANSCRIÇÃO DO CORPUS

(baseadas nas normas adotadas no Projeto NURC/SP)

#### - Transcrição Grafemática

- 1. nomes de pessoas e cidades: apenas as iniciais em maiúsculo;
- 2. números: por extenso;
- 3. fenômenos fonéticos:
  - a) os segmentos serão transcritos ortograficamente;
  - b) as características observadas na fala serão registradas, pois podem ser reveladoras da:
  - i. interferência do japonês/português. Ex.: non (não), firia (filha), masu (mas), iô
     (eu), enton (então), etc;
  - ii. influência de variantes do português (popular, regional). Ex.: assartado, costumá, ponhava, etc;
  - c) segmentos específicos do japonês a serem observados:
    - i. as nasais, por N (noN),
    - ii. o tap r como r (fara),
    - iii. tsu, dzu, dj (dja, hodje, nihondjin),
    - iv. sokuon: registrar por consoante dupla (yappari);
- 4. omissões, supressões e inserções: não restabelecer, registrando o que se ouve.
  - Ex.: mais/masu/mai para 'mas', sufixos gramaticais (plural nominal, verbal, infinitivo) prá, pro, prum, po, ocê , cê, cadê, comemo, tava, tá, etc;
- 5. omissão de vocábulos gramaticais: não restabelecer;
- 6. hesitações, pausas (todas, inclusive aquelas que seriam representadas por vírgula, ponto e vírgula e ponto final): registrar com reticências. Ex.: o caminhão passou...dedou né...;
- 7. repetição, abandono de palavras, do esquema sintático: registrar acompanhado de reticências. Ex.: soshite..., tá ruim...aqui tá ruim...;
- 8. interrogação: registrar com ?;
- 9. alongamento dos seguimentos e os 'yo:on': registrar com : ;
- 10. incompreensão de palavras: registrar com ( );

- 11. ênfase: registrar em letras maiúsculas;
- 12. comentários descritivos: registrar com (). Ex.: (risadas), (tossiu), (latidos), etc;
- 13. superposição, simultaneidade: marcar dentro do enunciado por // //;
- 14. fáticos: para iniciar a conversa: hã, bom, então, daí; preenchedores de espaço (fillers): hum, hum, hã..., sei, daí, então..., né...; fáticos interacionais: não é/ num é?, Sabe?, Você concorda?;
- 15. japonês: fazer a transcrição na forma romanizada, em itálico, e acompanhada por tradução em português entre parênteses. Ex.: nippongo (língua japonesa).

As línguas faladas nas comunidades *nikkei* do Brasil (Segunda Fase) – Da pesquisa sobre o português falado pelos *nikkeis*: avaliação e resultados preliminares

Sonia Regina Longhi Ninomiya (UFRJ, Rio de Janeiro, Brasil)

Elza Taeko Doi (Unicamp, Campinas, Brasil)

ABSTRACT: The purpose of this report is to present a general evaluation of the research conducted in Aliança (Mirandópolis) and Ipelândia (Suzano), in the State of São Paulo. This evaluation is based on the information obtained from interviews, including the transcription of the interview. Sample transcriptions of informants of both sexes for each of the three generations interviewed are attached. These data reveal preliminary differences in the speech of the members of the three generations in relation to expressiveness, as well as attitudes towards use and maintenance of Japanese, and the state of being a nikkey in Brazil.

#### 1. Avaliação geral da segunda fase do projeto

#### 1.1.Quanto às entrevistas

Uma entrevista, como a que concebemos na fase preparatória e pudemos comprovar ao longo dos trabalhos, é um estabelecimento de relações entre pessoas que, embora pertencentes a universos diversos, se encontram construindo um sentido através do diálogo. De forma geral, podemos dizer que logramos atingir empatia com os entrevistados no processo das entrevistas. Mesmo a interrogação que suscitava a presença de uma pesquisadora não *nikkei* ou a acentuada diferença de idade entre algumas pesquisadoras e alguns entrevistados não trouxeram quaisquer implicações para os resultados pretendidos.

O entrevistador não se manteve passivo ou neutro, propôs perguntas, dirigiu e também participou do processo da entrevista, na medida em que, a partir do roteiro, selecionou perguntas e temas a serem tratados, estabelecendo, assim, um diálogo entre si e o entrevistado. Procurou-se evitar juízo de valor e interferências inquisitivas, mas optou-se por compartilhar com o entrevistado as próprias experiências pessoais do entrevistador, tanto para facilitar o direcionamento das entrevistas quanto para estabelecer uma relação

de informalidade com o entrevistado, julgada necessária para se obter os dados e a qualidade de dados pretendidos desejáveis.

Pelo fato de os membros da equipe brasileira não terem podido participar integralmente de toda a primeira fase da pesquisa e portanto, não terem tido um contato pessoal com cada um dos informantes, acrescido da não disponibilidade dos dados gravados nessa primeira fase, o que levaria a uma escolha mais criteriosa dos informantes para a segunda fase, baseamo-nos em informações dos pesquisadores, registradas nos questionários. Contudo, nem sempre essas informações eram claras ou pertinentes sobre a adequação ou não da pessoa como informante. Portanto, acabaram por ser selecionados alguns nomes para a segunda fase cujo perfil desejado embora satisfizesse, não se prestavam à uma conversa produtiva, cuja timidez e/ou falta de articulação levaram a respostas lacônicas, comprometendo, assim, o alcance dos objetivos aos quais nos propusemos. Contudo, logramos obter um discurso oral expressivo, porquanto natural e espontâneo na maioria das entrevistas.

Embora houvesse, também, preocupação com a não interferência na fala ou a emissão de juízo de valor para garantir a total liberdade de colocação da visão de mundo do entrevistado, por vezes os silêncios longos ou os olhares perdidos nos levaram a falar ou justificar mais do que o necessário. Contudo, não podemos ignorar, nesse aspecto, a falta de experiência de alguns membros da equipe brasileira para esse tipo de trabalho. Embora conhecêssemos a teoria sobre o assunto, a parte prática, a técnica de entrevista estava sendo efetivada pela primeira vez. Essa falta de experiência nos trouxe dificuldades na dosagem de neutralidade ou passividade na condução do processo das entrevistas.

Quanto aos aspectos físicos das entrevistas, não foi notado nenhum estranhamento, ou mesmo hostilidade em relação aos gravadores, microfones ou às anotações feitas durante as entrevistas. Quanto às condições para a realização das mesmas, por vezes nos deparamos com arranjos não ideais onde vozes infantis, latidos de cães, campainha de telefone e conversas paralelas próximas foram igualmente registradas. Contudo, a transcrição, pelo menos das amostras em anexo, pode ser realizada sem grandes problemas. Por falha técnica uma das fitas k7 não ficou gravada, mas o conteúdo pode ser eficientemente recuperado a partir do MD.

### 1.2. Quanto à transcrição

Para a transcrição, foram utilizadas normas próprias (anexo 04 – objetivos e Processos) estabelecidas a partir das normas adotadas no Projeto NURC/SP – Projeto de Estudo da Norma Lingüística Urbana de São Paulo, realizado em 1987. As normas ora estabelecidas se revelaram eficientes para satisfazer a nossa preocupação de termos um texto transcrito o mais fiel possível àquele gravado. Assim, tanto a forma quanto o conteúdo puderam ser registrados, também, graficamente. Os critérios utilizados para a transcrição podem sofrer alterações conforme prossigam os trabalhos para a transcrição total do material, quando questões não previstas podem ainda ocorrer, urgindo adequações das normas levantadas.

Nessa transcrição grafemática, apenas para reiterar alguns cuidados tomados, as características observadas na fala foram registradas tal e qual, pois são indicadoras da interferência das línguas ou da influência de variantes do português, como mostram os exemplos abaixo:

- Assartado (assaltado), quarqué (qualquer), costumá (acostumar), tamém (também), extraídos da fala de um informante nissei, de 60 anos, com forte influência da variante do português popular, conhecida como o falar caipira.
- Masu (mas), difíshil (difícil), entoN (então), parabra (palavra), extraídos da fala de um *jun-nisse*i, de 77 anos, com forte influência do japonês verificada nos traços sonoros característicos do japonês.

Além dessas influências apontadas, é preciso também considerar o estilo informal adotado pelos envolvidos nas entrevistas, o que vem favorecer a apreensão da variedade coloquial utilizada pelos informantes, dado que acabaria se perdendo sem a adoção das medidas tomadas.

O japonês usado dentro da fala em português foi transcrito em forma romanizada (e em itálico), acompanhado por tradução em português entre parênteses.

".....é...sim... só no domingo...né... tinha domingo...oterade (no templo budista)" (informante jun-nissei, 49 anos, Suzano)

"so: falava nihongo (japonês) né até ir na escola" (informante nissei, 42 anos, Alianca)

"... como sensei (professor) fa:la as vezes eu falo...." (idem)

Para efeitos deste relatório, contudo, a tradução de sintagmas e períodos mais longos não foi realizada visto que o trabalho de transcrição está ainda em um estágio preliminar.

Toda a equipe brasileira participou dos trabalhos de transcrição das amostras, que passou por uma única revisão, parcial, por absoluta falta de tempo e de pessoal. Ao longo do processo pudemos perceber que, se necessária se faz a transcrição, esta sempre estará em desvantagem em relação à gravação no que diz respeito a elementos como o tom e a velocidade da voz, o interromper abrupto ou natural das pausas, dentre outros, que em uma análise lingüística podem vir a ser de grande importância e significado. Tornou-se claro, assim, que a transcrição, por mais que tente refletir fielmente a situação de fala, não se sustenta por si só, mesmo para uma análise conteudística, havendo sempre a necessidade de se ter disponível para o trabalho ambas as representações, sonora e gráfica.

Cumpre ressaltar que os objetivos da transcrição das entrevistas gravadas são disponibilizar o seu conteúdo para futuras análises lingüísticas e de outras áreas que se interessam pelo assunto (como a sociologia, a antropologia, a psicologia, a história, etc). A transcrição, assim, assume papel crucial, pois nenhum filtro pode ser utilizado. As transcrições têm que se auto-sustentar, muito embora, para uma análise fonético/fonológica a audição das gravações seja imprescindível. Assim sendo, neste caso, procuramos nos ater fiéis à expressão do entrevistado.

#### 2. Considerações sobre os dados

Juntamos ao relatório, a título de exemplificação, algumas amostras do material transcrito (anexo 01), escolhidas aleatoriamente, duas de cada geração e de gêneros diversos, cujos trechos se prestam quer para uma análise lingüística, quer para uma análise sóciohistórico-cultural.

Dessas amostras da transcrição do português falado pelos imigrantes e seus descendentes, podemos ressaltar características típicas de fala de diferentes gerações, de escolarizados e não escolarizados, quanto à expressividade — vocabulário e organização frástica, à fluência, à mudança e ou mistura de códigos — e quanto à postura sobre o uso e a manutenção da língua e de costumes étnicos, bem como a sua condição de *nikkei* no Brasil.

Com relação ao conteúdo das entrevistas, de uma forma geral, pudemos observar que as gerações apresentam comportamentos e atitudes díspares quanto a saber uma ou outra

língua e quanto à sua manutenção, ou melhor, sua transmissão. A escolaridade, no Brasil, também aparece como variável importante, dentro das gerações, na determinação de atitudes. As considerações abaixo, de caráter geral, baseiam-se nos dados da língua portuguesa falada pelos informantes.

Por exemplo, os isseis (no nosso projeto, os jun-nisseis) com escolaridade mais baixa mostraram uma proficiência limitada em língua portuguesa, onde se pode observar uma forte influência fonética e sintática da língua japonesa, bem como uma acentuada mudança de código todas as vezes que sentiam limitações no seu português. Certamente, a presença de uma entrevistadora proficiente em língua japonesa contribuiu para essas mudanças. São, também, os que constituem o grupo dos imigrantes mais antigos (pré e pós-guerra). A maioria tem tendência a relativizar as diferenças culturais e alguns deles não acharam necessário o ensino de língua japonesa para os seus descendentes. Os com escolaridade mais alta geralmente falam bem o português, apresentam interferência fonética e sintática menor, mas ainda constatável no nível prosódico e a mudança de código restringe-se ao nível de vocábulos e conectivos. São também os que constituem o grupo de imigrantes mais recente (década de 60). A maioria tende a ver como necessária a transmissão de traços culturais e da língua japonesa para os descendentes.

Quanto aos nisseis, os menos escolarizados, que também são os de faixa etária mais alta, trazem influência da fonética e da sintaxe da língua japonesa e do falar caipira em seu português. Apresentam grande mudança de código na sua fala, sentem-se japoneses ("como os pais ensinaram ser"), tendem também a relativizar as diferenças culturais e acham importante ensinar a língua japonesa para os descendentes. Quanto aos mais escolarizados, têm um português mais fluente e sintaticamente correto, porém a prosódia sofre, ainda, uma influência da língua japonesa. Talvez possamos creditar essa influência ao ritmo bimoraico, de que trata Doi (1997, 2000). A mistura de código se restringe a vocábulos, e a proficiência em língua japonesa, pelo menos daqueles entrevistados, é limitada. Contudo, acham importante falar e ensinar a língua japonesa para os descendentes.

Quanto aos sanseis, não foram percebidas diferenças significativas quanto a variável escolaridade relacionada com a fluência no português, mas com uma característica peculiar na sua prosódia. Os mais escolarizados apresentam maior expressividade, com um domínio maior da linguagem mais culta. No entanto, como já mencionado acima, dado o caráter informal das entrevistas, a linguagem predominante foi aquela mais coloquial. A mistura de código raramente ocorre, mas quando se manifesta é a nível de palavras relacionadas com o

assunto tratado. Foram assim frequentes, as palavras nihongo, nihonjin, gakko, sensei, quando o tópico se referia à língua japonesa. A proficiência em língua japonesa é limitada, mas acham que se deve ensinar a língua para os descendentes e anseiam pela cultura japonesa, embora não tenham uma idéia clara do seja essa cultura.

Resumindo, de forma geral e preliminar, após a audição das gravações, podemos dizer que a língua portuguesa falada nessas comunidades apontam forte influência da língua japonesa, quer a nível fonético, prosódico, sintático ou morfológico, na fala dos *isseis* (junnisseis, no nosso projeto). À medida que as gerações se sucedem, a proficiência em língua portuguesa melhora ao mesmo tempo em que a em língua japonesa decresce e a influência verificada passa a ser a do registro regional do português. A mudança de código, também, vai se atenuando com a sucessão das gerações e o declínio da proficiência em língua japonesa. Como já foi observado acima, a recorrência à mudança de código pode ter sido, contudo, fortemente determinada pela figura do entrevistador, visto como interlocutor bilíngüe em português e japonês.

#### 3. Considerações Finais

Os dados coletados, pela equipe brasileira, nesta pesquisa, poderão ser insuficientes para o desenvolvimento de pesquisas de cunho qualitativo relacionadas com questões que exigiriam elementos mais específicos, mas a rica variedade de elementos apresentados servirá, certamente, para se ter um primeiro contato com os problemas que se pretende investigar. Contudo, este pouco constitui uma contribuição relevante para a tomada de contato e de compreensão dos fatos que envolvem a imigração japonesa e seus desdobramentos, bem como a imigração em geral.

Quanto ao processo desta segunda fase da pesquisa, podemos, numa avaliação geral, pontuar que, diferentemente da aplicação de questionários, como ocorreu na primeira fase da implementação do projeto, pesquisas que se baseiam em entrevistas devem contar com a sensibilidade dos entrevistadores em relação aos vários aspectos que envolvem esse trabalho de campo. Há que haver sensibilidade para com os objetivos, para com o contato com os entrevistados, para com as situações que exigem flexibilidade, dentre outras. Assim sendo, percebemos o tempo de planejamento desta segunda etapa um tanto curto e a equipe pequena e em condições adversas de operacionalizar o processo de planejamento. Os pesquisadores são de diferentes e distantes localidades, não se pôde contar com apoio

logístico para a execução de comezinhas tarefas, não houve tempo para o treinamento dos entrevistadores. E, somando-se à essas condições adversas, houve, também, a inexperiência dos pesquisadores como entrevistadores. Embora uma boa cumplicidade tenha se estabelecido com os informantes, por vezes os objetivos não se concretizavam devido à inexperiência na condução da entrevista. Por outro lado, o curto espaço de tempo para a preparação das entrevistas e a impossibilidade de acessar os dados gravados por ocasião da primeira fase, levou-nos a tomar como base apenas as informações, nem sempre pertinentes, dos pesquisadores sobre a acessibilidade ou não de determinado informante à entrevistas. Contudo, no computo geral, a avaliação desta segunda etapa da pesquisa é positiva pelos resultados obtidos e pela contribuição que dará para futuros estudos sobre o tema.

# REFERÊNCIAS BIBLIOGRÁFICAS

- Befu, Harumi & Guichard-Anguis, Sylvie (ed.) Globalizing Japan Ethnography of the japanese presence in Asia, Europe and America, Nova Yorque: Routledge Curzon, 2003
- Côté, Pierre and Clément, Richard. Language attitude: an interactive situated approach.

  Language and Communication, 14(3), 237-251, 1994
- Cargile, Aaron C. and Giles, Howard. Understanding language attitudes: exploring listener affect and identity. *Language and Communication*, 17(3), 195-217, 1997
- Doi, Elza T. O Papel da Sílaba e da Mora na Organização Rítmica do Japonês. Síntese Conjuntura e Cenários, vol. 3, Unicamp, Campinas. 1998.
- O ritmo bimoraico e as moras não-plenas do japonês: reflexões sobre o ensino da língua oral. *Trabalhos em Lingüística Aplicada 36*. Campinas, IEL. Unicamp. 2000.
- Milroy, Lesley & Muysken, Pieter ed. One Speaker, two languages, Nova Yorque: Cambridge University Press, 1995
- Romaine, Suzanne (ed.). Sociolinguistic Variation in Speech Communities .London: Edward Arnold. 1982

### ANEXO 01

# TRANSCRIÇÕES (AMOSTRAS)

Transcrição 1

Tipo de inquérito: diálogo entre informante e documentador

Data do registro: 23/07/2003

Informante (Inf.): M.S., issei, 76 anos, homem, Aliança (SP)

Documentadora (Doc.): Sonia R. L. Ninomiya

(Doc.) se o senhor tem que fazer um serviço aqui na sua casa //ah sei sei// encanador ou se o senhor precisa ir a um médico... né? //ahã hã// dentista e se tiver um médico nikkei e um médico não nikkei... qual médico o senhor escolhe?

(Inf.) é eu...depende né depende da hora da precisa ne doente depende e coisa de precisa de encano coisa quando conserta depende ne é si... portu...japonês mais facilita mim né //hum hum// é mas tem um gozaçon sabe? //hum hum// lá no Araçatsuba tem uma mecânico bom... ere é nascido RÁ no...rá no...hum...como chama...é rá po...jap...japonês meia esquisita...é bem raano pra rá do Kumamoto ken como chama...Amami Ôshimatte iu toko arudesho (tem um lugar chamado Amami Ooshima, não é?)

(Doc.) Amami Ôshima

(Inf.) asukono hitotachino kotobaga mô...bokuraniwa wakaranai nihongode (a língua daquelas pessoas de lá... em japonês que nós não entendemos)

(Doc.) aa...hôgendakaranee (é... por ser dialeto, né)

(Inf.) ee sorega (sim, e isso)Araçatsuba teve Araçatsuba mecânico bom ele que sentou bomba de água aqui //hum hum// é ... masu shi fara nippongo mais esso comprica... enton fala portugueis mais facirita porque é hoogen do hoogen do naquele Amami ooshima rá... non entende é ...e naquere chama como que hein? é Amami Ooshimano tokowa... nante ittakkene (o local de amami Ooshima...como é que se chama)naquere ken (província)? Ka...Kago...Ka Kagoshima Kagoshima depende lugaru nós non entende japonês do eres é nissei já otro coisa fara devagá fara japonês e eles devagá e enton dá entendê masu Kagoshimaken... puro puro non nós entende é difíchil mesmo... enton ele vem... fara português mais facirita (risos) gozado né

- (Doc.) interessante... e por exemplo o sr. sente que confia MAIS... no nikkei ou não tem essa coisa?
- (Inf.) eu não tem isso sente né //hum hum// é é é é //é// porque é eu tem quatro firia e um filho né //hum hum// um filho que fica aqui ele non gosta muito estudá enton ajuda o papai né e... firia tudo uma não estudou mas maioria estudou pouco ah...profisson tudo tá no São Paulo né //ah é// é é ... e uma casou nissei ... só fara português uma fara poquinho nippongo (língua japonesa) né //hum hum// e uma fara bem nippongo masu não sei vai lá... também é mema coisa ere non fara nippongo masu... ere conversa direi... devagarzinho e gente bom né é é por isso que eu farei D. hum...coisa parabra non é né para... gente bom aí fica...

(Doc.) tranquilo

- (Inf.) tranquiro né é é
- (Doc.) hum hum é verdade (é) ... de sono shisonnine nihongowo zehi oshietaitoiu kimochi, arimasuka.(e, gostaria de ensinar o japonês a seus descendentes?)
- (Inf.)...antigamente eu teve... né u...masu ima sonna kotowa naidesu  $ima\ itta\ y\hat{o}nine$  (atualmente não tenho mais, como acabei de dizer)

(.....) eragper : A

Transcrição 2

Tipo de Inquérito: diálogo entre informante e documentador

Data do Registro: 29/07/2003

Informante (Inf.): M.I.U., mulher, issei, 49 anos, Ipelândia, Suzano (SP)

Documentador1 (Doc.1): Junko Ota

Documentador2 (Doc.2): Arissa Saeki

(Inf.) família...dentro da família...nihongo (japonês)

(Doc.2) mas...você...você tem mais fluência em que língua?

(Inf.) ai yo (eu) falo mais o português né...mas...aqui dentro da casa é só nihongo (japonês)...porque eu moro com sogra né!

(Doc.2 ) //ah...tá...//não....é que você é tão fluente em português que parece que...//usa mais o português

(Inf.) //é...então//((risos)) não...entre eu e meu marido é mais português

(Doc.2) ah...tá...

(Inf.) agora...entre eu e ela...a sogra e o sogro era tudo japonês né

(Doc. 1) e a senhora (e seus irmãos?) como fica aí...

(Inf.) meio-a-meio

(Doc.1) //meio-a-meio?// ((risos))

(Doc.2)//meio-a-meio?//

(Inf.) meio-a-meio! é meia abrasileirado né!

(Doc. 1) ah...é livre então...

(Inf.) é livre...

(Doc. 1) eles também da mesma maneira?

(Inf.) isso, os filhos deles também não falam nihongo (japonês)

(Doc. 1) ah...não falam?

(Inf.) é...estudou mas não falam não

(Doc.2) ah...então aí tem que falar em português

(Inf.) é...os meus acho que fala mais do que eles porque eles que morava com djitchan (avô) batchan (avó) direto...n'e

- (Doc.1) () tinham um contato maior né...aí...quando a senhora está triste...tá com raiva assim... (falam mais em que língua? japonês ou português?)
- (Inf.) yappa nihongo da né ((risos)) (realmente/de fato, é japonês)
- (Doc.1) yappa nihongo? (é japonês, de fato?) yappari nihongoga deru (de fato sai japonês?)
- (Inf.) é....
- (Doc. 1) (Yapparine nanasaidamonne (afinal, veio com sete anos))
- (Inf.) (é...nanasaimade (até sete anos) é )
- (Doc.2 ) yume miru toki mo nihongo de miru hôga...(quando eu sonho, é....em japonês)
- (Inf.) ooi (é mais frequente) né
- (Doc.2) ooi (é mais frequente)?
- (Inf.) ooi! yappari oi...(é...de fato, é mais freqüente) //engraçado né//
- (Doc.2) //kangaegoto// suru tokimo nihongo de kangaeterundesuka (quando pensa, também pensa em japonês)?
- (Inf.) sou yo namo ta... tanomu koto demo hotokesan yappa nihon (é...quando tenho algum pedido...buda...de fato...jap...) né...pa...papai sogro também gostava falá japonês
- (Doc.2) hum...
- (Inf.) aí...eu peço
- (Doc. 1) onegai suru? nanika oinoride (pede? através de orações)
- (Doc.1) agora...a senhora acha que...quando começou a freqüentar a escola...brasileira...acha que sofreu discriminação assim...pelo fato de ser japonesa?
- (Inf.) é...pelo fato de ser japonesa...pelo meu nome em si...porque meu nome é Matchiko, mas escreve C-H-I-K-O né
- (Doc.2) uhum
- (Inf.) aí...em B.C....eu entrei numa classe de quarenta alunos...homens e eu só de mulher...porque não sabia que era mulher
- (Doc. 1) ah! ((risos))
- (Doc.2) ah...tá!
- (Inf.) Matchiko tte 'Chiko' tte naru desho (Matchiko não fica Chico)?
- (Doc.2) ahan
- (Inf.) Matchikotte natte (fica Matchiko)...então...aí Francisco toka sonnanoga nitoru desho (não parece nomes como Chico de Francisco...)?
- (Doc. 1) e...as aulas eram dadas...separadamente pra...meninos e meninas?
- (Inf.) não!

```
(Doc.1) não?
(Inf.) é...tinha classe mista...tinha classe masculina...tinha classe feminina.
(Doc. 1) tinha isso?
(Inf.) é!
(Doc. 1) ah é?
(Inf.) é...antigamente tinha
(Doc. 1) que estranho
(Inf.) aí...entrei na classe dos meninos
(Doc. 1) e aí?
(Inf.) eu chorei ((risos))! não sabia falar nada ((risos))
(Doc.2) //eles não tiraram?//
(Doc.1) //e daí?//
(Inf.) aí...aí...foi transferirada né
(Doc.2) ahan
(Doc.1) ai meu Deus do céu....coitada!
(Inf.) é...passei cada uma! ((risos))
(Doc.2) ai...é complicado né
(Inf.) é complicado
(Doc. 1) aos sete anos entra no meio de guarenta meninos...
(Doc.2) kawaisôni (coitada!)
(Inf.) aí...só tinha oito...nove anos né...
(Doc. 1) terrível não?
(Inf.) terrível...não entendia nada...
(Doc.1) () não tinha ninguém com quem conversar em japonês
(Inf.) não tinha...que a maioria era gaidjin (estrangeiro, mas neste caso, refere-se aos
      brasileiros) né
(Doc.1) ai...que horror....que situação! () ((risos))
(Inf.) em casa...entre meus irmãos...eu que falo mais fluente o português
(Doc. 1) certo...
(Inf.) outro é engenheiro formado...mas ele naturalizou...mas ele tem aquele sotaque porque
      ele é bem mais velho...né dez anos já dá aquele sotaque...né
(Doc.1) mas ele fala...
```

(Inf.) ele fala português também

(Doc. 1) mas....e....como é que eram os professores dessa escola brasileira? (Inf.) ah...dava mais atenção pra mim porque...como não entendia né... (Doc.1) ahan... (Inf.) tentava explicar assim...né...katagurushii koto (coisas complicadas) (Doc.1)()(Inf.) é isso...isso.... (Doc. 1) aí...dava pra entender um pouquinho? (Inf.) ah...dava...aí...depois foi fácil né (Doc.1) hum... (Inf.) depois que eu comecei a trabalhar de empregada doméstica...foi mais fácil (Doc.1) foi mais fácil (Inf.) aí já fui destacando entre os alunos né (Doc.1) certo...agora....aprender a escrever...começou a apren...assim...qual que foi primeiro? japonês ou português? o alfabeto? hiragana (alfabeto fonético japonês) e katakana (alfabeto fonético japonês para gravar palavras estrangeiras) ou então alfabeto...qual que foi o primeiro? as primeiras letras assim... (Inf.) primeiro foi nihongo (japonês) porque eu aprendi no Japão né (Doc.1)()(Inf.) isso (Doc. 1) aí depois começou o alfabeto? (Doc.1) tá...agora...assim...aqui em casa...a senhora falou que...fala mais japonês (Inf.) é japonês (Doc.1) entre os irmãos meia-meia e...tem...fala outras línguas com outras pessoas fora de casa? (Inf.) não...só... (Doc. 1) mais em casa mesmo? (Inf.) mais em casa...em casa...kaikan (associação/ clube japonês)...assim...né (Doc. 1) ah...então kaikan...seria mais japonês? (Inf.) isso (Doc.1) e tem...e tem algum trabalho ( ) (Inf.) não agora não porque... () hyakusho:mo yararen... (não tenho nem como trabalhar com

arroz)

(Inf.) foi bem proveitoso

(Doc. 1) ah... (Inf.) batchanga (avó) toca assim (Doc.1) ah... (Inf.) só por prazer né (*Doc.1*) ah tá... (Inf.) só pra ela não ficar doentinha (Doc.1) ah... (Inf.) bom... (Doc.1)()(Inf.) não...só quando tem muita colheita eu vou mas... (Doc.1) () senão já () (Inf.) é...que agora meu marido começou a trabalhar fora já...não...é tanto a minha obrigação ficar no hatake (horta)::se precisar eu vou mas...né (Doc.1) ahan...então pra isso não precisa ter contato com outras pessoas e...falar...() (Inf.) //não...contato eu tenho... ((tosses))//tem brasileiro que trabalhou com a minha sogra...tem...tem estampador que...meu...meu marido tinha fábrica...tem ainda...estampa...aqui na no koya (casinha) né...é aí tem um amigo dele que é nihonsei (? do Japão) ele faz (Doc.1) ah... (Inf.) né...aí...o empregado estampador é brasileiro (Doc.1) ah...é brasileiro? (Inf.) é (Doc. 1) nessas horas tem que falar em português (Inf.) é...português (Doc. 1) agora...((tosses)) a senhora acha que é importante saber japonês... //seus filhos...seus netos...// (Inf.) //é...bastante importante// (Doc. 1) bastante importante... (Inf.) inclusive meus filhos estão no nihon (Japão)né (Doc. 1) ah estão no nihon(Japão)? (Inf.) é...estudaram até...nihongakko (escola de língua japonesa) aqui... (Doc. 1) ah...

- (Doc.1) ah é
- (Inf.) é...faz até tradução
- (Doc. 1) olha! estão contentes então
- (Inf.) é...tão...faz três anos e meio já
- (Doc. 1) () esse tipo de serviço não precisa () pesado né
- (Inf.) é...não sei que tipo é...parece que é serviço leve né mas...
- (Doc.1)()
- (Inf.) nihongoga wakarukara tasukarutte iukedone...(por entender o japonês, dizem que ajuda, mas....)
- (Doc.1) ah...agora...
- (Doc.2) é...mas a senhora acha que...para uma pessoa...como um descendente nikkei é importante saber japonês?
- (Inf.) é lógico! minha mãe sempre falava nihondjinno kao shitara nihongo shyaben...(se tem cara de japonês, conversar em japonês) né...apesar de que os neto dela não falam ((risos))só katagurushii koto (coisa rígida)né...só pra bátchan entender eles falam mas assim entre as tias assim não
- (Doc.2) isso mais seria no sentido de manutenção da cultura?
- (Inf.) isso
- (Doc.2) e...o que a senhora acha de...dos casamentos entre não-descendentes que tá acontecendo hoje?
- (Doc. 1) (descendentes e não descendentes)
- (Doc.2) isso...descendentes e...
- (Inf.) é...isso é de cada um né...eu acho...sendo feliz o casal tá bom mas meu marido não aceita de jeito nenhum gaidjin (estrangeiro)
- (Doc. 1) ( ) não gosta ( )
- (Inf.) não...inclusive minhas filhas são tudo casadas com nissei (descendentes de japoneses)
- $(Doc.2\ )$ ah...e pela senhora...teria preferência?
- (Doc.1)ah...também prefiro niss...nikkei (descendente de japonês) né
- (Doc.2) ahan..mas por quê? porque causa que...perderia a...
- (Inf.) não posso falar muito porque tenho um filho solteiro ainda né (risos)
- (Doc.2)()
- (Inf.) é...é...então...mas sempre desde pequena papai ga (é o papai que...) aceita sen (não)...djitchan (avô) também né

(Doc.2) ahan

(Inf.) não que seja racista mas...né...o casamento em si...não sei se são casados com brasileiros mas...aí fala que awan (não combina) né

(Doc.2) ah...não seria por causa da...porque perderia a cultura...a tradição...seria mais por combinar?

(Inf.) é...também né...a cultura também influi bastante né...acho

(Doc.2) ahan...

(Inf.) mais tarde...tabemonoga tchigaukara (porque a alimentação é diferente)...né...acho que complicado...tem bastante tomodatchi (amigo) casado com brasileiros separados né

(Doc.2)ahan

(Doc.1) separados por causa...não por causa de ( )

(Inf.) não...não...(risos) awanno né yappari kangaekataga tchigau (não combina, de fato, porque o modo de pensar é diferente)

(Doc. 1) kangaekataga tchigau (o modo de pensar é diferente)?

(Inf.) né

(Doc.1) ah...

(Doc.2) mas no caso então a senhora é....é....se tivesse que procurar um serviço de um profissional seja é...médico...advogado...

(Inf.) prefere nihondjin (japonês)

(Doc.2) prefere?

(Inf.) é...médico da minha sogra é nihondjin (japonês)...advogado que tá fazendo inventário é nihondjin (japonês)...

(Doc.2 ) ah tá...

(Inf.) é...sem querer a gente vai né...(risos) o dentista que eu vou hoje é nihondjin (japonês)

(Doc.2) ahan...por causa de quê? dê?

(Inf.) ah...dentista é amigo também...advogado também é amigo...médico também ela confiou mais no nihondjin (japonês) porque nihongo ga wakaru kara (por entender a língua japonesa) já sente mais à vontade né

(Doc.2) ahan

(Inf.) vai com gaidjin (estrangeiro) assim não entende o que fala então fica qui....parede...né....

(Doc.2) mas no caso da senhora não teria problema em português

(Inf.) não mas eu também prefiro nikkei (descendente de japonês) (Doc.2) confiança? (Inf.) é...mais...eu acho...sim sim (Doc.2) ah...tá... (Doc.1) agora...a senhora já esteve no Japão? Inf. não...nunca fui (Doc. 1) ah nunca? (Inf.) não...só eu...da minha família só eu (Doc. 1) ah é? o resto da família já esteve? (Inf.) sim...até minha sogra nunca foi também (Doc. 1) não? (Doc.2) a senhora nunca teve vontade? de ir? (Inf.) não...eu tive vontade é...até esse ano eu ia né...mas eu reformei a casa...primeiro pagar a dívida primeiro (risos) depois quem sabe mais tarde...eu ia levar batchan (avó) né (Doc. 1) agora... assim...acha que o Japão é igual àquele Japão que você lembra... (Inf.) eu acho que não (Doc. 1) acha que não? (Inf.) acho que não que muita gente fala mo: furusatoga nakunatta ttekara (porque falam que a terra natal já acabou)...vai... já...não é aquela imagem que a gente deixou né (Doc.1) //ah...// (Doc.2 ) //uhum...// (Doc. 1) mas lembra de muita coisa? (Inf.) não....eu lembro só sítio...de casa....estrada que ia pro gakko...gakko (escola...escola) em si...só::aí depois meus irmãos foram trouxe shashin (foto) tudo mas tudo mudado já né ( )

Transcrição 3

Tipo de inquérito: diálogo entre informante e documentador

Data do registro: 29/07/2003

Informante (Inf.): No. J.O., homem, nissei, 61 anos, Vila Ipelândia, Suzano (SP)

Documentadora 1 (Doc.1): Arissa Saeki

Documentadora 2 (Doc.1): Junko Ota

- (Doc.1) e o que o senhor acha da SUA condição de ser um nikkei ... nihondin (japonês) diria ... aqui no Brasil?
- (Doc.2) o senhor se acha japonês ... não japonês?
- (Inf.) Bom ... EU ( ) ser japonês né ... mas io companho a lado japoneis que meu pai ensinou (jeito de nihongo né)
- (Doc.1) hun hun
- (Inf.) ma: japoneis no ho: ni ( ) mas ( ) io to: aqui trinta .. quarenta ano ma nunca entrei no nihondinkai (associação de japoneses do bairro) né ( ) (risadas)
- (Doc.2) o senhor nunca entrou no nihondinkai?
- (Inf.) não ( ) ... sore wa (isso) io da ne sempre vai falar ... hitori dattara: (como sou sozinho) utino (diz o nome da esposa incompreensível)) tamém falou ... hito:ri dattara shigoto su:ru hima ga: nai (te) (como é sozinho e precisa trabalhar, não tem tempo)
- (Doc.2) ah ... so: nano? (é assim?) hun
- (Inf.) é .. sempre (vai) ter que ir no lado do nihondjinkai assim ... qualquer COISA tem que comparece: ... se não comparece...eles acha mal (risadas) ... tá errado ... então ... não tem jeito de trabaiá
- (Doc.2) () então o senhor não acha legal ... não acha bom participar ()
- (Inf.) ( ) não acho bom participá nihondjinkai ... é BOM participá ma não acho bom por causa do que io não posso largá serviço .. e pro ( ) coisa pra é pro serviço não tem ... e io preciso do serviço né ? //hum hum//
- (Doc.2) e o senhor tem que priorizar o serviço né?
- (Inf.) é ... priorizar o serviço e depois o ... nihondjinkai
- (Doc.1) e o que o O acha assim ... de ser nikkei aqui no Brasil? assim ... ( ) descendentes né //ah ah// de japoneses aqui no Brasil? ... o senhor sente a diferença de ser um nikkeidjin (japoneses e seus descendentes) aqui?

- (Inf.) não ... não acho diferença nenhum ... eu ... pra mim tudo igual né
- (Doc.1) igual com quê? ... com relação aos ... buradirudjin (brasileiros)?
- (Inf.) é ... porque... ninhondjin (japonês)...//hum hum// fala que é nihondjin mas nihondjin ... VEIO no Brasil ... mais ... a gente tem que respeitar mais Buradjiru (Brasil) né ... mai nihondjim ... fala eu sou nihondjin: não pode mandar aqui no Brasil tamém ... então TUDO tem que ser igual ... pa não ter discussão né
- (Doc.1) h tá ... quer dizer ... o senhor vê a diferença que eles fazem ... mas pelo senhor (
- (Inf.) não PODE fazer diferença ...//hum hum// tem que levar normal
- (Doc.1) hum ... bem ... então ... quanto à lingua japonesa ... o senhor ... o que o senhor acha ... da diferença que existe ... da língua japonesa ... têm a diferença não têm? a língua japonesa AQUI do Brasil ... e lá do Japão... de agora?
- (Inf.) tem tem isso aí tem ... né ... tem diferença mas é mínimo não é MUITAS coisas né ...
  //hum hum// porque nihondjin ... tem muitas palavra que tá errada aqui no Burazil...
  ma muitos palavras do Burazil tamém tá errada no nihongo tamém ... né ... então ... a
  gente leva assim meio chutado no meio ... //hum hum// EU acho que tem que levar
  chutado
- (Doc. 1) então o senhor não acha que um é melhor que o outro?
- (Inf.) não ... tudo igual né ... ... tada nihondjin no seito buradirudjin no (seitoga) tigau dake ne (só tem diferença entre os alunos japoneses e os brasileiros ne) ... mais AGORA ...

  NESSE gakko: (escola) que eu estudei no nihongakko (escola de japonês) e ESSE gakko que tá teno agora tá teno pouca diferença ... né ...//hum hum// que nihondjin quando antigamente quando tava indo pra nihongakko... sensei (professor) era rígido ... né ... falou mal do sensei quarqué coisa ... já ... levava ... papai né ...//hum hum// e pai chegava ... e agora não ... ima no gakko parece que tá meio lado do gaidjim ...//hum hum// num tá? (risadas) ... ... eu acho que tá MEIO lado do ()
- (Doc.1) ( ) se comparar com a época do O ... //ah ah//
- (Inf.) porque ... ( ) antigamente ERRADO é ERRADO ... né ... antigamente ... agora non errado demo ... tem que costumá ... aí minha mulher ficou brava com a minha filha ... né ... por QUÊ coisa errada tem que costumá ... se é errado fala po sensei que é errado ... né num pode costumar coisa errado ... levá certo ... ERRADO é errado
- (Doc.2) errado em que sentido? é ... fala errado ou fazer coisa errada?
- (Inf.) nom ... fazer coisa errado
- (Doc.2) fazer coisa errado ... que a criança faz alguma coisa errado e a ( )

(Inf.) sensei fala que tem que costumá com esses coisa ... tem que levá tudo normal

(Doc. 1) ( ) aceitar o que a criança faz de errado?

(Inf.) é ... é ... que nem teve ... houve um probrema tamém com nosso gakko ... nosso sensei ... esse ... sensei daqui ne...

(Doc.2): ( ) atual

- (Inf.) aí ... tá com minha filha ... então (tossiu) se falá assim nome acho que é até ruim (risadas) ma tem um gakusei () que ponhava lápis do outro sensei ... do outro gakusei (to) que ponhava no da minha filha ENTÃO minha filha ficava como DOROBÓ ...(ladra) //ah// (agora) isso tá errado ... aí ...fala que minha filha pegó e levó pro sensei... aí sensei faló ah tá um pouco ... essas coisa tem que COSTUMÁ não PODE custumá essas coisas... se é ERRADO é ERRADO né ... aí minha filha ... minha mulher faló errado é errado tem que falá po sensei ... aí ... nesse dia que nois tava falano assim com minha mulher tava discutino ... aí ... discutindo não ... tava conversando ... é igual discutí né ... aí tava conversano ... tava falano ... aí ... eu falei ... non non pode ser assim ... entón ... tem que falá com sensei aí logo ... a ... T ... acho que foi... é sim foi ele ligou pra mim ... tem um reunião no (latido) tem um reunião no sensei ... no nihongakko mai eu non TAVA sabeno ... () treis meis né ... não tava sabeno aí eu falei po T (kore) T ... esse negócio tá ERRADO ... mandá sensei embora tá errado ... aí non era (esse) MANDÁ embora ... SENSEI que não queria ficá mais
- (Doc.1), Doc.2: senseiga ... (risadas) kawaisóni (coitada) ... porque teve problemas depois disso?
- (Inf.) ( ) nom nom esse aí não era esse negócio ... má eu não tava ... tava levando por mal tamém né ... porque (eu pensei que) às veis minha filha faló alguma coisa... aí T as veis ligou pra nois aí... num era ... era outro probrema era probrema de nihondjinKAI com sensei aí eu falei bom ... T. io non vou aparecé lá no gakko: io sou sozinho non posso saí daqui ... aí io falei pra ele ...sensei io non posso ... O QUE os outro resolvé tá resorvido ... pra MIM sensei tá bom porque ... dois mês demo ninenseini nattoruné (a filha está no segundo ano mesmo com dois meses) tá bom dimais ... né tá aprendendo bem o (nosso) sensei ... tá ... acho que tá bom dimais ... pra mim ... do jeito que os outro fazé tá bom aí acho que todo mundo entró na minha conversa todo mundo foi bom aí ...acho que esse sensei vai continuá ... eu acho bom tamém ... continuá ... não ... até eu pra dá educação na minha filha é duro ... agora mande deis pessoa pra dá educação () coisa mai duro

Doc.1E: senseimo taihen desuyone: (o professor também sofre né) (risadas) (Inf.) então ( ) (risadas) ( ) esse negócio

### Transcrição 4

Tipo de Inquérito: diálogo entre informante e documentador

Data do registro: 25/07/2003

Informante (Inf.): H.S.H., mulher, nissei, 42 anos, Aliança, Mirandópolis (SP)

Documentador (Doc.): Arissa Saeki

(......) (Doc.) você aprendeu o (  $\,$  ) o português na escola?  $(Inf.) \ \ isso$ 

(Doc.) em casa você só usava a língua japonesa?

(Inf.) não... é ... na minha família a gente é ... bátchan (vovó) e djítchan (vovô) morava junto né ... que meu pai era filho mais velho então bátchan e djítchan sempre morou junto ... então ... bátchan e djítchan até falava ... assim ... nihongo (língua japonesa) um pouco com a gente né mas como tinha funcionário ... tudo era brasileiro né ... então mesmo bátchan e djítchan já misturava né ... e como a (gente também) já fazia vários anos que tinha vindo pro Brasil né então eles já sabiam um pouco (na) língua brasileira e como tinha bastante mais contato com brasileiro né então mesmo bátchan e djítchan com a gente eles falavam ... assim ... basTAnte português e também um pouco nihongo ... agora meus pais já falavam MAis português só com a gente então é a gene foi aprendendo é ... mais (bras...) português mesmo né

(Doc.) mas você fala bem o nihongo mas você consegue assim responder e ... ( )

(Inf.) é que eu falo errado ... eu falo ... como é que fala eu sou meio ... ... eu não tenho muita vergonha né ... (é que) minha sogra aqui ... é ... aqui é o contrário quando eu vim pra cá né que eu casei faz seis anos e eles são issei ... eles vieram acho que com vi::nte e poucos anos né então eles já vieram ... há ... e eles praticamente só falam nihongo MEsmo eu que vim pra cá depois que casei eles falam só nihongo comigo então aí eu fico ... aí a gente começa a mesmo errado vai ... tem que se comunicar né mais eu falo assim bastante errado e juro que ela não ( ) que eu falo pra ela assim quando eu tou falando errado e ... me corrige né (então) coitada aquela correria também né (então) ela hã entendi e fica tudo (por isso mesmo) (risadas)

(Doc.) entendeu tá bom (risadas)

(Inf.) (risadas) é que ela entende muito mais fácil né as veis a gente faz um gesto ou outro e ... e acho que ela pega a conversa ... sei lá (só sei que) ela fala que entendeu aí ...

- (Doc.) hum hum... e acaba ficando por isso
- (Inf.) mas meu nihongo é muito ... é ... assim né ... muito falho né eu falo uma pala::vra ... depois falo outra ... (tão) fica ... tudo pelo ...
- (Doc.) (então) mas isso é uma característica assim ... do nihongo faLAdo aqui no Brasil né
- (Inf.) ah e que tem muita gente MEsmo pessoas que é ... tem um pouco de estudo ... ou ... é ... eles misturam muito né
- (Doc.) hum hum ... é porque ... ( ) (uma forma assim) que (parece que) é ... de identificação né ... ( ) a gente vê assim pessoa falando é TUDO misturado ... e é uma forma normal de comunicação né ... mas você ... você acha (assim que) que seu japonês não é bom?
- (Inf.) ah (eu cresceu assim) porque eu levo ah minhas duas filhas vai no yo:tchien (jardim da infância) né já faiz dois a:nos ... mais de dois anos ... (então eu vejo né) como sensei (professora) fa:la as vezes eu falo uma COisa e aí ela repete o que eu falei na forma certa aí é BEm diferente né
- (Doc.) a sensei corrige( )?
- (Inf.) ela não corrige ela fala ah se tá falando isso fala em nihongo né ... aí eu vejo que é bem diferente né ... a forma ... assim lógico né ... a forma da colocação do verbo a palavra falada ... da maneira correta né ... mas é bom que ... eles não ligam né assim ... eles falam que ... é até incentivam é muito melhor falar errado e tentar falar do que ... tem muitas pessoas que por vergonha de falar u:ma palavrinha errada já ... se fecha né não fala nada né
- (Doc.) então isso que é o problema né ( ) a pessoa na verdade sabe mu:ito mas ... ( )
- (Inf.) não fala né eu é o contrário eu sei muito pouco e falo aí ... ( ) (risadas)
- (Doc.) ah tá (risadas) (não porque) eu pensei né (ela não) ela não queria em japonês mas ela fala tã:o bem (risadas)
- (Inf.) (risadas) assim eu ... como é que fala ... ah ... pra se (apresentar) alguma co:isa ou pra falar pra pessoa entrar né ... ( ) (e assim) o Mínimo uma coisa bem mínima né
- (Doc.) hum hum aí é (é) tranqüilo
- (Inf.) aí depois que a coisa fica difícil (risadas)
- (Doc.) ah ... é então na sua ... na sua família quando foi criada ... é ... os seus pais tinham preferência assim ... da língua pra vocês aprenderem? ou era só português e tava bom?
- (Inf.) é que ... o m:eu pai é issei (de primeira geração) ele veio com oito anos ... né ... é: ... onde a gente nasce:u e foi ... criado né ... é ... tinha acho que po:ucas famílias japonesas ... meu pai tinha assim pare:ntes amigas mas eram ... não eram ... assim

vizi:nhos né não eram na mesma ... ah ... como é que fala? bairro então assim ... a gente (tinha) ma:is contato com brasileiro me:smo ... e a minha mãe ela já é nissei ... então pra minha mãe também era mais difícil né ... é ... então é assim ... ah meu pai () meu pai é assim ele tem (louc) ele ... ele é japonês assim ... daqueles ... e ... sabe? que orgulha () ... pra ele o Japão é o melhor país é ... () pra ele ele ado:ra ser japonês né ... ele até acho que gostari:a mas era difícil né a gente era peque:na e ele também tinha que trabalha:r né então assim ... ele sempre teve essa vontade mas ... desde criança ele não tinha assim mu:ito ... não podia ... é ficava o tempo todo fora trabalhando né então era difícil né pra ELE poder incentivar a ge:nte a ensinar né

- (Doc.) hum hum mas o gakko (escola) você freqüentava?
- (Inf.) hum até ... eu acho que nã:o tinha a cidade onde eu morava era assim be:m pequena tinha assim bem pouco ... assim japoneses descendentes ... o que eu me lembro não tinha escola japonesa
- (Doc.) ah tá ... que região? ( )
- (Inf.) ( ) pertence a A só que era uma cidade meia hora de lá ... é ... uns trinta quarenta minutos ( )
- (Doc.) ah tá é pequena
- (Inf.) ( ) é ( ) deve ter cinco mil ... treis a cinco mil habitantes eu acho né ... é uma cidade be:m piquinininha aí DEpo:is lá nós moramos ... depois que (no caso) eu:: nasci até os deis até //até quantos anos?//... até onze anos aí depois nós mudamos pra uma cidade um pouco maio:r e lá também tinha poucos japoneses só que ... como já tinha dito anterior né tinha um um senhor que ele queria ensinar para as pessoas os descendentes de japoneses né aí ele tentou ensina:r a gente ia era aos domingos só que ele sabia só nihongo ele não ele ia explicar pra ge:nte aí ele fala:va como é que fala ele a gente falava que quer dizer i:sso ne ele NÃO conseguia traduzi:r
- (Doc.) aí então vocês não conseguiam entender o que ele falava porque vocês eram uma turma assim que não usavam o nihongo dentro de casa
- (Inf.) não era muito ( ) como era assim tipo só é konnitchiwá: (boa tarde) sayo:nara: (adeus) assim coisa MI:nima né agora conversar: mesmo era muito pouco né aí esse //sensei// senhor não era sensei aí também ele desistiu né a gente também ficou desestimulada né não tava conseguindo aprender: criança assim né aí foi o que ... alguns me:ses só aí não teve mais nihongo né o po:uco que eu trouxe comigo foi do meu vó paterno que a gente morava ju:nto então bátchan e djítchan sempre né ... algumas coisas ... é que

	basta: nte ela falava em $nihongo$ e a gente também entendia: a í na  convivência né pelo $$
	menos alguma coisa vai aprendendo né ( ) mas mai:oria ( ) coleguinha de esco:la
	é tudo era brasileiro então era difícil assim né aprender <i>nihongo</i> mesmo né
(Doc.)	quer dizer não ( ) tinha opção no caso né ( ) seu pai valorizava muito
(Inf.)	sim: ele se:mpre nossa ele só que na Època ele não ele também não tinha tempo né
	ficava o dia inteiro fora chegava só de tardezinha aí a gente também era criança
	pequena logo depois já dormia: então não era mui:to contato né
(Doc.)	( ) mas você hoje você usa as duas línguas o japonês e o português porque você e a
	sua sogra ela fala em <i>nihongo</i> né (  ) quer dizer dentro de casa você tem esse (  )
	hábito e seus filhos ) e conforma a regula escapação de aparez a patricia patricia patricia patricia de se
(Inf.)	então com e:la é pou:co porque incrível né que nem o meu: marido que é fi:lho dela
	então ele foi criado des: de criança só $nihongo$ ( ) pelo que eu saiba os pais dele quando
	ele era criança só: falava nihongo né até ir na escola (    ) e até hoje os pais dele só fala
	nihongo com ele e aqui dentro de casa né entre eu e ele e as criança ele só fala em
	português então eu falo assim pra ele ( ) porque lá no gakko ( ) os senseis falam né
	pra estimula:r pras crianças aprende:r né é e tudo isso né aí eu falo pra ele vamo eu
	sei pouco mais o pouco que eu sei eu tento passar pra elas né e eu falei assim e você
	pode até me ensinar né você sabe bem mais né e ensinar a elas também sei lá se é
	rece: io se é falta de hábito né acha que é só com os pais que pode fala r $nihongo$ a gente
	acha que tem que ser com o português né então as veis até é engraçado as veis ( ) fala
	papai ohayo: (bom dia) ah bom dia eu falo ( ) (risadas) então é aqui dentro agora como
	elas estão já indo no yo:tchien então é sensei ensina um pouqui:nho aí eu tento
	apesar da correria né criança atrasa escola eu tento é como é que se fala firmar
	né aí ( $$ ) eu falo é como é que é isso em $nihongo$ né uma fruta de manhã falo pra elas
	cumprimentarem em nihongo e com bátchan as veis fa:la também alguma coisinha né
	mais é pouco também elas também assim não é assim muito e também como
	estão em yo:tchien ainda não é parte escri:ta é mais parte de aprende uma mú:sica
	em <i>nihongo</i> né aprende co:r é algumas palavri:nhas
(Doc.)	( ) você você gostaria que suas filhas soubessem $nihongo$ né ( )
( <i>Inf.</i> )	eu acho que seria bom né porque uma que é como é que fala criança tem uma
	facilidade grande né de aprender e tem vontade né e e ( ) é uma língua que é ( )
	a origem da gente né então já aprendendo a língua já a ( ) vai aprendendo a cultura

também né

(Doc.) ( ) então você acha que para ser um nikkei é impor T Ante saber a língua? a japonesa?
$(Inf.)$ (a) $\sin x_{11/2}$ where $x_{11/2}$ is the state of the state
(Doc.) por causa que saber a língua ( ) é saber a cultura?
$(\mathit{Inf}.)$ é acho que isso principalmente né porque acho que a cultura japonesa assim
ela ela tem muita coisa assim bo:a né coisa assim bonita pra aprender né em
termo de cultu:ra porque através da língua você vai aprender a cultura né é então é
bom que elas aprendam né e outra é origem delas né então é acho que é importante né
e criança cria:nça adulto acho que quanto mais você ensina por que criança não é
só (aquele) ah quer passear então vamos quer comprar isso então compra não
é essa coisa é muito vazia né só ficar naquele mundo de comer dormir e e
brincar e acabou né acho que a vida é pra você aprend:er pra você conhece:r né
então desde criança assim se você estimu:la né acho que é importante (e acho que) a
língua japonesa porque é origem da gente a descendência né ( )
(

# Transcrição 5

Tipo de inquérito: diálogo entre informante e documentador

Data do registro: 29/07/2003

Informante: J.K.I., homem, sansei, 43 anos, Suzano (SP)

Documentadora: Elza Taeko Doi

sutapare, violen ober 8, genra - Lentices a Lentes - 8 genrie uni puete deste - V(1.010.com)

(Doc.) por outro lado o senhor acha importante que o descendente fale japonês?

- (Inf.) bom... nihongo (japonês)... eu acho que ... isso...eh... já faz parte né... faz parte... eu preciso aprimorá mais... mais como... a gente... quando a gente é criança... assim... né... eu poderia tê me esforçado mais um poquinho... mais... né... prá tê mais facilidade... mais... aprofundá aprofundá mais na na língua na escrita né //sei// no imi (significado)... no kandji (ideogramas chineses)... assim... sabe... essas coisas mais... mais complexas... né ... mais aí //acho que...// é uma coisa da circunstância... também... né... não é porque não precisou... né... não precisou naquele momento... né //eh... talv...// eh... eu acho que sim... eu acho que aquilo... naquela época que eu... que a gente foi... eu estudei... eu me formei em mil... novecentos e setenta... história... historicamente falando... a gente fala assim... falá em história //sei... sei//...em história do Brasil //sei// então o Brasil tava...tava...assim... numa situação econômica muito boa... né...sessenta... setenta... né... enton... jamais a gente.. ia imaginá que futuramente ia sê necessário de uma manera... vamo dizê profissional. acho que foi mais isso. //ah...// no meu caso //ah...// no meu caso //sei... sei// agora... eu acho que agora tá mudando muita coisa...nesse sentido... né // eh... eh //
- (Doc.) é... porque por outro lado... né... fico pensando... sabe... preservá a língua dos... ancestrais... né...// ah... sim... é // isso o senhor acha que é importante... né? ou que... na...não há necessidade... é isso que eu tava fazendo a pergunta. o senhor acha isso importante ( )
- (Inf.) ah... sim a pergunta... eu acho que fuji um poco... né...// ma não tem portância... não tem portância // eh... geralmente eu acho que é uma... quando a pessoa tem orgulho... dentro da gente... aquele... fala eu sô ... não NEGÁ... né... não negá... o que a agente é ... eu acho que a gente tem que pelo menos... pelo menos... sabê... né... alguma coisa... né... eh... em termos... não vou dizê eu... eh... como a gente fala hoje de uma

identidade dos negros... os negros fala assim... não... eu sô... sô. então eu acho que a gente tem que... não vou falá... eles tão descobrindo isso hoje // hum...// agora... recentemente...mais o ...acho que as otras raças // hum // acho que isso... eh...isso... é uma coisa natural... sabe... da gente achá... que... a gente GOSTAR do pai // hum // a gente... isso é uma coisa natural... né! // hum...// gostá do pai e da mãe... né // eh! // e gostá do djitchan e da batchan... né // hum // isso é uma coisa natural que a gente nasce com isso... porque a gente vai... vai crescendo... a gente vê o djitchan... batchan sempre junto com a gente... então a gente... a gente vai gostá dele... NÉ! é lógico... né... se o djitchan batchan dé ... o devido afeto... né // sei // então acho que... por mim foi... é natural... não tem como eu falá não. isso é uma coisa nata... né. não vô falá... eu não posso discuti isso em termo de... de... vamo dizê... de lógica... né... talvez é uma coisa nata... né // sei // que ta dentro da gente... né // sei... é uma coisa mais // é uma coisa que desde pequeno... quando ocê nasceu... né // coisa mais afetiva... também... né // é... talvez.. talvez... então... não posso discutir esse lado... né... porque... eu aprendi.

- (Doc.) então... nesse sentido... o senhor... então tem respeito... gosta... né // gosto... gosto // e pretende passar... também... para os seus filhos... né?
- (Inf.) ah! sim... sem dúvidas... né... coisas boas... né... coisas boas a gente tem que transmití... né // sei... sei // eh! co ( ) eh... tentá... né... tentá... pelo menos... né...(risos) // Hum //
- (Doc.) bom... o senhor que conhece... né BEM... tanto a cultura japonesa quanto a cultura brasileira... né // ah... sim // agora eu gostaria de fazer algumas perguntas meio assim... sabe ...// ah! sim // do que que o senhor acha assim... BOM... assim... o que que o senhor acha que admira... acha bom... etecétera... eh... do lado... das coisas japonesas (tosse) e depois eu gostaria de sabê (tosse) das coisas brasileiras...
- (Inf.) (tosse) eh...uma coisa que eu admiro da... bom poderia falá... né... eh... como é uma... cultura que existe há... eh... tem muita história... né... tem muita história... muita coisa pá gente... a gente... eu acho que a minha vida... minha vida intera... eu não vô consegui descubri o que seria uma cultura... da culTURA japonesa... né! // eh!// mas... resumindo... resumindo... eu gosto é da ...(estalo de língua) e ( ) existe alguma coisa... a gente fala assim: não... sê japoneis é diferente... né. é uma coisa... eh...talvez... eh... uma coisa que eu acho interessante... não vô dizê que eu gosto... né... mais que eu acho muito... é enryo (cerimônia... acanhamento)... sabe // hum...// é... eu acho isso daí uma coisa... sabe... num... num... querê ultrapassá... sabe... // certos liMItes... né // é...

enton... eu acho isso aí... uma coisa muito... puxa... eh...eh... que ... isso é... é... eu admiro... sabe... nesse sentido... né. e... e... principalmente tamem... né... o... a dedicação ao trabalho... né // sei... sei // que isso daí já... isso já faz parte... né... hã... hã... eh... eh...vamo dizê... eh... tentar ser correto... né... não é... não vô dizê... eu não sei se posso dizê ser honesto... né. mais ser correto... né //essa atitude deles que eles// () ah sim sim... é. acho isto é uma coisa que... que tá dentro do nihondjin (japonês) né! tá dentro... eu acho que ... sabe... é fazer enryo (cerimônia... acanhamento)... enryo eu acho que... é uma coisa assim... cerimônia... né // eh... é... é um respeito... né // é... é...// eu acho que é um respeito pelo outro // isso aí é uma coisa... eu acho que é ... talvez é que sai de dentro do ... nihondjin (japonês). Isso daí eu acho ... uma coisa... uma coisa que eu a ( ) admiro bastante... bastante....eh. eu acho que é do japoneis // sim // do japoneis // sim //

(Doc.) agora... do brasileiro... que que o senhor acha que realmente isso é legal... o senhor acha que seja... assim... alguma coisa assim ( )

(Inf.) bom... do brasileiro... eh... bom eu adquiri isso né //sei// sê espontâneo né //sei// a espontaneidade eu acho que é a primera coisa que... né... né... eh... sê espontâneo e.. não sei se é porque a gente vive num país tropical... né // sei // de ... de ( geralmente o... é...como peixe... sabe... como peixe... né. peixe... aves... né. geralmente peixes... aves tropicais são mais coloridos... né... então são mais alegres // sei... sei // então ... isso acho muito bão... acho muito bão essa parte... né.. então... cor... é essa... sabe... é essa alegria... espontaneidade e alegria... né. eh... eh.. tamem... é... eu acho que existe tamem eh... bom... eu acho que podia falar do nihondjin (japonês) e do... como é um ser humano é ... aí seria... eu acho que todo mundo tem bondade... né //sei... sei//... bondade acho qué uma coisa que todo mundo TEM... né //tem né// então num posso nem falá... mais é essas duas parte eu acho que a espontaneidade e a alegria né //e se tivesse// eh... é um povo tamem... um povo honesto... tudo... né... tamem... mais... entre aspas... né //sim// É //sem alguns assim...// é //é mais de maneira geral... né// de maneira geral eu acho que as duas coisa. Eu acho que ... particularmente eu acho qué um povo ... o brasileiro em si... né... obrasileiro... né.. tamem no meu caso... no nosso caso... né... a gente... eh...eh... tá adquirindo... tá adquirindo... essa... //espontaneidade...// espontaneidade... né... fala: não... tomei banho... to assim... né...to cansado... né.. e não fala assim... tentá... tentá... fala não...cê ... vivê a situação de uma entrevista e eu tô assim... né... tranqüilo... né // sim... eu ... eu reconheço...

- também... sabe // isso é uma coisa... uma coisa do Brasil... né! // é ! porque japoneses... // acho que não... acho que talvez nem... pra nós ... não to... não sei... não sei... né... mais ...
- (Doc.) é ... mas apenas... agora... esse tipo de coisa... o senhor ... é uma coisa que o senhor pensa sempre ou é uma coisa que o senhor já vinha pensando... ou agora... assim ... com a minha pergunta é que o senhor... sabe...eh...//que...eh...assim...eh...// sim... porque são conceitos... são conceitos //hum... hum// que o senhor já tem claros na cabeça //hum... sei... sei... sei// não são todos que têm esse tipo de conceito já //hum// claros... eu gosto disso gosto daquilo //ah sei sei// poucas pessoas já PENSAM dessa maneira... né... então uma coisa que eu eu acho que o senhor já adquiriu esse contacto tanto com japoneses como com brasileiros acho que aos poucos o senhor já foi sedimentando né esse tipo de pensamento né? será que não?
- (Inf.)... é... talvez... porque eu... eu tenho muito contato ... eh... no ceasa... por exemplo... né... eu tenho muito contato com nihondjin (japonês) //sei// e... gaidjin (estrangeiro) tamem...//sei// ... gaidjin... uns piãozada //sei... sei// eu VOU //sei// me inTEgro com eles... sabe...//sei... sei// das duas parte... como ... eu me expresso das duas manera... né // É // eu num sei... talveis eu sou um camaleão... sabe (risos)...né! Nesse sentido de // Sei... sei // de... de entrá assim ... eu ENTRO na cunversa... quer dizê... respeitando... é lógico... né. enton... ah... eu percebo... né... num sei... então talveis seja a minha ... // a coisa especial que o senhor tem //... ah... num sei... num vô dizê especial... mas é que eu vejo... fazendo minha análise... né.
- (Doc.) sei. agora... uma vez que eu perguntei sobre a admiração... parte positiva // hum // posso pergunta... também... a parte negativa? o que o senhor acha da...// parte negativa...// parte negativa de CADA UM deles... o que o SENHOR acha?
- (Inf.) bom...//com relação ao japonês ( )// bom em relação ao nihondjin (japonês) ma ... hum... Bom eu acho que e... e... tem que sê mais espontâneo né ... mais assim mais ... eu acho muito sabe ... //kitchikitchi (apertado... duro)// é é é muito... não vô dizê fechado mais deveria ... eh... num sei a gente podia qui expressão a gente poderia usá... né? sê mais aberto... num sei... num é aberto... mais um poquinho ma... eh... eh... relaxá mais... num sei... mais num é relaxá tamem //eu sei num é no sentido negativo de relaxar// é...//é ... saí um pouco daquela daquela coisa já pré-moldada... né?// é... é uma coisa que... é... sabe... não é regras tamem mas é... eu acho muito... acho muito bom esse... esse lado sabe de... hoje... né...hoje a gente tá vendo que regras

são muito importantes né gente... se abrí MUITO ah não pode fazê isso pode fazê aquilo vira uma bagunça //é// como tá... como virô virô esse país... //é // mais é um poQUINHO mais de...//de maleabilidade// é... se mais né se mais //sei// ( ) ... é muito polido né... como é... é num sei a gente fala: o inglês é assim... o americano é mais aberto. é... talveis seja alguma coisa desse tipo... né. como a gente... tá... vamo dizê... a gente... seria o americano // Isso... isso // e a... né... num é? // o japonês seria o inglês... por exemplo // é o inglês é... seria alguma coisa nesse sentido... num é? É que eles podia sê mais...né... e os japoneis lá fala... que eu tenho meu tio fala assim que o inglês não americano americano fala totalmente DIFERENTE... a proNÚNcia o JEIto né enton ele fala assim... meu tio fala assim o americano é um aluno MAL de inglês sabe porque ele fala difeRENTE né //sei... sei// eh... eh.. num pronuncia do mesmo modo então talvez seria uma coisa desse tipo mas eu acho que o americano é mais esponTNEO né o inglês é mais polido mais ... segue mais a regra ele é mais assim né... eh... eu acho que deveria fica mais né um poquinho mais "relax" né! //sei// fica mais à vontade né... //sei// não ... fica assim... porque no Japão o pessoal se apega tanto ao trabalho... bom... se bem que eu tamem... né... mais eu tenho muitas horas de folga... sim... eu relaxo um poço... mais ... eu tamem tenho muito esse negócio de lado japonês de trabalhá... trabalhá... pensá não eu tenho que ( )família sabe...

and a transfer some file of the second control of the second contr

e de la composition La composition de la

n and the second section of the second of the second of the second section of the second section of the second The second section of the sec

t in Model Comment Republic Comment in Application of the American Programme and Comment in American American American Securic Conference and Conference and Conference in American Security (Conference on American American

r en fransk formalisk for til state for enter formalisk for the state of the segment of the segment of the seg To state of the state of the segment of the segment

and seek to the control of the contr

# Transcrição 6

Tipo de inquérito: diálogo entre informante e documentador

Data do registro: 23/07/2003

Inf.: Informante: A.K.Y. mulher, sansei, 48 anos, Aliança (SP)

Doc.: Documentadora: Sonia R. L. Ninomiya

(.....)

- (Doc.) e hoje... Á... por exemplo... prá usar as duas línguas... né... japonês e português... né... hã... por exemplo... quando você fica muito triste... assim né...você... você expressa essa tristeza em japonês... por exemplo... ou em português? ou quando você tá muito alegre... ou quando você tá BRAva... como é que é essa reação? em que língua que você reage?
- (Inf.) ah... bom... ora em japoneis ora em portugueis... né... //ah... é... // é //em que... depende da situação?// é... depois... depende da situação... né...
- Doc. por exemplo... é um determinado assunto que faz você reagir de uma maneira ou de outra ou é ... assim... uma companhia?
- Inf. é uma companhia... né //ah...(risos)// uma companhia... né...//sei// num sei se purque o marido ta nu Japão... às vezes a gente sente aquela saudade em japoneis mesmo... né //hum... hum// é... e varia muito... né... //hum... sei... sei...//
- Doc. e para dar bronca nas crianças... que língua você usava? hoje já não dá mais bronca... né! já //é... hoje// ( ) // são moços... já...
- Inf. sabe que quando meu sogro era vivo... a gente até pá dá bronca tinha que falá em nihongo (japonês)...//ah...// é //ele fazia questão...// num sei... ele era muito rigoROSO... sabe... e hoje... graças a Deus... os menino aprendeu por causa disso... né... //hum... hum// e aqui como tem nihongaku (escola de japonês) e tudo... eles... aprendeu a lê e a escreve e falá um poco...
- Doc. ah! você os mandou para a escola ... escola japonesa... também?
- Inf. mandei... é aqui na tercera aliança... né... //ah... sei// eles estudáro desde o prézinho até o colegial //hum... é! Poxa... que bacana... hein// e hoje... graças a Deus... eles sabe lê... sabe escrevê... né... se um dia precisá i no Japão... né num tem poblema... né //hum... hum// dá pra se virá... né //hum...// é! // com certeza...// ah... é muito bom... né...
- Doc. e... por exemplo... quando você faz conta... eh... você faz em japonês ou em português?

- Inf. em portugueis...
- Doc. em português? (risos)... certo,.. eh... por exemplo... se você uma...uma amiga... ou um amigo que seja nikkei... também... e... e você quer discutir um assunto assim... você não concorda com ele e quer falar sua opinião... assim...impor sua opinião... você escolhe uma das línguas?
- Inf. ah... a gente mistura... né // mistura? // mistura né // han... han...// é mesmo assim... na associação... no fujinkai (associação de senhoras)... é... uma hora fala portugueis... otra hora fala em japoneis // em japonês...// é... né...
- Doc. então depende muito mesmo da pessoa... né // é // com quem você está falando... // é... é // né... por exemplo... se você vai fazer compra...comprar alguma coisa numa venda que seja de japoneses... você tende a falar // tem que falá japoneis // japonês... né // isso... é... é // aí não tem problemas // não // você fa // não // la tranqüilo...
- Inf. é... qui nem esses palavra comum... a gente consegue... né... agora... quando fica assim...
  mais na gramática...já é meio difícil... né... mais normalmente... assim comum dá prá
  intendê... i falá também... né // hum... hum //
- Doc. eh... você acha que é importante saber falar japonês... Á.?
- Inf. ah! eu acho... heim... e muito... né... muito... ainda mais hoje... né... que a gente...eu acho que tem que falá e aprendê... né...

Doc. por que isso?

Inf. ah! porque acho que a língua... assim... o Japão é um país muito... é um país do primeiro mundo... né! E principalmente as criança... eu acho que é importante né // hum // aprendê... falá e assim ... emprego tamem... né // hum // se tivé e consigui falá japoneis... acho que ajudaria muito... né...

Doc. mesmo aqui no Brasil? um emprego aqui no Brasil?

Inf. é... mesmo aqui no Brasil... né // hum... hum // mesmo aqui no Brasil... né // hum.... certo //

Doc. então você fez questão que as crianças fossem para a escola japonesa... né?

Inf. ah... sim... né... como não tive oportunidade... né... mas os filho fiz QUEStão de aprendê
// hum... certo //

Doc. você acha que para ser nikkei... para se sentir nikkei... você tem que saber falar japonês?

Inf. ah! precisa... né... // hum // precisa e muito... né // hum... hum // eu que fico com priguiça de i aprendê... mais...

- $\it Doc.$  mas você fala! (risadas) // mas eu...// (risadas) por isso ( ) você fica com preguiça...
- Inf.: mais que tem escola aqui a noite pus pais... né... // ah é? ai que interessante!// E a gente como trabalha o dia inteiro... assim... quando chega a noite já cansado... né... ma o sensei (professor) até que dá... ta dando aula... assim... sabe... uma hora assim... duas veis na semana...//ah é?// é...
- Doc. e dá para ir à pe daqui da sua casa?
- Inf. dá... dá pra i... //olha!// é... // que interessante!// é que é...no começo eu tava indo... depois... ah...(estalo de língua) a gente trabalha o dia inteiro... chega a noite...tá cansada... e aí desisti // hum... hum // mais é bom sim... aprendê é bom sim // hum... hum // parece que a cabeça já num ajuda mais () (risadas)
- Doc. ah! que é isso Á... você é muito jovem //ah! ai... ai // você tem quarenta e oito anos...// é isso... quarenta e oito é...// é muito moça ainda...
- Inf. é que eu tô querendo i pru nihon (Japão)... e eu fico pensando... né... ai preciso aprendê... preciso aprendê mais... aí o dia vai passando... vai passando...
- Doc. hum... hum...(risadas) é que você já fala né... se fosse totalmente zero... né... então aí acho que você // acho que é // acho que você iria... né? é que você já fala... né... então é ... é normal... né... e você participa... aqui na comunidade ?
- Inf. é.. participo...das festas // das festas // das reuniões // das reuniões... dos fudjinkai (associação das senhoras)... né // hã: // é ...participo muito...// hã: ...
- Doc. de...sou iuu...nanka... né...(e dentre essas... não é) fudjinkai ni deruto...(indo à associação de senhoras...) yappari nihongoni natchau desu... né (como não poderia deixar de ser... é japonês... não é?) // é... é // hã: ... dou desuka? (que tal?) souiu tokoro he dette...tanoshii? (comparecendo a um lugar assim...é divertido?
- Inf. Jibunde tanoshii... yo... (nossa... eu me divirto) eh....tanoshiiyo (eh...é divertido... viu) //
  hã...//

	· ·
(	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
(	

Breve perfil histórico das escolas japonesas das Comunidades Alianças (município de Mirandópolis) e Fukuhaku-mura ou Vila Ipelândia (município de Suzano)

Leiko Matsubara MORALES (USP-Brasil)

Junko OTA (USP – Brasil)

#### I. Introdução

O presente artigo irá se centrar nas descrições de escolas japonesas das duas comunidades estudadas pelo grupo de pesquisa: a primeira, o grupo de comunidades Alianças, núcleo denso de imigrantes, em que o ensino de japonês é amparado por incentivo do governo japonês, localizado na região noroeste do estado de São Paulo, no município de Mirandópolis, a 600 km da capital, São Paulo; a segunda, Fukuhaku-mura (Vila Ipelândia), comunidade localizada no município de Suzano, a 50 km da capital São Paulo, em que o ensino da língua japonesa é financiado pelos moradores locais.

Apresentamos um trabalho descritivo dos primeiros resultados obtidos a partir das leituras de textos produzidos pelas comunidades, anuário de edições comemorativas, revistas, jornais e sobretudo do trabalho de campo, que consistiu em coleta de depoimentos dos moradores locais, como professores em exercício, professores aposentados, ex-diretores de escolas primárias, gakumuin "diretor responsável pelos assuntos educacionais", pais e alunos – figuras que, em graus e perspectivas diferentes, atuaram no processo de ensino de língua japonesa.

<sup>(1)</sup> Projeto: Línguas na comunidade *nikkei* do Brasil: documentação e estudo interdisciplinar, liderado pela Profa. Dra. Mayumi Kudô, coordenadora geral e financiado pela Universidade de Osaka. Do lado brasileiro, o projeto é coordenado pela Profa. Dra. Elza Taeko Doi, da Universidade Estadual de Campinas.

<sup>(2)</sup> A pesquisa de campo foi feita em duas etapas: do dia 17 a 24 de abril e 28 de julho a 1 de agosto de 2003 na comunidade Fukuhaku; de 1 a 5 de maio e 21 a 26 de julho de 2003 na comunidade das Alianças.

<sup>(3)</sup> Gostaríamos de manifestar nossos profundos agradecimentos pelo apoio dado pelos líderes, moradores e professores das 1<sup>a</sup>., 2<sup>a</sup>. e 3<sup>a</sup>. Alianças, Comunidade Yuba e Fukuhaku (Vila Ipelândia), que gentilmente acolheram toda a equipe de pesquisadores, propiciando suporte logístico e preciosas informações, sem medir esforços. Um registro especial de agradecimento ao sr. Fumio Oura, de Fukuhaku. Sem a colaboração destas pessoas, não teria sido possível este trabalho.

<sup>(4)</sup> No total, foram entrevistados 23 informantes (7 em Fukuhaku e 16 nas Alianças), em depoimentos que duraram em média de 3 a 4 horas.

No caso das Alianças, as edições comemorativas apresentam um retrato vivo de sua história, principalmente a do 10<sup>o</sup> Aniversário, que traz descrições minuciosas da vida da comunidade nos seus primórdios, expondo com clareza o *modus vivendi* e as emoções cotidianas dos colonos. Não foi possível, assim, evitar que certos períodos, dada à abundância de dados, fossem mais densos que outros, que, ainda, estão por reconstituir.

## II. AS ALIANÇAS

#### 2.1. Primeira Aliança

Cumpre registrar que os imigrantes desbravaram florestas, tornando a mata virgem minimamente habitável, derrubando árvores, construindo hospedarias, postos de saúde, armazéns e estradas de acesso – tratava-se literalmente de um empreendimento para povoar uma terra nova. As primeiras famílias, Ogawa, Suzuki, Shinohara e Kamijô, chegaram em agosto de 1925. Depois de um ano, a fase embrionária das escolas japonesas começa com uma escola dominical instalada pelos colonos, senhores Ishido e Hosokawa, no dia 4 de julho de 1926. Assim, os primeiros passos rumo à educação podem ser atribuídos às escolas dominicais.

Nos primeiros meses, não havia sequer uma sala de aula; o professor e os alunos improvisavam "espaços ao ar livre, sob o sol forte e escaldante, onde as folhas de mamoeiras e bananeiras acolhiam as crianças para o estudo". Embora tivessem concluído a nomeação do quadro de funções de diretor, professor e assistente, não havia objetos que caracterizassem o ideário da educação: lápis, giz e quadro negro não faziam parte daquele cenário.

Depois de alguns meses, o ensino passa a englobar matérias como a língua pátria (japonês), matemática e educação moral — o que configura uma mudança de característica para um modelo escolar do Japão deixado por eles e não propriamente de orientação religiosa. As preocupações dos colonos quanto à construção de uma escola eram constantes, como pode ser observado num fragmento de carta enviada ao Japão por um morador, relatando a situação da escola:

<sup>(5)</sup> Edição comemorativa dos 10 anos de imigração das Alianças (1936).

<sup>(6)</sup> A influência do fundador da Aliança, sr. Hisashi Nagata, da Rikkokai, pode ser observada na formação das escolas dominicais, sempre presentes nas Alianças. Na fase de formação do núcleo, muitos japoneses eram cristãos protestantes, que tinham em mente o esforço individual para o sucesso, a formação humana através da educação e a dedicação de corpo e alma à sociedade.

"[...]A escola é dividida em níveis básico, intermediário e avançado. Há classes de iniciantes mas a distância mais próxima da residência até a escola é de 2 km, o que dificulta muito o acesso de crianças menores. São cerca de 20 alunos e depois das aulas dominicais, há ainda a escola primária, mas por ser uma única vez na semana, é praticamente destinada para manter o conhecimento adquirido. [...] Rezo para que construam uma escola o mais breve possível. [...]"

Quando foi atingido o número de 20 alunos, os pais passaram a administrar uma pequena escola, solicitando auxílio ao escritório da Associação Ultramarina de Shinano, que ofereceu a garagem para ser usada como sala de aula durante o dia. Em 28 de março de 1931, os pais decidem administrar diretamente uma escola, fazendo-a independente da escola dominical – a qual será conhecida mais tarde de "escola central".

Nessa época, foram escolhidos dois representantes para se filiarem a Zaihaku Nipponjin Kyôikukai "Associação Educacional dos Japoneses Residentes no Brasil". Era comum os gakumuin "diretores educacionais" liderarem na escolha de professores e na definição de diretrizes da escola. No período pré-guerra, observa-se que um número grande de moradores da região das Alianças possuía formação no magistério no Japão, enquanto que os professores locais contratados de língua portuguesa não tinham a mesma formação, razão pela qual no momento de oficialização das redes acabavam perdendo os seus cargos, sendo substituídos por professores licenciados.

A gestão escolar se dava mediante arrecadação de mensalidades; entretanto, quando as mesmas mensalidades não eram suficientes para cobrir os salários, o gasto excedente era rateado entre os moradores da região, o que atesta o papel importante da associação comunitária na divisão de despesas e nos tratamentos de assuntos locais.

Além da escola central, segundo relato de antigo morador da  $1^a$ . Aliança, foram construídas outras. Uma delas era a unidade sucursal da escola central  $(bunk\hat{o})$ , localizada na  $2^a$  seção, onde ficava o escritório da cooperativa e outra independente, na  $6^a$  seção, no km 32, administrada pelos pais de alunos residentes nessa seção, majoritariamente de

<sup>(7)</sup> Edição comemorativa dos 10 anos de imigração das Alianças (1936).

<sup>(8)</sup> No dia 14 de março de 1929, durante três dias, realizou-se o primeiro encontro dos representantes de escolas japonesas e dos professores no Consulado Geral do Japão em São Paulo, por iniciativa do cônsul geral Akamatsu. Para maiores detalhes, vide nota de rodapé no. 26 do livro de Chiyoko Mita (1991).

<sup>(9)</sup> Segundo a edição comemorativa, em 1930, por questões políticas, o 6º Distrito da 1ª. Aliança abre sua própria escola.

imigrantes oriundos dos EUA, de alto poder aquisitivo — e por isso, recebiam o nome de Seção Norteamericana (*Hokubeiku*). Nesta última, quando as crianças atingiam um certo nível, os pais transferiam seus filhos para a escola central, onde a formação dos professores era superior a de outras escolas.

Ressalte-se o fato de, no caso das Alianças, o núcleo ter um caráter mais permanente, uma vez que, com o incentivo institucional e financeiro do governo japonês, muitos imigrantes já haviam adquirido suas terras. Além disso, a formação escolar e profissional dessas pessoas era invejável em comparação a outros imigrantes.

Em 1929, com os subsídios recebidos do governo japonês, era construida a primeira instalação escolar de tijolo, onde se formaram os primeiros cinco alunos. A escola já contava com uma centena de alunos matriculados. Nesse período, começam as primeiras divergências quanto ao reconhecimento oficial ou não da escola. Mudar a categoria da escola para pública implicaria, segundo a opinião de alguns pais, "uma educação destituída de formação ideológica japonesa, com valores e preceitos próprios do povo japonês". Há registro do pensamento do presidente Yuba da Associação Aliança da época, cravando sua postura pró-educação nipônica:

"[...] não gostaríamos de ver a nossa liberdade (de educar os filhos) tolhida. Além disso, sabemos da dificuldade de não poder contar com professores brasileiros altamente qualificados para terras longínqüas como a Aliança como também nem os brasileiros que aqui ficam não possuem uma cultura elevada, assim, por mais que seja sacrificado, não podemos delegar por completo ao estado brasileiro a educação das gerações *nissei* que sustentarão a comunidade no futuro [...]. "

<sup>(10)</sup> No caso das Alianças, para a formação da comunidade, houve uma participação do governo japonês, seja de ordem financeira, seja de construção de primeira infra-estrutura, como a construção de hospedaria para imigrantes recém-chegados, na instalação de postos de saúde, seja na prestação de serviço, como os primeiro socorros para os recém-chegados etc. A 1<sup>a</sup>. Aliança foi fundada e organizada pela Associação Ultramarina de Shinano, atual província de Nagano, que mais tarde viria a ser coordenada pela BRATAC, Brasil Takushoku Kumiai, a Cooperativa de Colonização Brasil.

<sup>(11)</sup> Para entender melhor a política de implementação de envio de imigrantes, vide trabalho de Reimei Yoshioka (1995).

<sup>(12)</sup> Vide Handa (1987:417) sobre o detalhamento da formação escolar e profissional dos imigrantes que foram à região de Aliança.

<sup>(13)</sup> Saliente-se o fato de que, nessa época as residências de colonos eram construídas de pau a pique e sapé.

<sup>(14)</sup> Na descrição das escolas da comunidade, é comum encontrarmos denominação escola particular não-(ou sem reconhecimento) oficial, particular (com reconhecimento) oficial, pública e oficial, como também acontecer de um mesmo estabelecimento ter salas sob a jurisdição estadual, municipal e particular.

<sup>(15)</sup> Vide trabalho detalhado da DEMARTINI (2000) sobre as diferentes categorias de escolas paulistas existentes.

<sup>(16)</sup> Edição comemorativa dos 10 anos de Imigração (1936:118)

Assim, todos os pais concordaram em manter a escola particular com reconhecimento oficial. Preocupados com a educação espiritual das crianças, houve tentativa de estabelecer feriado sabático, tendo em vista que os alunos freqüentassem a escola dominical, mas muitos pais preferiram desvincular a orientação espiritual da escola.

Em julho de 1930, por motivos políticos internos, a primeira ruptura balançou as estruturas da escola unificada. A 5<sup>a</sup> seção se rompe da Associação das Alianças e da Associação Ultramarina de Shinano e passou a administrar sua própria escola. O mesmo rumo tomou a 6<sup>a</sup> seção que instalou sua escola sucursal, alegando dificuldades de acesso. Em 21 de julho do mesmo ano, esta última passou a ser reconhecida oficialmente como escola primária agrícola.

Nem sempre a escola central situava-se em local de fácil acesso para todos os moradores, sendo assim a distância o fator determinante na abertura de uma nova unidade escolar. Somaram-se, ainda, as dificuldades financeiras, geadas que assolaram a região e a crise econômica de 1930. Quanto à administração escolar, conflitos entre os professores japoneses e brasileiros eram comuns, como também aumento de inadimplência no pagamento de mensalidades.

Observa-se nos relatos a alta rotatividade dos professores, independentemente da intervenção do Estado na educação escolar dos imigrantes, havendo, por vezes, a substituição antes de se completar um semestre.

Em 28 de junho de 1931, a escola primária central foi municipalizada, levantando debates em torno desta questão.

Cabe registrar aqui a iniciativa do Ministério das Relações Exteriores do Japão que designou a Cooperativa de Imigração de Shinano para a formação dos professores japoneses, enviando-os à escola normal de São Paulo, com vistas à obtenção de certificado para oficializar a contratação desses professores pelo governo brasileiro. Subjacente às discussões em torno da jurisdição escolar, a ordem do dia era a política de homogeneização da população e a onda de nacionalização imposta pelo regime político da época. Não obstante a distância que a separava da capital, Aliança seria alvo de perseguição , por ser um núcleo densamente povoado por japoneses, que, além de constituir uma etnia minoritária, eram considerados inimigos.

<sup>(17)</sup> Edição comemorativa dos 10 anos de Imigração (1936:126)

Em 1934, o cerco contra os japoneses começou a ficar mais intenso, culminando nas medidas nacionalistas do Estado Novo. Diante da hostilidade oficial, buscando resguardar os ideais nipônicos de educação, a prudência recomendava a alteração da condição da escola para um ensino público e oficial. Foi nesse contexto que, em rápido retrospecto, em 21 de julho de 1930, a escola foi reconhecida oficialmente como escola primária agrícola particular; em menos de um ano, em junho de 1931, passou para a escola municipal; em 15 de julho de 1932, uma parte foi reconhecida como estadual e em 1º. de abril de 1935, passou a ser chamada Grupo Escolar Estadual. Atrelada a essa força conjuntural, havia, por outro lado, a demanda dos alunos .

Nos bastidores dessa mudança, as questões domésticas eram marcadas por discussões da transferência da administração escolar da Associação Ultramarina de Shinano para a associação de pais, marco importante que caracterizou a tomada de responsabilidade e controle por pais.

Segundo relatos de Eizô Niizu, 88 anos, depois da 2ª Guerra, as aulas de japonês voltaram a ser ministradas por volta de 1947, na 1º seção, pelo pastor Kenji Irukawa, na escola "Casa da Uva", em sua própria residência, freqüentada por cerca de 40 alunos. As aulas duraram aproximadamente 10 anos. Além desta escola, na 7º seção, também havia aulas com Osamu Sato. No km 32, na 6º seção, havia dois professores: Iwamoto e Mizokami, cada um ministrando aulas numa extremidade da seção, ambos na sua residência, à noite. Essa situação durou mais de 10 anos. Mesmo quando as aulas de japonês foram retomadas na 1ª Aliança, na região Central, nem todos podiam freqüentá-las: devido à distância, a filha do sr. Niizu, por exemplo, freqüentou os dois primeiros anos da escola brasileira a pé e nos dois seguintes, a cavalo.

No final da década de 50, na 6a. Seção, Sobe Iwamoto deu aulas por cerca de 4 anos. Esse curso era freqüentado por cerca de 30 alunos de todas as idades. As aulas eram aos domingos, entre 10 e 14h; naquela época, o almoço era servido cedo, por volta das 9h e após a refeição, as crianças iam estudar. As aulas consistiam basicamente da leitura e escrita. Os livros didáticos eram *Atarashii Kokugo* da Editora Tokyo Shoseki. As mensalidades não

<sup>(18)</sup> A constituição de 1934 foi a primeira a dar tratamento sistemático à educação, à qual dedicou o Título II do título V (artigos 148 a 158), além de defini-la como "ensino primário integral gratuito e de freqüência obrigatória, extensivo aos adultos" (capítulo II, artigo 150, parágrafo único, letra a). Vale notar que essa mesma constituição previu, pela primeira vez, que o ensino seria ministrado em português (capítulo II, artigo 150, parágrafo único, letra d)

<sup>(19)</sup> Em março de 1932, alcançava-se o número de 175 crianças matriculadas, das quais, 99 alunos estavam matriculados na escola central, 42 alunos na 6ª seção e 34 alunos na 3ª seção.

eram cobradas e os pais retribuíam com uma pequena gratificação.

Niizu recorda-se que, desde que a "Casa da Uva" foi extinta em 1950, juntou as crianças da seção onde morava (10ª seção) para começar a ensinar, pedindo ajuda para a sua mulher, quando o grupo excedia os vinte alunos. Seus netos foram todos educados na sua seção e quando havia eventos gerais da região Noroeste", participavam junto com as crianças da 1ª. Aliança, como também de lá lhe eram emprestados os livros didáticos. Assim, as aulas intermitentes, se somadas, continuaram por entre 30 e 40 anos. Com a queda no número de alunos desde 1996, atualmente só ensina o seu bisneto. Niizu recebeu a visita do prof. dr. Yoshio Mase", que ficou sensibilizado com a situação e trabalhou em prol da coleta de livros didáticos usados no Japão. Os materiais didáticos foram enviados à comunidade com o auxílio da JICA", que arcou com as despesas de postagem.

Noriko Niizu, 63 anos, ainda recorda-se que durante os anos 55 a 58, na  $10^a$ . seção, seu pai, Eizô Niizu, Taketo Haneda e Shigeo Honma revezavam-se para ensinar a leitura e escrita para mais de dez crianças da seção, no espaço cedido por Kudô. As aulas ocorriam duas vezes por semana, por cerca de duas horas. Lembra-se que na região Central, onde se localizava a atual escola japonesa, as aulas foram reiniciadas pelo pastor Nakamura, por volta de 1966 a 1967. Durante as décadas de 70 e 80, o filho do antigo pastor Irukawa, Nozomu Irukawa, ensinou japonês. Novamente nos fins dos anos 80 para início de 90, o pastor Shinokuwaya retomou aulas de língua japonesa, com alguns assistentes — assim, a presença destes pastores supriu a falta de professores de japonês durante um período. Dos anos 89 a 95, aproximadamente, a associação local contratou uma professora.

Em 1998, na falta de professor e com uma contingência de 40 alunos, Noriko Niizu e Agnes Kanna Yuba, da comunidade Yuba, são solicitadas a dar aulas temporariamente. Desde então, Noriko açabou ficando na escola e Agnes Yuba, por sua vez, foi se especializar no curso de formação para professores, de dois anos, promovido pela JICA no Japão e retornou à escola. Durante este período, em abril de 1998, a comunidade recebeu o professor Tetsuhiko Kimura do Japão, que trabalhou por um ano, num programa de intercâmbio. Desde 1999, a JICA envia bienalmente um professor de japonês. O atual professor, prof.

<sup>(20)</sup> A regional Noroeste inclui três subdivisões: a primeira, congrega as escolas japonesas de Pereira Barreto, Mirandópolis, Andradina e as três Alianças; a segunda, Araçatuba, Valparaíso, Birigüi e Guararapes e a terceira, Bauru, Promissão e Lins.

<sup>(21)</sup> Lingüista e dialetogista japonês da Universidade de Shinshû. Na ocasião, entre 1986 e 1987, o professor Mase esteve no Brasil como professor visitante da Universidade de São Paulo.

<sup>(22)</sup> Japan International Cooperation Agency, órgão vinculado ao Ministério das Relações Exteriores do Japão. A partir de 1 de outubro de 2003, passou a ser órgão do governo independente.

Yukawa, é a terceira pessoa enviada pela JICA. A 1<sup>a</sup>. Aliança ainda conta com subsídios oferecidos pela província de Nagano na contratação de professores, desde há aproximadamente 15 anos. Assim, o quadro atual é constituído de dois professores e duas assistentes.

Cerca de 30 alunos estão matriculados, desde a idade pré-escolar até os 17 anos. As aulas são separadas em turmas de diferentes níveis, com o acompanhamento de quatro professores, que se revezam a cada 30 minutos.

As aulas de pré-escola são dadas duas vezes por semana, cada aula com uma hora de duração; os de idade escolar, duas vezes por semana, com duas horas de duração. Às sextas, o horário de aula é destinado à prática de atividades recreativas como jogos e música, e à noite, a participação é livre para treinar tênis de mesa. A escola adota dois livros: *Hiroko-san no tanoshii nihongo* no. 1 e 2 da Editora Bonjinsha e *Nihongo do-re-mi*, editado pela JICA.

A escola dispõe de materiais de apoio como cartões ilustrativos e de *kanji*, cadernos de caligrafia para *hiragana e katakana*, fitas cassetes para compreensão oral, vídeos com desenho animado, músicas infantis e de adultos para tradução e compreensão.

As reuniões entre os professores são feitas quinzenalmente; e no final de cada semestre, realiza-se uma reunião com os pais. A escola dispõe de boa infra-estrutura, como copiadora, computador e um acervo bibliográfico, doado anualmente pela JICA.

As atividades extra-aulas são complementadas com concurso de oratória, acampamento escolar (rinkangakkô), concurso de tênis de mesa, caligrafia, gincana poliesportiva (undôkai), festival de música, participação nos testes de proficiência em língua japonesa (nihongo nôryokushiken) e testes para as crianças (kodomo nihongo tesuto), promovidos pelo Centro de Estudos de Língua Japonesa.

A metodologia visa atender à expectativa dos pais, que desejam ver seus filhos falantes de língua japonesa; durante a aula, os professores evitam ao máximo o uso de português e procuram dar ênfase na conversação e na escrita. As professoras assistentes são responsáveis pelo acompanhamento dos exercícios da escrita, tomam a tarefa dos alunos e lêem os livros infantis. Outros eventos, como o dia das mães, cerimônias de início de aulas e formatura são mantidas, com premiação aos melhores alunos e aos mais assíduos. Os preparativos demandam esforços dos professores que podem se estender até aos finais de

<sup>(23)</sup> Exame de proficiência em língua japonesa, promovido pela Fundação Japão e Associação Japonesa de Educação Internacional e realizado no Brasil desde 1984, nos primeiros anos pela Aliança Cultura Brasil-Japão e posteriormente pelo Centro de Estudos Japoneses (Nihongofukyûsentâ)

semana. O sistema de promoção para as classes superiores é feito de acordo com a capacidade da crianca.

Segundo relatos da profa. Agnes Kanna Yuba, "é difícil exigir dos alunos uma dedicação constante e exclusiva, já que as aulas da escola brasileira tomam muito tempo".

Como atividades de atualização dos professores, fazem visitas periódicas à escolamodelo de Araçatuba, como também outras escolas da região e participam dos cursos de atualização, promovidos pelo Centro de Estudos da Língua Japonesa.

Uma nova atividade introduzida na região é a chamada *kanzume kyôshitsu*, um tipo de aprendizagem em "imersão" que foi realizada pela primeira vez em julho de 2003 na comunidade Yuba, durante 3 dias. Neste ano, houve participação de 16 professorese 14 alunos (2 alunos de cada escola da região Noroeste de São Paulo).

Ainda, na 1<sup>a</sup>. Aliança, não podemos deixar de fazer uma menção especial à comunidade Yuba, que tem a sua própria escola de japonês, com cerca de 21 alunos, desde a idade pré-escolar até os 18 anos.

A comunidade inteira, desde os mais jovens até os de idade mais avançada, sem exceção, fala fluentemente a língua japonesa, como primeira língua de aquisição, num contexto brasileiro em que a língua materna deveria ser o português. Num sistema de insulamento, a comunidade subsiste à globalização, adotando o modelo comunitário em que se fala basicamente o japonês. Em Yuba, a primeira língua é o japonês, onde as crianças passam a ter contato com o português somente aos sete anos, o que a difere das comunidades vizinhas, onde o português é a primeira língua.

Respeitando os princípios norteadores do fundador Isamu Yuba, a comunidade procura preservar a língua como elemento fundamental para a continuidade da cultura japonesa. Observa-se um ambiente dinâmico para a aquisição do japonês, de modo natural e sem percalços. Desde a prática esportiva e artística de diversas modalidades, incluindo balé, piano e teatro, brincadeiras infantis até tarefas comunitárias, tudo é feito usando a língua japonesa. Além disso, a comunidade dispõe de recursos para a manutenção da língua como uma biblioteca, a rede de transmissão NHK etc. Este ano, especialmente, a comunidade recebeu uma professora que veio do Japão num programa de intercâmbio, encarregada atualmente das aulas para as crianças da comunidade.

<sup>(24)</sup> As escolas-modelos localizam-se em Belém do Pará, Manaus, Rio de Janeiro (capital), Brasília, Goiânia, Vitória (ES), Salvador, Londrina, Curitiba, Porto Alegre, São Joaquim (SC), Dourados (MS), Marília, Araçatuba, Mogi das Cruzes e Colônia Pinhal, totalizando cerca de 16 escolas que recebem subsídios da JICA.

# 2.2. Segunda Aliança

Diferentemente da 1<sup>a</sup>. Aliança, a 2<sup>a</sup>. teve a participação de duas associações na formação do seu núcleo, a Ultramarina de Shinano e Ultramarina de Tottori, em abril de 1927, que começaram o povoamento pelas regiões de Travessa e Cotovelo. Assim, o bairro foi dividido primeiramente em 4 seções e começaram a aparecer as primeiras escolas primárias com características de um terakoya.

Na região de Cotovelo, em abril de 1928, tem-se a notícia da primeira escola, simultaneamente com a escola dominical. As aulas eram ministradas duas vezes por semana, às quartas-feiras e aos domingos, das 8h às 12h e as disciplinas eram educação moral, língua pátria (japonês), matemática, canto e educação física. As mensalidades eram base da sua administração, entretanto, havendo saldo negativo, era rateado por todos os moradores. A divisão das classes seguia o modelo japonês de seis séries no primário, com cerca dé 39 alunos matriculados no total.

Em 1929, novas famílias vieram constituir o núcleo, nas 5ª. e 6ª. seções de Cotovelo (km 29), como também iniciava a colonização da 3ª Aliança, núcleo vizinho. Conseqüentemente, os pedidos de ingresso na escola aumentaram, tornando necessária a ampliação de salas. Já nessa época, a administração escolar era formada por quatro gakumuin "diretores educacionais", um diretor de escola, uma professora e um professor da escola dominical. Assim, as aulas aumentaram para 3 vezes semanais (domingo, quarta e sexta), das 8 às 12h. As matérias eram educação moral, língua pátria, matemática, canto, ginástica, língua holandesa e leitura de textos.

Os alunos eram divididos em dois grandes grupos: de 1ª a 3ª e de 4ª a 6ª séries. Para atender à demanda, em 1930, na 6ª seção e na 3ª Aliança foram abertas novas escolas primárias. Entretanto, em 1931, há o decréscimo do número de alunos, como reflexo de corte de custos decorrente de forte geada e da crise mundial, atingindo diretamente a educação. Há registros de que, não obstante o fato de os salários dos professores serem irrisórios,

<sup>(25)</sup> Denominação dada às instituições de ensino básico para as crianças em idade pré-escolar de classe menos abastada durante o período Edo (1600-1867) e início de Meiji (1868-1912). O ensino era voltado para a formação básica, a começar com a alfabetização, dos caracteres fonográficos, o uso do ábaco e sua administração ficava sob a guarda dos monges, dos senhores feudais ou dos médicos. Nos primórdios do período Kamakura (1185-1333) e Muromachi (1338-1573), a educação do povo era ministrada nos templos budistas (tera) e por isso a adoção desta denominação.

<sup>(26)</sup> É interessante observar aqui a herança do período Edo, durante a política de isolacionismo: o Japão mantinha contato somente com a Holanda, de onde absorvia a cultura Ocidental. Assim, a língua holandesa era a língua de intermediação entre o Japão e o Ocidente.

houve ainda drástica redução de custos, obrigando-os "a se sacrificarem voluntariamente em prol das futuras gerações da colônia".

Na região de Travessa, em setembro de 1928, foi construída a 1<sup>a</sup>. escola entre as 1<sup>a</sup>. e 2<sup>a</sup>. seções, num esforço conjunto entre pais e voluntários. As aulas eram dadas 3 vezes por semana, 4 horas por dia e os professores foram escolhidos entre os moradores da região. A grade curricular era composta de matérias como língua pátria (japonês), matemática e holandês. A escola iniciou com 36 alunos, divididos em duas classes, e funcionou até 1931.

Em agosto de 1931, as associações Shinano e Tottori foram dissolvidas e a escola de Travessa sofre as conseqüências de um impasse político, perdendo o espaço até então utilizado – durante meio ano, as aulas foram provisoriamente ministradas na residência do professor, fato que acabou reduzindo o número de alunos para 21. Retomando o espaço inicial e suportando firmemente todos os obstáculos financeiros e políticos, a escola manteve suas atividades até concretizar a unificação das escolas primárias da 2ª Aliança, em fevereiro de 1932.

Com a chegada de mais famílias, a sucursal da 6ª seção ganhou autonomia, desvinculando-se da escola de Cotovelo, construindo seu próprio centro comunitário que abrigou a escola japonesa. Havia aulas de língua pátria e matemática na residência de um professor, três vezes semanais, 4h por dia; cerca de 23 alunos estudavam nesta unidade, divididos em três grupos. Com a dissolução das associações, foi possível organizar a escola central, juntando os alunos que vieram da 6a. seção e alguns da região da Travessa. A escola central foi instalada num dos cômodos da Cooperativa de Imigração de Shinano. Havia nesta escola cerca de 29 alunos; as matérias eram línguas pátria e holandesa, além de matemática, dadas em três vezes semanais. Com o professor contratado da 1ª. Aliança, a escola funcionou por um ano e meio até a unificação. Assim, uma verdadeira rede de escolas se descortinava, parecendo reproduzir a popularização do ensino ocorrido no período Edo no Japão.

Em 1930, quando a escola primária de Cotovelo foi anexada à Central, a dominical entrou em declínio, somente voltando a operar plenamente em 1932, com a inauguração do centro comunitário de Cotovelo.

A comunicação e a regulamentação eram itens falhos neste sistema de escolas sem unidade. A disputa na localização de construção da escola primária parece ter tomado

<sup>(27)</sup> Edição comemorativa do  $10^{0}$ . Aniversário de fundação das Alianças (1936).

proporções danosas para o processo da unificação. Com três longos anos em discussão, somente em maio de 1931 as divergências foram superadas, com o ultimato do Consulado Japonês, alertando que se não houvesse definição do local ainda naquele ano, haveria suspensão de subsídios. De fato, definir a localização era uma questão crucial para os moradores da região, já que o percurso poderia variar de 2 a 7 km cada trecho.

Ainda, sofrendo a dissolução das duas cooperativas, foi instalada uma comissão de assuntos pertinentes à educação e à saúde. Assim, uma diretoria definia todas as diretrizes educacionais. Em fevereiro de 1932, uma parte da escola foi transformada em municipal. Diferentemente da 1<sup>a</sup>. Aliança, que mantinha firme a postura de uma educação sob os moldes nipônicos e resistia à oficialização, a 2<sup>a</sup> Aliança não se mostrou relutante em transferir a administração escolar para o governo brasileiro.

Naquela época, um mesmo estabelecimento escolar podia ter salas sob jurisdições diferentes, podendo uma sala ser estadual, outra municipal e/ou particular. Sendo de jurisdição maior, naturalmente os benefícios eram maiores, enquanto que, sendo particular, independente de ser oficializada ou não, os gastos corriam por conta dos imigrantes.

Em março de 1932, já havia 121 alunos matriculados na escola central, dos quais, 48 estavam no 1º. ano, 39 no 2º e 34 no 3º. ano. Foi neste ano que houve uma reforma educacional brasileira ampla, provocando restrições no número de aulas de língua japonesa em todas as escolas. Sob essa pressão, uma parte da escola primária foi transformada em municipal em fevereiro de 1933. Como medida de ajuste do quadro docente, houve demissões sucessivas e envios de novos professores licenciados para a região – reflexo da oficialização da escola.

Outra mudança na comunidade foi a transferência da administração da Associação Ultramarina de Tottori para a Sociedade Colonizadora do Brasil Bratac em fevereiro de 1934. Em 1º maio de 1934, a comissão de saúde e de educação foi dissolvida, em função do decreto governamental que proibia os alunos de idade inferior a 10 anos serem educados em língua estrangeira.

Um dos moradores mais antigos da 2ª. Aliança, sr. Hidetaka Nakao, nascido em 1931, relata que só pôde estudar até a 3ª. série, pois a escola primária completa, denominada de grupo escolar, ficava na 1ª. Aliança – longe demais para ir a pé. Assim, os estudos foram interrompidos e retomados somente quando completou 14 ou 15 anos. Mesmo

<sup>(28)</sup> Edição comemorativa dos 10 anos de imigração das Alianças (1936:257).

assim, essa continuidade não se deu nas escolas brasileiras, foi preciso formar grupos de jovens da redondeza para reinaugurar os dias de estudo — assim, o estudo de japonês foi retomado, de um lado, devido à omissão do Estado, que, apesar de impulsionar a criação de escolas primárias com a obrigação das aulas em língua portuguesa, não havia dado conta do contingente de alunos que se formariam em 4 anos de estudo básico, nem da vontade dos mesmos de ter prosseguimento nos estudos.

Nakao lembra-se dos dias que se seguiram como o grupo de jovens que estudavam à neite, à luz de lampião a gás, em dias alternados, na casa de sapé, lugar onde se criavam bichos-da-seda. As aulas duravam cerca de 2h por semana. Não se lembra do material didático, mas acredita que era confeccionado no Brasil.

Com o número de formandos aumentando e sem a possibilidade de dar continuidade aos estudos, houve na 1<sup>a</sup>. Aliança várias tentativas de estabelecer um local, visando a instalação de ensino secundário. Com o objetivo de atender todas as Alianças, em 1928, foi instalada uma escola sabática - formada por dois engenheiros e um professor, mas por falta de adesão da comunidade local, não conseguiu prosseguir adiante. Em 1930 ou 1931, na 4<sup>a</sup>. seção, têm-se notícias de formação de curso particular, porém, com poucas adesões, acabou também fechando as portas em um ou dois anos.

No começo dos anos 40, havia um curso de japonês chamado Futaba, que foi aberto com a iniciativa e a solidariedade dos moradores, em pequena escola construída a toque de caixa. Passados alguns meses, o professor teve uma indesejável visita do diretor do grupo da 1ª Aliança e mais alguns guardas que vieram vistoriar o local. Alguém havia denunciado a existência da escola japonesa. Por não ter sido no horário de aula, as crianças não foram flagradas, mas depois desse incidente, a pequena escola foi forçada a fechar. Entretanto, a semente do desejo plantada na memória dos pais da 1ª seção de Moremoto acabou germinando mais tarde. Finda a guerra, começam as aulas noturnas. Os pais eram os próprios professores. Essa atitude das pessoas resultou num sentimento de união, muito positivo entre os moradores da seção. Aqueles que tinham alguma habilidade ou especialidade passavam a ensinar: havia, entre eles, versados em assuntos de astrologia, física, matemática, historia natural, redação e agricultura. A reunião parecia uma "pequena chama de vela por ser apenas uma vez por semana. Os pais e as crianças, cada qual no seu papel, haviam reservado aquele horário para estudo proficuo".

<sup>(29)</sup> Edição Comemorativa do 45°. Anviersário da 2ª. Aliança (1974).

Como resultado dessas reuniões, foram coletadas redações dos alunos. Assim, atitudes como esta ganharam a aprovação e incentivos das mães que começaram a demonstrar mais interesse. A coletânea foi denominada de Futaba e os próprios estudantes eram encarregados de sua produção, chegando a um número de 20 edições. Cada família passou a ensinar um grupo de crianças, separando-as em básico, intermediário e avançado. O sistema era tão bem programado que, enquanto as crianças estavam no básico, ou seja aos 6 anos, antes de entrar no primário, ensinavam-se todo o silabário japonês (hiragana e katakana), tabuada e conta de multiplicação. Enquanto as crianças estavam no grupo escolar (7 a 10 anos), o ritmo era mais lento para não sobrecarregá-las nos estudos; depois acelerava-se novamente. Somente as redações eram de caráter permanente. O progresso era o aumento da freqüência das aulas noturnas, que passou de uma para duas semanais. A escola dominical de Holiness também desempenhou função importante, pois a educação espiritual delas era feita na língua japonesa.

Há registros de escola dominical organizada pelo padre Yuba, na ocasião de ocupar o posto da igreja do km 42. Assim, as escolas dominicais tiveram um papel importante na educação espiritual e formação do caráter das crianças da comunidade, vindo suprir a lacuna deixada pelos pais, que não tinham tempo para educar seus filhos. Cada vez que o padre era promovido, assumindo jurisdição maior, as aulas eram reduzidas. Durante a 2ª. Guerra, até mesmo as escolas dominicais foram fechadas. Em 1948, já se tem notícia de que as escolas dominicais retomaram o andamento, com cerca de 30 alunos.

Nas memórias de Akira Oto, na década de 50, as atividades em escolas japonesas voltaram a ser retomadas nos domínios seccionais, nos quais um grupo pequeno de pais ficaram incumbidos de reunir crianças da vizinhança para lecionar voluntariamente. Reuniam-se cerca de uma vez por semana, à noite, para estudar a leitura e escrita, sem nenhum livro didático. Praticamente a metade do tempo era destinada às atividades údicas. Durante o dia, frequentavam a escola brasileira, que ocuparia um período do dia. Depois de terminado o primário, quem quisesse continuar os estudos tinha de ir até a cidade de Mirandópolis, 20 km dali distante.

Assim, com a redução do número de famílias nas seções, em 1959, foi criada uma associação de moradores da 2ª. Aliança e as aulas de língua japonesa passaram a ser

<sup>(30)</sup> Edição comemorativa do  $45^{\circ}$ . aniversário da  $2^{\circ}$ . Aliança (1974:243) .

ministradas na região central, no antigo centro comunitário.

Nas palavras de Kimie Morita: "Lembro-me de ter estudado nos anos 60 e tive pelo menos quatro professores diferentes. Estudávamos cerca de 2 a 3 horas por dia, uma vez por semana. Cheguei a estudar até o segundo ano do ginásio equivalente ao do Japão (8 anos de estudo); as aulas eram voltadas para a leitura e escrita, com ênfase na redação. Como eu gostava muito de estudar a língua japonesa, meu pai sempre me incentivava comprando livros para mim, desde mangá "desenho em quadrinhos" até algumas revistas, mesmo depois de me tornar adulta".

Fujio Akabane, 58 anos, atual gakumuin da 2<sup>a</sup>. Aliança, relata que as aulas de língua japonesa que freqüentou durante os anos 60 a 65 consistiam basicamente na leitura e escrita de kanji. Retomou os estudos, depois de alguns anos de término de escola primária brasileira, quando então tinha 14 ou 15 anos. As aulas de japonês eram ministradas durante a tarde e lembra-se de ter estudado com livro didático do Japão, chegando a terminar o livro de 2<sup>o</sup>. ano do ginásio japonês. Recorda-se de ter tido aulas com professores Koyama e Manjôme. Lia muito mangá (revista em quadrinhos japonês) e livros. Akabane lembra-se que seu pai, no período de pós-guerra, deu aulas às crianças da vizinhança por cerca de 10 anos.

Entre os anos 1961 e 1966, há relatos de pais preocupados em aprimorar a didática do professor contratado, e para aperfeiçoá-la, assistiam sistematicamente às aulas e encaminhavam os comentários ao diretor educacional.

As críticas que se fizeram às aulas do professor da época foram: conversar demais nas aulas e não avançar o livro; o mau comportamento dos alunos; a importualidade no início das aulas; a falta de leitura sistemática dos capítulos do livro; também fizeram pedidos de aumento de lições de casa e aplicação de provas no final do mês. Tudo isso, a nosso ver, reflete a falta de didática e de preparo prévio por parte do professor.

A partir de 1966, as aulas passaram a ser ministradas até aos sábados, visando atender alunos que frequentavam a escola de Mirandópolis; houve também abertura de cursos de férias, evitando-se o período letivo da escola brasileira.

Segundo relatos, as aulas foram conduzidas pelo prof. Hiramatsu, entre os ano 70 e 90. As crianças estudavam algumas vezes por semana, 2 a 3 horas por dia. Como o professor era grande apreciador de música, ele ensinava os alunos a cantar e montava coletânea de redações. Levando em conta o horário da escola brasileira, a escola japonesa funcionava no período alternativo. Em 1986, foi construído um novo centro comunitário e as aulas de

japonês eram ministradas numa sala de reunião, em anexo ao centro comunitário. No 65°. aniversário da fundação da 2ª. Aliança, em 1989, a comunidade recebeu a visita do governador da província de Tottori e nessa ocasião o pedido de envio de professor foi formalizado, mas concretizado somente no 70° aniversário, em 1994. A atual escola foi construída em 1997.

É preciso registrar aqui que, em datas imprecisas, os antigos moradores recordam-se das escolas dominicais na região de Moremoto, como também da influência da igreja Holiness na orientação espiritual das crianças do bairro. É importante ressaltar que, embora não fossem propriamente escolas de japonês, toda a orientação religiosa era feita na língua japonesa.

Atualmente, a 2<sup>a</sup>. Aliança conta com o Prof. Kanji Ôbayashi, 6<sup>0</sup> professor enviado da Província de Tottori. Os alunos somam um número de 32, desde a idade pré-escolar até os 17 anos. À noite, os adultos vêm à escola estudar, cuja faixa etária varia desde 30 até 70 anos. Há duas turmas, de dois níveis diferentes, uma vez por semana, das 19h30 até às 21h.

As aulas diurnas acontecem diariamente, divididas em grupos, duas vezes por semana para cada grupo e na sexta, o horário é destinado para atividades que congregam todas as turmas. Nos níveis elementares 1 e 2, as aulas são baseadas em música, jogos tradicionais como "itomakimaki", "genkotsuyama no tanukisan"; nos níveis 3 e 4, faz-se muita revisão com o intuito de recordar e treinar o japonês com uso de cartões ilustrativos; à noite, para adultos, usam-se artigos de jornais e revistas, formação de frases (tanbun), músicas para crianças e adultos.

Segundo o professor, para as classes noturnas, com cerca de 12 alunos, sua preocupação se centrase em selecionar artigos de jornais ou revistas que sejam interessantes e atuais. Como são textos densos escritos em kanji, o professor os apresenta na versão escrita em hiragana para facilitar a leitura.

As atividades extras são complementadas com aulas de redação, concursos da oratória (ohanashitaikai), acampamento escolar (rinkangakkô), testes de escrita (kakikata chikaradameshi), karaokes e festivais de educação física (taiikusai). Costuma haver reuniões aos sábados com os pais, quando há algum evento.

Para o professor, o papel da escola está em introduzir aos alunos os costumes tradicionais da província, desde a música até a dança. Para proporcionar aos alunos uma "atmosfera japonesa", cuida detidamente da arrumação da sala de aula, desde a decoração alegre até a exposição de trabalhos dos alunos, para o incentivo de seu aprendizado.

Segundo sua filosofia, o ambiente agradável e as atividades divertidas devem fazer com que os alunos tenham vontade de vir à escola, mesmo sem a pressão dos pais. Na parede, observam-se mapas do Japão, com destaque à província de Tottori. Outros materiais compõem o alegre cenário de aulas: instrumento musical como órgão, vídeos, livros ilustrados, vasto material didático, cartões ilustrativos etc. que parecem reproduzir fidedignamente o cenário das classes do primário japonês.

### 2.3. Terceira Aliança

O povoamento da 3ª. Aliança começou em 1927, sob a organização da Cooperativa de Imigração de Toyama. Em 1928, já se observou um contingente de 34 moradores e 20 crianças. Nesse ano, introduziu-se o sistema seccional e foram eleitos os diretores de cada seção, os responsáveis pela educação e o diretor de saúde. No final do mesmo ano, estava concluída a construção de um espaço provisório para aulas.

No ano seguinte, em janeiro de 1929, começaram as aulas com 24 alunos e um corpo docente, constituído de um professor de japonês e um assistente responsável pelas aulas de língua portuguesa.

Inicialmente, a associação de pais administrava a escola, que mais tarde passou a cuidar dos assuntos educacionais. Nessa mudança de administração, houve demissão de antigos professores, com a contratação de novos. No final do ano de 1929, os alunos já somavam 54 e em 1930, 58.

Em 1930, recebendo subsídios de 33 contos do governo japonês, iniciou-se a construção da escola propriamente dita. Nesse mesmo período a comunidade recebeu do Japão um professor enviado do especialmente da Cooperativa de Toyama. Em 29 de abril de 1931, na mesma data em que se comemorava o aniversário do Imperador, foi inaugurada a nova sede da escola japonesa.

Em setembro de 1932, chegaram os professores de língua portuguesa para ministrarem aulas de português, o que deu impulso ao verdadeiro ensino de língua do país. Mas, a permanência desses professores não era fácil. Alguns alegavam dificuldade de acesso ou chuvas para justificar suas faltas.

Entretanto, não faltavam iniciativas locais para implementar a continuidade do estudo. Em 1930, foi aberta a escola dominical na escola central, mas não houve adesão por dificuldade de acesso. A partir de 1931, novas escolas dominicais foram instaladas na Escola

Agrícola de Watanabe<sup>(31)</sup>, nas 4<sup>a</sup>. e 5<sup>a</sup>. seção, mas sem atingir a prosperidade dos primeiros tempos. Em março de 1932, aparecem propostas para aulas aos domingos. Foram levantadas as disciplinas como assuntos de conjuntura mundial, química, física, matemática, língua pátria (japonês), língua brasileira e educação agrícola. Para manter um ensino sustentado e subsistente, os idealizadores pretendiam que as aulas fossem dadas por voluntários, mas essa atividade também não vingou, funcionando somente por um ou dois anos.

Em 1932, houve demissão sucessiva de professores. Provavelmente foi o reflexo da medida política, adotada contra as escolas de línguas estrangeiras, que atingiu os professores sem licença. Apesar das tentativas fracassadas, o número de alunos aumentava gradativamente, e em 1934 já havia 116 matriculados. Uma das alternativas de educação dos imigrantes foi a construção de uma biblioteca em 1935:

"[...]devido à diferença de língua, livros, jornais e revistas brasileiras eram bens inacessíveis e os que tinham sido trazidos do Japão já tinham sido lidos, o que nos fazia sentir privados da cultura geral — essa era a realidade das terras colonizadas. Para eliminar as mazelas e a triste realidade, não havia outro caminho a tomar - se não o da instalação de uma biblioteca. A biblioteca não seria somente um lugar de cultivo espiritual e formação do caráter, mas serviria também para a educação e até um conforto psicológico aos adultos. [...]"

Sabe-se que a iniciativa vingou e, no final de 1932, foram reunidos mais de 3.000 livros. Os maiores doadores foram Editora Iwanami de Tóquio, Setor de Assuntos Culturais de *Rikkokai* e a Cooperativa de Imigração de Toyama.

Em 1935, um novo retrato da colônia emerge: a escola primária da 1<sup>a</sup>. Aliança passa a ser Grupo Escolar<sup>(35)</sup>, reflexo da implantação da política educacional que investiu cerca de 20% dos impostos arrecadados de cada estado para a educação.

A prática até então era de que as escolas primárias reservariam uma matéria para o ensino de língua portuguesa, entretanto, o novo regime proibia que as crianças com menos

<sup>(31)</sup> Empreendimento da *Rikkokai* que adquiriu 200 alqueires de terras, onde se constru íram alojamento e acomodações aos solteiros não possuidores de glebas.

<sup>(32)</sup> Neste período, após cinco anos de colonização, de acordo com a edição comemorativa dos 10 anos da Aliança, o núcleo já contava com 100 famílias e 500 habitantes.

<sup>(33)</sup> Edição comemorativa do 10<sup>0</sup>. Aniversário de fundação das Alianças (1936:293)

<sup>(34)</sup> De acordo com Yoshioka Reimei (1995), *Rikkokai* foi fundada por Hyôdaiyu Shimanuki, pastor protestante, nos finais do século XIX que tinha como propósitos treinar e enviar jovens ao exterior.

<sup>(35)</sup> Anuário do 25<sup>0</sup>. Aniversário da Colonização da Alianças. (1952).

de 14 anos tivessem acesso ao ensino de língua estrangeira. Para agravar ainda mais a situação, corriam notícias de que a escola japonesa da Colônia Tietê tivera suas portas fechadas por ordem de uma fiscalização. Também noticiavam que a escola primária não oficializada do km 42 foi fechada, e a do km 32 só conseguiu se manter alegando dificuldade de acesso até a escola central.

Em um discurso de posse do corpo docente formado por professores brasileiros, o diretor teria dito:

"[...]enquanto as escolas de Araçatuba contavam com quatro séries, não obstante o fato de se localizarem em terras distantes, a Aliança tinha o privilégio de ter uma escola com seis séries, o que deveria ser motivo de júbilo para os moradores da colônia e por esta razão, cumpria mostrar resultados melhores que a cidade".

A nova administração escolar, liderada pelo diretor brasileiro, solicitou o apoio dos pais para agilizar a comunicação e para aquisição de material didático e foram criadas cooperativas de varejo para levantar verba na aquisição de material didático, enquanto que, para a formação dos jovens, foi incentivada a organização de grupos de escoteiros. Nesse clima de construção de uma boa parceria, foi instalada uma associação promotora de educação.

Em 1º. de outubro de 1938, as Alianças se unem e a educação passa para a cooperativa comunitária, surgindo a escola primária municipal. Em 1º. de junho de 1938, entra em vigor o decreto que proibia o ensino de língua estrangeira para menores de 14 anos. Em fins de dezembro, as escolas japonesas da colônia foram todas fechadas.

Alguns dirigentes tentaram encontrar alternativas como as aulas itinerantes, mas a prática era inviável, ficando assim a cargo dos pais educar seus filhos, sobrevivendo apenas as escolas dominicais e noturnas.

Apesar de um longo período de silêncio antes e após o término da 2ª. guerra, a 3ª. Aliança recebe em abril de 1956 o sr. Hisashi Nagata, que introduziu a filosofia 4 H aos jovens, começando, assim, uma nova fase da escola japonesa. As propostas dessa escola

<sup>(36)</sup> Anuário do 25<sup>o</sup>. Aniversário da Colonização da Alianças. (1952:72)

<sup>(37)</sup> Denominação dada ao movimento de filosofia americana de incentivo aos jovens, principalmente àqueles que se dedicavam à agricultura. Os quatro H representam head "cabeça" que tinha o sentido metafórico de pensamento e inteligência; heart "coração" de sentimento; hand "mão" de trabalho e health "saúde"ou "vigor físico".

visavam educar jovens de idade entre 10 e 17 anos, faixa etária que carecia de uma educação mais sistemática; além disso, visava introduzir os conhecimentos básicos de agricultura e ensinar a língua japonesa. As aulas eramdadas uma vez por semana, duas vezes ao dia, 2h na parte da manhã e 2h na parte da tarde e 1h de trabalho dedicado no lugar de mensalidade. O curso durava dois anos e as matérias ensinadas nesse período foram matemática, ciências sociais, geografia e história japonesa, estudos agrícolas, democracia, cooperativa, os objetivos da vida, assuntos religiosos etc. Nas aulas de língua japonesa, foram utilizados os livros didáticos Atarashii kokugo, da editora Tokyo Shoseki, Shôgakukokugo e Nihongo, editados no Brasil, para concluir o currículo escolar equivalente ao ginásio do Japão. Os alunos organizavam a edição de jornal chamado Wakaba, que complet ou 4 edições. Escreviam-se diários todos os dias. Assim, além das disciplinas escolares, os alunos encontravam-se para discutir os projetos pessoais e coletivos quinzenalmente, às sextas feiras. Em termos artísticos, havia o teatro e o canto. As meninas participavam e expunham suas produções artesanais, como pratos de culinária, tapetes, almofadas etc. O destaque desse movimento é o diálogo que se estabeleceu com outros grupos do Clube 4H, passando a promover encontros regionais e com os jovens da capital; além disso, havia viagens de visita técnica para outros países como EUA, Japão etc.

O número de alunos diminuiu progressivamente a partir de 1962, e a partir de 1965, a maioria de alunos passou a frequentar o ginásio.

Nagata deixou a Aliança nos anos 70. A partir de então, as aulas da escola japonesa passaram a ser ministradas pela profa. Kazumi Baba Sato, até a chegada do professor, enviado pela província de Toyama em 1977. A profa. Kazumi Baba chegou a ensinar por 50 anos, se contar o tempo da escola dominical. Segundo ela, que ensinou tanto com livros nacionais quanto com importados, os nacionais eram melhores, por destacarem os valores brasileiros.

Similarmente aos depoimentos anteriormente colhidos, na falta de um professor, buscava-se alguém da comunidade. Assim, as aulas eram distribuídas, em níveis e dias diferentes. As classes eram divididas por moradores voluntários da própria comunidade. As aulas eram voltadas exclusivamente para a leitura e a escrita. Às vezes, em forma de incentivo, aplicavam-se provas no final do mês e concediam-se prêmios aos melhores alunos.

O atual professor é o 13º. enviado da província de Toyama e, segundo seu depoimento, o número de alunos atual está em torno de 30, na faixa etária de 5 a 18 anos. Os alunos do primário e de séries superiores estudam 3 h por dia, 3 vezes por semana, totalizando 9 h

semanais. Os alunos do pré-primário perfazem 1h por dia, 4 vezes por semana, totalizando 4 horas semanais. Os materiais dos iniciantes são confeccionados artesanalmente e se baseiam na escrita fonográfica (hiragana e katakana) e cumprimentos diários simples. Os mais avançados utilizam o livro de tarefas Shin nihongo no kiso "Novo japonês básico" – níveis elementar e intermediário. Como o professor não fala o português, obriga os alunos a falarem com o professor em língua japonesa durante a aula. As atividades extra-aulas são Rinkangakkô, Ohanashi happyôkai, Undôkai, Piquenique e Shugâku ryokô que são atividades predominantemente tradicionais na colônia japonesa do Brasil.

# 2.4. Fukuhaku-mura (Vila Ipelândia)

Diferentemente das Alianças, a colonização de Fukuhaku-mura (Vila Ipelândia) começou por iniciativa particular. As famílias de Keida Harada e seu cunhado Sadatoshi Koga foram as primeiras a chegar, em março de 1931. Após dois anos, já havia dez famílias japonesas, que formaram a primeira associação local, denominada *Nichiyôkai*.

Em outubro de 1934, as primeiras aulas de língua japonesa foram ministradas na residência da profa. Nobue Hattori, com 14 alunos.

Em 30 de abril de 1935, inaugurou-se a primeira escola japonesa da vila e esta data foi comunicada à Zai San Pauro Nihonjingakkô Fukeikai "Liga dos Amigos da Escola Japonesa de São Paulo" e foi celebrada na presença do sr. Sato, doutor em literatura, representando a autoridade japonesa, enviado especial do consulado geral do Japão no Brasil. No dia 5 de maio, começaram as aulas de Português e Japonês. Em dezembro de 1936, é realizada a primeira formatura com cinco alunos.

Em junho de 1937, por causa das divergências no sistema de aprovação adotado, o professor é demitido. Enquanto o professor adotava um rígido sistema de aprovação e de classificação de turmas, levando em conta a competência efetiva dos alunos, os diretores

<sup>(38)</sup> O atual nome Vila Ipelândia veio a substituir a denominação Fukuhaku em 1967, apenas conhecida no meio dos japoneses. A associação dos jovens moços realizou um concurso para a escolha do melhor nome que representasse o bairro, com o intuito de oficializá-lo junto à prefeitura. Até então, Fukuhaku era conhecido pelos brasileiros não-descendentes como Cooperativa de Suzano, nome de antigo estabelecimento que existia na entrada da vila. No final da seleção, restaram dois: Suzanópolis e Vila Ipelândia. Na época, no caminho à vila, havia muitos pés de ipês nas margens do rio próximo ao bairro, o que acabou sendo decisivo na escolha. Entretanto, com a poluição, as flores não mais floresciam como antigamente. Os moradores, na tentativa de fazer jus ao nome, decidiram plantar dois pés de ipê na entrada da vila. Segundo a impressão de um antigo morador, sempre floresce primeiro o pé mais próximo à entrada da vila, e quando este perde suas pétalas, o outro comeca a florescer.

educacionais não podiam manter o funcionamento da escola com os mesmos critérios. Apesar da saída do professor, os alunos lembram-se do saudoso educador que transcendeu os limites da sala de aula.

Depois, chegou à escola um jovem professor, Jôji Kozakai, de 25 anos, de personalidade bem mais maleável que seu antecessor. Conhecia artes e sonhava em ser artista. Ele era um professor "liberal", gostava de contar histórias e ensinava matemática, história e geografia, sem se limitar ao ensino da língua.

Todos os dias, os alunos eram submetidos a um novo número de *kanji*. Durante as aulas, costumava se ouvir do professor a explicação do significado, pois não havia dicionários na época. A memorização dos caracteres era feita mediante um intensivo exercício de repetição que poderia ser de três páginas para um mesmo *kanji*. As aulas eram dadas diariamente, das 8h até o final da tarde, com o almoço intercalado.

Especialmente na premiação do melhor aluno do primário, prêmio concedido somente no último ano de estudo, a Cooperativa Agrícola de Cotia enviava o certificado e o prêmio, uma vez que Fukuhaku tinha muitos moradores filiados à Cooperativa. Em 1937, na 2ª. formatura, 9 alunos concluíram o curso. Alguns pais e mestres, sentindo a necessidade de criar um nível ainda superior, fundam as classes superiores (kôtôka) para aqueles que terminaram o primário. Em fevereiro de 1938, as aulas de classes superiores foram ministradas pela primeira vez no centro comunitário dos jovens moços, que não era ocupado durante a semana. Enquanto o primário era administrado pela Associação Japonesa, as classes superiores ficaram exclusivamente sob a administração dos pais que tinham seus filhos matriculados.

Durante o período da guerra, as escolas funcionaram á surdina em locais de difícil acesso, em cabanas de sapé que podiam ser derrubadas a qualquer hora. De uma certa forma, segundo depoimento de Fumio Oura, 79 anos, graças à postura diplomática de Keita Harada, foi possível manter a neutralidade num momento de muita turbulência. Havia pouca fonte de informações acerca da guerra, pois somente algumas pessoas possuíam rádios e podiam ler na língua portuguesa.

<sup>(39)</sup> Fumio Oura chega ao Brasil com 6 anos, mora até os 11 anos em Mogi das Cruzes e depois fixal sua residência em Suzano.

Os jovens conhecidos como junnisseis que, apesar de possuírem nacionalidade japonesa, em certa medida, já diferia dos "autênticos" japoneses, haja vista que recebiam boa parte da educação escolar no Brasil, começaram a se organizar na dianteira da reabertura oficial da escola japonesa. Os pais ainda mostravam perplexidade e receio em mandar os filhos à escola japonesa. Assim, como medida de discrição, os moradores, em comum acordo, decidiram criar escolas sucursais em 4 domínios seccionais. Diferentemente da construção da escola em 1935, de tijolos, que na época era sinônimo de opulência, as escolas recomeçaram no período pós-guerra com casas de sapé para facilitar o desmanche na hora da emergência. Assim, surgiram as unidades escolares conhecidas como Central, Palmeira, Baruel e Tijuco. As aulas eram multisseriadas (fukushiki jugyô), em que um professor passava de turma em turma para orientá-las e os alunos, enquanto uma turma fazia exercícios de escrita, outra lia ou fazia redação.

Assim, em fevereiro de 1938, a escola recebe mais um professor, Shin Sato. Esse fato marcou a época, uma vez que não era comum haver dois professores em uma só escola.

Em Suzano, pelo menos, não era forte ainda o nacionalismo de Vargas. Fumio Oura lembra-se que seus amigos iam à escola mista e frequentavam no horário alternativo a escola japonesa que tinha classes mais adiantadas. Enquanto na região as escolas japonesas só funcionavam aos domingos, Fukuhaku se orgulhava de manter uma escola com aulas diárias. O professor Kozakai usava, além do livro principal, muitos outros materiais de complementação. Oura, que foi seu aluno, lembra-se de ter lido Naoya Shiga e outros autores de literatura japonesa. Enquanto Kozakai orientava literatura, Sato ficava com as aulas de exatas. Escreviam-se também muitas redações.

No período anterior à 2ª Guerra, a escola era organizada por *Nihonjinkai*, mas os salários dos professores eram pagos com as mensalidades; com pretensões de retornar ao

<sup>(40)</sup> A definição de junnissei é diversa, no entanto, aqui vamos adotar a afirmação do próprio Oura, que se considera um legítimo junnissei, são japoneses que vieram antes ou sem completar a educação primária (primeiros 6 anos de educação fundamental) no Japão. No caso, Oura deixou o país aos 6 anos, permaneceu até os 11 na cidade de Mogi e depois mudou-se para Fukuhaku em 1935. Assim, são pessoas de nacionalidade japonesa, mas de formação nipo-brasileira. Destacamos o papel dos junnissei na construção de uma nova comunidade que buscava união com a cultura brasileira, que sempre procurou um meio termo, no sentido de complementar, de criar algo novo que não seja nem propriamente japonês, mas nem totalmente brasileiro – são pessoas que conseguiam enxergar coisas boas dos dois lados. Assim, os jovens que faziam parte da Associação de Jovens Moços, a maioria junnissei, entendiam, no seu íntimo, que a educação japonesa poderia ser um novo componente para enriquecer a cultura brasileira.

<sup>(41)</sup> Quem terminasse a escola mista, não tinha como dar continuidade nos estudos por falta de um grupo na região. Oura recorda-se que a filha do fundador Keida Harada, na época com 10 anos, andava 11 km de cada trecho, ou seja, 22 km por dia para freqüentar o Grupo Escolar que ficava somente na cidade de Suzano.

<sup>(42)</sup> Nos anos 30, não era comum haver escolas que ministrassem aulas todos os dias, exceto as escolas Taishô da capital, de Cotia e de Bastos.

Japão, a educação japonesa era um item necessário na vida da colônia, e não mediam esforços para pagar as mensalidades, mesmo que esses pesassem no orçamento familiar.

A primeira formatura das "classes superiores" viria a ocorrer em 1939. Nesse ano já se fazia notara pressão de autoridades brasileiras contra as aulas de língua japonesa no centro comunitário. Os alunos que haviam tomado gosto pelo estudo não podiam mais dar sua continuidade. Alguns mais dedicados canalizaram esse desejo à leitura de livros. Oura lembra que as aulas de Kozakai eram movidas com o espírito de que os japoneses do Brasil eram tão bons quanto os do Japão. Assim, a identidade desses jovens era construída no seu imaginário, sempre com os olhos voltados aos jovens japoneses, mas com os pés fincados no Brasil. Paralelamente ao estudo em sala de aula, a leitura foi fundamental no desenvolvimento da língua japonesa dessa geração. Na época, os livros podiam ser adquiridos diretamente na livraria ou tomados de empréstimo dos vizinhos. Assim, a cultura da leitura crescia e constantemente atualizada. *Yônen Kurabu, Shônen Kurabu e Kingu* da Editora Kôdansha faziam parte das leituras dos jovens da época.

O pendor ao nacionalismo era uma tendência mundial. Assim, os imigrantes viviam no interlúdio de dois nacionalismos, de um lado o japonês, deixado nas terras de origem e longe dos olhos, mas muito presente no coração; por outro, o nacionalismo brasileiro, que era hostil aos imigrantes estrangeiros. Antes, os imigrantes tinham a liberdade de construir escolas estrangeiras e ensinar sua língua pátria, mas, a partir de 1935, o nacionalismo brasileiro começa a tomar dimensões maiores.

Em dezembro de 1938, forma-se a 3ª. turma da escola primária. Entretanto, em julho de 1939, as aulas das "classes avançadas" da 2ª turma foram interrompidas e os professores perderam seus postos. Em 1941, Japão entra em guerra.

Desde a década de 40, os japoneses tiveram de suspender suas atividades sociais, ficando apenas dois pilares de sustentação da comunidade, sendo uma associação de pais para a administração da escola brasileira e outra, as reuniões promovidas pelas cooperativas agrícolas. Apesar de sofrer restrições, ainda havia restado canal para comunicação. Nas palavras de Oura:

"Ainda assim, criamos um tipo de escola aos domingos nas casas dos jovens voluntários que montavam uma sala de aula no fundo do barração, para onde vinham cerca de 20 pessoas. Os

<sup>(43)</sup> Na época, nem todos os moradores pertenciam a uma mesma cooperativa, uma vez que dependendo do produto agrícola era mais vantajoso fazer parte de uma cooperativa do que de outra. Assim, apesar de grande parte pertencer à Cooperativa Agrícola de Cotia, outros pertenciam à de Mogi e à de Suzano.

pais sabiam onde e quando eram realizadas as aulas. À noite, íamos com lampião a pé passar o recado. Durante o dia, tínhamos que trabalhar. Com a escola funcionando, conseguimos até realizar o *undôkai*, no meio do mato, com umas 30 pessoas".

Em 1943, durante a guerra, Oura recebe a visita de Keida Harada, líder do bairro, em traje formal, na sua residência. Era um pedido para o jovem Oura, com 23 anos na época para, ser assessor de gakumuin, cargo normalmente ocupado por pais de famílias com filhos em idade escolar para tratar de assuntos pertinentes à escola. Na época, Oura era presidente de Seinenkai (Associação de jorens de sexo masculino), representava no seu entender, a continuidade e a liderança do bairro transferida às mãos de jovens junnissei da época. Esse fato torna-se um marco fundador na condução de boa relação que vai se estabelecer ao longo do tempo com a escola brasileira – sempre marcada pela iniciativa de aproximação, sem, contudo, configurar em prejuízo de perda da característica japonesa. Oura lembra que, como Keida Harada morava próximo de sua residência, comentava freqüentemente sobre os seus "grandes ideais teóricos" que só mesmo um jovem que não tivesse filhos podia idealizar.

"As professoras diziam que os alunos só falavam em japonês e me pediam que parasse de falar nessa língua. Os alunos não queriam aprender o português. Uma das professoras mais radicais disse: eu sou descendente de italianos e por que vocês não se adaptam logo? Eu respondi que a cultura latina era diferente da oriental, desde religião, alfabeto e tudo era diferente, o que dificultava naturalmente a assimilação. O japonês come com palito, escreve em linhas verticais, budismo é diferente do catolicismo, então, quando em contato com uma cultura diferente, o que era necessário para a assimilação era o fator tempo, eu disse, e acrescentei: se a gente errar o momento certo, pode trazer conseqüências piores".

Naquela época, 90% dos alunos da escola brasileira eram descendentes japoneses e as crianças sofriam, quando entravam no primário, na escola brasileira. "A escola é o primeiro passo da socialização das crianças, então a escola japonesa deveria cumprir um papel de intermediação desse processo de socialização", observa Oura. Estudar a língua japonesa não significava abortar a cultura brasileira, mas sim, promover, através dela, a assimilação da

<sup>(44)</sup> Keida Harada foi líder do bairro desde 1931 até 1949.

cultura brasileira. A absorção da literatura estrangeira também seria possível, uma vez que, naquela época, logo depois da 2ª Guerra, a tradução de literatura estrangeira para o português era praticamente nula. Nesta linha de pensamento, o estudo do japonês não deveria ser feito em surdina, e sim com orgulho. Assim, a escola japonesa deveria ser um elo de ligação com a brasileira. A idéia foi amadurecendo entre os jovens moços da época, formando um propósito claro, com relação ao papel da escola japonesa junto à brasileira.

Assim, a pedido de uma autorização, Oura foi conversar com o subdelegado de Suzano, que era chefe da estação, para sondar as possibilidades de reabertura da escola e depois de muito explicar suas idéias, a resposta do delegado foi: "não ouvi nada e não sei de nada" e estendeu-lhe a mão. Compreendeu este ato como sinal positivo e assim levou adiante a idéia de atribuir um papel para a escola japonesa, mudando sensivelmente a sua função, de harmonizar-se com a sociedade brasileira.

As jovens professoras italianas diziam não entender o porquê dos japoneses não se adaptarem à cultura brasileira. Oura lembra que, embora não obtivesse aprovação delas, via na diretora, uma senhora já com os seus 50 anos, uma luz de esperança. Assim, solicitou que fosse não só estabelecido um diálogo permanente e profícuo entre os professores das escolas japonesa e brasileira, como também criada uma sociedade de pais e mestres para harmonizar o clima hostil e de pouca compreensão.

Por outro lado, os jovens moços passaram a discutir a necessidade do retorno à escola japonesa unificada. As escolas sob os recônditos da aldeia não iriam formar mentes abertas. Era difícil obter a aprovação dos pais, uma vez que cada seção já estava organizada administrativamente, constituindo forças antagônicas contra a unificação. Para isso, a primeira aproximação surgiu na forma de uma exposição que congregasse todos os trabalhos de alunos das unidades escolares. Em 1947, foi organizada a Exposição de Artes dos Alunos Nipo-Brasileiros (Nippaku jidôsakuhinten), que, pela iniciativa dos jovens moços, reuniu também os desenhos dos alunos da escola brasileira.

À guisa de informação, Oura lembra-se do episódio em que a diretora ficou intrigada com o título escolhido — nippaku — "nipo-brasileiros", argumentando que os alunos eram todos brasileiros, sem exceção. Não se lembra dos motivos que alegou, mas convenceu-a a manter o nome. Esse evento, a nosso ver, mostra a integração da comunidade Fukuhaku com a escola brasileira, mas sem perder a sua essência da origem japonesa. Mantinha-se o canal para o diálogo sempre aberto, de modo que a escola japonesa não fosse entidade dissociada da brasileira, tornando isso um grande diferencial nas relações inter-pessoais e na

minimização dos conflitos inter-étnicos. Atitude como esta conquistou a compreensão dos professores brasileiros. Ainda, a promoção de artes possibilitou o contato com os intelectuais japoneses da capital como Tomoo Handa, Kikuo Furuno, que ajudaram na seleção dos desenhos para a sua premiação.

Assim, Oura lembra que na 2ª ou 3ª edição da exposição geral dos alunos, um dos gakumuin da época, Saburô Toida, formado pela Universidade Imperial de Tôhoku, escreveu sua opinião: "pesquisar as pessoas da comunidade é importante, mas também seria interessante verificar a flora da região". Esse comentário estimulou os interessados a saírem a campo com as crianças, coletando as plantas existentes na comunidade e catalogou-as com nomes científico e comum – trabalhos conservados até hoje. Na concepção de alguns estudiosos, esta atitude aparentemente simples é importante para firmar o sentimento de vínculo com o local e aprofundar o conhecimento sobre a vila por parte dos moradores, não bastando plantar tomates ou repolhos para o sustento.

Em 1947, a escola que havia fechado subitamente em 1941 as portas tentava recuperar o fôlego. Em março de 1947, as aulas na escola Central são retomadas de forma ainda não oficial, ocupando uma parte do depósito no terreno de Nakamura. Caixas de tomates foram usadas para servirem de carteira. O lugar era de difícil acesso para quem quisesse chegar, localizado estrategicamente numa topografia íngreme, cravada num vale onde corria um córrego - uma escola sob o perigo, com características semelhantes de uma guerrilha.

Ideologicamente, enquanto as escolas japonesas da pré-guerra visavam formar japoneses para um dia retornarem ao seu país, as escolas ressurgidas no pós-guerra atendiam a necessidades locais. Os *junnissei* que estavam na dianteira do movimento já não tinham em mente retornar ao Japão, mas fazer de Fukuhaku a sua terra natal.

Até a realização do 3º Undôkai em 1938, foi usado o campo da escola japonesa. A partir de 29 de abril de 1939, ou seja, do 4º Undôkai até o 6º, foram realizados no centro comunitário onde dispunha de espaço mais amplo. Em 8 de dezembro de 1941, eclode a Guerra do Pacífico e os nikkeis (japoneses e seus descendentes) foram proibidos de promover qualquer tipo de aglomeração, e com isso Undôkai foi banido das atividades sociais. As quatro seções, Central, Palmeira, Baruel e Tijuco, retomam as atividades mas em sistema de escolas descentralizadas, bunkô. No mesmo ano, para a realização do Undôkai, as quatro escolas se reuniram em 01 de maio de 1947, mas já sob a nova denominação Kazoku Ian

 $Und\hat{o}kai$  "Festa poliesportiva para recreação familiar".

Undôkai é uma atividade intimamente ligada às escolas japonesas e não podia ser esquecida. Segundo levantamento de Oura, "undôkai é a atividade mais antiga que os imigrantes japoneses trouxeram ao Brasil, propagando-se rapidamente. O termo undôkai se adaptou na língua portuguesa e deve continuar por longos anos. Desde que o Japão surgiu como uma nação moderna, no novo governo estabelecido em Meiji, em 1887, o primeiro ministro da educação e cultura Arirei Mori estabeleceu não só a educação intelectual, mas também a educação física como uma das bases do desenvolvimento do ser humano, um dos itens ensino obrigatório. Assim, tendo como público as crianças do primário e do ginásio, as escolas japonesas passaram a ter amplos campos de esporte, apesar da sua escassez de terreno."

Em março de 1958, é inaugurado o novo centro comunitário dos jovens (seinenkaikan). Era uma construção arrojada para a época. No Undôkai daquele ano, estava programada uma apresentação de ginástica acrobática em grupo. Por causa da chuva, o chão estava molhado e, ironicamente, as roupas dos ginastas eram brancas. Um fato surpreendente aconteceu aos olhos de expectadores. No momento em que, Matao Taniguchi, treinador e professor de japonês, tocou o apito, os alunos deitaram-se no chão molhado, sem nenhuma hesitação, formando um colchão de pessoas para iniciar a ginástica acrobática. Esse episódio lembra a capacidade do professor na organização e no treinamento dessas apresentações que transcendia os limites da aula — e eram essas as qualidades que os japoneses buscavam nos professores: disciplina, organização e união.

Em 1958, formou-se a Associação Geral Esportiva e Cultural da Grande Suzano. Havia cerca de 11 associações na região. E o líder Kiyoshi Takabatake afirmava a necessidade de construir uma colônia japonesa unida e sólida para propósitos políticos. Foi naquele ano que pesquisadores de São Paulo vieram fazer pesquisa de campo, o que ajudou na criação de uma associação que congregasse a região da Grande Suzano ando, form-se uma comissão de comunicação entre as escolas japonesas da região na qual se filiaram 11 escolas (kyôshi renraku kyôgikai). Uma das atividades dessa comissão era a organização de exposições de pintura dos alunos, que durou cerca de 10 anos.

<sup>(45)</sup> No período pré-guerra era denominado de *Tennô tanjôbi hôshuku Undôkai* "Gincana em congratulação ao aniversário do Imperador" , comemorado no dia 29 de abril.

<sup>(46)</sup> O texto se encontra na "Programação do  $60^{\circ}$ . Undôkai, em homenagem ao  $70^{\circ}$ . Aniversário de fundação de Fukuhaku"

Finalmente, depois de mais de dez anos de luta, em 1963, a escola japonesa é unificada, excluindo somente a seção Tijuco. De cada sucursal veio um professor responsável, ficando com três professores na escola unificada. Para convencer os moradores, Oura lembra que escreveu um artigo sobre a necessidade de unificação e fez mais de cem cópias no mimeógrafo para distribuir entre as famílias. Embora o movimento para a unificação tenha levado mais de dez anos, ele acredita que foi importante esse tempo de amadurecimento, e se não o tivesse esperado, teria sido prematuro.

O ano de 1970 foi o apogeu da escola, chegando a 170 alunos matriculados e com 80 jovens filiados à associação de moços. Estudava-se cerca de 2h30 a 3h por dia, em classes multisseriadas. Em depoimento, Yoshimune Watanabe, 74 anos, relata que foi gakumuin durante 6 anos, no começo dos anos 70, e nessa época discutia-se muito a necessidade de manter o ensino de matemática ou não na grade curricular das escolas japonesas, resquício do período em que as escolas japonesas exerciam o "papel da socialização" das crianças. Alguns pais, mesmo com a mudança dos tempos, viam utilidade e eram contra a sua extinção. Os próprios alunos eram a favor da manutenção porque eram elogiados na escola brasileira, mas os gakumuin não tinham intenções de "agradar" a escola brasileira. A escola japonesa tinha de ter a sua autonomia. Esta nova postura revela a mudança de paradigma. Enquanto as antigas escolas japonesas funcionavam para dar suporte aos alunos da escola brasileira, nos anos 70, não se observou mais a mesma tendência.

De um lado, com o acentuado aumento de novos japoneses imigrantes de pós-guerra nos anos 58, que não conheciam a realidade dos imigrantes do período anterior à guerra, a vila passou por um processo de revitalização. Assim, um ato simbólico característico desta mudança é a extinção da declamação do *kyôiku chokugo* "Rescrito Imperial da Educação" que era feita durante a cerimônia de festejo ao Imperador no Ano Novo. A intensificação de um ensino mais voltado para a formação integral do ser humano, conhecido como *jôsôkyôiku*, começa a aparecer em meados dos anos 70 para início dos anos 80. A escola

<sup>(47)</sup> É uma seção que fica geograficamente no extremo da vila, separado por um córrego da região Central, Como recebia novos integrantes, passaram a congregar cerca de 50 famílias, assim, ganhou força e independência, desmembrando e constituindo uma nova associação chamada de Tijuco Preto. A escola Tijuco Preto tornou-se independente. Em 1949, na seção Tijuco Preto foi criado o Nihonjinkai. Em maio de 1956, separa da associação do bairro de Fukuhaku (sonkai). Em 1997, dissolve o Nihonjinkai e em 1999, volta a pertencer a Fukuhaku sonkai.

<sup>(48)</sup> Para maiores detalhes vide trabalho de Hiromi Shibata (1997:39).

<sup>(49)</sup> Educação que prioriza o cultivo de senso estético, da apreciação de música e artes em geral.

<sup>(50)</sup> Numa perspectiva macro, nos anos 80, os professores de japonês que eram enviados ao Japão pelo programa de treinamento subsidiado pela JICA, os professores enviados faziam o curso na Universidade de Tamagawa, onde valorizava essa linha de educação.

japonesa visava preencher uma lacuna deixada pela escola brasileira, que não tinha disciplinas voltadas para essa formação. As crianças já não apresentavam nenhum problema com a língua portuguesa. Assim, a escola chegou a adquirir até um piano para promover o ensino de música, contrariando alguns pais que acreditavam ser gasto desnecessário.

Em 1980, os sinais de queda no número de alunos podem ser explicados por diversos fatores, como a desapropriação de terras planas na localidade para construção de represa, provocando a saída de muitas famílias; a saída de jovens que se formaram em faculdades e não retornaram à vila; o fenômeno dekassegui para o Japão como também a diminuição geral de número de filhos por casal impulsionaram o grande êxodo da vila. O número de alunos começou a decair e hoje estão matriculados menos de 30 alunos. Como medida de estanque, há um ano, a associação introduziu a flexibilização na matrícula das crianças na escola, aceitando filhos de ex-moradores do bairro, mas ainda assim, o número estagnou nos mesmos patamares. Assim, os efeitos perversos foram devastadores e hoje discute-se até a possibilidade, no futuro, de realização do tradicional Undôkai de Fukuhaku em conjunto com os bairros da Grande Suzano, devido à queda no número de alunos.

Segundo registros da comunidade, a década de 80, o ensino tinha um propósito mais claro, visando o domínio da escrita e da leitura. Era geral o movimento para prestar o exame de proficiência em língua japonesa, conhecido como *nôryokushiken*, que passou a ser uma meta. A obtenção do certificado poderia ajudar nas promoções como também na obtenção de emprego junto às empresas japonesas.

Assim, do ponto de vista da formação dos professores, cumpre afirmar que a escola também passou por momentos críticos: alguns professores de qualificação duvidosa, professores que acabam se esquecendo da sua principal função docente, em detrimento de cargos que ocupavam nas associações de classe, que pregavam uma metodologia de ensino contrastivo com o português, mas acabavam provocando a ira dos pais *nisseis*, por usar demasiadamente um português incorreto e sem formalidade; profissionais de pouca ética, de formação insuficiente etc.

Em carta datada de 20 de janeiro de 1992, um professor questiona um fato curioso, reavivando as mesmas discussões de 1937, ao levantar o sistema de aprovação automática como uma questão problemática na condução de classes. Baseado no seu "princípio de competência efetiva", este professor (cujo nome será preservado), em comunicado escrito aos pais, afirma discordar do sistema de concessão de certificados aos alunos que terminaram o curso.

O professor argumenta que o livro japonês *Atarashii kokugo* foi produzido sob o parâmetro de crianças japonesas, que já têm na sua bagagem um certo número de vocábulos antes mesmo de entrar na escola, o que não é o caso dos alunos brasileiros. Por isso, a promoção não deveria ser automática; no entanto, não se introduz nenhuma mudança em concreto ou mesmo substituição do livro. Questiona-se o sistema de aprovação, mas não são apresentadas soluções que atendam os aprendizes sem conhecimento de língua.

Ao nosso ver, não raras vezes, os professores avaliam, sem muita discriminação e critérios, baseando-se na sua subjetividade, os alunos que trazem algum conhecimento da língua cultivada com a sua família, criando um ambiente injusto e pouco motivador na aquisição de língua, muitas vezes desencorajando aqueles com interesse.

Desde 1998 até o presente momento, a escola está sob a orientação de uma professora, moradora do bairro. Atualmente, a escola está com 26 alunos matriculados. As aulas são dadas todos os dias, das 7h às 10h e das 13h30 até as 16h30, com 30 minutos de intervalo. As de sextas-feiras são diferenciadas, visando promover atividades como desenho, origami, diário com desenho e leitura de livros infantis. Os livros didáticos adotados são Atarashii kokugo "Nova língua pátria" da editora Tokyo Shoseki e Kiso Nihongo "Japonês Básico" e Rabo Nihongo "Japonês Laboratório" da autoria de Yôko Kashimoto. As classes seguem a divisão do primário japonês, que vai desde 1º. até o 6º. ano. A faixa etária dos alunos é de 5 a 16 anos e as turmas são divididas por nível. Segundo a professora, procura-se utilizar a língua japonesa o maior tempo possível durante as aulas, restringindo o uso do português para as explicações e avisos. Permite-se o uso de dicionários durante a aula.

Não há lições de casa, pois, segundo a professora, é impossível conciliar com as tarefas de outros cursos como inglês, computação, Kumon (matemática) etc. Durante as aulas, o livro didático *Atarashii kokugo* é utilizado para exercitar somente a escrita, fazendo cópias.

As atividades extra-classes são  $und\hat{o}kai$ , piquenique, concurso de caligrafia (escrita a caneta e em pincel), redação, pintura infantil, festival de música japonesa, com grupos masculino e feminimo  $(k\hat{o}hakuutagassen)$  e festival de yakisoba  $(Yakisobamatsuri)^{(51)}$ . Não promove ohanashitaikai e nem supiichi kontesuto. Não há classes de pré-primário e nem

<sup>(51)</sup> O lucro obtido com a venda de yakisoba é usado para promover viagens com os alunos acompanhados da família. Nos anos anteriores, junto ao festival, foi organizada uma apresentação de atividades artísticas dos alunos, como teatro, exposição de desenhos etc.

<sup>(52)</sup> A primeira realização do ohanashitaikai de âmbito nacional aconteceu em 1965, organizado por Nichigakuren, antiga Hakkokunihongorengôkai e desde 1998 não se realiza mais em âmbito nacional, ficando somente os concursos regionais.

<sup>(53)</sup> Este evento existe desde 1979, sob o título de *Benron taikai* e primeiramente foi organizado pelo antigo *Nichibunren*.

aulas noturnas. A escola também realiza a cerimônia de encerramento no final do ano e alunos com bom desempenho no ano são premiados, como também aqueles que concluíram o curso recebem o certificado. Como na formatura é usual a participação dos pais, costuma-se preparar algum tipo de apresentação de teatro, coral e leitura de redações escritas pelos próprios alunos.

Baseado nos depoimentos, é possível observar a falta de uso de recursos audiovisuais durante as aulas, como fitas-cassetes, CDs ou vídeos, o que certamente daria um caráter oral e direcionado para a conversação. Enquanto os pais não vêem resultados otimistas no desempenho oral dos filhos, a professora, na contramão, queixa-se de que as crianças não falam mais o japonês nas suas casas e assim vêm para a escola sem compreender a língua. Enquanto de um lado os pais desejam ver os filhos falando, exatamente o que não se pode fazer em suas casas, no imaginário da professora, é forte o papel alfabetizador da escola, no sentido mais genuíno do termo, de educar para ler e escrever e não propriamente de falar a língua. Como está registrado no seu depoimento:

"A escola japonesa é um lugar para ler e escrever. Até a criança aprender a falar vai levar muito tempo...[..] Eu acho que os pais têm interesse na educação japonesa dos filhos, mas se eles ainda falassem o japonês em casa [em tom de lamentação]..."

Assim, é preciso esclarecer os propósitos da escola como um todo – professores, diretores educacionais e pais de alunos deverão estar em sintonia: se a conversação é um item importante num aprendizado, é preciso redirecionar todo o esquema de aulas para tal finalidade. Por parte do professor é necessário, sem dúvida, um treinamento eficiente para o domínio de técnicas de ensino, metodologias condizentes para diferentes faixas etárias, escolha e utilização adequada de livros didáticos, elaboração de exercícios motivadores, material de apoio etc. e a escola, como instituição, oferecer ferramentas de trabalho necessárias, como computador, copiadora, impressora, cartões de desenhos etc. para tornar a tarefa diária do professor a menos desgastante possível e, por fim, principalmente, o apoio dos pais no estímulo verbal e comportamental atuante nas horas de sentar para a lição de casa e em relação ao valor que se atribui em aprender a língua dos antepassados. O processo para o aprendizado de uma língua estrangeira requer uma série de fatores que não se limita apenas ao esforço isolado do professor. Os pais deverão ter consciência e praticar atitudes favoráveis ao ensino de língua japonesa – o ensino de língua estrangeira não deveria ser

somente de finalidade utilitária, mas de formação pessoal, de enriquecimento cultural e sobretudo de conhecimento de suas raízes.

Em classes multisseriadas, é interessante que haja computadores e copiadoras para que o professor possa confeccionar ou selecionar previamente os exercícios. Seria ainda melhor se as salas fossem divididas em níveis próximos, para que esse profissional pudesse otimizar o ensino, já que é a conversação que está em jogo; o importante é que o professor possa desenvolver essa atividade com presença e orientação. É importante salientar que, em classes multisseriadas, fica a cargo do professor administrar com maestria a distribuição do tempo, a quantidade e a qualidade de exercícios e atenção aos pequenos grupos de alunos.

## III. Conclusões parciais

A despeito das diferenças constitutivas das três Alianças e de Fukuhaku, podemos verificar semelhanças na progressão das escolas japonesas.

A primeira época é desde o nascimento das escolas até a entrada do Japão na Segunda Gerra Mundial em 1941, quando as escolas tiveram uma dinâmica com características marcadamente nipônicas, desenvolvendo-se sem a imposição do Estado, ainda com dificuldades financeiras. No caso das três Alianças, a "popularização do ensino" é mais evidente, devido às forças políticas internas de cada bairro e muitas vezes, agravada em decorrência da distância entre a casa e a escola, principalmente como na 2ª. Aliança. A divisão de terras adquiridas pelos primeiros colonos em sistema seccional parece imitar um modelo do antigo sistema feudal do período Edo, o sistema de ensino terakoya.

A ansência de infra-estrutura educacional pam dar continuidade aos estudos nas escolas brasileiras é um fato visível. Na falta de cursos secundários que absorvessem a demanda, aqueles que quisessem ver seus filhos estudarem teriam de sair do bairro. O contingente de crianças crescia, como resultado decorrente da política de imigração e de aceitação impulsionada pelos dois países. Assim, a escola japonesa passa a ser uma alternativa na formação desses jovens. Desde o início, observa-se o auxílio do governo japonês – as três Alianças receberam apoio institucional, financeiro até no envio de professores nos primeiros anos de seu estabelecimento. Observa-se, também, a iniciativa dos próprios imigrantes em estabelecer escolas informais, a fim de completar a educação dos filhos.

Na 1<sup>a</sup>. Aliança, observou-se o embate entre o grupo a favor de uma educação

totalmente entregue ao ensino brasileiro e outro, mais consciente da necessidade de impor uma política mais agressiva para a manutenção de sua língua e da cultura. A unificação das escolas japonesas, de uma certa forma, teve intervenção do Estado, culminando na "nacionalização" e no desaparecimento das escolas japonesas, que pode ser observado simbolicamente por meio de sucessivas mudanças de denominação: escola particular sem, primeiramente, e depois com reconhecimento oficial, escola parcialmente municipal, escola municipal e finalmente, escola estadual – gradativamente, até perder por completo as aulas de língua japonesa. O clima da época não permitia o ensino de língua estrangeira, obrigando os imigrantes a deixarem suas raízes, entrando no processo de homogeneização.

A última forma de resistência pode ser observada na comunidade Yuba que manteve por meio de insulamento a continuidade da língua e a preservação dos valores culturais japoneses.

O processo similar à 1<sup>a</sup> Aliança é observado em Fukuhaku: enquanto a escola japonesa ia de vento em popa, com a instalação de "classes de nível superior", subitamente a escola é fechada.

O período do silêncio perdura entre os anos 41 e 47, quando o ensino de língua japonesa fica confinado às residências, em que somente alguns pais conseguiram acompanhar o ensino de seus filhos. Muitos não puderam fazer com êxito, razão pela qual as crianças que estavam no primário nessa fase não terem conseguido aprender o japonês, sobretudo a escrita.

Observou-se uma diferença marcante nas duas comunidades, Alianças e Fukuhaku, quando se tratava de relações com a escola brasileira. Enquanto na 1<sup>a</sup>. Aliança observou-se maior relutância na oficialização das escolas, como também um silêncio sem igual frente à escola brasileira, no caso de Fukuhaku, a iniciativa era tomada pelo lado japonês, liderada e representada pelos jovens *junnisseis*. Além disso, Fukuhaku, por ser uma vila formada de iniciativas privadas, não recebeu ajuda do governo japonês.

No caso das Alianças, finda a guerra, as aulas de língua japonesa foram retomadas pela iniciativa particular de pastores e voluntários, distribuídos em domínios seccionais, como também nas escolas dominicais, pequenas classes montadas nos recônditos dos lares. Em Fukuhaku, observa-se a iniciativa dos jovens *junnisseis* que, por medida de segurança, dividiram deliberadamente as escolas em unidades seccionais.

Após a guerra, em geral, as escolas japonesas enfrentaram o êxodo, decorrente da saída de pessoas rumo às capitais em busca de uma educação melhor para os filhos. Mesmo

nas descrições das escolas nas edições comemorativas das Alianças, percebe-se uma acentuada mudança de foco: as descrições das escolas brasileiras ganham mais destaque do que das japonesas. Para o japonês, a educação ocupa um lugar especial, mas não se observa uma atitude enérgica com relação à língua, voltada para a manutenção da sua língua de herança, com exceção da comunidade Yuba. Em Fukuhaku, é importante salientar que a chegada de imigrantes do pós-guerra, que acabaram fixando com suas famílias na vila, ocasionou a revitalização da vila. Novamente, em Fukuhaku, os *junnisseis* são os protagonistas na unificação das escolas que não se deu de maneira abrupta, mas sempre trabalhada e dialogada (por cerca de dez anos), não só com a comunidade brasileira, mas também com a própria mentalidade dos pais japoneses de gerações anteriores.

Atualmente, as Alianças parecem estar num momento de calmaria. Entretanto, este estado de coisas pode não representar a verdadeira face dos pais, dos alunos e dos professores. Diferentemente das grandes capitais em que há escolas de ensino de japonês como língua estrangeira, as Alianças mantêm o sistema tradicional. A nosso ver, a concepção da língua, bem como a condução do ensino da língua japonesa, parece estar configurada mais como uma língua de herança do que estrangeira. Não se observa, ainda, uma adoção sistemática de metodologias de ensino de língua estrangeira.

Essa postura reflete a atitude dos dirigentes: os professores nativos são enviados periodicamente do Japão para acompanhar o ensino da língua japonesa administrado por cada centro comunitário. A 1a. Aliança recebe um professor enviado pela JICA, a 2<sup>a</sup>. da província de Tottori e a 3<sup>a</sup>. de Toyama. Com exceção do professor enviado da JICA, os dois últimos são professores nas escolas do ensino fundamental do Japão, acostumados a lidar com crianças falantes de japonês como língua materna. É importante, a nosso ver, salientar que, se a comunidade quiser formar falantes competentes, são necessários, treinamento e atualização do professor como um profissional de línguas.

Se o ambiente familiar já não é mais um lugar propício para o fomento da língua, é preciso que a escola passe a ser um espaço de promoção da língua, com metodologias condizentes e atividades eficientes para alcançar esse objetivo. Porém, essa responsabilidade não deve ser atribuída exclusivamente ao professor. Cabe uma conscientização mais firme dos pais, como o aprendizado da língua que não vise única e exclusivamente fins utilitários, promoção profissional, mas de formação pessoal, de enriquecimento cultural e sobretudo do conhecimento de suas raízes. Nessa esteira de raciocínio, estamos na mesma opinião de Sasaki (2001), que afirma não poder restringir a responsabilidade somente na metodologia

de ensino dos professores, é preciso uma atitude comunitária e consciente dos pais.

Nessa esteira de raciocínio, a comunidade Yuba está privilegiada, já que consegue manter um ambiente dinâmico de aquisição da língua japonesa. É uma questão de atitude lingüística. É quase impossível manter uma língua de herança viva num país em que o português, detém sua hegemonia lingüística, ainda mais uma língua tipologicamente distante como o japonês.

Fukuhaku, por sua vez, está numa fase em que requer uma revisão de metas da escola japonesa. A diversidade de gerações da comunidade, bastante rica, pode suscitar divergências quanto a forma de ensino, mas deve haver um diálogo intenso e sincero e um canal aberto entre os envolvidos os pais, professorese diretores, buscando uma otimização de ensino. Se a conversação e a aquisição da língua japonesa ora são os desejos dos pais, é preciso incluir no programa curricular as atividades voltadas para a fala, como exercícios de fala, ou, se preferirem, mesmo participações em *ohanashihappyôkai e spiichi kontesuto*, assim como as atividades culturais japoneses.

É lastimável observar que os professores ficam desamparados, sem noção exata do que fazer quando se vêem no fogo cruzado de interesses, muitas vezes, antagônicos de pais e diretores educacionais (que cobram resultados e bom desempenho dos alunos) e dos próprios alunos, nem sempre motivados pelo estudo da cultura e língua japonesa. A necessidade de formação e atualização dos professores é uma questão bastante discutida hoje nas comunidades nipo-brasileiras, que vêem as novas gerações cada vez mais distantes da lígua de herança de seu antepassado. Acreditamos que a capacitação dos profissionais de língua seria um caminho para, junto com os pais e responsáveis da escola japonesa, visualizar e viabilizar um ensino de qualidade, o caminho da motivação para os alunos.

Bibliografia

Associação dos Jovens de Fukuhaku (org.) Daichi / Terra. Versão fotocopiada, 25.08.1959. HANDA, Tomoo. O Imigrante Japonês: História de uma vida no Brasil. São Paulo: T.A. Queiroz, Editor / Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 1987. p. 281-297, 416-424, 618-623, 720-724, 802.

SHIBATA, Hiromi. As Escolas Japonesas dos imigrantes japoneses paulistas: a organização do ensino e a orientação japonesa. Evento comemorativo dos 90 anos da Imigração Japonesa no Brasil, São Paulo: Faculdade de Educação/USP, 1998. p. 23-28.

Aliansa Íjûchishi Jûnen shi kankôkai (org.) Sôsetsu 10 nenshi Ed. Shinano Kaigai Kyôkai, 1936

Aliansa Ijûchishi Hensan Iinkai (org.) Sôsetsu 10 nenshi Ed. Shinano Kaigai Kyôkai, 1936. Aliansa Ijûchishi Hensan Iinkai(org) Ariansashi sôsetsu 25nenshi. Ed. Shinano Kaigai Kyôkai, 1947.

Ariansa Ijuushishi Hensan Iinkai (org.) *Ariansashi sôsetsu 45nenshi*. Ed. Shinano Kaigai Kyôkai, 1970.

CORRÊIA, Adilson da Silva (UNEB). "As dualidades que envolvem o processo de ensinoaprendizagem de línguas". In: *Círculo Fluminense de Estudos Filológicos e Lingüísticos*. *Revista Philologus*, Ano 9, n. 25. In: http://www.filologia.org.br/revista/artigo/9(25)05.htm (acesso em 06/09/2003).

Dai 2 Aliansa Henshû Iinkai (org.). Dai 2 Aliansa Nyûshoku 45 shûnenshi. Paulista Bijutsu, 1974.

Dai 3 Aliansa Henshû Iinkai (org.). Dai 3 Aliansa Nyûshoku 50 shûnenshi. Paulista Bijutsu, 1979.

Dai 3 Aliansa Kaitaku 60 shûnen Kinen Sashinshû Iinkai (org.). *Dai 3 Aliansa Ijûchi Kaitaku 60 shûnen* Kinen Shashinshû. São Paulo, Dai 3 Aliança Kuchôkai, 1990.

DEMARTINI, Zeila de Brito Fabri. Escolas Japonesas em São Paulo: elementos para a história da educação brasileira. Evento comemorativo dos 90 anos da Imigração Japonesa no Brasil, São Paulo: Faculdade de Educação/USP, 1998. p. 3-22.

Relatos orais de famílias de imigrantes japoneses: Elementos para a história da educação brasileira. Educação & Sociedade, ano XXI, n. 72, Agosto, 2000. p.43-72 <a href="http://www.scielo.br/pdf/es/v21n72/4193.pdf">http://www.scielo.br/pdf/es/v21n72/4193.pdf</a> (acesso em 30/09/2003).

FAUSTO, Boris. Historiografia da Imigração para São Paulo. São Paulo: Ed. Sumaré/FAPESP, 1991.

FAUSTO, Boris (org). Fazer a América: A Imigração em Massa para a América Latina. São Paulo: EDUSP, 2 ed., 2000.

FIORI, Neide Almeida. "O perfil ideológico da 'escola estrangeira' em Santa Catarina". Revista de Antropologia. São Paulo: Universidade de São Paulo, v.29, 1986. p. 113-133.

HANDA, Tomoo. O Imigrante Japonês: História de uma vida no Brasil. São Paulo: T.A. Queiroz, Editor / Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 1987. p. 281-297, 416-424, 618-623, 720-724, 802.

(org.) Burajiru Nihon Imin – Nikkei shakaishi nenpyô. São Paulo, Centro de Estudos Nipo-brasileiros, 1996.

Históricos das Álianças. Edição Comemorativa às Alianças. Número único, Dezembro, 1969. MITA, Chiyoko. Bastos: uma cominidade étnica japonesa no Brasil. São Paulo: Humanitas, FFLCH/USP, 1999.

ORLANDI, Éni Pulcinelli (org). *Política Lingüística na América Latina*. Campinas, SP: Pontes, 1988.

POLETTI, Ronaldo. Constituições Brasileiras: 1934. Brasília: Senado Federal e Ministério da Ciência e Tecnologia, Centro de Estudos Estratégicos, vol. III, 2001.

SASAKI, Michiko. "Japanese as a Heritage Language (JHL) Classes in Brazil and Hawaii-Their Differences and Similarities." Colorado: University of Colorado, ATJ Seminar, 2001.

TANIGAKI, Luiz Yassumi (dir.). Suplemento Comemorativo do Cinquentenário de Fukuhaku. Jornal Paulista, São Paulo, ano XXXV, no. 8200, 12 de Dezembro de 1981.

WAKISAKA, Katsunori (coord.). *Uma Epopéia Moderna 80 Anos da Imigração Japonesa no Brasil*. São Paulo: Hucitec/Sociedade Brasileira da Cultura Japonesa, 1992.

YOSHIOKA, Reimei. Por que migramos do e para o Japão. Os exemplos dos bairros das Alianças e dos atuais dekasseguis. São Paulo: Massao Ohno Editor, 1995.

CONTROL OF THE RESIDENCE OF THE STATE OF THE

# BIBLIOGRAFIA SOBRE A LÍNGUA JAPONESA E SEU ENSINO: TEXTOS PUBLICADOS NO BRASIL

(livros, dissertações, teses, artigos em periódicos e publicação em anais, escritos em português e outras línguas, exceto japonês)

Junko OTA (USP)

#### 1. LIVRO

SUZUKI, Tae (1995) As expressões de tratamento da língua japonesa. São Paulo: EDUSP.

## 2. TESES E DISSERTAÇÕES

### 2.1. Estudos sobre o japonês

- KIKUCHI, Wataru (2003) Pronomes pessoais e papéis sociais: um estudo da sociedade japonesa sob a ótica da inter-relação língua e cultura. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- MUKAI, Yûki (2003) O morfema wa da língua japonesa: suas funções do ponto de vista da estrutura informacional. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- TASHIRO, Elisa Atsuko (2003) Documentação missionária e tradição autóctone sobre a língua japonesa: padrões em língua e padrões em historiografia lingüística. São Paulo, FFLCH-USP, tese de doutorado.
- TOMIMATSU, Maria Fusako (2003) Os provérbios japoneses considerações sobre o Iroha Garuta. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- MORALES, Leiko Matsubara (2002) En: do chinês para a diversidade conceptual do japonês no universo de Genji Monogatari (Narrativas de Genji). São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- OKANO, Michiko (2002) Ideograma como metáfora da cultura japonesa e seus processos de significação. PUC-SP, dissertação de mestrado.
- OKATA, Grace Rie (2002) Quebrar e kowasu (quebrar): verbos de "destruição" em português e japonês à luz da semântica cognitiva. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- KANASHIRO, Cecilia Kimie Jo (2000) A interferência da língua japonesa na língua portuguesa falada por nipobrasileiros – Estudo de aspectos da concordância nominal e verbal. São Paulo, FFLCH-USP, tese de doutorado.
- KUYAMA, Megumi (2000) O uso da língua japonesa na comunidade nipo-brasileira: o empréstimo lexical no japonês falado pelos imigrantes o caso de Distrito Federal. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- NISHIKITO, Elisa Mie (1999) Estudo contrastivo dos fáticos retroalimentadores das línguas japonesa e portuguesa. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- DOI, Elza Taeko (1997) O papel da sílaba e da mora na organização rítmica do japonês. Campinas, IEL-Unicamp, tese de doutorado.
- SOARES, Gisele de Fátima (1997) Teorias sobre o aspecto verbal: crítica e aplicação ao português e ao japonês. Curitiba, UFPR, dissertação de mestrado.
- TASHIRO, Eliza Atsuko (1997) A descrição de alguns morfemas gramaticais na arte da Lingoa de Iapam: o tratamento dado à classe dos joshi e jodôshi pelo Pe. João Rodrigues. FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- OTA, Junko (1996) O histórico do keishikimeishi e uma abordagem sintática e semântica em torno de koto e mono da língua japonesa. São Paulo, FFLCH-USP, tese de doutorado.
- SCHUMACHER, Cristina Almeida (1995) Aspectos do modelo japonês de organização do trabalho e da empresa sob o ponto de vista da relatividade lingüística. Porto Alegre, UFRGS, dissertação de mestrado.
- FUKASAWA, Lídia Masumi (1991) O sistema de estruturação das modalidades na língua japonesa. São Paulo, FFLCH USP, tese de doutorado.
- SUZUKI, Maria E. (1990) O japonês em situação de pseudo-imersão: o uso dos pronomes pessoais., Campinas,

- IEL-Unicamp, dissertação de mestrado.
- MAEDA, (1988) O português do Brasil: uma evidência do contínuo tipológico um estudo comparativo entre inglês, português e japonês. PUC-SP, tese de doutorado.
- NAWA, Takako (1988) Bilingüismo e mudança de código: uma proposta de análise com os nipo-brasileiros residentes em Brasília. Brasília, UnB, dissertação de mestrado.
- SAITO, Miyoko (1987) A contrastive study of Japanese and Portuguese. Curitiba, UFPR, dissertação de mestrado.
- SUZUKI, Tae (1984) As expressões de tratamento da língua japonesa no Brasil: uso e processo de aculturação. São Paulo, FFLCH- USP, tese de doutoramento.
- FUKASAWA, Lidia Masumi (1984) Deixis e anáfora na língua japonesa. São Paulo, FFLCH-USP, dissertação de mestrado.
- DOI, Elza Taeko (1983) A interferência fonológica no português falado pelos japoneses na região de Campinas (SP). Campinas, IEL-Unicamp, dissertação de mestrado.
- COELHO, Brito C. M. (1980) Interferência da língua japonesa. Porto Alegre, PUC-RGS, dissertação de mestrado.

## 2.2. Estudos sobre o ensino do japonês

- TAKANO, Yuko (2002) Tensão diglóssica na aquisição de línguas: um estudo de bilíngües nipo-brasilienses. Brasília, UnB, dissertação de mestrado.
- TONGU, Érica Ayaco Sacata (2002) Resistência de seda: um estudo preliminar sobre a nacionalização dos imigrantes japoneses e a educação no Brasil. São Paulo, FE-USP, dissertação de mestrado.
- KAWAHARA, Lúcia Shiguemi Izawa (2000) Escola de língua japonesa: representações sociais de um grupo da colônia japonesa de Cuiabá um estudo transgeracional. Cuiabá, UFMT, dissertação de mestrado.
- SETOGUTI, Ruth Izumi(1999) A escolarização entre descendentes de japoneses no Brasil: pontos para uma reflexão. Marília, Unesp, tese de doutorado.
- TAKASU, Fumiko (1999) O silêncio na interacao entre descendentes e não-descendentes na sala de aula de língua japonesa. Campinas, IEL-Unicamp, dissertação de mestrado.
- GONÇALVES, Sebastião C. L. (1997) Aquisição do português como segunda língua: o caso das crianças Yuba. Campinas, IEL-Unicamp. Dissertação de mestrado.
- SHIBATA, Hiromi (1997) As escolas japonesas paulistas (1915-1945): a afirmação de uma identidade étnica. São Paulo, FE-USP, dissertação de mestrado.
- NAKAYAMA, Haruka (1996) Terminologia aplicada à ciência da informação: da produção de vocabulário técnico-científico bilíngüe (japonês-português), na área do ensino da língua japonesa. São Paulo, FFLCH-USP, tese de doutorado.
- CAMACHO, Luiza MitikoYshiguro (1993) As relações entre a cultura japonesa e a educação dos nipo-brasileiros: um estudo dos elementos influenciadores do desempenho escolar positivo dos descendentes de japoneses. São Paulo, PUC-SP, dissertação de mestrado.
- AQUINO, Olga Ribeiro de. (1991). A língua na escola. Campinas, FE Unicamp, dissertação de mestrado.
- JOKO, Alice Tamie (1987) Análise contrastiva dos sistemas fonológicos do japonês e do português: subsídios para o ensino do japonês para falantes do português do Brasil . Brasília, UnB, dissertação de mestrado.
- PULLIN, Elsa Maria Mendes Pessoa (1985) Organização semântica: influência da alfabetização em línguas diferentes (português/japonês) um estudo com a técnica de greenspoon. São Paulo, IP-USP, tese de doutorado.

## 3. ARTIGOS SOBRE A LÍNGUA JAPONESA

## 3.1. Descrições e estudos

- IWAKAMI, Laura Tey. Da oralidade à sistematização da escrita o "eu" identificado. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- JO, Cecília Kimie. A interfêrêndia da língua japonesa na língua portuguesa falada por nipo-brasileiros. Estudos de aspecots da concordância nominal e verbal. Anais do XIVEncontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- JOKO, Alice Tamie. O tratamento da consoante velar nasal no ensino de japonês do Brasil. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP. 2003.
- KIKUCHI, Wataru. O valor social da coletividade e léxico japonês. Anais do XIV Encontro Nacional de

- Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- MORALES, L. M., NINOMIYA, S. R. L. e SUZUKI, T. As funções lingüísticas em Watanabe Minoru. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- MUKAI, Yûki. O morfema wa de contraste. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- OKATA, Grace Rie. As expressões metafóricas quebrar e kowasu: um estudo contrastivo entre o português e japonês sob a perspectiva da semântica cognitiva. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- OTA, Junko. As questões ralativas ao rentaishûshokusetsu (adjuntos adnominais e orações adjetivas) da língua japonesa análise e contraste com o português. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- SUENAGA, Eunice Tomomi. Problemas envolvend a tradução de Genji Monogatari para o português. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- TAKANO, Yûko. O mito do bilingüismo: reflexo da tensão diglóssica no uso da variedade nipo-brasileira. Anis do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japanesa. Assis, UNESP, 2003.
- YANAGI Hiroko. Gunshoruijû shuppanno shûhên. Anais de XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língia, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.

- DOI, Elza Taeko et al. As teorias gramaticais do japonês: Yamada e Hashimoto. *Estudos Lingüísticos*. V.32. São Paulo, Grupo de Estudos Lingüísticos do Estado de São Paulo(CDROM).
- KIKUCHI, Wataru. O papel social e a interação na sociolingüística interacional. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- KUDO, Mayumi. Conversação e tempo. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- \_\_\_\_\_. Nihongogaku e o ensino da língua japonesa. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- MORALES, Leiko Matsubara. Os predicadores de qualidade keiyôshi e keiyôdôshi. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- MUKAI, Yûki. O morfema de topicalização wa um breve histórico. Estudos Japoneses. no. 22. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- O morfema de topicalização wa, do ponto de vista da estrutura informacional. Anais do XIII Encontro
  Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas,
  EDUNICAMP.
- OKATA, Grace Rie. Análise do significado dos verbos quebrar e kowasu sob a perspectiva da semântica cognitiva. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- SAITO, Miyoko. Léxicos metafóricos nas expressões idiomáticas em japonês. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- SUZUKI, T., NINOMIYA, S.R.L. Proposta de terminologia da gramática japonesa, em português. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.
- YOSHIKAWA, Mayumi Edna Iko. De, ni e o como indicador de lugar. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.

- DOI, Elza Taeko. O ritmo do japonês e a unidade *haku* proposta por Bekku. *Estudos Japoneses*. no. 21, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- DOI, Elza Taeko. Pesquisas em língua japonesa. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- HOSHIKAWA, Edna Mayumi Ikko. Expressão de convite ~masenka. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses. Porto Alegre, UFRGS.
- KIKUCHI, Wataru. Considerações sobre o estudo da inter-relação língua e cultura japonesa. Anais do XII

- Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses. Porto Alegre, UFRGS.
- MUKAI, Yûki. Os morfemas finais ne e yo da língua japonesa, à luz das funções de kyûjôhô(informações dadas) e shinjôhô(informações novas). Estudos Japoneses. No. 21, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da IISP
- MUKAI, Yûki. As funções de kyûjôhô (informações dadas) e shinjôhô (informações novas) na estrutura discursiva da língua japonesa em contraste com a língua portuguesa. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- NAKAJIMA, Toru. Língua japonesa das crianças brasileiras que viveram no Japão: informação preliminar.

  Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- NAKAYAMA, Haruka. Terminologia bilíngüe (japonês-português) e equivalência conceitual: estudo de caso dos termos de ikebana. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- PEREIRA, Fausto Pinheiro. Pequeno estudo comparado das onomatopéias das línguas portuguesa e japonesa. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- SAITO, Miyoko. Jodôshi 'desu' e jodôshi 'masu' como marcadores de polidez. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.

- AZUMA, Shoji. A língua na sociedade: estudos de casos de mudança de código e de atitude lingüística. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- DOI, Elza Taeko. As onomatopéias do japonês: reflexões sobre a sua tradução. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- DOI, Elza Taeko. Estudos Japoneses no Brasil: língua. Anais do XI Encontro Nacional de Professores
  Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília,
  UnB
- KANASHIRO, Cecília K.J. Interferência da língua japonesa na língua portuguesa falada por nipo-brasileiros aspecto da concordância nominal. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- KUNO, Mariko. As feições do falar de Tóquio da variedade regional à variedade de gerações. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- KUYAMA, Megumi. Fatores sociais e frequência de empréstimos do português no japonês falado pelos imigrantes no Brasil o caso do Distrito Federal. *Estudos Japoneses*. No. 20, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP, pp. 69-85.
- KUYAMA, Megumi. O empréstimo lexical do português no japonês falado pelos imigrantes: a mudança de código situacional. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- MUKAI, Yûki . A coesão e a coerência na língua japonesa, à luz das funções de kyûjôhô (informações dadas) e shinjôhô (informações novas), em contraste com a língua portuguesa. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- NAKAMIZU, Ellen. O discurso bilíngüe dos jovens nipo-brasileiros residentes no Japão com enfoque na mudança de código. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- NISHIKITO, Elisa M. Meaning and understanding in conversations: the listener's contribution to face-to-face interaction in Japanese. Estudos Japoneses. No. 20, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- OTA, Junko. A língua japonesa dos imigrantes algumas considerações. Evento comemorativo dos 90 anos da imigração japonesa 1998. São Paulo, FEUSP-USP.
- SAITO, Miyoko. As várias funções discursivas de sumimasen(desculpe). Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- YOSHIKAWA, Edna M. I. mô~mada e mada~mô. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários

de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.

#### 1999

- DOI, Elza Taeko. Considerações sobre o japonês falado pelos brasileiros. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Rio de Janeiro, UFRJ.
- NAGAMINE, Catarina. Mudança de valores interferência dos traços da LM nos da LE. *Anais do X Encontro*Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.
- NAKAYAMA, Haruka. Terminologia bilíngüe e transferência de conhecimento. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.
- NISHIKITO, Elisa M. Back channels in Japanese and Portuguese conversations: syntactic context of occurrence and implications for the dynamics of interaction. Estudos Japoneses. No. 19, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- OTA, Junko. Um estudo preliminar sobre expressão ~toiu no sintagma nominal (SN) da língua japonesa. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.
- SUZUKI, Tae. Interrelação língua e literatura. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Rio de Janeiro, UFRJ.
- SZATROWSKI, Polly Ellen. Sobre as estratégias discursivas de convite na língua japonesa. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Rio de Janeiro, UFRJ.
- YAMAZAKI, Mayumi. O filtro perceptivo uma análise através da fonética acústica. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.

#### 1998

- CARVALHO, Nanci E. S. As interjeições japonesas. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- DOI, Elza Taeko. O Papel da Sílaba e da Mora na Organização Rítmica do Japonês. Síntese Conjuntura e Cenários, vol. 3, Unicamp, Campinas. 1998.
- KANASHIRO, Cecília K. J. Interferência do japonês no português falado pelos descendentes japoneses bilíngües.

  Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- KUYAMA, Megumi. O empréstimo lexical no japonês falado pelos imigrantes a integração do português ao japonês. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- OKASAKI, Catarina Nagamine. Um problema de comunicação sob o ponto de vista fonológico choon sokuon.

  Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro Latino-americano. Assis, Unesp.
- OTA, Junko. Koto e mono enquanto elementos coesivos do texto. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- OTA, Junko. O sistema de escrita na língua japonesa e alguns aspectos da sua história. Revista de Estudos Orientais. No. 2. São Paulo, FFLCH-USP.
- SAITO, Miyoko. Conjunção(setsuzokushi) como elemento importante nas frases. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latinoamericano. Assis, Unesp.
- TASHIRO, Elisa Atsuko. A declinação dos nomes segundo Pe. João Rodrigues e os joshi. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- WATANABE, Minoru. A língua e o sentimento do Japão. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro Latino-americano. Assis, Unesp.

- CARVALHO, Nanci S. A partícula de proibição nakare/nanaiso. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- FUKASAWA, Lídia Masumi. Valores intencionais e persuasivos da língua japonesa. *Estudos Japoneses*. No. 17, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP, pp. 111-118.
- OTA, Junko. A tradição histórica dos estudos de *keishikimeishi. Estudos Japoneses*, no. 17, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

- OTA, Junko. Considerações sobre os keishikimeishi koto e mono. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SAITO, Miyoko. Koto e no como nominalizadores nas frases. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da IISP

- CARVALHO, N. E S. O modo condicional nas gramáticas de Rodriguez. Anais do VII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- DOI, Elza Taeko. O Papel dos Dados Limite na Avaliação das Análises Propostas pela Fonologia Métrica para o Ritmo do Japonês. *Letras de Hoje, 104*. Porto Alegre: PUCRGS.
- JO, Cecília K. Comportamento lingüístico e paralingüístico entre os japoneses e os nipo-brasileiros a posição dos olhos dos interlocutores durante o diálogo. Anais do VII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SAITO, Miyoko. A estreita relação entre verbos e partículas. Anais do VII Encontro Nacional de Professores
  Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da
  UNP
- TASHIRO, Eliza Atsuko. O tratamento dado aos joshi e jodoshi na lingüística japonesa. Anais do VII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

#### 1995

- CARVALHO, Nanci E. S. As partes do discurso nas Gramáticas de Rodriguez. Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- DOI, Elza Taeko. A realização das moras "especiais" do japonês no desempenho de falantes brasileiros. *Estudos Japoneses*, no. 15, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- JOKO, Alice Tamie. Grau de pertinência do japonês falado por estudantes brasileiros. Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- KUNO, Mariko. No encalço das palavras mutantes. Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- KUYAMA, Megumi. Pesquisas em língua japonesa: situação da língua japonesa no Distrito Federal. Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- OTA, Junko. A determinação nominal(rentai shûshoku) do japonês algumas considerações em contraste com o português. Estudos Japoneses, no. 15, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SAITO, Miyoko. Giongo: a função adverbial com a repetição de duas palavras. Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. A montagem do texto ideograma: lógica, poesia, linguagem. Revista USP Dossiê Brasil-Japão. São Paulo, EDUSP.
- TOMINAGA, Yumiko. Diferentes formas de expressar pedidos de favor (yari-morai). Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

- FUKASAWA, Lídia Masumi. Os elementos constitutivos das estruturas pragmáticas do texto japonês. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- JO, Cecília K. A língua japonesa dos nipo-brasileiros. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- NINOMIYA, Sonia Regina Longhi. Das formas de expressão do condicional em língua japonesa. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

- OTA, Junko. Sobre o keishikimeishi 'tokoro'. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. Contos da época Heian e a linguagem de tratamento. Estudos Japoneses, no. 14, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- Considerações sobre o tratamento em diários da época Heian. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- TASHIRO, Eliza Atsuko. Breves considerações sobre as terminologias gramaticais na Arte Breve da Lingoa Iapoa (1620), na Gramática da Lingoa Portuguesa (1540) e em Guengyoshishuron (1824). Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- TOMINAGA, Yuminaga. Keigo: um estudo do honorífico. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da UISP

- FUKASAWA, Lídia Masumi. Os morfemas finais e a estrutura de argumentação no japonês. *Estudos Japoneses*. No. 13, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- JO, Cecília K. Comparação do comportamento lingüístico e paralingüístico entre os japoneses e os nipobrasileiros. Anais do IV Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses.
- OTA, Junko. Os empréstimos do português nos jornais japoneses do Brasil. *Estudos Japoneses*, no. 13, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

#### 1992

- FUKASAWA, Lídia Masumi. A função modalizadora dos auxiliares verbais da língua japonesa. Estudos Japoneses. No. 12, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- FUKASAWA, Lídia Masumi. Construção da modalização no enunciado japonês. Anais do III Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- OTA, Junko. O termo koto e seus empregos. Estudos Japoneses, no. 12, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- OTA, Junko. Sobre o keishikimeishi koto. Anais do III Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- UKIDA, Saburô. Características dos costumes, da cultura e das formas de expressão em provérbios japoneses: uma abordagem contrastiva entre provérbios japoneses e gregos. *Estudos Japoneses*. No. 12, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

- DOI, Elza Taeko. As formas de tratamento do japonês: seu funcionamento. Caderno de Estudos Lingüísticos, 20. Campinas, Unicamp.
- FUKASAWA, Lídia Masumi. As teorias japonesas sobre a enunciação uma etapa fundamental para a investigação das modalidades no japonês. *Estudos Japoneses*. No. 11, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- JOKO, Alice Tamie. As dificuldades da aprendizagem da pronúncia japonesa por um aluno brasileiro. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- LUCAS, Nadine. L'evolution de la syntaxe em japonais contemporain le suffixe dearu (c'est). Estudos Japoneses, no. 11, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- LUCAS, Nadine. Syntaxe discursive du japonais scientifique: à props du thème. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- OTA, Junko. Sobre os substantivos compostos da língua japonesa. Anais do II Encontro Nacional de Professores
  Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da
  USP
- OTA, Junko. Formação de palavras da língua japonesa: sobre os *keiyôshi* compostos. *Estudos Japoneses*, no. 11, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SATO, Miyoko. As funções discursivas das partículas -wa e -ga. Anais do II Encontro Nacional de Professores

- Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. A era Nara e o tratamento. *Estudos Japoneses*, no. 11, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. Uma abordagem sociolingüística do tratamento da era Nara. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- WAKISAKA, Geny et al. O mito do bilingüismo. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

- FUKASAWA, Lídia Masumi. O tratamento das expressões de modalidade da língua japonesa necessidade de uma abordagem pragmática no interior do esquema discursivo. *Estudos Japoneses*. No. 10, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- ISHIGAMI, Teruo. Sobre tomoni e muta em Man'yôshû. Estudos Japoneses. No. 10, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

#### 1989

EGUCHI, Masahiro. Sobre os verbos da obra *Contos de Heike, edição Amakusa. Estudos Japoneses*. No. 9, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

#### 1988

- DOI, Elza Taeko. Arte da Lingoa de Iapam e Arte Breve`da Lingoa Iapoa, de Pe. João Rodriguez A Pronunciação do Japonês e a Ortografia. Estudos Portugueses e Africanos, 11. Campinas: IEL Unicamp.
- SUZUKI, Tai. O sistema temporal da língua japonesa nas narrativas clássicas. *Estudos Japoneses*. no. 8, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1987

- FUKASAWA, Lídia Masumi. O tratamento dos mostrativos da língua japonesa, segundo os autores japoneses. Estudos Japoneses. No. 7, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- MASE, Yoshio. A língua japonesa dos imigrantes japoneses e seus descendentes no Brasil. Estudos Japoneses. No. 7, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. Padre Ioão Rodriguez: suas Artes e a linguagem de tratamento da língua japonesa. *Estudos Japoneses*. no. 7, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1986

- FUKASAWA, Lídia Masumi. Dêixis e anáfora na língua japonesa —um estudo gramatical e lingüístico dos mostrativos. Estudos Japoneses. No. 6, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP, pp. 37-77.
- SUZUKI, Tae. As expressões de tratamento da língua japonesa no Brasil: uso e processo de aculturação. *Estudos Japoneses*, no. 6, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- TAKENAGA, Beatriz Shizuko. O *kakujoshi ni*: nuanças da língua japonesa. *Estudos Japoneses*. No. 6, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1985

SUZUKI, Tae. A escrita japonesa. Estudos Japoneses, no. 5, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## **19**84

- DOI, Elza Taeko. Algumas considerações sobre a interferência fonológica (nível segmental) no português falado pelos japoneses. *Estudos Japoneses*, no. 4, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. O tratamento japonês e seus significados. *Estudos Japoneses*. No.4, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

- FUKASAWA, Lídia Masumi. Alguns aspectos da língua japonesa moderna a língua enquanto elemento revelador da sua realidade. *Estudos Japoneses*. No.3, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- SUZUKI, Tae. Breves considerações sobre as expressões de tratamento da língua japonesa. Estudos Japoneses. No.3, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- KATO, M. & BARBARA, L. Língua Asiáticas. Abralin Boletins, 5, pp. 95~111.

BARBARA, Leila & KATO, Mary A. (1982) Fatores intervenientes na proficiência oral em japonês dos descendentes de japoneses radicados na cidade de São Paulo. Série Estudos 8, 79-91.

#### 1981

BARBARA, Leila (1981) A primeira língua dos brasileiros descendentes de japoneses. Cadernos PUC 9, 42-63.

#### 1979

- FUKASAWA, Lídia Masumi. Breves considerações acerca do "Tempo" e do "Aspecto" na língua japonesa moderna. Estudos Japoneses. No.1, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- NAITO, Tae. Sobre a estrutura da língua japonesa. Estudos Japoneses. No.1, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

#### 1973

HANDA, Tomoo. O destino da língua Japonesa no Brasil. In: SAITO, Hiroshi & MAEYAMA, Takashi.

Assimilação e Integração dos Japoneses no Brasil, São Paulo, Vozes. EDUSP.

## 3.2. Estudos sobre o ensino do japonês

#### 2003

- ENDO, Teresa Yasuko. Expressão de desejo ga hoshii e o seu uso encoberto. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- GARDENAL, Luis Maximiliano Santin. A utilização do kotowaza no ensino de língua japonesa como língua estrangeira. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- KREUTZ, Lúcio. A educação de imigrantes no Brasil. In: LOPES, Eliane Marta Teixeira et al (org.). 500 anos de Educação no Brasil. Belo Horizonte: Autêntica, 3 ed., 2003. p. 347-370.
- NAKATA, Michiyo. Burajiruno nihongogakushûshano ishiki chôsa seijingakushûshano ishikichôsa seijingakushûshano purofiiru takainihonbunkani yoseru kanshin. Anais do XIV Encontoro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.
- TOMINAGA, Yumiko. Nihongo kyôshi shibô gakuseino tameno maruchi medea kyôzaino sakuseito riyônikansuru ichikôsatasu. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis. UNESP, 2003.
- YOSHIKAWA, Edna Mayumi Iko. Significado, situação de uso e abordagem dedática da forma ta. Anais do XIV Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Assis, UNESP, 2003.

## 2002

- DOI, Elza Taeko po aulo. Da língua da imigração para a língua estrangeira: o caso do japonês no Brasil. 12ª Inpla, S.P. LAEL/PUCSP.
- SUZUKI, Maria Emiko & FUJII, Michiko. Exame juvenil de língua japonesa: uma tentativa de avaliação unificada a jovens que estudam a língua japonesa como língua estrangeira (LE). Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Campinas, EDUNICAMP.

- AZUMA, Shoji. Bilingüismo e ensino da língua japonesa: ensino que aproveita a vitalidade da língua. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa. Porto Alegre, UFRGS.
- DOI, E.T., TAKASU, F., HIRAI, K., PONCE M. H. O. Análise de erros: implicações para o ensino e aprendizagem do japonês. Anáis do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- IWAKAMI, Laura Tey .Caracteres da escrita japonesa uma apresentação em multimídia. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.
- JOKO, Alice Tamie. A presença da consoante velar nasal sonora em materiais didáticos de áudio destinados ao ensino de japonês para estrangeiros. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses. Porto Alegre, UFRGS.
- KUYAMA, Megumi. Aquisição/aprendizagem de L2 dos imigrantes japoneses: uma proposta de análise do ponto

de vista da interferência social e cultural. Anais do XII Encontro Nacional de Professores Universitários da Língua, Literatura e Cultura Japonesa e II Encontro de Estudos Japoneses.. Porto Alegre, UFRGS.

#### 2000

- BRITO, Claudia Regina de. De escola de língua japonesa a Escola Visconde de Cairu: a construção da etnicidade em Campo Grande. Evento comemorativo dos 90 anos da imigração japonesa 1998. São Paulo, FE-USP.
- CAMACHO, Luiza Mitiko Yshiguro. A educação dos nipo-brasileiros e a cultura japonesa. Evento comemorativo dos 90 anos da imigração japonesa 1998. São Paulo, FE-USP.
- DEMARTINI, Zeila de Brito Fabri. Escolas japonesas em São Paulo: elementos para a história da educação brasileira. Evento comemorativo dos 90 anos da imigração japonesa 1998. São Paulo, FE-USP.
- DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri. Relatos orais de famílias de imigrantes japoneses: Elementos para a história da educação brasileira. Educação & Sociedade, ano XXI, n 72, Agosto, 2000, p.43-72 http://www.scielo.br/pdf/es/v21n72/4193.pdf
- DOI, Elza Taeko. O ritmo bimoraico e as moras não plenas do japonês: reflexões sobre o ensino da língua oral. Trabalhos em Lingüística Aplicada, 36. Campinas, Unicamp.
- MATSUZAKI, Rosa Hiroko. O ensino comunicativo da língua japonesa: a busca de medidas para o novo milênio.

  Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- NAKAYAMA, Haruka. Representação do conhecimento e transferência da informação: a cultura japonesa e o ensino da língua japonesa. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- SASAKI, Michiko. Ensino de japonês para descendentes na era da multiplicidade de escolha da língua. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- SASAKI, Michiko. Configuração do material didático destinado ao ensino da cultura no universo de ensino de língua japonesa na era da globalização. Anais do XI Encontro Nacional de Professores Universitários de Lingua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Japoneses. Brasília, UnB.
- SHIBATA, Hiromi. As escolas dos imigrantes japoneses paulistas: a organização do ensino e a orientação japonesa. Evento comemorativo dos 90 anos da imigração japonesa 1998. São Paulo, FE-USP.

## 1999

- MORAES, João Antonio de. Reflexões sobre o ensino da prosódia do japonês a brasileiros. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.
- DOI, Elza Taeko et al. Aspectos culturais no ensino da língua japonesa. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.
- YOSHIKAWA, Mayumi E. I. Abordagem didática da expressão ~shi~shi e seu contraste com as expressões ~tari~tari e ~te~te. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.
- ENDO, Tereza Y. Abordagem didática da expressão -to omoimasu e sua situação de uso. Anais do X Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonês. Rio de Janeiro, UFRJ.

- DOI, E. T, TAKASU, F., HIRAI, K., PONCE, M.H.O. Aplicação da abordagem comunicativa em sala de aula. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- IKO, Mayumi E., MUTO, Akira. A avaliação da habilidade oral: uma tentativa. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- MASE, Yoshio. O ensino da língua japonesa: situação atual e perspectiva. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro Latino-americano. Assis, Unesp.
- MIZUMOTO, Ademar Iwao. Estudo sobre o perfil do aluno das escolas de língua japonesa da Alta Sorocabana.

  Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro Latino-americano. Assis, Unesp.
- SASAKI, Michiko. O ensino da língua e a cultura japonesa: o que indicam as pesquisas no Brasil, no Havaí e na Oceania. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.
- SUZUKI, Maria E. O ensino da língua japonesa no Brasil: breve histórico e perspectiva para um novo enfoque como língua estrangeira. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua,

Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.

TOMINAGA, Yumiko. Computer assisted instruction system no ensino da língua japonesa como uma língua estrangeira. Anais do IX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e I Encontro de Estudos Latino-americano. Assis, Unesp.

#### 1997

- GONÇALVES, Sebastião C. L. O papel de L1 na aquisição de L2: um estudo de caso na Comunidade Yuba. Campinas, Caderno de Estudos Lingüísticos. 36.
- TASHIRO, Elisa Atsuko. Os chamados chinjutsu fukushi e o ensino da língua japonesa. Anais do XIII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1996

- FUZII, Estela O. & HOYAMA, Yoshiko S. Resumo do vídeo Kanji para Brasileiros. Anais do VII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- GAUDIOSO, Tomoko Kimura. A questão da concepção analógica e anáfora no ensino de língua estrangeira.

  Anais do VII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa.

  São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

#### 1995

NOMOTO, Chizuko. — O papel dos cartazes ilustrados no ensino da língua. Anais do VI Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1994

KANEKO, Keiko Yamada. Relatório das estratégias e técnicas aplicadas para o ensino de língua japonesa no CEL da EEPSG Dr. Fábio Barreto – Registro. Anais do V Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1991

- BORGATTO, Maria das Graças et al. O ensino da língua japonesa nas escolas de 1º. e 2º. graus. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- DOI, Elza Taeko et al. O ensino da língua japonesa na universidade: reflexões sobre as metas e sua adequação aos meios utilizados. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.
- UKIDA, Saburo. Os pontos problemáticos do ensino da língua japonesa no Japão no caso da Universidade de Hiroshima. Anais do II Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1989

DEMARTINI, Zelia de Brito Fabri & ESPÔSITO, Yara Lúcia, São Paulo no ínicio do século e suas escolas diferenciadas. In: *Ciência e Cultura* (Revista da Sociedade Brasileira para o Progresso da Ciência), São Paulo, 41(10), outubro, 1989, p. 981-995.

## 1986

TOIDA, Helena Hisako. Laboratório de Línguas no ensino da língua japonesa. Estudos Japoneses. No. 6, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1985

DOI, Elza Taeko. Reflexões sobre o emprego da escrita no ensino de japonês. *Estudos Japoneses*, no. 5, São Paulo. Centro de Estudos Japoneses da USP.

## 1984

FUKASAWA, Lídia Masumi. O ensino da língua japonesa para estudantes brasileiros de nível superior. Estudos Japoneses. No.4, São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da USP.

## Notas:

## (1) Abreviaturas:

EDUNICAMP – Editora da Universidade Estadual de Campinas

EDUSP – Editora da Universidade de São Paulo

FE – Faculdade de Educação

FFLCH - Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas

IEL – Instituto de Estudos da Linguagem

IP - Instituto de Psicologia

PUC – Pontifícia Universidade Católica

UFRGS – Universidade Federal do Rio Grande do Sul

UFRJ – Universidade Federal do Rio de Janeiro

UnB – Universidade Federal de Brasília

UNESP – Universidade Estadual Paulista

UNICAMP – Universidade Estadual de Campinas

USP – Universidade de São Paulo

## (2) Fonte:

- Banco de teses e dissertações ( -2003)
- Periódicos:
  - Estudos Japoneses. Centro de Estudos Japoneses da USP (1979-2002 )
  - Trabalhos em Lingüística Aplicada. IEL-Unicamp
  - Cadernos de Estudos Lingüísticos. IEL-Unicamp
  - Anais do Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa/ENPULLCJ (1991-2003)
  - outros periódicos avulsos

# BIBLIOGRAFIA SOBRE O CONTATO LINGÜÍSTICO: TEXTOS PUBLICADOS NO BRASIL(1, 2) (período de 1974 - 2001).

(livros, dissertações, teses, artigos em periódicos e publicação em anais, envolvendo o português e outras línguas, exceto japonês)

## Elza Taeko Doi (Unicamp) Arissa Saeki (Unicamp)

## 2001

LEME, M.L. de A. (2001) Dio, che brut estudá...: um estudo lingüístico da comunidade tirolo-trentina da cidade de Piracicaba. Campinas:Editora da Unicamp, Centro de Memória-Unicamp.

#### 2000

- ANDRADE, K.S. (2000) Empréstimos lingüísticos entre os Karajá "iny rybe". Dissertação de mestrado, FFLCH-USP São Paulo
- ARAÚJO, O.M.C.M. (2000) Nas raias de Mato Grosso: o discurso de constituição de fronteira. Dissertação de mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- ARRUDA, B.F.B.P de (2000) A designação camelôs em Cáceres: os sentidos nas relações comerciais na fronteira Brasil/Bolívia. Dissertação de mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- BISINOTO, L.S.J. (2000) Atitudes sociolingüísticas em Cáceres-MT: Efeitos do processo migratório. Dissertação de Mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- CAMELO, L.C. (2000) Os empréstimos lingüísticos na língua portuguesa contemporânea. Estudos Lingüísticos, 29 ,474-479
- CAVALCANTI. M.C. (2000) Entre escolas da floresta e escolas da cidade: olhares sobre alguns contextos escolares indígenas de formação de professores. Trabalhos em Lingüística Aplicada, Campinas, 36,101-119.
- CORREA, R.L.T. (2000) Conviver e sobreviver: estratégias educativas de imigrantes italianos. Tese de doutorado, São Paulo, FFLCH-USP.
- FERREIRA,M. (2000) Considerações sobre o léxico indiano na língua portuguesa uma questão de línguas em contato. Estudos *Lingüísticos*, 29, 429-434
- HONÓRIO, M.A. (2000) Espaço enunciativo e educação escolar indígena: saberes, política, línguas e identidades. Tese de doutorado, Unicamp, Campinas (SP).
- JUNG, N. (2000) Eventos de letramento em uma escola multisseriada de uma comunidade rural bilíngüe (alemão/português) Trabalhos em Lingüística Aplicada, 35, 69-82.
- MORALIS, E.G. (2000) Dialetos em contato: um estudo sobre atitudes lingüísticas. Dissertação de Mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- SHYU, D.J.Y. (2000) Estudo da linguagem na comunidade chinesa em São Paulo: influência da língua portuguesa e do dialeto taiwanês na língua oficial. Dissertação de mestrado, São Paulo, FFLCH-USP, São Paulo.
- VARGAS, M.V.A.M. (2000) O projeto "estudo histórico-descritivo dos vocábulos de origem indiana na constituição do léxico do português e da língua do Brasil. Estudos Lingüísticos, 29, 423-428
- ZUCCOLILLO, C.M.R. (2000) Língua, nação e nacionalismo um estudo sobre o guarani no Paraguai. Tese de doutorado, Unicamp, Campinas (SP).

- CAVALCANTI, M.C. (1999) Estudos sobre educação bilíngüe e escolarização em contextos de minorias bilíngües no Brasil. DELTA, 15, 385-417
- GAMBEROTTO, B. (1999) Línguas africanas e o léxico do português do Brasil: um encontro lingüístico e cultural. Estudos Lingüísticos, 28, 215-221
- MELLO, H.A.B. O falar bilingüe. Goiânia: Editora UFG.
- PAYER, M.O. (1999) Memória da língua: imigração e nacionalidade. Tese de doutorado. Unicamp, Campinas (SP).

- PEREIRA, M.C. (1999a) Naquela comunidade rural, os adultos falam "alemão" e "brasileiro", na escola, as crianças aprendem o português: um estudo do continuum oral/escrito em crianças de uma classe bisseriada. Tese de doutorado, Unicamp, Campinas (SP).
- PEREIRA, M.C. (1999b) Um olhar sobre a fronteira: alunos paraguaios bilíngües espanhol e guarani que estudam em escolas monolíngües em Foz do Iguaçu, PR. Projeto de pesquisa (mimeo).
- SANDALO, F. e GORDON, P. (1999) Acquisition and creolization of condition "violations" in kadiwéu and portuguese. *Cadernos de Estudos Lingüísticos, Campinas*, 36, 193-205.
- SANTOS, M.E.P. (1999) Fatores de risco para o sucesso escolar de crianças brasiguaias nas escolas de Foz do Iguaçu: uma abordagem sociolíngüística. Dissertação de Mestrado, UFPR, Curitiba.
- SEKI, L. (1999) A lingüística indígena no Brasil. DELTA, 15, 257-290
- SOUZA, A.C.S. (1999) A variação de concordância de gênero entre o sujeito e o predicado na linguagem do Cafundó. Estudos Lingüísticos, 28, 208-214

- BILIA, M.B. (1998) Análise lexical das interferências da língua portuguesa na língua italiana falada por italianos de nível universitário residentes na cidade de São Paulo. Dissertação de mestrado, são Paulo, FFLCH-USP, 2 volumes.
- BORTONI-RICARDO, S.M.B.(1998) A análise do português brasileiro em três continua: o continuum ruralurbano, o continuum oralidade-letramento e o continuum de monitoração estilística. in S. GROSSE & K. ZIMMERMANN (orgs) Frankfurt: TFM.
- RODRIGUES, A.D. (1998) O conceito de línguas indígenas no Brasil I: os primeiros cem anos (1550-1650) na costa leste. *Línguas :Instrumentos Lingüísticos*. Campinas: Pontes, 59-78
- VECHIA, A. (1998) Imigração e educação em Curitiba: 1853-1889. Tese de doutorado, FFLCH-USP, São Paulo

#### 1997

- ANDRADE, T.E.S.V.(1997) Visiblità del lexico inglese in riviste di grande comunicazione: italiane e brasiliane.

  Dissertação de mestrado, São Paulo, FFLCH-USP.
- BIGONJAL-BRAGGIO, S.L. (1997) Aquisição e uso de duas línguas: variedade, mudança de código e empréstimo, ABRALIN Boletim da Associação Brasileira de Lingüística, 20
- JUNG, N. M. (1997) Eventos de letramento em uma escola multisseriada de uma comunidade bilíngüe (alemão/português). Dissertação de mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- CAVALCANTI, M.C. (1997) O índio e a escola: A linguagem na construção de representações sobre a educação indígena pós contato. Projeto de Pesquisa
- FERRETI, G.D. (1997) A língua da Sardenha: Um estudo histórico descritivo. Tese de doutorado, São Paulo, FFLCH-USP.
- SALAWDEH, O.K. (1997) Manutenção e mudança de língua: um estudo da comunidade árabe em São Paulo.

  Dissertação de Mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- SÁNCHEZ, J.E.H. (1997) "Las lenguas que me enredan" Rumo a um planejamento bilíngüe Mapudungun e Espanhol. Tese de doutorado, Unicamp, Campinas (SP).
- SCHNELL, F.R. (1997) Discurso de malentendidos interculturais em português e alemão no âmbito empresarial. Trabalhos em Lingüística Aplicada, 29, 37-50

## 1996

- CHOI. K.J. (1996) Aspectos fonéticos-fonológicos de português falado por coreanos: evidências de transferências/interferências da língua materna na segunda língua. Tese de Doutorado, FFLCH-USP, São Paulo.
- COUTO, H.H. (1996) Introdução ao estudo das línguas Crioulas e Pidgin. Brasília: UnB.
- FARIA, M.V.B. de (1996) Interferência da língua materna na escrita da língua inglesa: uma experiência com os alunos brasileiros. Dissertação de Mestrado, UFRN, Natal (RN)
- ISHIHARA, T. (1996) Discursos relatados e alteridades lingüísticas Descrições em português e francês. Tese de doutorado, , FFLCH-USP, São Paulo (SP).
- MARTINS, L.M. (1996) Um estudo sociolingüístico na comunidade dos imigrantes brasileiros em Santa Rosa del Monday. Dissertação de mestrado, UFPR, Curitiba (Pr)
- MELLO, H.A.B. de (1996) Codeswitching: uma estratégia discursiva de bilíngües. Dissertação de Mestrado, UFGO, Goiânia (GO).
- VOGT, C.A. e FRY, P. (1996) Cafundó: A África no Brasil. Campinas: Edunicamp.

## 1995

FREITAS, D.B.A.P. de (1995) Bilinguismo do grupo de Arara (pano de Acre) – Sugestões para alfabetização na

língua indígena. Dissertação de Mestrado, UFPE, Recife (PE)

- PESSOA, M.S. (1995) Ontem e Hoje: percurso lingüístico dos pomerados de Espigão D'Oeste-RO. Dissertação de mestrado. Unicamp, Campinas (SP).
- TRINDADE, A.M.; BEHARES, L.E e FONSECA, M.C. (1995) Educação e Linguagem em áreas de fronteira Brasil-Uruguai. Santa Maria, RS: Editora da UFSM.
- VIEIRA, M.Z.M. (1995) Estudo histórico social e lingüístico de três núcleos de colonização polonesa em Ponta Grossa. Tese de doutorado, UNESP, Faculdade de Ciências e Letras de Assis,

#### 1994

- GALINDO, J.(1994) Análise constrativa sincrônica do sistema fonológico do português do Brasil e do castelhano da Colômbia. Tese de doutorado, FFLCH-USP, São Paulo.
- KREUTZ, L.(1994) A escola teuto-brasileira católica e a nacionalização do ensino. in T.L. MÜLLER (org.)

  Nacionalização e Imigração Alemã. São Leopoldo: Editora UNISINOS.
- LEME, M.L. A. de (1994) A linguagem da comunidade Tirolesa-Trentina da cidade de Piracicaba-SP. Teses em Lingüística, Unicamp, Campinas (SP).
- SAVEDRA, M.M. Bilingüísmo e Bilingualidade: O tempo passado no discurso em língua portuguesa e língua alemã. Rio de Janeiro: UFRJ.

#### 1993

- ABBUD, C.E. (1993) Língua e cultura: Um estudo acerca da relação entre o bilingüismo árabe-português e o autoconceito em um descendente de sírios. Dissertação de mestrado, USP, São Paulo (SP).
- GHIRADI, P.G. (1993) Imigração da palavra: apelos da italianidade e enraizamento no Brasil. Tese de livre docência, USP, São Paulo (SP)..
- FERNANDES, J. (1993) Índio esse nosso desconhecido. UFMT Editora Universitária, Cuiabá MT.
- RODRIGUES, A.D. (1993) Línguas Indígenas: 500 anos de descobertas e perdas. DELTA, 9. (83-103)
- SIMÃO, M. (1993) Mascate árabe: contribuição aos estudos sociolingüísticos. Tese de doutorado, USP, São Paulo (SP).

## 199

- AQUINO, O.R. de. (1991) A língua na escola. (orient) Saria Maria Affonso Moysés. Dissertação de mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- CARDOSO, S.A.M. (1991) Sociolingüística e diatopia: empréstimos no português do Brasil. Cadernos de Estudos Lingüísticos, 20, 139-161
- CAVALCANTI, M.C. (1991) Interação guarani/não guarani: etnocentrismo naturalizado na questão do silêncio inter-turnos. Trabalhos em Lingüística Aplicada, 18, 101-109
- CONFORTIN, H.(1991) Faina lingüística: estudo de comunidades bilíngües italiano-português do Alto Uruguai gaúcho. Tese de doutorado. FFLCH USP, São Paulo,
- LUIZ, S.M.F. (1991) Empréstimos: um estudo sobre os processos de integração à língua portuguesa. Dissertação de mestrado. FCL-Unesp, Araraquara.
- MAHER, T.M. (1991) Conflito interacional e a educação lingüística do índio. *Trabalhos em Lingüística Aplicada*, 18.,111-126

## 1990

- ARCAS, Solange Magliano (1990) Bilinguismo residual: um perfil sociolingüístico da cidade de Nova Friburgo. Dissertação de mestrado, PUC RJ, Rio de Janeiro.
- FÉLIX, J.L. (1990) Colônia riograndense: problemas de aculturação e língua. Dissertação de Mestrado, UNESP. Faculdade de Ciência e Letras de Assis.
- MAHER, T.J.M. de (1990) Já que é preciso falar com os doutores de Brasília... Subsídios para o planejamento de um curso de português oral em contexto indígena. Teses em Lingüística Aplicada, Unicamp, Campinas (SP).

- BARNET-FURST, U (1989) Manutenção e mudanças lingüísticas no município de Panambi um estudo qualitativo e quantitativo. Dissertação de mestrado. Unicamp, Campinas (SP).
- CARVALHO, N. (1989) Empréstimos lingüísticos. S.Paulo: Editora Ática.
- NABHAN, N.N. (1989) O imigrante libanês em São Paulo Estudo da fala. FFLCH USP, São Paulo.
- PEREIRA, C. da C., SILVA, E.V. da, AMORIM, L.C. de, SILVA, M.E.B. da & BRANDÃO, S.F. (1989) Projeto do atlas etno-lingüístico dos pescadores do estado do Rio de Janeiro (Projeto APERJ): Breve Notícia. Trabalhos em Lingüística Aplicada, 14, 213-219

- EMMERICH, Charlotte (1988) Da natureza da variação lingüística no português xinguano. UFRJ, Rio de Janeiro (RJ)
- ORLANDI, E.P. (org) (1988) *Política lingüística na América Latina*. Série: Linguagem; Crítica. Campinas: Pontes.
- RODRIGUES, A.D. (1988) As línguas indígenas e a constituinte. Orlandi, E.P. (org) *Política lingüística na América Latina*. Série: Linguagem; Crítica. Campinas: Pontes.
- VOGT, C. e FRY, P. (1988) Ditos e feitos da falange africana do Cafundó e da calunga de Patrocínio ou de como fazer falando. Orlandi, E.P. (org) Política lingüística na América Latina. Série: Linguagem; Crítica. Campinas: Pontes.

#### 1987

- KAHMANN, C.I. (1987) Interferência da língua portuguesa em um dialeto alemão. In *Anais do 5º BILSUL*. Florianópolis: UFSC, 110-119
- KERECUK, N.L. (1987) Descrição de alguns aspectos do bilingüismo português-ucraniano no Paraná. In Anais do 5° BILSUL. Florianópolis: UFSC, 177-189
- KOCH, W. (1987) Projeto de mapeamento do bilingüismo no Rio Grande do Sul. In *Anais do 5º BILSUL*. Florianópolis: UFSC, 211-221º
- KULCZYNSKYJ, W.(1987) Influência da língua portuguesa no ucraniano falado no Vale do Iguaçu: esboço de uma pesquisa. In *Anais do 5º BILSUL*. Florianópolis: UFSC, 74-86
- TARALO, F., ALKIMIN, T. (1987) Falares crioulos: línguas em contato. São Paulo: Ática.
- VANDRESEN, P. e STEINER, F.R. (1987) Mapeamento das áreas de colonização alemã em Santa Catarina. In Anais do 60. BILSUL. Curitiba: UFPr, 56-76.
- ZANELLA, F. (1987) A mortalidade lingüística do dialeto italiano no município de Taió. In  $Anais\ do\ 5^o\ BILSUL$ . Florianópolis: UFSC, 96-109

#### 1986

- HOUAISS, A. (1986) Língua de cultura e diversidade lingüística. In Atas do 1º Simpósio sobre diversidade lingüística no Brasil. Salvador: Universidade Federal da Bahia, 13-22
- KOCH, W. (1986) Mapeamento das áreas bilíngües do Rio Grande do Sul. In Atas do 1º Simpósio sobre a diversidade lingüística no Brasil, Salvador:UFBa.,99-108
- KULCZYNSKYJ, W.(1986) Bilingüismo e os falantes das línguas eslavas. In Anais do 4° BILSUL. Porto Alegre:UFRGS, 100-104
- MULLEN, P. e VANDRESEN, P (1986) Estudo do bilingüismo Xokléng-português no Posto Duque de Caxias. In Anais do 4º BILSUL. Porto Alegre: UFRGS, 115-134.
- RODRIGUES, A.D. (1986) Línguas brasileiras: para o conhecimento das línguas indígenas. São Paulo:Loyola.
- SILVA, M.M. (1986) Influência dos crioulos africanos na língua portuguesa do Brasil. In Atas do 1º Simpósio sobre diversidade lingüística no Brasil. Salvador: Universidade Federal da Bahia.293-298
- VANDRESEN, P. (1986) Preservação das línguas e culturas indígenas. Boletim da ABRALIN 7, 55-62.
- VOGT, C. e FRY, P. (1986) Mistério e enigma no Cafundó: análise de um diálogo. Cadernos PUC 22, 89-117.

## 1985

VOGT, C. e FRY, P. (1985) Rios de Cristal: contos e desencontros de línguas africanas no Brasil. Cadernos de Estudos Lingüísticos 8, 109-128

- BEHARES, Luiz E. (1984) Diglosia en la sociedad esciolar de la frontera urugaya com Brasil: matriz social del bilingüismo. Cadernos de Estudos Lingüísticos 6, 228-234
- EMMERICH, Charlotte (1984) Contato lingüístico e variação. Tempo Brasileiro, 78/79, 33-53.
- EMMERICH, Charlotte (1984) A língua de contato no Alto-Xingu: origem, forma e função. Tese de Doutorado. UFRJ
- EMMERICH, Charlotte (1984) Um aspecto morfossintático na língua de contato do Alto Xingu. Boletim da ABRALIN 6, 159-173.
- FONSECA, Onosor (1984) Um caso de interferência lingüística: nisseis que trocam l por r (brando). Estudos Lingüísticos 9, 216-219.
- FRY, Peter et al (1984) A comunidade no Cafundó. Cadernos de Estudos Lingüísticos 6, 111-128.
- KULCZYNSKYJ, W.(1984a) Mapeamento de comunidades eslavas no Paraná. Fragmenta Linguistica 3, 18-55
- KULCZYNSKYJ, W.(1984b) Projeto integrado de estudos do bilingüismo e variação lingüística na região Sul. In Anais do 3º BILSUL. Curitiba:UFPr, 20-26.

- LEME,M.L.A. (1994) A linguagem na comunidade Tirolesa-Trentina da cidade de Piracicaba/SP. Dissertação de mestrado, Unicamp, Campinas (SP).
- NABHAN, N.N. (1984) Interferência lexical: estudo da fala de imigrantes libaneses em são Paulo. Tese de doutorado. USP.
- SIEMENS, J.U. (1984) Variedades Sociolingüísticas entre os menomitas de Curitiba. Dissertação de mestrado, UFPR, Curitiba(Pr).

- ANGENOT, Jean-Pierre (1983) Simpósio sobre línguas minoritárias no Brasil: línguas africanas. *Boletim da ABRALIN* 5, 126-138.
- CASTRO, Yeda P. de (1983) Das línguas africanas ao português brasileiro. Afro-Ásia 14, 81-107.
- DRUSZCZ, Arlindo M. (1983) O bilingüismo em Araucária: a interferência polonesa na fonologia portuguesa. Curitiba: Universidade Católica do Paraná.
- EMMERICH, Charlotte (1983) Simpósio sobre línguas minoritárias no Brasil: línguas indígenas. Boletim da ABRALIN 5, 77-94
- FROSI, Vitalina M. (1983) Os dialetos italianos e a língua portuguesa. *Anais do 2º BILSUL*, 100-120. Florianópolis: UFSC.
- FROSI, Vitalina M.e Mioranza, Ciro (1983) Dialetos italianos. Um perfil lingüístico dos ítalo-brasileiros no nordeste do Rio Grande do Sul. Caxias do Sul. Editora da Universidade de Caxias do Sul.
- FURLAN, Oswaldo A.(1983) A linguagem catarinense de ascendência luso-açoriana: características e sua origem. *Anais do 2º BILSUL*, 231-250. Florianópolis: UFSC.
- KATO, M. e BARBARA, L. (1983) Simpósio sobre línguas minoritárias no Brasil: línguas asiáticas. *Boletim da ABRALIN* 5,(95-111)
- NASCIMENTO, N.F. do (1983) Uma experiência em educação bilíngüe com o povo Maxakali. Caderno de Estudos Lingüísticos 4, 155-164.
- ROSSI, N. (1983) Simpósio sobre línguas minoritárias no Brasil: palavras de abertura. Boletim da ABRALIN 5, 75-76.
- VANDRESEN, P. (1983) Simpósio sobre línguas minoritárias no Brasil: línguas européias. *Boletim da ABRALIN* 5. 112-125.
- VOGT, C. e FRY, P. (1983) Ditos e feitos da falange africana do Cafundó e da calunga de Patrocínio, ou como fazer falando. Revista de Antropologia 26, 65-92
- ZIMMERMANN, I.(1983) Estudo sociolingüístico de uma comunidade alemã. In Anais do 2º BILSUL, Florianópolis: UFSC, 40-84

## 1982

- BUNSE, Heinrich A.W.(1982) Algumas notas sobre pesquisas lingüísticas nas áreas de etnia alemã e italiana no Rio Grande do Sul. In: *Anais do 1º BILSUL*, 59-70. Porto Alegre: UFRGS
- CASTRO, Yeda P. de(1982) Língua e nação de candomblé. África 4, 57-77.
- KAWKA, M. (1982) Os brasileirismos do dialeto polono-brasileiro. *Dissertação de mestrado*. Curitiba: Universidade Católica do Paraná.
- PÓVOAS, R. (1982) A linguagem do candomblé: níveis sociolingüísticos de integração afro-portuguesa. Dissertação de mestrado. UFRJ.
- SILVA, R.V.,. e SILVA, M.B. (1982) Manifestações do processo de simplificação em um dialeto de contato. Boletim de Filologia 36, 125-137.
- VANDRESEN, P. (1982) O estudo do bilingüismo em Santa Catarina, In *Anais do 1º BILSUL*. Porto Alegre: UFRGS, 28-35.

## 198

- D'ANGELIS, W. R.& J. MAZZAROLLO (1981) A migração brasileira para o Paraguai. Cadernos de Justiça e Paz.
- FRY, Peter et al (1981) Mafamburra e Caxapura: na encruzilhada da identidade. Dados. Revista de Ciências Sociais 24(3), 373-389.
- LUYTEN, S.M. B. (1981) Comunicação e aculturação: a colonização holandesa no Paraná. São Paulo, Loyola.
- WOUK, M. (1981) Estudo etnográfico-lingüístico da comunidade ucraniana de Dorizon. Curitiba, Projeto.
- ZIMMERMANN, I.(1981) Interferência de um dialeto alemão na língua portuguesa. Dissertação de mestrado. UFSC.

## 1980

CASTRO, Yeda P. de (1980) Os falares africanos na interação social do Brasil Colônia. Centro de Estudos

Baianos 89, 5-26.

FROEHLICH, P.A. (1980) O problema sociolingüístico dos empréstimos: alguns aspectos do inglês. Alfa, 24 (73-92)

VANDRESEN, P. (1980) Contatos lingüísticos em Santa Catarina. In Anais do 3º colóquio de Estudos Teuto-Brasileiros. Porto Alegre:UFRGS, 371-385

VERBURG, M.K. (1980) O bilingüismo em Castrolândia: aspectos sociais da aquisição da segunda língua. Dissertação de mestrado. Curitiba: UFPr.

## 1979

ANDRADE, N.M.C. de (1979) Léxico e explicação interdialetal no APFB. UFBA. 39467

HENNES, M.C. (1979) A interferência fonológica de um dialeto alemão no português. Dissertação de mestrado. PUCRGS, Rio Grande do Sul.

SILVA, R.V.M. (1979) Aspectos do contato lingüístico no Brasil. Universitas 24, 83-92

## 1978

VOGT, C.A. e GNERRE, M. (1978) Cafundó: Uma comunidade negra que fala até hoje uma língua de origem africana. Estudos *Lingüísticos*, 2, 11-19.

#### 1977

CASTRO, Yeda P. de (1977) Influência de línguas africanas no português do Brasil. Educação 25, 50-64

EMMERICH, Charlotte (1977) Um traço propulsor numa língua de contato. In *Anais do 2º ENL*, 393-400. Rio de Janeiro PUC Rio de Janeiro

PEREIRA, E. (1977) Um estudo sociolingüístico na colônia Esperança. Dissertação de mestrado. Florianópolis:

TASCA, M. (1977) Línguas em contato: interferência na aprendizagem da escrita. Dissertação de mestrado, PUC-RS, Porto Alegre, 195p.

## 1976

SOUZA, E.Z. (1976) Processos de Interferência Lingüística entre o português e o alemão. Dissertação de mestrado, PUCC, Campinas (SP).

## 1974

BONATTI, Mário (1974) Aculturação lingüística numa colônia de imigrantes italianos de S.Catarina, Brasil.

Lorena/Blumenau: Faculdade Salesiana de Filosofia, Ciências e Letras de Lorena/Instituto de Estudos Históricos do Vale do Itajaí.

## (1) Abreviaturas:

FE - Faculdade de Educação

FFLCH - Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas

IEL - Instituto de Estudos da Linguagem

PUCC - Pontifícia Universidade Católica de Campinas

PUCRJ – Pontifícia Universidade Católica de Rio de Janeiro

PUCSP – Pontifícia Universidade Católica de São Paulo

UFGO - Universidade Federal de Goiás

UFMT – Universidade Federal de Mato Grosso

UFPE – Universidade Federal de Pernambuco

UFPr - Universidade Federal de Paraná

UFRGS - Universidade Federal do Rio Grande do Sul

UFRN – Universidade Federal do Rio Grande do Norte

UFRJ - Universidade Federal do Rio de Janeiro

.UFSC - Universidade Federal de Santa Catarina

UnB – Universidade Federal de Brasília

UNESP - Universidade Estadual Paulista

UNICAMP – Universidade Estadual de Campinas

USP - Universidade de São Paulo

ABRALIN – Associação Brasileira de Lingüística.

## (2) **Fonte:**

- Banco de teses e dissertações ( -2003)
- Periódicos:
- Alfa (Revista da Universidade Estadual Paulista/Unesp)
- Cadernos de Estudos Lingüísticos (Revista do IEL/Unicamp)
- DELTA /Documentação de Estudos em Lingüística Teórica e Aplicada (Revista da PUCSP e da Associação Brasileira de Lingüística/ABRALIN)
- Estudos Lingüísticos (Revista do Grupo de Estudos Lingüísticos do Estado de S.Paulo GEL)
- Trabalhos em Lingüística Aplicada (Revista do IEL/Unicamp)
- Outros periódicos avulsos

or de Britania de 1900, 2001, incluita de Porto de Sakon de 1900 de 1900 de 1900 de 1900. La companio de 1900, de 1900, en companio del Politica de 1900.

the or a section of the section of t

. 2002 a capabaga (n. 30), sur esta esta esta esta en la composició de la

The American Community of the Community

apar war de la composition della composition del

# ブラジル日系人の「日本語」を巡る 状況と言説

-1908年から1980年代末まで-

森 幸 一 (サンパウロ大学文学部―FFLCH―USP)

## はじめに

ブラジルへ最初日本移民が到着して一世紀,この時間は異郷の地への日本語の離散の歴史だった。移民とともにブラジルに「旅」した日本語は異郷の文化と接触しどのような変容を遂げたのであろうか。そして、日本語は異郷の地にあって、移民やその子孫たちの自らの起源(ルーツ)への帰属意識やアイデンティティの構築にどのように関わってきたのだろうか。さらに、日本語をめぐる日系人の思考や感情の構造はいつ頃、どのような状況を契機としながら、いかに変化してきたのであろうか。本研究で、ブラジルの日本語を巡る動向や言説をトピックとしながら、それらを移民の生活(生存)戦術、移民社会における意味や価値システム、移民社会の構造の変化一地域共同体と家族など一、エスニック・アイデンティティ構築の歴史的変遷、さらにこれらに多分に影響を与えるブラジルの国家・国民文化観一特に移民に対する国家政策、グローバリゼーションなどと関連させて解釈し、日本語観を通じてみた移民の精神史を考察することを課題とする。本稿はこうした問題関心から現在実施している研究の、現時点での成果(アウトライン)を示すことを目的とするものである。

本研究では、1908年に始まるブラジルへの日本人移民とその言語をめぐる考察を行う際に、時代を大きく戦前期と戦後期に区分し、それぞれの時代を移民の生活の変化やそれに伴う言語生活の特徴、日系社会の組織化などを指標としながら、さらにいくつかの時期に区分し、それぞれの時期の日本語を巡る動向や言説を上記のような視座から記述考察していく。

本稿では戦前,戦後期の日本語を巡る動向や言説を考察するために,戦前期(1941年まで)を便宜的に,①短期的出稼ぎ戦術/コーヒー・ファゼンダ(Fazenda)時代―初期移民の言語生活(1910年代),②中・長期的出稼ぎ戦術/植民地・在伯同胞社会―「日本語」共同体の誕生(1920年代),③二つのナショナリズムと〈国語〉イデオロギーの台頭(1930年代)に区分して、この時代区分に沿って、それぞれの時期の「日本語」(を巡る諸状況)に

ついて記述していきたいと考えている。

一方,戦後期に関しては、①永住戦術/日系コロニアの「誕生」と日本語教育機関の再組織化(1950年代)、②〈コロニア人〉アイデンティティの構築とコロニア知識人による〈コロニア語〉の発見(1950年代以降)、③〈コロニア語〉によるエスニック日本語教育意識の出現―コロニア版教科書製作運動とコロニア文学運動(土着性議論)(1950年代後半から70年代末)、④グローバル化とブラジルの〈日本語〉―アカデミアによる「コロニア語」の発見と「真正な日本語」観の醸成―(1970年代以降)という時代区分を便宜的にもちいつつ、所与の課題に関する記述、考察を行なう。

## 1. 戦前移民社会における日本語を巡る状況

## 1.1. 短期的出稼ぎ戦術/コーヒーファゼンダ時代─初期移民の言語生活(1910年代)

図表1はブラジルへの日本移民入国者数を1963年時点まで四つの時期に分けて示したものである。これによると、戦前期は約19万人の日本人移民がブラジルに入国しているが、戦前の場合、移民入国数は第2期に全体の64,6%(戦前のみで言えば、83%)が集中している。この時期における移民の急増には1925年より日本政府がブラジル移民全員に渡航費補助を行なうようになったこと(換言すれば国策移民となったこと)や日本、ブラジル双方の状況の変化などが関連している。

時代区分	入国数	比率
第1期(1908—1923)	32, 266	13,3%
第2期(1924—1941)	156, 349	64,6%
第3期(1942-1951)	151,	0,06%
第4期(1952-1963)	53, 405	22,1%
合 計 (1908-1963)	242, 171	100,0%

図表 1 ブラジルへの日本移民入国数

ごく初期の戦前移民の特徴は、ほとんどの移民が契約移民としてサンパウロ州のコーヒー 耕地の農業労働者として生活を開始したこと、サンパウロ州政府の日本移民政策としてコー

<sup>(1) 1920</sup>年代からのブラジル向け日本移民増加にはいくつかの理由がある。ブラジル側の理由としてはイタリア政府が労働条件の劣悪さからブラジル向けのイタリア移民送出を禁止し、サンパウロ州内のコーヒー耕地の労働力が不足したこと、日本側の理由としてはまず第一に、日露戦争の反動で1905年から13年頃まで日本社会は農村部を中心に不況が継続し、1918年には米騒動、20年には世界恐慌発生にともなう国内景気の更なる後退、23年には関東大震災も起こり、国内景気が継続的に悪化していたこと、第二に政府は景気対策と人口問題解決の一環として移民を奨励したのであるが、肝心の移民先が徐々に制限されていたということがあった。例えば、1908年には日米紳士協定により、日本からの北米向け移民は自粛され、1907年にはカナダとのルミュー協分によりカナダ移民を自粛、さらには排日運動の高揚などもあり、21年には米国が日本からの移民に完全に扉を閉ざしてしまった。こうして、北米を中心とする移民制限・禁止措置を背景に南米、特にブラジル移民が注目され、しかも政府による [移民] 事業が国策として推進されたこともあって、数多くの移民がブラジル向け渡航したのである。

ヒー耕地での定着率を上げる目的で単独移民を排し、12歳以上の労働力三名以上を含む家族移民を原則とし、しかも契約期間を原則として一農年としたことなどを挙げることができるだろう。こうした特徴は日本移民の移民としての社会的性格を強く規制することになった。ごく初期の移民にあっては、サンパウロ州政府の提示する条件をクリアするために、新たな「家族」を構成するものが多かった。出稼ぎによる貯蓄という目的に沿って、「家族」労働力を構成するために、弟や妹、甥や姪、近隣の若者や、赤の他人までを養子縁組し「家族」を作った。この結果、この時期の「家族」は相対的に稼動年齢層を多く含み、男女比における男性の卓越があったが女性も4割程度含まれていたものとなった。女性移民(それも10代前半の)を多く含んだ移民構成はその後のブラジル日系集団の形成に大きなファクターとなって機能し、移民の定着化、日本人同士の結婚・家族生活、言語習得などに大きく貢献することになった。

図表2は戦前期におけるブラジル移民の渡航時における家族内地位を整理したものである。この図表から1910年代末までのごく初期移民において、「子供」という家族内地位をもった存在は少なく、それに比較して構成家族員の占める比率が高くなっているという特徴を看取できる。この初期の特徴は時間経過に伴い、子供の増加、構成家族の減少が起こり、構成された家族から「正常」な家族の増加へと変化していった。

180380	1908 — 1912	1913 — 1917	1923 - 1927	1933 — 1937
夫婦	34,6%	37,3%	21,3%	18,5%
子供	21,8%	22,6%	46,8%	48,2%
構成家族員	42,1%	39,9%	26,2%	27,5%
内訳 近親者	30,9%	26,5%	23,5%	26,5%
他人	11,3%	13,4%	2,7%	1,3%
その他	1,4%	0,3%	5,7%	5,8%
合計	100,0%	100,0%	100,0%	100,0%
実数	3295人	9733人	18862人	51854人

図表 2 ブラジル移民の渡航時における家族内地位

[出典] 前山隆 (2001)「同伴移民, 妻移民, 子供移民―ブラジル日系女性移住体験を中心に―」 『阪南論集 人文・自然科学編』第36号第3号 4頁

以上のような特徴をもった日本移民の大半は4,5年から10年という短期的な出稼ぎ戦術をもって、サンパウロ州内陸部のコーヒー耕地にコロノ (Colono:農業賃金労働者)として就労した。コーヒー耕地という空間は当時ブラジル人労働者(及び所有者など)をはじめ、ヨーロッパ各国からの移民集団を同時に抱え込む多人種・多民族的構成を特徴としており、これらの集団との日常的直接的な接触の中で、日本移民はポルトガル語の語彙を覚え、その

<sup>(2)</sup>前山隆 「同伴移民,妻移民,子供移民―ブラジル日系女性移住体験を中心に―」阪南大学学会編『阪 南論集 人文・自然科学編』第36巻 第3号 2001年1月 (1-14頁)4頁-5頁

<sup>(3)</sup> Teiiti Suzuki, The Japenese Immigrant in Brazil: Narrative Part, Tokyo; The University of Tokyo Press. 1969 pp189

語彙を日本語の中に借用していった。つまり、ごく初期のコーヒー耕地において、「日伯混成語」 (ブラジル日系人の話す日本語) の原型が生成されていったのである。

この時期は(少なくともごく初期においては)短期的な出稼ぎ戦術が卓越していたこと, その「家族」構成的特質(相対的に学齢期の子供少ない)などと交錯して,子弟の(日本 語)教育に関してあまり強い懸念は生じなかった時期であった。「珈琲園移民」の子弟教育 の状況(大正時代半ば頃の状況)を輪湖俊午郎は次のように記述している。

「大正七年の初頭、当時私(輪湖)が『ブラジル時報』の編集に携って居た頃、自身の興味からリベイロン・プレートを中心とした邦人家族の子弟教育に関し、之が調査のため四十余日を費し行脚したことがあります。即ち其頃日本人は、未だ珈琲園移民の域を脱せず、従って多く此地方に在住していたからであります。調査耕地は四十数所、一千家族近かったのでありますが、日本語教育などして居る所は一ヶ所も無く、而かも父兄の希望は如何にしてブラジル語を習得せしむるかにあり、しかも其のブラジル学校さへ大耕地を除く外は、殆ど存在しなかったのであります。其時の私の結論は、児童教育を中心とする以上、一日も早く土地を所有せしめて集団せしむる外上策はないと云う事でありました。

もともと出稼ぎに来たのであり、又当時の境遇は望んでも許されなかった点もありますが、先づ以て子弟教育に関する限り、及ばぬ事と諦めて居る者が大部分で、稀には全く無関心の如く見ゆる人々もあったのであります。当時ノロエステ地方には、既に平野植民地及ビリグイ植民地等が開設されて居り、此等邦人集団地に於ては自然教育問題も進展し、所々に寺子屋が設けられていたのですが、然し教育の根幹的方針などは勿論なく、伯國政府または児童教育に関する限り、極めて無頓着であり、田舎へ教師など派遣する誠意など毛頭なかった為、其好むと否とに関わりなく、日本式に教育をやって行かねばならなかったのであります。珈琲園移民中には、稀に此児童教育に痛く心配し、当時邦人唯一の組織的植民地として知られて居たイグアペ植民地を、小学校あるが故に選んだ者もあったのであります。…(略)…

この時期における日本移民たちの懸念は子供たちがいかに「ブラジル語」を習得するかであったと輪湖は論じているが、1910年代末の在伯同胞社会では既に子弟教育をめぐって邦字

(5) 輪湖俊午郎 (1939)『バウルー管内の邦人』サンパウロ

<sup>(4)</sup> この借用の過程に関しては半田知雄 [1970] のファゼンダでの生活に関する記述の中で断片的に記述されている。半田知雄 (1970) 『移民の生活の歴史』家の光社 戦前において,すでにブラジル人,外国人移民との接触の中で,日本移民は『ポルトガル語混じりの日本語』「日伯混成語」を生活言語として発展させ,さらにコーヒー耕地から植民地へと生活戦術を変更し,ブラジル滞在をより長期化する中で,その「日伯混成語」をより「洗練」されたものへと発展させていた。しかし,戦前期において,自らの集団が話す言語に関する言及はほとんど存在していない。その中で例外は半田である。半田はすでに1928年に「日伯混合語の使用」という論考を聖州義塾機関誌『塾友』に発表している。これがおそらく移民による自らの言葉に対する最初の言及であろう。半田は「日本語,ポルトガル語ともに文法的に正しいかたちで混ぜることが大切」と主張し「パバィ(Papai)はナ・ロージャ(NA LOJA)にいるのナ(NA)はいらない」といった例を示している。移民たちが自らの話す言葉を新たに「コロニア語」というレッテルを貼り,発見するのは戦後50年代のことであった。

新聞の社説などが「伯主日従主義」的な視点から論じている。この子弟教育(児童教育)に関する最初の言及は1918年11月の伯剌西爾時報の社説においてであった。この社説ではブラジルの教育令に従う教育を先ず受けさせ、「日本人の長所美点を身につけさせる」ために、

「補習教育(日本語教育)」を施すことも重要であると論じられている。つまり、日本語は日本人の徳目を身につけさせるための手段(道具)と考えられていたのであった。また、この社説では日本と国情を全く異にする伯国に存在する児童には、日本人の長所美点がよく理解できるような独自の教科書編纂が必要とも主張されている。10年代末からは、社説に限らず、邦字新聞紙面にはたびたび子弟教育を巡る言説が取り上げられているようになる。

この当時(1910年代から20年代後半にかけて),子弟教育のモデルは伯主日従主義に基づく,国粋主義的ナショナリズムの影響をほとんど受けない子弟教育論であったことが共通の特徴であろう。そして,伯国教育の補助教育としての日本語教育は「徳育教育に尽くし日伯合金の善良なるブラジル国民養成」を目的としてもったものでもあった。また,この時代の邦字新聞に出現する議論を考察するとすでに短期的な出稼ぎではなく,永住を前提にしたものであることを共通の特質としているように思われる。

この時期にはすでに記述言語として、当時既に発行されていた日本語新聞の中に「日伯混成語」が登場するのであるが、この言語を巡る言説は存在していない。

## 1.2. 中・長期的出稼ぎ戦術/植民地・在伯同胞社会-「日本語」共同体の生成-(1920年代)

コーヒー耕地時代に続く1920年代には短期的出稼ぎ戦術に代わる中・長期的な出稼ぎ戦術が様々な状況の変化を条件に移民の間に析出されはじめた。移民たちはコロノ制度が実は奴隷制の代替的制度であり、この制度下では貯蓄が不可能であるという事実を認識しはじめた。

この当時にはサンパウロ州奥地で大土地所有制が崩壊し始め、日本移民を始め外国人移民たちに農地(土地)獲得の可能性が出現していおり、こうした状況の変化を条件として、新たな生活戦術が析出されたのである。新しい生活戦術は借地農、自営農となって、時間をかけて貯蓄を行い、日本へ「錦衣帰国」を行なうというものであった。この戦術の実践の舞台

<sup>(6)</sup> 例えば、1918年11月12日付けブラジル時報には展南生が「植民地の児童教育」という寄稿文を、また同年12月20日の時報紙には榛葉彦平(平野運平の実弟)が「子弟の教育はどうするか」という寄稿文が載せられている。

<sup>(7)</sup> 馬渕至宏(1927)「在伯子弟教育論」

<sup>(8)</sup> この当時の新聞の論調は永住主義を基本としていたが、これは一部移民知識人層あるいはエリート層の拠ってたつ視点であり、庶民としての移民間では永住という意識はほとんど存在していなかった。移民間では帰国を前提にしつつ、無教育のままに学齢期に至る子弟教育に対する懸念が最大のものであり、しかも一方では伯主日従主義は日本へ帰国した際の、再適応、日本人としての資質といったものと密接に関わっていたし、他方においてはブラジルという国家枠組の規制も受けつつ、析出されてきたものといえるだろう。また、サンパウロ市のような都会において、10年代から20年代にかけて、日本語教育に従事したのは「日本キリスト教」ともいえるべき宗教者たちであったことは注目すべき事実であるように思われる。

<sup>(9)</sup> このサンパウロ州内における大土地所有制の崩壊過程やそれに伴う日本移民の植民地形成に関しては、 斎藤廣志 (1960) 『ブラジルの日本人』丸善に詳細な記述がある。

となったのが日系人の地域エスニック共同体一植民地であった。

こうした植民地はすでに1910年代に出現しているが、植民地形成が活発化したのは1920年代、そして質量的に最盛期を迎えるのは1930年代であった。植民地というエスニック集団地のタイプは様々であり、『移民80年史』(1991)によると、①自然発生的な入植、②移民などによって分譲された土地への入植、③日本の民間資本によって分譲された土地への入植、④連邦ないし州政府造成植民地への日本移民の大量入植などがあった。

植民地は日本のムラ組織をモデルに社会組織化が行なわれ、そこには擬似ムラ意識のような感情も後には醸成された。植民地の社会組織の主要な機能は一方において共同体としての道路、衛生、冠婚葬祭、農業などの領域の管理運営であり、他方においては子弟教育の実施にあった。子弟教育は植民地が奥地の未開地に形成されるケースがほとんどであったことから既存の教育機関もない中でゼロから出発しなければならなかった。前節で概観したように、若い労働力を主体にする「構成」家族がブラジルで解体し、青年層による新たな家族が形成され子供が誕生するようになったこと、1920年代からは家族構成の中に多くの子供が含まれるようになること、しかも20年代半ば以降国策移民として移民数が急増していく中で、植民地においてはこれらの子弟を巡る教育という問題が出現し、原始林を開墾した新開地の中で教育を受けずに成長する第二世たちの教育問題は日本に帰国するにしろ、当面第二世たちをどのように育てていったら良いのかという問題が基本であった。前述の輪湖によれば、珈琲園移民から脱して植民地形成熱が勃興した際、子弟教育は俄かに大問題となっていったが、子弟の教育方針に関しては確固たるものが定まらなかったという。

「其後植民地熱が勃興し、邦人集団地が到る所に簇出するや、教育問題は非常に強力な力を得、漸次之が植民地の中核的問題をなすに至ったのであります。然しブラジル教育か、日本教育か、それともチャンポン教育かに就いては、移住者自体に確固たる方針が定まらぬため、議論は百出して帰機を知らずという状態が永く続いたのであります

しかし、1910年代後半から20年代半ばにかけての時期は邦字新聞に見る限り、子弟教育に関する、非常に鮮明なスタンスが認められる。それはブラジルへの永住を前提とする伯主日従主義に基づくブラジル教育の重視と「徳育教育」を中心とする日本語による補習教育の必要性の主張であった。

<sup>(10)</sup> 最も古く形成された植民地はイグアベ植民地で1913年から開拓が行なわれている。これは東京シンジケートがサンパウロ州政府から州有地を無償で交付され、そこに植民地を創設したもの。日本の民間資本による植民地造成のケースである。

<sup>(11)</sup> 移民八十年史編纂委員会編 (1991) 『ブラジル日本移民80年史』 ブラジル日本文化協会 51—52頁 (12) 第二世という概令はフォーク概念であり ここには日本生まれの子弟とブラジル生まれの子弟がとも

<sup>(12)</sup> 第二世という概念はフォーク概念であり、ここには日本生まれの子弟とブラジル生まれの子弟がともに 包含されている。第二世が内部的に分裂をし、準二世と二世という新たな範疇とアイデンティティを析出 するのは後のことである。

<sup>(13)</sup> 輪湖俊午郎 (1939) 『バウルー管内の邦人』

ブラジル時報紙は1921年8月三回にわたって、社説において「児童教育は何ぞや」を論じ ている。この社説の論説は子弟教育はブラジル式を主体とするが、ブラジルの教育には人間 教育としての「修身」教育が不在であり,この道徳をどうするかが問題であり,日系社会に あって「修身教科書 | の編纂が急務であると主張している。そして、翌年7月には社説で日 系児童向けの修身用教科書編纂に関して、かなり具体的な意見が開陳されている。このブラ ジル式を主体とし、人間教育としての、日本語による徳育教育を従とする教育モデルの析出 は多分に、その当時、植民地に創設された教育機関をめぐる状況とも関連していた。植民地 においては第一次世界大戦中に南部三州のドイツ人学校が当時のブラジル教育令(10歳未満 の児童への外国語教授の禁止とブラジルの地理・歴史教授の義務)に従わずに問題をかもし 出したことを勘案し、学校を設立してはそれを「州または郡に寄付し、係官の監督の下にこ れを経営したのである。邦人小学校は、そのやうにして州又は郡の公認を得、また有資格の ブラジル人教師を得 | るというかたちを取る場合が多かったのである。換言すれば、植民地 の学校はその初期よりブラジルの公認の小学校としての形式をとっていたのであり、いわゆ るニ言語教育体制が敷かれていたのである。このニ言語教育体制は基本的に午前中はブラジ ル教育省のカリキュラムに沿った「ブラジル学校」、午後からは「日本語学校」(補習教 育)という構造をもつものであった。

1920年代のに邦人小学校に関する資料はほとんど存在していないが、30年代初頭の移民社 会の子弟教育の状況については伯剌西爾時報社編『伯剌西爾年鑑』(1938)がつぎのように 比較的詳細に記述しているので、それを引用しておこう。

「各校日本語部の教授様式は概ね日本式で6学年制を以てし、中には高等科以上を設けて居るも のもある。学科目は国語,修身,算術,地理,歴史,理科,体操,唱歌で,教科書は日本の国定教 科書に依る為め、伯国で生まれた児童に説明しても諒解されぬ事が多いという。葡語部は学科目等 すべて聖州教育令によって行なわれ、両部の授業は午前と午後に別けて行なわれている。

茲に注意すべきは日本人教師と伯人教師との教授法、児童訓育に対する理念、規律、訓練等が異な る為め往々にして午前一方の教師に受けた訓導を午後他方の教師により全然覆される様式に依り訓 練さるる為め遂に去就に迷わしめられ、ひいては日伯両語教師の反目を来す如き現象を度々見る事 があるし

<sup>(14)</sup> ブラジル時報 1920. 7.30日付けから同年8.13日付けに三回にわたって掲載された社説「児童教育 とは何ぞや」

<sup>(15)</sup> ブラジルにおける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルにおける日本人発展史』(下巻) 198頁

<sup>(16)</sup> この学校の経費はしかしながら、公認小学校となっても、その大部分を邦人側が負担しなければならなかった。経費の支出は植民地における主生産物であったコーヒーが採取できるようになって初めて解決し たのであり、公認小学校となるのは植民地形成後4,5年を経てからであったという。 (17) 伯剌西爾時報社編(1938)『伯剌西爾年鑑』 サンパウロ 108頁

20年代半ばには、外国語としての日本語を子弟に教えるべきだという主張が日伯新聞に見られた。日伯新聞のスタンスも伯主日従主義にたつものであるが、ブラジル時報紙が日本語による修身教育(徳育教育)を主張するのに対して、日伯新聞は、「日本教育と日本語教育を取り違えて」はならないという点から「日本語は一つの外国語」として教えることが肝要と主張している。また、日伯新聞ではこうしたスタンスから徳育教育よりも、子弟の専門学校以上の学校への進学の重要性も説かれている。

伯主日従主義による子弟教育というモデルは1920年代半ばまでかなり卓越したものであった。もちろんブラジル時報の説く「修身教育による」徳育教育=日本人教育、日伯新聞新による「外国語としての日本語教育」といった伯主日従主義の内容における多様性はあったものの、移民社会ではブラジル時報の主張が一般的な心の佇まいであった。

1920年代,ブラジル・ナショナリズムは具体的なかたちで移民一般,または集団地へと影響を与えることはなかったが,ナショナリズムは法案審議などの報道を通じて,一部エリート層(出先官憲,教育現場,新聞社など)の間では大きな懸念となりはじめていた。こうした動きは外部からの圧力に対して,固まりかけた子弟教育のモデルを揺るがすことになった。この動揺による「混乱」を懸念した日本政府の出先官憲・サンパウロ日本国総領事館は1925年にはじめて「子弟教育問題懇談会」を開催し、移民社会における子弟教育のあり方を討議する場を設けている。

当初 [20年代半ば頃] の,日本政府の日系子弟教育をめぐるスタンスは北米などの排日運動の経験,ブラジルのナショナリズムへの懸念から,伯主日従主義に徹したものだった。1925年7月19日コチア小学校新築校舎落成式の総領事代理原口七郎は「特に小学校の先生,我が忠君愛国主義は当伯国に於いては,教育すべきものにあらず。総て伯国を背景にした教育の出ず可きなり。宣しく伯国の法規に随いて教育するを要す」とこの立場から訓示を述べている。

この懇談会開催を契機にして、在伯同胞社会のなかに、子弟教育をめぐる中央機関が設置されていった。子弟教育の中央機関は1927年にサンパウロ市に「在伯日本人教育会」が設立され、1929年にはこの機関が社団法人「サンパウロ日本人学校父兄会」に改組され、各地に部会を設置することで、各植民地の「小学校」を中央機関に統合していった。そして、父兄

<sup>(18)</sup> この日伯新聞の主張は当時としては斬新な主張であったが、同胞社会では受け入れることは出来ないものであった。こうした主張を展開した知識人としては半田知雄やアンドウゼンパチなどがいる。アンドウは思想誌『文化』の中で同化論、永住論という立場から、日系二世への日本文化f伝承のための「外国人教育としての日本語教育」という主張を開陳している。アンドウのこの視点は当時の同胞社会一般には受け入れられなかったものの、戦後1958年に『二世とニッポン語問題』という小冊子を出版し、戦後のコロニア版日本語教科書製作運動に大きな影響を与えた。

<sup>(19)</sup> 日伯新聞 1925. 8. 7日付け社説「第二世教育の根本基調」

<sup>(20)</sup> 石原辰雄 (1979) 『コチア小学校の50年―ブラジル日系児童教育の実際 (1916-1966)』 サンパウロ [私家版] p25

会は1930年には定款の一部を改正し「ブラジル日本人教育普及会」へ, さらに1938年にはみたび「ブラジル日本人文教普及会」に改称・改組されている。

植民地形成とともに高揚した子弟教育に関する懸念は植民地での子弟教育機関(小学校)を創設させることになった。1920年代半ば(26年)現在,植民地の「小学校」数はサンパウロ総領事館管内30校,バウル―領事館管内31校,合計61校に達している。そして,その数は5年後の1931年には総数122校、収容生徒5千人に達している。

子弟教育をめぐる中央―地方組織の創設は散在する植民地がネットワークで結ばれ、それが総領事館に置かれた中央機関へと統合され、日本という国家と繋がったことを意味するものであったが、こうした植民地間のネットワークを補強し「在伯同胞社会」という想像のエスニック共同体(あるいは日本語共同体)や「在伯同胞」というエスニックアイデンティティの生成に大きな役割を果たしたのは邦字新聞を中心とするエスニック・メディアの整備と流通体制の確立であった。ブラジルの邦字新聞は1916年の週刊南米と日伯新聞の発行をもって開始され、その後様々な新聞が発行されている。主要新聞社は1932年当時、それぞれ自前

図表 3 在伯同胞社会における主要定期刊行物一覧(1933年5月現在)

定期刊行物名	発行	週刊/月刊	ページ数	備考
伯剌西爾時報	ブラジル時報社	週2回	12 <b>p</b>	購読料年30ミル
日伯新聞	日伯新聞社	週刊	8 p	年30ミル
聖州新報	聖州新報社	週2回	8 p	年30ミル
日本新聞	日本新聞社	週刊	6 p	年30ミル
アリアンサ時報	アリアンサ時報社	週刊	4 p	年12ミル
物産週報	日伯物産通信社	月刊	20 <b>p</b>	_
農業のブラジル	農業のブラジル社	月刊	100p	年30ミル
波紋	波紋社	月刊	100p	娯楽誌
ポプラール	リンス通信社	月刊	70 <b>p</b>	少年少女向娯楽
青空	サンパウロ父兄会	月刊	4 p	父兄会機関誌
若人	農業のブラジル社	月刊	_	スポーツ専門誌
力行の叫び	力行会聖市支部	月刊	19p	機関誌
更新	更新社	隔月刊	_	
角笛・おかぼ・新天地	アリアンサ時報社	月刊	-	_
家庭と健康	互生会	月刊	8 p	衛生関連雑誌
郷友	耕地通訳協会	月刊	50 <b>p</b>	衛生関連雑誌

<sup>[</sup>出典] サンパウロ人文科学研究所編『ブラジル日本移民・日系社会史年表』1996 76頁

<sup>(21)「</sup>ブラジル日本人教育普及会」は1937年に『日本語読本』全八巻とその教授用参考書八巻を編纂,発行した。この教科書はポルトガル語の翻訳をつけて州当局へ提出され認可を受けた,ブラジル初の日本語教科書であった。しかし,当時の軍国的色彩や国家主義的思想は認可を伴うものであったことと関連して,極力抑制されたものとなっており,当時の邦人社会からはあまり歓迎されなかった。

<sup>(22)</sup> この小学校は「何れも其の設立当初より充分の設備を有していたものでなく、寺子屋式のささやかなものが多く、その教師の如きも、これを本職とする者は極めて稀で、多くは当該集団地に於ける青年又は家長であり、教育放任を座視するに忍びずとして立った人々である」ブラジルに於ける日本人発展史編纂委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史 下巻』197頁

<sup>(23)</sup> この数字は1934年発行の『サンパウロ日本人小学校父兄会会報第二号』に掲載されているもの、換言すればその時点で存続していたものであり、実際にはもっと多くの「小学校」が創設されていたと思われる。 (24) 1933年5月当時、在伯同胞社会において発行されていた主要な定期刊行物を示したのが図表3である

の印刷設備を所有し、新聞印刷を行なっていた。38年には主要邦字新聞は4頁から8頁の日 刊となった。1933年当時の最大発行部数は8千部程度であったが、38年には日伯新聞1万9 千5百部,伯剌西爾時報1万7千部,聖州新報9千部,日本新聞5千部,アリアンサ時報 (37年にアラサツーバに移り、日伯共同新聞と改称)5千5百部、ノロエステ民報(34年に 北西民報と改称)4千5百部に達した。この当時の日系世帯数は約4万世帯と推計されてお り、邦字新聞が移民たちの間でいかに読まれていたかが看取されるだろう。輪湖俊午郎が 1939年に実施した「邦人の新聞並びに雑誌講読数」に関する調査では、調査対象者数11567 世帯に対して、邦字新聞購読世帯数10154、男子雑誌5967、婦人雑誌1168、子供雑誌1078とな っており、「新聞の如きは9割に達し、将に新聞の天下と言ふを得べき」普及率であった。 また輪湖は「さらに驚いたことは一萬五千家族,伯国在住年数平均十一年と言ふに拘らず, 伯国語の雑誌などは一冊もなく、新聞が僅かに百部内外であったが、大部分は都市生活者の インテリ層に限られていると言ふ貧弱さである。これでは伯国政府が心配し出す(日本人移 民不同化論)のも無理はない」と述べている。また、当時、サンパウロ市内だけでもサン・ ジョゼー,博友堂,日本堂という日本語印刷所も存在,10年代後半から生成されてきた日本 語共同体では30年代に、これらの印刷設備を利用して定期刊行物以外にもさまざまな出版物 が出版されるようになった。

日本とブラジルの国境を超えた刊行物を含む商品の流通体制は移民船貿易を通じて支えられていた。ブラジルには日本移民導入前から日本に本店を持つ商店が進出していたし、移民渡航後は移民自らが多くの商店を開業した。これらの商店には1919年開店の瀬木商店をはじめ、20年代から30年代初頭にかけて、中矢、遠藤、国井、羽瀬などの商店が開店し、移民船貿易は植民地での経済的安定や上昇をある程度達成した移民たちの需要に対応してきた。商品の中には数多くの日本書籍も含まれており、書籍輸入を専門とする業者も出現している。

日本書籍の中心的な購入者が各植民地に組織された青年会であった。『移民八十年史』は その様子を次のように記述している。

「青年会には修養部という部門が設けられていて夜学,日曜学校を主催するほか,青年雑誌(例えば大日本雄弁会講談社(現在の講談社の前身)の『雄辨』,評論雑誌『現代』,娯楽雑誌の『キング』,『講談倶楽部』,『婦人倶楽部』,少年少女向きの『少年倶楽部,少女倶楽部』などが青年会の

<sup>(25)</sup> 輪湖俊午郎 (1939) 『バウル―管内の邦人』

<sup>(26) 1934</sup>年以降には、34年「商工業の友」「学友」(以上雑誌),「ノロエステ民報」(新聞)、37年「地平線」「南十字星」「羅針盤」(以上雑誌)、38年「産業のブラジル」「文化」(雑誌)、39年「植民」、40年「自然」等が発行されている。

<sup>(27)</sup> 移民船貿易の概観に関しては,森(1998)「〈食〉をめぐる移民史(1) -戦前のコロノ・植民地時代 --」『人文研』No. 2 サンパウロ人文科学研究所編 48-70頁参照のこと。

経費で購入され(サンパウロの書籍輸入店から)会員間で回覧された。

日本雑誌の回覧によって、植民地の青年の読解力が進んだことは想像外のものがあった筈である。と同時に、これらの雑誌に網羅されている日本の風潮が、そのまま青年たちの情緒や指揮を形成するのに大きく与ったのであった。1930年代に入って、日本の"国粋主義"的思想と行動が高まり、軍の発言力が強くなって来ると、諸雑誌の内容もこれを反映迎合したものとなり、それが植民地の青年たちの思考を左右し縛り付けることになった」

以上のように、在外公館の主導による子弟教育をめぐる植民地間ネットワークの生成と邦字新聞や日本からの輸入書籍、邦人社会における出版物などを中核とするエスニック・メディアの整備(増加)と流通体制の確立を主要な条件としながら、ブラジルに「日本語」共同体が生成されていき、特に1930年代には、この構造を通じて、日本のナショナリズム、国粋主義的思想が植民地を席巻し、移民や農村青年たちの思考や行動、価値観などに大きなインパクトを与えるようになるのである。

## 1.3. 二つのナショナリズムと『国語』イデオロギーの台頭(1930年代)

既に述べたように、日本政府による渡航費補助(1924年)に、日本経済の疲弊、イタリア政府の移民禁止に伴うサンパウロ州のコーヒー産業における労働力不足などを背景に、1920年代半ば日本移民が急増し、30年代初頭にそのピークを迎え、33・34年当時、日本移民のサンパウロ州への外国人移民数に占める比率は4割を超えた。こうした大量の移民流入や先着移民の経済的な安定などを条件としながら、1930年代は植民地=地域日系共同体は全盛時代を謳歌することになった。

また、30年代は日本語教育分野のみならず、各地域に散在していた各植民地は在伯日本人文化協会や日伯産業組合中央会などの中央機関を通じてその頂点である在外公館に統合され、それを通じて日本(天皇)へとつながる構造の中に位置付けられていった。当初、週一回の発行であった邦字新聞は漸次発行回数を増やし、1938年には日伯、ブラジル時報、聖州新報の主要三紙は日刊となり、移民たちにさまざまな情報を伝え、移民の『心の拠り所』の一つとなっていった。これらの新聞は移民たちにブラジルの国内情報、移民消息、集団地事情、農産物の傾向や市況、日本語教育界の動向など幅広い情報を提供した。それに加えて、新聞は祖国日本の動向も盛んに伝え、特に満州事変以降の軍国主義的日本に関する一連の報道は異国にある移民たちの心情に強い影響を与えることになった。

そして、この心情は移民の子弟教育(日本語教育)へと具体的に跳ね返っていった。20年

<sup>(28)</sup> 移民八十年史編纂委員会編 前掲書(1991) 82頁

代までの植民地における子弟教育は伯主日従主義を基本とするものであったが、30年代初頭より、そのモデルは国粋主義的イデオロギーを基盤とする日主伯従主義、和魂伯才主義へと大きくシフトしていくことになった。この当時の状況を『移民70年史』は次のように記している。

「日本の秀れたものを子弟に継承させる方法は日語教育をおいてはないと信じ,世界無比の皇統連綿の神国,世界を導く選ばれたる民族,悠久の大義,八紘一宇,東亜共栄圏,絶対不敗の皇軍, (30) といったことを環境とは全く無縁な次元で子弟に注ぎ込む努力が続けられた」

「明治この方の国家至上主義教育を受け、天皇即国家、天皇は父、国民は子、世界に冠たる日本、という思想は移民たちが既に身につけて来たものであったが、日本が異常な事態に突入するとともに、移民たちは改めてそれを自分のことと感じて心情的な傾斜を深めたのであった」

日本臣民を生成するための教育あるいは「臣民」であることの確認のために、1930年代には植民地において、前山が天皇崇拝シンボリズムと呼ぶ儀礼コンプレックスが創造された。この天皇崇拝儀礼コンプレックスの中核的な場が「日本学校」に他ならなかった。前山はこの「日本学校」とそこで行われる天皇崇拝儀礼コンプレックスについて次のように記している。

「それ(日本学校)は今日のごとき単なる語学教育の場ではなかった。子供も、青年男女も、そして親たちもそこで真の「日本人」となり、真の「人間」となることが期待された。そこでの行事に参加しない日本人は集団の一員と見なされず、日本人とも見なされなかった。日本学校は日本人会によって運営され、そこには必ず「御真影」が安置され、教育勅語が備えられていた。日本学校は子弟教育の場であると同時に、日本人会の集会場であり、青年団・処女会の活動の中心であり、

<sup>(29)</sup> 勿論、少数派ではあったものの、子弟への日本志向教育を反対するものたちもあった。それは同化主義に基づくものであり「ブラジル生まれの子供はブラジル人」という認識から出発し、ブラジルの教育を尊重し、ブラジル社会へ同化させるのが先決とする考え方であった。アンドウゼンパチや半田知雄は1930年代の二世像に関していくつかのタイプを析出している。半田(1996)はこの当時の二世を、1)植民地に生活の根を張った、準二世や一世と同じ立場を取っている二世であって、日本語もよく出来、日本の思想に反発しない種類のもの。2)日本人の社会に生活している以上、日本人の話すこと考えることに接触的に反対はしないが、ブラジル人的気持ちを充分持っていて、ブラジル人たる義務感を失うまいとする種類の二世(ブラジルの教育も中学程度及びそれ以上のもの)3)二世として最も純粋なもので、ブラジル人としてのアイデンティティを持つことに努め、ブラジルを相国として生きようとし、「日本精神」に反発する者のグループ(大学生、大学卒インテリ)である。半田知雄(1996)『今なお旅路にありーある移民の随想』 太陽堂書店 144頁

<sup>(30)</sup> 移民70年史編さん委員会編 前掲書(1980) 77頁

<sup>(31)</sup> 移民70年史編さん委員会編 前掲書(1980) 77頁

<sup>(32)</sup> 前山によれば、天皇崇拝儀礼は「日本学校が氏神であり、祭社であった。天皇が御神体であった。経典は教育勅語であった。」という。前山隆(2001)『異文化接触とアイデンティティ―ブラジル社会と日系人―』 御茶ノ水書房 55頁

さらには産業組合の事務諸であったりした。新年の四方拝、紀元節、入植記念祭、天長節、卒業式などに際しては、生徒だけでなく、植民地の全員が参列して、皇居遥拝(「東方遥拝」とも言って、「日本遥拝」を意味した)、御真影への最敬礼、勅語奉読、君が代斉唱などの儀式が、大抵の行事に先行して行われた」

こうした天皇崇拝シンボリズムを通じて移民個人は植民地の日本人会—中央統括機関—在外 公館という象徴構造のなかに位置付けられ、日本の天皇へと直接に結びつけられていった。

20年代に日本人の徳目を継承させる徳育・修身教育の手段であった日本語は、30年代、特に後半になると、日本臣民/民族を構成する必須条件としての「国語」へとその意味を大きくシフトしていった。そして、このシフトには子弟教育中央機関に対する様々な補助(学校建設補助金、教師の派遣、奨学金など)を行なうことを通じて、日本という国家(の遠隔地ナショナリズム)もまた強く関わっていた。

30年代,日本語は「日本民族の本質」と同一なものとして認識され,国粋主義的な民族 (精神)観,国語観などが生み出されていくことになった。こうした国粋主義的な「国語」 観は1935年にサンパウロ市ピンニェイロス地区に暁星学園という実務学校を創立した岸本昂一の思想の中によく認められる。岸本は1947年という戦後の早い時期に出版した『南米の戦野に孤立して』という著書の中で、日本語教育や外国語学習などに関して自説を展開している。

岸本によると、「日語教育とは単に文字を教えるということだけではない。日本歴史をたて糸として生成発展して来た民族の精神建設をいう」。そして、岸本は続けて「日本語は日本人の血液を持つ者にとっての大地であり、太陽であり、水であり、空気であるのだ」「日本語の中には、民族の純粋至高なる脈博、流れて止むこと無き壮大雄渾なる歴史が呼吸しているのであって、言葉の響きの中に、文学の一句一節の中にも祖先の血管が脈々と波打って居り、その精神が沁み込んでいるのだ」と主張し、「国語」なしの海外発展は「民族の本質」を失って形骸だけを止めることになってしまうと結論づけ、日本民族は世界の果てにいっても、「国語」とともに永遠に行き続けていかねばならないと主張した。

岸本は国粋主義的な「国語」観を強くもっていたが、日本民族の子弟にとって外国語学習

<sup>(33)</sup> 前山前掲書(2001) 55頁

<sup>(34)</sup> 二世の教育の関する日本政府の干渉はブラジルにおける排日運動の材料に使われる怖れがあると危惧する意見もこの当時存在していた。安東義喬は「二世の教育をば日本の外務省が、出先官憲をして扱はせるということは表面のみならず又実質に於いても非常に向こうの反対を受ける所でありまして、所謂内政干渉とでも謂えば言はれる所であります」と語っている。また、日本政府の干渉は当時の二世インテリたちの、ブラジルナショナリズムの影響を受けたナショナルアイデンティティとの間に相克を起こし、いわゆる「菊花事件」を起こすことになった。

<sup>(35)</sup> 岸本昂一 (2002) 『南米の戦野に孤立して』 200頁

<sup>(36)</sup> 岸本 前掲書 (2002) 201頁

(この場合ポルトガル語)を不必要とは考えていなかった。逆に岸本は日本民族は積極的に外国語を学ばねばならないと主張している。その理由は「彼等を啓蒙し、強化し」そして「私たち自身を、そして日本を、世界的に押しひろげてゆく」ためであり、「人として必要な学問技術」だからである。こうした認識から岸本は日本民族精神建設に不可欠な「国語」と、実際的実用的な技術のために不可欠なポルトガル語の双方を子弟に教育するという立場を主張したのであった。

このような立場は、この当時、邦人社会の中で流布していたフォーク概念でいえば、『和魂伯才論』であり、それはちょうど20年代の伯主日従主義を逆転させた立場であったといえるだろう。岸本の、『国語』=民族精神、「ポルトガル語」=実用的機能という「和魂伯才論」は決して彼独自のものではなく、当時の移民たちのなかでかなり共通する、内部矛盾する子弟観であったといえるだろう。

もちろん、こうした移民の心情は日本ナショナリズムからの影響によってのみ形作られたものではなかった。30年代はまた、ブラジル・ナショナリズムの高揚した時代、盛んに外国人移民の同化政策が展開された時期であり、こうした二つのナショナリズムの〈狭間〉というポジションから立ち上がってきたものであったと解釈するのが的を得ている。

植民地が全盛期を迎えた30年代は,日本移民にとって受難の時代でもあった。ブラジルのナショナリズムは1920年代から徐々に台頭し,20年代には様々な外国人移民制限法が実施された。1923年の第一次排日運動から始まり1934年に「移民二分制限法」が国会で可決されるまでの時期は日本移民導入反対論が急速に高まった時期であった(すでに見たように,この時期が戦前移民の全盛期であった)1930年ナショナリゼーション政策を打ち出すゼツリオ・バルガスが革命で政権を奪取し,臨時大統領に就任した。その4年後バルガスは国内労働者や定着している外国人労働者の利害を守るという観点から大統領令19482号,いわゆる「移民二分制限法」によって,外国人移民の入国を制限する法案を憲法制定議会に提出している。

バルガス政権のナショナリズム政策に先だって、日本移民へ直接影響を与えた政策決定を 行ったのは日本移民の大半が居住していたサンパウロ州政府であった。それは主に教育領域 におけるナショナリゼーション政策ともいえるべきものであった。サンパウロ州政府は次の ような内容をもつ州教育令を公布した。(1) 外国語以外の科目はすべて教授すべし。

- (2)10歳未満は年齢の如何にかかわらず、国語文盲者に外国語を教授することを禁ず、
- (3)ポルトガル語及びブラジルの地理・歴史の教授は監督課より指定する時間数を以て, 生来のブラジル人ポルトガル人又は帰化人の有資格者により担任せらるべきこと,(4)外

<sup>(37) 1920</sup>年代から30年代にかけてのナショナリゼーション政策と日本移民の動向に関しては、三田千代子 (1995) や移民70年史に詳細な記述がある。三田千代子 (1995) 「I ブラジルの外国移民政策と日本移 民」『日本ブラジル交流史―日伯関係100年の回顧と展望』 日本ブラジル中央協会 93-116頁

国語の教授は検定試験合格者たること,(5)外国語の教授に使用する教科書は予め監督課に許可を得たものに限る。ブラジル国民静止の涵養に有害なる影響を与える教科書の使用を禁ず,(6)幼稚園及び育児所の学校担任者はブラジル人たる教員に限る。但し正確なるポルトガル語を話し得る外国人はその助手たることを得る。

もっともこの州教育令は、それほど大きな影響を植民地内の「小学校」に与えたわけでは なかった。まだ、この法令に外国語教師の資格試験受験、使用教科書の認定などを通じてあ る程度の対応が可能であったからである。

ナショナリゼーション政策が直接、移民の生活や子弟教育などに影響を与えるようになるのは、1937年11月のクーデターを経て、独裁政権を樹立したバルガス大統領による、中央集権的なエスタード・ノーボ体制が確立された後の、1938年以降のことであった。38年から39年にかけてはナショナリゼーション政策の立法が活発化し、外国人移民とその子弟に対する強硬な同化政策が実施されるようになった。その政策は移民の入国、居住、植民地形成、初等教育、商工業活動など移民の生活全般に及ぶものであったが、特に、日本移民にとって大きな痛手であったのは、初等教育活動の規制と出版物規制であった。

1938年8月,外国人入国法の施行細則が交付されたが、その第93条には、農村地帯においては14歳未満の者に対する外国語教授禁止(サンパウロ市及びサントス市は農村地帯ではなかったので11歳未満)のほか、①教師はブラジル人に制限、②教科書はすべてポルトガル語で記述されたもの、授業はすべてポルトガル語へ制限、③初等・中等科ではブラジルの地理・歴史教授の義務化などが細則として盛り込まれている。さらに、この翌年の1939年9月に、サンパウロ州政府は州内私立学校を対象に「サンパウロ州内学務官憲に対する訓令」を発布し、州民あるいは州内に居住する子どものブラジル化を推し進めようとした。この「訓令」の骨子は①教室内に非国家的意識を与える表象物の設置禁止、②国家・国旗の歌及び愛国的唱歌の授業義務化、③外国語授業の制限(1日二時間まで)、④私立学校の催し物のプログラムのなかに外国語や外国精神を高揚するが如き種目の挿入禁止からなるものであった。

こうした一連の外国人移民及びその子弟に対する同化政策は「本国的色彩を失うこと極めて急速なるもの」があったし、70年史によると、「法令に従う限り、子弟に日本語を教える

<sup>(38) 1937</sup>年に成立したバルガス政権下のナショナリゼーション政策では,ブラジル精神(Brasilidade)と国家主義の高揚,国民の形成とその統合が目的とされ,そのために一連の外国移民同化政策が採用された。さらに1940年には37年の政策をさらに進め,①外国人やその子弟の置かれた社会的地理的隔離状態の除去,②同系統の外国人のみの集団地創設禁止,③外国人集団地へのブラジル人家族入植促進,④ナショナリゼーション促進の環境整備,などを骨子とする一連の法令を発布している。

<sup>(39)</sup> ここでいう農村地帯というのは同法施行細則第275条において、連邦府・州の首都及び外国人入国港の境界内に含まれざる領土の全部と規定されている。したがってサンパウロ州では州都であるサンパウロ市と外国人入港地であるサントス市以外はすべて農村地帯ということになる。

<sup>(40) 70</sup>年史のよると, 1938年12月にはブラジル全土の外国語学校に対して閉鎖命令が下され, サンパウロ州内にあった日本語学校294校が閉鎖に追い込まれたと記述されている 前掲書75頁

<sup>(41)</sup> ブラジルにおける日本人発展史刊行会篇 前掲書 200~201頁

ことはこの時点でもはや不可能になった」という。サンパウロ州政府によると、外国人入国法施行細則のうち、農村地帯小学校に関しては、その条項のために、学校経営不能に陥り、当局より閉鎖命令を受けた学校が235学校に達し、そのうちの219校が日本人関係であったという。そして、1938年12月には、ブラジル全土の外国語学校に対する閉鎖命令が公布され、サンパウロ州内で294校、そしてブラジル全国では476校の日本(語)学校が閉鎖に追い込まれることになった。

また、ブラジルにおける日本語教育の中心的機関であった『ブラジル日本人教育普及会』は1938年10月に定款改正を行い「ブラジル日本人文教普及会」と改組され、従来の事業を拡大しようとする矢先、前述の外国人入国法実施細則が公布され、傘下の日本語学校の閉鎖という事態に直面したのに加えて、外国人団体取締法(第6条)により、外国の政府・団体又は外国に居住する個人からのいかなる名目の補助・寄付・援助などを受けることが禁止されたこともあって、その活動を停止せざるを得ない状況におい込まれた。

一方,1910年代後半から発行されてきた日本語新聞もまた,ナショナリゼーション政策の影響を受けることになった。1937年7月ブラジル政府は外国語新聞・雑誌取締規則を公布した。邦字新聞主要三紙が日刊になるのは1938年後半からで,この当時の植民地社会では新聞をはじめ文芸活動などが益々隆盛を極めていたが,1939年9月以降,第二次世界大戦へ拡大する様相が強くなると,記事検閲制一社説主要記事などのブラジル語訳添付一ブラジル語欄併設へと規制が厳格化されていき,1941年8月には外国語新聞発行禁止令が公布され,日本語新聞はついに約四半世紀に及ぶ活動の幕を閉じることになったのである。

以上のような、一連のプロセスを通じて、移民は自らの「国語」やその教育機関、報道機関を失うことになった。子弟を日本民族=臣民として育て上げることの困難さ、情報の欠如、日本民族として生きることの困難さ、こうしたファクターから日本移民の間では日本ないし帝国主義的拡張政策の結果、植民地化した土地への「帰国」への希望が急激に増加した。1939年のノロエステ、パウリスタ延長線「同胞現勢調査報告」によると当時の移民の85%帰国を希望しているように、二つの国家ナショナリズムの〈狭間〉において、戦中の暗い時代へと移行していくのである。

1941年12月7日(ブラジル時間)太平洋戦争が勃発し、翌年1月末にはリオデジャネイロで汎米外相会議が開催、ブラジルを含む10ヶ国は枢軸国との経済断交を決議、ブラジル政府はさらに1月29日対枢軸国との国交断絶を決定した。この前日にはすでに在リオ帝国大使館、在サンパウロ総領事館など在外公館は閉鎖され、一夜にして移民は在外公館を通じての日本

<sup>(42)</sup> 移民70年史編さん委員会篇前掲書 74-75頁 1938年11月には、国語による子弟教育が不可能なブラジルでは民族の発展はないとして、北支への進出のための資金支給をサンパウロ総領事館に嘆願するというエピソードも起こった。

とのつながりを断たれた。42年1月にはサンパウロ州政府保安局は敵性国民となった日・独 ・伊三国人に対して、以下のような取締令を公布告示している。

ブラジルの日・独・伊との国交断絶に当たり, 本州居住当該国民に対し, 以下の事項を禁止する

- 1. 如何なる者も当該国々語にて記されたものを頒布すること
- 2. 当該国々歌を唱し、あるいは演奏すること
- 3. 当該国独特の敬礼をなすこと
- 4. 多数集合の場あるいは公衆の場において、当該国々語を使用すること
- 5. 当該国政府要人の肖像を人の集まる処, あるいは公衆に展示すること
- 6. 保安局より発給の通行許可書 (Salvo Conduto) なくして,一地域から他地域に旅行すること
- 7. 私宅内といえども、私的祝祭の名義をもって集合すること
- 8. 公衆の場に於いて国際時局に関し、討論あるいは意見の交換をなすこと
- 9. 以前に正当な許可書を取得しているとも、武器を使用すること、また武器弾薬あるいは爆弾 製造に使用し得べきものを売買すること
- 10. 保安局に予告なくして, 転居すること
- 11. 自己保有の飛行機を使用すること
- 12. 保安局より許与される特別許可証なくして空路旅行すること

42年1月の対枢軸国との国交断絶により、「敵性国民」となった日本人移民たちは戦時中、 上記のような生活上の様々な制約を受けることになったが、こうした状況の中で、移民の唯 一のコミュニケーション手段であった日本語は家庭内のみで使用可能なものに制限されたの であった。

## 2. 戦後日系社会における日本語を巡る状況とその変化

## 2.1. 永住戦術の析出/戦後日系社会の再編-1950年代-

1930年代から1945年までの一連のナショナリゼーション政策と第二次世界大戦の開戦から終戦に至る時期は日本移民とその子弟にとって、大きな激動の時代であった。特に戦時中は「日本人」として生きることに「敵性国人」ゆえに様々な制約が課せられることになったが、その一方、日本移民の大半が従事していた農業部門は戦禍の外側にあったために好景気となり、この時期に多くの移民たちが財産を形成し、戦後における経済的社会的上昇の地歩を築くことができた。この財産形成、第二次世界大戦における日本敗戦による帰還すべき祖国の喪失感、そして外国人同化政策のなかで「ブラジル国民」として成長してきた二世の存在などの状況の変化が、それまでの日本移民の生活戦術を大きく転換させることになった。終戦

直後の在伯同胞社会に発生した「勝ち負け問題」を経て、日本移民のなかにブラジルへの永住という意識が醸成され、高められていった。

ブラジルへの永住をめぐる語りは集合的なレベルから個人のレベルまで数多く存在しているが、パウリスタ新聞社編『コロニア戦後十年史』(1956)では「日本語」能力の低下ないし喪失という側面から、永住(定住)に至る心理状況が以下のように語られている。

「…コロニアに定住の傾向が著しいのは、一つは過ぐる大戦の結末がもたらした現象といえるかも知れぬが、それよりも、コロニア自体が永住か帰国かの問題に当面して、何れかに決定せねばならぬ状態におかれたときに、あの戦争の結末がきて移民の永住を決定的ならしめた、という方が当っているであろう。というのは、錦衣帰郷を夢みて、子供の教育を怠っている間にも子女は成長した。たんに成長しただけではなく、ブラジル的な要素を吸収して、ブラジル的に成長した。親は老け込んだだけではなく、戦時中の緘口令も祟ったのか、漢字を忘れたのはもとより、ブラジル語を混ぜずに標準語のニッポン語もなかなか話せぬ状態となり、これではブラジル的な息子や娘を連れて、ブラジルぼけした人間が生存競争の激しい母国に帰ることもどうか、と内心は多くの移民が考えはじめた頃に戦争の結末がやってきた」

この言説では、自らが話す「ニッポン語」が日本の日本語と対比されて、こうした日本語話者ではブラジル化した子弟を伴って母国日本へ帰国しても日本では到底生存競争に勝てないと、自らのニッポン語を否定的に捉えられ、それが永住(定住)の動機とされている。少なくとも、終戦後から50年代前半の時期までは、後に見るような自らの話す「ニッポン語」を積極的に意味づけ、新たに析出されてくるアイデンティティを構成するシンボルの一つにまで昇華してはいなかった。

戦争直後から50年代前半の時期,日系社会は,多くの戦勝派一勝組団体や負組一認識派による時局認識運動の組織化など「勝負問題」をめぐる組織化を中核としながら,再生への道を歩みはじめた。そして,「勝負問題」と密接に関連したかたちで,日本語新聞が,復刊・創刊されていった。1946年10月にサンパウロ新聞が,そして同年中に南米時事,伯剌西爾時報も復刊され,さらに翌47年1月には「時局認識」を標榜したパウリスタ新聞が創刊され,日本語共同体も再生されていった。日本語新聞が創刊ないし復刊すると,その印刷設備などを利用するかたちで,勝組,負組を対象とする雑誌一たとえば「時代」,「光輝(のち輝

<sup>(43)</sup> 戦後期に大きな影響力をもった日伯毎日新聞は1949年1月創刊されている。1950年時点の日系社会における刊行物は1951年度版パウリスタ年鑑(パウリスタ新聞社)に掲載されている。それによれば、パウリスタ新聞、サンパウロ新聞、ブラジル中外新聞、昭和新聞、アサイ新報、よみもの、子供の友、ニュース、サンパウロ・マガジン、大地、養鶏生活、木陰、椰子樹、時代、ピラチニンガ会報、広野の星、進路学生会機関誌、暁の星、睦、ブラジルの自然、童話絵本、革新などがあった。

号)」,「断」など一や子供向け雑誌「子供の友」,一般雑誌「よみもの」(月刊),短詩型雑誌「椰子樹」(短歌),「木蔭」(俳句),農村向け雑誌「大地 (Terra)」などが次々に創刊され、日本語共同体は急速に復活されていった。

一方,1938年に停止した日本語教育は日本語共同体の再生よりも少し遅れて復活した。日本語新聞が戦後すぐに創刊(復刊)されたのに対して、なぜ日本語教育がなかなか再開されなかったのか。その事由は、伯国日本語学校連合会の機関誌『幾山河』によると、(1) 母国の地位転換によるコロニアとしての自重、(2) 時局をめぐるコロニア内部の対立、

(3)日語教育反対論の台頭,(4)非合法的再開に対する自粛という四つをあげ,特に最後の理由を主因としている。

外国語教育を規制した従来の、教育令は1947年11月の新教育令の施行によって緩和され、まだ制約は存在するものの、正規の手続きを踏めば日本語学校開設が可能となった。この法的規制緩和を受けて、1948年以降、日本語学校が「伯国公認日本語学校」として開校されはじめた。

「伯国公認日本語学校」は1954年7月の時点では、三十校近くに達した。公認日本語学校数の増加を条件にして1950年代半ばにはその連合会=統合組織創設の気運が生まれた。この連合会創設の発起人となったのは森根亀吉であり、森根の呼びかけにより、1954年7月に第1回サンパウロ州公認日語小学校連絡会議がサンパウロ市に開校していたドン・ペードロ2世日本語学校において開催された。『幾山河』によると、この連絡会議の開催は戦前、総領事館監督のもとに文教普及会が中核となって実施された日本語教育にかわって「戦後はコロニア自体の力によって日語教育を実施しなければならないという決意」のもとに開催されたものであった。そして、1955年1月には、サンパウロ市ドン・ペードロ2世日本語学校で、25校の経営者、教師などが参会し、聖州公認日語学校連合会創立総会(以下日学連と呼称する)が開催され、連合会が設置された。

50年代前半という時期は日系社会において発生した勝負けをめぐる対立が収束し、サンパウロ市創立400年祭に、ブラジル社会(市役所)から日系社会としての参加を要請されると

<sup>(44)</sup> 伯国日本語学校連合会編『幾山河 (全伯日語教育史)』1966 サンパウロ 111頁

<sup>(45) 1947</sup>年11月26日付け「サンパウロ州の教育に関する法令17698号」の第二章「私立学校令―指導と監督―」によると、小学校準備科、保育園、幼稚園、小学校(初等学校)、中学準備科、語学科、科学科の運営を行なうには教育局に登録を行なわねばならないと規定されている。その登録に必要な願書およびその願書とともに提出すべき書類に関しては第106条、第107条において規定されている

<sup>(46)</sup> 日本語学校公認は1947年11月発布のサンパウロ州教育令第17698号の規定によって行なわれる。この公認 手続きは伯国公認日本語学校連合会が行なっていた。公認手続きの基本は日語教師検定試験(毎年7月) に受かった教師が存在するかどうかであったようだ。

<sup>(47)</sup> 伯国日本語学校連合会 1966 115頁 この連絡会議での協議事項は(1)教授法発表(学習指導及び 訓育)(2)父兄との連絡(又は学校と家庭)(3)教師に対する待遇の問題(4)授業中の教師の態度 (5)教育令の研究(6)教育上の連絡機関設置の研(7)当局に対する公認学校の義務(8)学校行事 開催の件(9)学童誌刊行(10)感想文又は研究発表,であった。

いう外部からの「日系社会」の存在認知を受ける,ブラジル・ナショナリズムという「亡霊」から解放された時期に当っており,日系社会の再編が活発化していた時期であった。日系社会の中核的団体であるサンパウロ日本文化協会(現在のブラジル日本文化協会)は1955年に,400年祭日系協力委員会を母体として組織化され,翌56年には,サンパウロ日本文化協会内に,日系ブラジル人に対する日本文化の普及を目的とする日本文化普及会(日本語普及部をその下部組織として含む)が創立された。さらに,1964年には日学連と日本語教育界を二分する勢力となったブラジル日本語普及会が創立されている。

50年代における日本語教育の復活には、日本語教育理念の検討という問題が随伴し、日本語教育をめぐる教育理念に関する議論も1950年代半ば頃から活発化していった。この議論は同化論とブラジルへの永住戦術に基づきながら、二世たちを「伯主日従」主義に従って、いかに「優秀なる伯国市民」として養成していくかを目指していくかを巡って展開された。この議論は実は、日本人一世たちがブラジルへ永住することの意味や意義を、理想型としての二世像モデルを通じて了解する、自己集団のブラジル在住性の確認するための営為でもあった。

この議論を通じて、日本人、日本精神を醸成する手段としての「国語」教育モデルとともに、新たに「文化伝承」手段としての日本語教育モデルが析出されることになる。教育理念をめぐる議論の最大のイデオローグはアンドウ・ゼンパチであった。アンドウは1958年に『二世とニッポン語問題』という小冊子を自費出版し、そのなかで新たな二世像モデルと戦前の国家主義的な側面が払拭された「文化伝承」手段としての日本語(教育)モデルを唱えている。

「日系コロニアが二世との密接な協力の上に築かれてこそ、ニッポン民族がブラジルへ移住したことが意義のあるものとなりうるのだ。そして一世と二世とのつながりを密接にして、その協力を完全にするためには、何よりも必要なものはコトバである。しかもそのコトバは一世のもつすぐれた才能、技術、また一世の母国ニッポンのいい文化を二世を通じてブラジルに伝えるために、ニッポン語でなければならない。このように考える時、二世の立場はたんに、よいブラジル人であるというだけではすまされないものがある。二世はブラジルを母国とする立派なブラジレイロであるとともに、一世の気持を理解し、ニッポンの文化に深い関心をもつニッポン人の子どもであることに

<sup>(48)</sup> このブラジル日本語普及会は日学連が「勝組」系団体とすれば、どちらかと言えば「負組」系日本語教師の組織であった。ブラジル日本語普及会は1978年に文化協会日本文化普及会と合併して、日伯文化連盟(Aliança Cultural Brasil-Japāo)が創立された。この組織は対ブラジルへの日本文化普及を目的とするものでった。

よって、二世という特殊な立場が、かがやかしい社会的存在となるのである」

アンドウの,この二世モデルと文化伝承手段としての日本語(教育)モデルは,のちにアンドウ自身がリーダーとなった日本語教育会議やそこから派生した日系社会独自のコロニア語日本語教科書編纂事業を支える(意味づける)理念となっている。

しかしながら、同化と永住主義を条件とする伯主日従主義による日系子弟教育(理念)モデル、文化伝承手段としての日本語モデルは当時の日系社会において卓越するものではあったが、決して唯一のモデルというわけではなかった。この当時、少数ながら、同化を基本的な立場とした日本語(教育)不要論が存在していた。この日本語(教育)不要論は「日本語有害論」と「児童の負担過重論」とに大別することができる。前者はブラジル社会への完全な同化を通じての(高学歴取得による)社会的経済的な上昇にとって、日本語習得はポルトガル語習得を遅らせる(鈍らせる)ものであり、ブラジル人としての二世層の、ブラジル社会での活躍にとって有害なものであると主張するものである。一方、後者はブラジル社会に進出を遂げる二世にとって完全なポルトガル語習得とそれを通じての高学歴取得が肝要であるが、その過程において日本語を習得させようとするのは二世にかなり大きな負担を強いることになるという主張であった。しかしながら、こうした日本語不要論は当時の日系社会においては同化主義的な思潮が強固であったにもかかわらず、受け入れられることはほとんどなかった。

# 2.2. 〈コロニア〉アイデンティティの構築と日系知識人による『コロニア』語の発見 (1950年代半ば~)

祖国喪失感,自らの話す「日本語」と日本の日本語との差異などは祖国日本への帰還を否定するファクターとして機能したが、50年代前半にはまだ、戦前の「在伯同胞社会」や「在伯邦人」といった自己同一化(アイデンティティ)に代わる新たなアイデンティティやそのシンボルなどは析出されてはいなかった。

ブラジルへの永住/在住を条件とする,「ブラジルの日本人」という,新たなアイデンティティが析出され始めるのは50年代後半から60年代前半にかけての頃であった。この時期,自らの〈名乗り〉として「コロニア」「コロニア人」という呼称が選択され,この呼称を通じて「ブラジルの日本人」という自己が主張されるようになった。「コロニア」という言葉はこの新しい自己規定を表象するために、新たに創造されたことばではなく、地域的な日本人共同体を指示するポルトガル語をカタカナ表記によって利用してきたものであるが、それ

<sup>(49)</sup> アンドウゼンパチ『二世とニッポン語問題』(私家版) 1958

に新たな意味を付与し、エスニック・シンボルとして選択し、「ブラジルの日本人」という自己を表象するために利用したものであった。「コロニア」というボルトガル語起源の言葉について、パウリスタ新聞社編『コロニア五十年の歩み』(1958)では次のように述べられている。

「題名についた「コロニア」という言葉は、コロニアには関係のない読者には耳慣れない字句かもしれないが、実はこのコロニアという言葉そのものが、われわれ日系社会で生活するものの姿をあらわしている。『在伯日本人』といい、『在留民』といい、或いは『在伯同胞』という使い古された言葉はすでにブラジルの日系人の実態とは程遠いものになってしまった。戦後何かの機会に使われはじめた「コロニア」という言葉は、それこそコロニア特有のもろもろのニュアンスを含んで、今ではちょっと訳語のない言葉となってしまった。直訳すれば「日本人とその子孫が形成し営んでいる社会」と言えるのかも知れないが、コロニアという語は、その本来の語意からすら離れて、いまでは訳しようもないものである

日系人の,この新しい〈名乗り〉が析出される上で重要な状況の変化は,戦時中の好景気による農業部門での財産形成,「ブラジル人として成長を遂げた」子供の存在,第二次世界大戦における日本の敗戦による祖国喪失感などからブラジルへの永住という新しい生活戦術が析出されたことである。

ブラジルへの永住戦術の析出に際して、重要な契機となった一つのファクターは戦災同胞 救援活動であった。前山によれば、この戦災同胞救援活動が担った意味はまず第一に、この 運動は日系社会に起こった勝ち・負け派閥闘争に終止符をうち、すべての日系人を一つの調和をもち、統合された構造に再編成する契機となったこと、第二に最終的に移民とその子孫 たちが出自社会日本への帰属心を捨て、日本人アイデンティティを改編する契機を与えたこと、であったと解釈されている。前述のファクターやこの運動を通じて、日本人移民間に「ブラジルへの永住」という戦術が明確に析出され、その結果として、戦前の在伯同胞社会、在伯邦人社会というアイデンティティから「正規のブラジルの構成メンバー」である「コロニア人」「コロニア」という新しいアイデンティティが構築されることになったのである。この新しいアイデンティフィケーションのプロセスは一方において自らを「日本の日本人」と自らを差異化しつつ、他方において「人種」的にブラジル人一般とも差異化をはかろうと

<sup>(50)</sup> パウリスタ新聞社編『コロニア五十年の歩み』序文 1958 サンパウロ

<sup>(51)</sup> この名乗りと「ブラジル社会の正規のメンバー」という自己認識の醸成にあたって、サンパウロ市役所からのサンパウロ市創立400年祭への日系人の参加要請も大きな契機となっている。この外部からの日系社会の認知は日系人にとって大きな自信回復の契機であったことは間違いない。

する二重の差異化の過程であり、その結果、自らを「ブラジル社会の正規のメンバーとしての日本人|「ブラジルの日本人|として規定、位置付けていこうとするものであった。

50年代末から60年代初頭における日系人を巡る状況の変化としてさらに指摘しなければならないのは、ブラジルの国家観や国民観がこの時期に大きく転換したことである。1950年代前半までは、戦前からのナショナリズムとそれに基づく「混血」を通じての同化主義的な国家・国民観が卓越していたが、こうした国家観は、多くの研究者が指摘するように、60年代から文化多元主義的な国家観、あるいは「多様性の統合」という国家観へと大きく変貌を遂げた。前山はこうしたファクターを背景に、自らの日系性から遠ざかっていた日系二世たちが自らのオリジンへと回帰するようになったと表現しているが、こうした国造りのパラダイムの転換も「ブラジルの日本人」という人種的民族的なアイデンティティ創出に強く関わっていたといえるだろう。

「コロニア」「コロニア人」アイデンティティは言語領域においては、自らが日常生活の中で話す言葉、即ち、それまで「ポルトガル語交じりの日本語」「日伯混成語」と呼ばれてきた生活言語をめぐって、それに新たなレッテル=「コロニア語」を貼り、「日本の日本語」から自らの「日本語」とを差異化し、それへの自己同一化というプロセスを通じて立ち上げられた。日系知識人やジャーナリストらによる、「コロニア語」に関する論考が出現するようになるのは1950年代半ば頃からで、例えば、1956年にアンドウゼンパチは自らが主宰する雑誌『エスペランサ』第3号に「コロニア語」と題する論考を、また同年日系歴史家佐藤常蔵は著書『ブラジルの風味』のなかに「コロニア語の解剖」という論考をそれぞれ発表している。その後、数多くの「コロニア語」を巡る論考が文学雑誌、新聞などを中心に発表されるようになり、知識人たちは自らの話す日本語の特徴、その現状や将来などに関して活発な議論を展開していった。こうした論考、議論を通じて、コロニア知識人たちによって、

<sup>(52)</sup> この新たなアイデンティティ析出のブラジル側ファクターをみると,ブラジルの国家観が同化に基づく 国民国家の構築から,多文化主義に基づく国家の建設へ50年代にドラスティックに変化したことが挙げら れるだろう。

<sup>(53)</sup> この時期における「コロニア語」に関して言及している主要な論考には次のようなものがある 1951年アンドウゼンパチ,半田知雄,山城ジョゼー,三澤哲明,古谷雅之,野上修二「二世と日本語の問題(座談会)」『時代』13号

<sup>1951</sup>年木村義臣, 鈴木悌一, 古野菊生, 斎藤廣志, 増田秀一「コロニアの日本語 (座談会)」『時代』14号 1952年半田知雄「ブラジルにおける日本語の運命」『時代』15号

<sup>1956</sup>年アンドウゼンパチ「コロニア語」『エスペランサ』 3号

<sup>1956</sup>年 佐藤常蔵 「コロニア語の解剖」『ブラジルの風味』 東京

<sup>1958</sup>年アンドウゼンパチ『二世とニッポン語問題』 自家版

<sup>1966</sup>年アンドウゼンパチ「コロニアにおける日本語の運命」『コロニア文学』 2号

<sup>1970</sup>年 半田知雄,鈴木悌一,野尻アントニオ,鈴木正威「伝承に耐え得る日本語「コロニア日本語」の現状と将来」『コロニア文学』12号

<sup>1972</sup>年 「日本語会話に取り入れられたポルトガル語」『コロニア文学』17号

「コロニア語」が発見されていったのである。

コロニア知識人の中で、「コロニア語』に関して最も網羅的体系的な記述分析を行ってい るのは半田知雄である。半田は「ブラジルにおける日本語の運命」という土曜会機関誌『時 代』に発表した論考の中で,ブラジルにおける日本語を「何よりもまず,労働移民の使用す るコトバ」と規定し、そののちに「移民の生活とコトバ」「生活様式の変化とコトバの単純 化 | 「コトバの単純化における方言の影響」「階級の一時的消滅とコトバの単純化」「生活と 言語感覚の関係 | 「日本語に対する刺激の不足 | 「階級,層,圏のコトバ」 「ブラジル語の日 本語化」といった側面から、自らが所属する集団の言語=コロニア語の特徴について詳細に 論じている。半田の「コロニア語」論を詳細に見ることはできないものの,いくつかの中心 的な特質は、次のように整理することができる。即ち、(1)生活文化の差異から日本的な ものと「赴きを異にする」ものからブラジル語が日本語を駆逐して用いられるようになる (2) 生活が変化し、自然的社会的環境が変化すると、それに適合した名称がブラジル語か ら借用される。(3) 自然的環境の差,即ち,おおらかなブラジルの自然,変化の少ない気 候なども影響して,精神生活が単純なものとなり,こまかい言葉のニュアンスが失われてい く. ( 4 ) 標準語がつねに言語の本流として全国民に教えられている日本と違って, ブラジ ルにはコトバのよりどころがなく、まず一般に通じない方言が捨て去られ、ついでむずかし い日本語の名称がつかわれなくなる(5)移民社会の過去においては生活様式の単純化,経 済的水準の同一化から階級や身分関係を表すコトバがはぶかれ、或はそれらをあまり強くひ びかせない他のコトバ、日本語或はブラジル語に代えられていく,(6)時が経過するにつ れて、ブラジル語を混ぜた方が自然であり、親しみを感じるようになる。…ブラジル語がま じると共に敬語はほとんど捨てられていく。否、敬語のつかい方のややこしさのために、ブ ラジル語が代用されるのだとも云える。( 7 ) ブラジルの生活や文化現象を日本語でとらえ るとぼやけるが、ブラジル語でとらえると急に生き生きとしたイメージが生まれる。鍬と云 うよりエンシャーダのほうがはっきりするし, 豆よりもフェイジョン, おいわいよりもフェ スタという具合, (8) 移民社会の経済的発展と地方的な特色によって, 階級や層や地方的 特色のある社会圏が生まれるようになると,ブラジル語の混入の割合も異なってくるし,そ れぞれのグループなりサークルなりに通用する日本語を話すようになる。その方向は一般的 にはブラジル語の方への傾斜である。(9)日常の日本語会話にブラジル語がまじるから日 本語がわすれられて逆にブラジル語が上手になるかといえば決してそうではなく、ブラジル・

<sup>(54)</sup> ブラジルの「コロニア語」に関して、日本国内において日本人によって言及された、ごく初期の論考に 産婦人科医太田典礼による「ブラジル邦人の言語生活」(1959) がある。太田は自身の日系社会における生 活体験をもとに、ブラジル日系社会の言語生活を紹介している。太田はまた戦前、戦後におけり日本語教 育事情を概観し、移民先で日本語が云々されるのは一世が存在している間だけのことで、いずれは消滅し ていく運命にあると感想を述べている。

語を日本語化する。

また、戦後、ブラジル日系社会を代表する知識人の一人であったアンドウゼンパチは「コロニア語」に関して、次のように記している。

「…こんな明治大正的なコロニヤに一つ、母国ニッポンをしりめにかけて、すばらしく進歩しているものがあるのに気付いているものは少ない。それはコロニヤのニッポン語である。コロニヤのニッポン語はくずれているとか、ガラがわるいとかいうが、必ずしもそうとばかりはいえない。

コロニアをつくっているものは、みんな、同じように移民としてきたもので、目ウエだ目下だのというややこしい身分カンケイがなかった。だからそんなところでは、バカ=テイネイな言葉や相手をみさげたようなコトバはきえていって、みんな平等(ビョウドウ)の立場で話ができるから、しぜんデモクラチコなものになる。大いに民主化したというニッポンで、民主化の根本になるコトバづかいが、いっこうデモクラチコでなく、あいかわらず、明治、大正時代のままで、目上のものには、バカ=テイネイで、目下のものにはオウヘイなコトバがつかわれているのは、ニッポンの民主化が、まだ ほんものでないしょうこだ」(アンドウゼンパチ『コロニヤ語』)

「…もともと同義語である母国と祖国という語に、このようなちがった概念を持たせた使い方は、まだ、いっぱん二世の間には普及していないが、二世にとって、ブラジルは生まれ育った母国、日本は両親や祖先の国、すなわち祖国という考え方は面白い。このような誤解も、ひっきょう、ある必要から生まれたもので、いちがいに、一笑して葬り去るのはどうかと思う。コロニアの日本語は日本のそれとちがってもいい。それが必然的な言葉の運命というものなのだ」(アンドウゼンパチ「コロニア評論 コロニアにおける日本語の運命」)

アンドウの第一の言説は「コロニア語 (日本語)」の特徴の一つである敬語,丁寧語,謙譲語表現の欠如 (ないし脆弱化)を,移民社会が平等な民主化した社会であることと関連づけ,しかもそれをニッポン社会と対比することで,ニッポン社会よりも有利なポジションに自ら (コロニア社会)を位置付けたものであり,第二は日本のコンテキストでは同義語である母国と祖国という語彙に,新たな意味を付与し利用するということがまさにコロニアの日本語であり,「コロニアの日本語」は日本の日本語と「違ってもいい」のであると主張するものである。以上のように半田にしろ,アンドウにしろ,両者は「コロニア語」と日本の日本語との対比を通じて (コロニア語の発見を通じて),自らの集団の独自性,あるいは日本の日本人との差異化を共通の内容とするものであった。

<sup>(55)</sup> 半田知雄「ブラジルにおける日本語の運命」土曜会編『時代』7頁~21頁

<sup>(56)</sup> アンドウゼンパチ「コロニア語」『エスペランサ』 3号 1956年

半田やアンドウ以外の、コロニア知識人たちもまた、「コロニア語」を別のやり方で「発見」していく。それらはたとえば、バタタ (Batata)、ミーリョ (Milho)、エンシャーダ (Enxada)、ムダンサ (Mudança) などの語彙は日本語の同義語が存在するにもかかわらず、ポルトガル語から借用され続けていることの意味、あるいは翻訳不可能性を問題にするという点で共通している。

例えば、ブラジル日系人の間で頻繁に使われるポルトガル語にムダンサがある。ムダンサは日本語に翻訳すれば「引越し、移転」などとなろうが、ムダンサは日本語に同義語があるにもかかわらず、ブラジル日系人はこの借用語を使い続けている。何故、ブラジル日系人間で、日本語に同義語があるにもかかわらず、ムダンサという借用語が使われつづけているのか。コロニアの知識人たちは、この意味を解釈していくのである。

ムダンサに関しては多くの記述がなされてきたし、このコトバは川柳のテーマなどにも頻 繁に取り上げられている。

例えば、白雲堂というペンネームで「百姓とムダンサ」という投稿文が三回にわたって、1949年3月の日伯毎日新聞に連載されているが、白雲堂によるムダンサの記述の一部を引用したのが次の文章である。

「カミニョン(トラック)の上に家具一切、コルション(マットレス)から空き箱、エンシャーダ(鍬)は勿論、犬猫、ニワトリまでつんで、その上には一張羅を着飾った子供たちが並び、途中のベントウまで用意して住みなれた村をあとに『それでは皆さん長いことお世話になりましたばい。さようなら』『お互い様だったよ。おいらもすぐにあとから行くけんな、元気でやってくんろ』ー 寸涙っぽい場面を見せるが、カミニョンが動き出してしまうと、『風と共にさりぬ』で悲しいことは、いっぺんに吹き飛んでしまう。上に乗っている子供たちはカミニョンに乗っていること、そのものがうれしいのである』

また、1929年の『農業のブラジル』11月号の川柳コーナーではムダンサがテーマの一つとされ、そこには次のような川柳が掲載されている。

ムダンサの数をかぞへて年をしり ムダンサの数自慢して古参額 ムダンサをやめた御陰で土地が買へ ムダンサの娘ばかりに晴着着せ ムダンサの度に味噌桶もてあまし 暦の佳い日にムダンサ雨が降り

この当時の日本人移民の行動は短期的な出稼ぎ戦術は中長期的な出稼ぎ戦術に変化してい

<sup>(57)</sup> 白雲堂「百姓とムダンサ」1949年3月11日~4月7日付け日伯毎日新聞随時連載,3月11日付け

たが、「錦衣帰国」のための金儲けという目的を捨て去ったわけではなかった。移民たちは 少しでも賃金,労働条件がよい所に移動したし,利益の上がる生産物を求めての移動も繰り 返していくことになる。ムダンサは1920年代以降に隆盛を極める「植民地」(ムラ)から少 しでも条件の良い場所へと移動をすることであり、大いなる期待に胸を膨らませた、移民の 「ハレ」の日の行事であった。ムダンサには新しい耕地での幸運(金儲け)を期待して,大 安吉日が選ばれ,娘や妻はこの「ハレ」の日の行事のために晴着を作り(あるいは縫い)そ れを着ての移動であった。すでにこの当時は、初期移民ではブラジル生活も長くなり、当時 の新来移民は「構成」家族ではない「本物の家族」構成による移住をおこなっており、多く の家財道具(財産)や生活必需品(味噌樽)などがムダンサのたびに大きな問題ともなった。 繰り返されたムダンサがブラジルでの初期移民の人生の時間の一つのメルクマールとなり、 ムダンサばかりをして結局金が儲からなかったという後悔の念などもムダンサをめぐる心情 を後に醸成するようになる。こうした植民地時代の、移民の集合的体験や心情をムダンサと いう、ポルトガル語からの借用語は背負わされて、使用されているのであり、この意味で日 本語への翻訳、日本語(引っ越し)での代替は不可能であるとコロニア知識人たちには認識 されたのである。同様の解釈はムダンサばかりではなく、コジーニャ (cozinha)、メーザ (mesa), ミーリョ (mirho) などにおいてもなされている。例えば, 半田は「コジーニャ をお勝手というと日本臭がつよくなってブラジル生活があらわれにくいし、テーブルという よりメーザの方が目に見えるようだ」と記しているし、鈴木信男も1965年4月7日付けパウ リスタ新聞において「ミーリョか玉蜀黍か」という論考を発表し、ミーリョという語句に含 まれる移民としての独自の心情の存在から,ミーリョは玉蜀黍には代替不可能であると主張 している。

社会言語学者比嘉正範は「コロニア語」におけるポルトガル語からの借用を、日本語に対応概念がないために必要な外来語と、対応概念があるのに使われる言語の効率から云えば不必要な外来語とに二分している。そして、比嘉は後者に関して、仲間意識という心理的な必要性のために借用が起こっているのではないかと推測している。日本語に対応概念があるにもかかわらずに日本語に置きかえられないポルトガル語にはすでに述べてきたように、ミーリョ、ムダンサ、エンシャーダといった語彙のほかに、オニブス(Onibus:バス)、ポン(Pāo:パン)、カフェー(Café:コーヒー)、バタタ(Batata:じゃがいも)、アルモッソ(Almoço:昼食)、ジャンタ(Janta(r):夕食)、トマテ(Tomate:トマト)、ケージョ(Queijo:チーズ)、メトロ(Metrô:地下鉄)、コジーニャ(Cozinha:台所)、カーマ

<sup>(58)</sup> 半田知雄「ブラジル日系社会における日本語の問題(2)」『言語生活』347号。1980年11月 58頁(59) 比嘉正範「ブラジルにおける日本人移住者の言語適応」筑波大学『ラテンアメリカ研究』4号 1982 153~179ページ

(Cama:ベッド),など多くの生活用語があるという。また鈴木英夫はブラジルの日本語を「コロニア共通語」と「コロニア方言」とに区別することを提起している。鈴木は、日系人がどうしても日本の日本語には翻訳(代替)できないと感じる語彙のはいった「コロニア語」を「共通語」、日系人のなかには不必要だと感じる語彙の入ったものを「方言」と呼んでいる。鈴木の場合、ポルトガル語からの借用語だけを問題にしているのではなく、日系社会独自の語彙・語法(たとえば、養国、地権、同県、同航、着伯、出聖、直来、配耕、転耕、退耕など)も含めて考察の対象にしているのだが、鈴木の二分法によれば、これまで挙げてきたミーリョ、ムダンサ、オニブスなどは日系社会独自と共に語彙「コロニア共通語」の語彙ということにある。

コロニア知識人たちにとって、こうした区分はどうでもよいことであるのだが、彼等は鈴木のいう「コロニア共通語」というものを考察(体系的なものではないが)の対象にすえ、「コロニア共通語」の背後にブラジルという異質な文化・社会構造との、様々な交渉の中から醸成されてきた心情や集合的な記憶や歴史的体験などの独自性とそれゆえの翻訳不可能性を問題にしながら、自ら(の集団)を日本の日本語から派生したが、それとは『異なる言葉』を話す集団(あるいは「コロニア」「コロニア人」というシンボル)と自己同一化(Identification)し、言語的なアイデンティティを析出してきたのである。

2.3. コロニア語によるエスニック日本語教育運動とエスニック文学運動(1960年代~70年代初頭)

#### 2.3.1. エスニック日本語教育運動

ブラジルへの永住を条件として析出された「コロニア」アイデンティティは言語領域においては、生活言語としての「ポルトガル語交じりの日本語」に『コロニア語(コロニア日本語)』というレッテルを貼り、日本の日本語との対比を通じて「ブラジルの日本人」集団の言語として、日本の日本語から自らを切り離していくというプロセス(営為)であった。こうして、ブラジルにおいて「コロニア語」が発見されたのであるが、自集団のアイデンティティ=「ブラジルの日本人」のシンボルとしての「コロニア語」は言説のレベルを超えて、ブラジル日系社会の日本語教育の中に取り込まれていった。換言すれば、この時期の日本語教育は実はコロニア語による「エスニック日本語教育」であり、日系ブラジル人(「エスニック日本人」)というべき主体を創造するものであった。あるいは、生活言語(及び記述言

<sup>(60) 1980</sup>年にはブラジル日系人の短歌運動の集大成として『コロニア万葉集』が出版されているが、この書の317頁から322頁にかけて、掲載短歌に用いられているボルトガル語の語彙を「コロニア慣用語註解」として、掲載している。ここに掲載してあるボルトガル語からの借用語は日系ブラジル人が日常生活のなかで用いる主要なボルトガル語語彙とみなしてもそう間違いではあるまい。コロニア万葉集刊行委員会編『コロニア万葉集』1980 サンパウロ

語)としての『コロニア語』と日本語の一体化とも捉えることができるだろう。

戦後日系社会における日本語教科書編集刊行運動はアンドウゼンパチの提唱によって1958 年に創設された「日本語教育会議」における協議に開始される。しかし、日本語教育会議に おける編集刊行作業は組織の脆弱さや経済面で挫折、中断された。その後、1959年(5月) に、日本の帝国書院社長の来伯と協力方の申し出により再開され、 日伯文化普及会の中に 「日本語教科書刊行委員会」(委員長山本喜誉司)(以下,刊行委員会と略す)が組織され, 役員や編集委員が決定され、1959年11月からサンパウロ日本文化協会図書館内に事務所を置 き、編集事業を開始、1961年4月末に全八巻の編集を完了した。そして発行元の日伯文化普 及会は1963年、第一期日語教科書全八巻に対する認可を、サンパウロ州学務局に申請、認可 を受けた。

刊行委員会は「日本語教科書刊行会の状況」というパンフレットを1959年に配布している。 このパンフレットによれば、教科書発行の基本的理念は文化伝承モデルに基づいたもので、 アンドウの影響を強くうけたものとなっている。また、この教科書は「日系児童は純粋のブ ラジル人であり,ブラジルの栄光をになう運命のもとにおかれて」おり,日本人育成のため の教科書は適切ではなく、学校での教科書として用いることは法的に禁止されているため 「その欠陥を補うとともにブラジルの国情と、コロニアの実情に即した教科書」でかつ「外 国語教科書として学務局の認可を得たもの | を目指すとされている。教科書の中心思想とし ては,「ブラジルの国民性の上にたって, コロニア独自の精神をつちかい, ブラジルの繁栄 のために挺身する人物」を育てることを目的としており、このために「童話、伝記など日本 人の独自な行動を強調したものはさけ」「概念化されたいわゆる日本精神」は排除されたも のとなっているのが特徴である。

こうした目的のために、内容は「ブラジル(コロニアを含む)、日本及び世界に教材を求

<sup>(61)</sup> 日本語教科書の編集及び出版費用に関しては帝国書院が引き受け、刊行は日伯文化普及会の名によって 行なうことになった。また、コロニアの総意に叶うものを作るために各邦字新聞社の編集長、各地方の教 育界代表者、書籍商組合代表者を委員に推薦して協力を求めた。

<sup>(62)</sup> 編集委員は移民文学者武本由夫(専任編集委員 ) をはじめ、半田知雄、下石一郎、永田泰三、佐藤常 蔵,アンドウゼンパチ (在日本),宮尾進,須貝富美子,横山トミ子などであった。 (63) 外国語の教授に使用する教科書も1947年11月26日「サンパウロ州の教育に関する法令17698号」の第112

条から第115条において、規制されている。

<sup>(64)</sup> パンフの日語教育の必要性に関する箇所を要約的に示すと次のようになる。「わたしたちのコロニアを 栄えさせるためには、経済的にも、文化的にも一世二世三世がしっかりと結ばれ、互いに力を合わせるこ とが緊要であるが、協力は理解し合うことから始まり、理解はコトバがよく通じあう所に生れる。ここに 日本語を二世三世に学ばせる第一の理由がある。日系子弟は将来東洋文化と西欧文化とをおりまぜて、ブ ラジル文化の開花に力をつくす有力分子でありたいと思うが、それには日本のすぐれた文化と技能を充分 に吸収してもらわなければならない。その第一歩は日本語習得からである」

<sup>(65)</sup> 教科書自体はサンパウロ州学務局の認可を受けて公認となったものの、日本語教師は資格をもたない非 合法教師が圧倒的に多かった。日本語教師としての資格はサンパウロ州の場合、検定試験に合格すること が必要であるが,検定試験に合格した教師は全体の18%程度にすぎず。8割以上が非合法的教師であった。

<sup>(66)</sup> 日本語教科書刊行委員会「日本語教科書刊行会の状況」伯国日語学校連合会編『幾山河』 1966 サン パウロ 73頁~80頁

め,童話,伝記,児童作品,文芸,社会,科学その他あらゆる分野」を含むものとし,特に「ブラジルの歴史的人物の業績を取り入れ」たり,「ブラジルへの愛情,日系人としての自覚と正しい誇りをもたせたいという意図からブラジルへの移住,コロニアの歴史なども入れて」あるのが特徴となっている。また,この教科書では「既にコロニア日本語化していると思われるブラジル語は低学年に限りそのままかたかなで入れ」られているのも特徴である。こうした事例として,『日本語(5)』に掲載されている「ぼくたちの村 ー パイネイラの下で」(29頁~33頁)を引用しておこう。

「ほくたちの一村の一入り口に、大きな一<u>パイネイラ</u>が あります。この <u>パイネイラ</u>の 下に立つと、村を 見わたす ことが できます。

ゆるい 波がたの おかが, いくつも 重なり合って 遠くまで つづいて います。

だいたい, カフェザルや パストですが, ざっ作地も あちこちに あります。

ところどころに、赤い かわら屋根の 家が 見えます。村の 中ほどに 見える 大きな たて物は、学校と 会かんと 組合の そうこです。

今, 西の 方で けむりの 上がって いるのは れんが工場です。北がわの <u>マット</u>の そばには、せいざい所も 見えています。

この 村は、四十年前 七家族の 日本人が 作ったのです。

その ころ, この へんは マットでした。

村を作った。人たちは、道をひらきながらマットの中を進んでいったのです。

木の 下に たてた 小屋に 住み, 朝から ばんまで 命がけで はたらきました。

木を 切りたおして やき、土を ほりおこし、畑に して いったのです。

年よりや 子どもたちまで、まっ黒になって はたらきつづけました。こう して、だんだん 村が 作られて いったのです。

村には、今、六十四家族の 人が 住んで います。ブラジル人と 日本人が なかよく くらして います。日本人の 中には、さいしょに この 村を 作った 人も いますが、近ごろ日本から 来た 人も います。前には 百家族以上に なった ことが ありました。また三十家族ぐらいに へったことも ありました。

村の 入り口に 立って いる  $\frac{N'1 + N'1 + N'1}{N'1 + N'1 + N'1$ 

<sup>(67)</sup> このために、この教科書の挿絵にもブラジルの風物や習慣などが描かれている。この挿絵はコロニアの画家や美術関係の人々が描いている。

<sup>(68)</sup> この章は一。パイネイラの下で、ほか 二。大切な村のもの、三。村の入植祭、四。村を作った人、の四つの文章から構成されている。また日本語 (5) では、この日系社会に関する記述のほか、ブラジルに関するものとしてはアマゾンの魚、アマゾンだより、サンバウロ見物、バンデイラの話が掲載されている。

夏には、青い葉を大きく。ひろげて、すずしい。かげを作ります。

秋には、えだいっぱい きれいな 花を さかせます。

パイネイラは「ぼくたちの」村の「番人です。じっと」村を「守って」きたのです。

むかしは,<u>オンサ</u>や <u>アンタ</u>が のろのろ 歩き回るのも みたでしょう。つらい ことも 楽 しい ことも 村に おこった ことは,みんな 知って いるでしょう。

<u>パイネイラ</u>の 下に 立って いると, いろいろな むかし話を 聞かせて くれるような 気が します」

この「ぼくたちの村」という文章には、パイネイラ(Paineira:パンヤ科の木)、カフェザル(Cafezal:コーヒー農園・畑)、パスト(Pasto:牧場)、マット(Matto:森林、森)、オンサ(Onca:豹)、アンタ(Anta:獏)といったポルトガル語名詞が借用されているが、この借用語の存在とともに、この文章が描いている「ぼくたちの村」が伝えている情緒、イメージ、心情などはブラジルでの経験や日本移民の生活戦術などの知識なしには本当には理解できないものであろう。換言すれば、日本の日本人は日本語としてはこの文章を理解できるだろうが、この文章への心情的一体化の感情を醸成することはないであろう。

この第一期日語教科書全八巻が完成すると直ちに高学年用教科書四巻の刊行事業が一年間の期間で日語教科書刊行委員会によって実施され、1964年には完成している。 この教科書は刊行直後から、日本語学校において従来の教科書にとって代わり始め、1963年日本語普及会が実施した「日系ブラジル人に対する日語教育実情調査」結果によると、コロニア教科書の使用状況は55%となり、コロニア教科書と柳田教科書の併用34%を加えると実に90%近くの日本語学校がコロニア教科書を利用するようになっていた。

1964年に完成をみたコロニア版日本語教科書は短期間のうちに、ブラジルの日本語教育界に広く普及していったもものの、この「コロニア語」教科書に対する批判がなかったわけで

<sup>(69)</sup> この当時の日本語学校のモデルを、日本語普及会調査結果から描くと以下のようになる。

○教師	
○生徒	約四十名

 ○教師授業時間
 一日四時間~六時間まで 50,6% 一日二時間~三時間まで 58,0% 超複式 100% 

 ○授業方式 の日本語以外の科目
 図画・工作 58,4%

<sup>(70)</sup> 日本語普及会編『日系ブラジル人に対する日語教育実情調査 (1963年)』 伯国日語学校連合会編前掲書 80頁~106頁

<sup>(71)</sup> このコロニア教科書と柳田教科書の併用は第二期中等用教科書がまだ未刊であったために過渡的に見られた現象であった。

<sup>(72)</sup> 第二次世界大戦直後の日系社会においては戦前の国定教科書の継続的使用が行なわれ、やがてそれが柳田国男編教科書にとって代わられた。この調査時に戦前国定教科書を引き続き使用している学校も5校存在している。

はなかった。批判の代表的なものは、「外国語としての日本語教育」、「日本の日本語」=真正なる日本語という立場からのものであった。日本語普及会の教科書編纂者船津禮作が1965年6月23日付け「パウリスタ新聞」に発表した「ブラジル語と日本文字表記」という投稿(船津の投稿では小学校低学年では生活感覚のなかに深く入り込んでいるポルトガル語に関してはそのままカタカナで表記し、高学年でその日本語対訳を行なっていくというポジションが取られていた)に対して、田中敬吾が7月14日付け「パウリスタ新聞」に「ブラジル語の借用について」という論考を投稿し、話し言葉でなんであれ、教育においては純粋な日本語を扱うのは自明であり、日本語はブラジルの子ども達にとっては外国語なのだから「正しい外国語」を教えなければならないと批判を行なっている。

こうした議論が「コロニア版日本語教科書」改訂の動きを醸成していったが、この改訂の 動きに大きな影響力を与えたのは1969年3月、サンパウロ大学東洋語学科に最初の客員教授 として、国立国語研究所から赴任した野元菊雄であった。野元は多くのブラジルの日本語や 日本語教育に関する発言を行っている。たとえば1969年『言語生活』(12月号)の「ブラジ ルの日本語 | という論考では、ブラジルにおける二世以下の日本語を対象に考察を行ってい るが、野元は音声、アクセントに続いて語彙について、作文の入選作品集から事例を引きつ つ「外来語を沢山とり入れることができるのは日本語の生命力を現すものと思うから、この こと自身は非難すべきではないと考えるが、日本の日本語のことは常に頭に置いて、日本で はどう使うかを教えるべきだろう。たとえば、オニブスといったのでは日本語にならない。 バスといってもらいたい」とコロニア語教科書を批判し、「今、日本語学校で大多数(96% という)が採用しているのは、サンパウロ州教育局公認のいわゆる『コロニア版日本語教科 書』12冊で、ブラジルで1959年から編集を始め、1961年以後発行されたものだ。これは大変 このようなポルトガル語からの外来語が多い。オニブス式日本語だ。これをもう少し整理し ようと改訂を考えているらしいのは大いにわが意を得たものだ。このように標準的な日本語 を教育しないとせっかく日本語で書いても,日本語を話す人の多数派である日本の日本人に 理解できないことになるおそれがある | と述べている。

この野元と同質の議論はやはりサンパウロ大学に客員教授として赴任にした鈴木英夫によっても展開されている。既に紹介したように、鈴木はブラジルの日本語を「コロニア共通語」と「コロニア方言」とに区別することを提起している。この鈴木の提起は日伯毎日新聞1979年2月6、8日付けに掲載された須田子徳の「コロニア語は方言」という投稿に触発されて行われたもので、鈴木は「ブラジル語はポルトガル語の変容したものであり、アメリカ語はイギリス語が変容したものですが、コロニア語の場合は、単なる日本語の変容の段階に

<sup>(73)</sup> 野元菊雄「ブラジルの日本語」『言語生活』 1969年12月号 67頁 75頁 69頁

<sup>(74)</sup> 野元 前掲論文 1969 70頁

止まるか、それともブラジル語への同化が一段と進んで、もはや日本語とは言えない段階にまで変質してしまうか、その点に問題があるからです」と懸念を表明しコロニア語の消滅を止揚するためには日本語教育領域でどのように対応すべきかを論じている。鈴木によれば、「問題は、日系社会公認の、コロニア共通語を日本語教育の中に持ち込むかどうかであります」とされ、以下のような立場を表明している。

「日本語教育の目標を、日本人にも分る日本語を習得させることに置くならば、日本語や日本式外来語に置き換えられるものは、日本語教育に持ち込むのを差し控えた方が良いのではないかと私は思います。ただ、コロニア共通語を教えることを目標とするのなら、問題は別です。その場合でも、入門期の幼児にポ系外来語を教えることには問題があります。というのは、ポ系外来語を持ち込むことによって、日本語とブラジル語との体系の違いが、曖昧になる恐れがあるからです。また、ポ系外来語を、コロニア共通語の中にどんどん取り入れて行くことは、日本語の変質を招く恐れもあると思います」

鈴木の主張は日本語教育の目標如何であるが、究極的にはコロニア共通語も日本語教育の中に持ち込むべきではないというものであろう。野元にしろ、鈴木にしろ、日本の日本語との関係において、日本人にも分る日本語を教えるということが主張されているのであり、こうした日本の研究者の言説の影響をも強くうけるかたちで、「コロニア(日本)語」によるエスニック日本語教育モデルは否定され、日本語教育の目標としての「真正なる日本語」と生活言語・記述言語としての「コロニア(日本)語」へと再び剥離のプロセスを歩むようになるのである。後述するように、日本語をめぐる二方向への分岐は1970年代になって日本語に関する専門家派遣などによって、日本語教育環境の整備が図られるようになって、明確な姿を現すことになった。

# 2.3.2. エスニック日本文学運動

「コロニア語」の「発見」を条件する、コロニア語によるエスニック「日本語」教科書編纂とそれによるエスニック日本語教育の実践とともに、1960年代以降、コロニア語を巡ってはもう一つの重要な実践が存在している。それはエスニック日本文学運動である。勿論、短詩型文学や散文などの創作活動は日本語新聞や雑誌の発行とともに、すでに戦前期から展開されてきていたが、戦後、「コロニア」アイデンティティを条件として、移民としての歴史的体験や心情を、文学という表現形式を用いて描いていこうとする明確な意図をもって、新

<sup>(75)</sup> この鈴木の主張に関して、日系人から、「コロニア語」が外来語の借用によって「乱れた言語」となっているというのであれば、「日本の日本語における外来語の氾濫」という事実はどうなのか、やはり日本語の乱れであれ、この意味で日本の研究者がこうした評価をするのは納得できないという主旨の批判が寄せられている。

たな地平にたって実践されるようになった。

この文学運動の中核的主張は「コロニア文学の土着性(独自性)」というものであった。この土着性は一方において、その文学におけるテーマや題材などに求められ、他方において、「コロニア語」という記述言語に求められた。このような目標をもって、1965年に結成されたのがコロニア文学会(初代会長鈴木悌一)であった。この団体は1966年から1977年にかけて文芸誌『コロニア文学』を刊行していった。このコロニア文学運動の中で、記述言語としての「コロニア語」にこだわった「作家」に前山隆がいる。前山は意識的に「コロニア語」を用いながら、「トマテとコンピュータ」という戯曲を1972年『コロニア文学』18号誌上に発表し、この作品によって、1968年ブラジル日本文化協会が創設した「コロニア文学賞」を受賞した。前山は『コロニア文学』18号のなかで、「トマテとコンピュータ縁起」という作品解説を行っているが、この解説文には前山の、そしてコロニア文学会のもつ記述言語としての「コロニア語」に対する眼差しが鮮明に現れている。

「"コロニア人"などと称していながら、自立的な脚本創作の活動もなしに、日本直来または直訳のやくざ芝居、母物人情劇、ドタバタ寸劇ばかりやっているのでは、コロニア六十年の歴史を云々しながら、うら淋しい話である。なんとか自律的なコロニア演劇つまりコロニアの問題をテーマとして、コロニア人によって創作され、演技するものと観るものとが自らの生きる問題を共に考えるよすがともなり、同時に娯楽をも提供しうるコロニア土着劇といったものが出て来ないものかと、ほくはしばしば考えていた…

コロニアには、日本語を中核において喋るものと、ポルトガル語を中核においてしゃべるものがある。しかし、程度の差はあれ、大体みんな、多少とも両語を聞きわけ、喋る。実生活においてjは、これらの両語を巧妙にこねあげ、使いわけて、コミュニケーションが成立している。単に言葉が"崩れて"混じっているのではない。生きていくうえでのストラテジー(戦術)として、われわれは故意に混ぜ、苦労して両語をこねあげているのである。その結果今こうしてコロニアで流通しているものを、コロニア語という。

こういったコロニア六十年史の最大の文化遺産たる"コロニア語"を除いて、日本語を中核に使用する人口とポルトガル語を中核に使用する人口、一世と二世、日本人会会員と青年会会員、親と子の両方に同時に訴えをもちうる戯曲を書くべき言葉はないのである。"トマテとコンピュータ"は、このような考えのもとに、コロニア語で書かれたものである…」

コロニア文学会を中心とするエスニック文学運動に触発され、1960年代後半からコロニア

<sup>(76)</sup> 前山隆「トマテとコンピュータ縁起」『コロニア文学』第18号 サンパウロ 1972

語の自覚的使用による表現活動が活発化し、日系人の注目すべき文学作品、自伝、漫画、生活史などの出版物が数多く刊行されるようになった。こうした出版物のなかには、1981年の梶本北民による『ブラジル季寄せ』や同年出版の、コロニア万葉集刊行委員会編『コロニア万葉集』など、ブラジル日系社会において活発に展開されている短詩型文学運動分野からのものや、半田による『移民の生活の歴史』(1970年)、沼田信一による、一連の「信ちゃんの移民シリーズ」などの移民の生活史に関する記述など記述言語としての「コロニア語」研究にとって重要な作品群が数多く含まれている。

# 2.4. グローバル化とブラジルの「日本語」―「継承語」から「外国語」へ/アカデミアにおける「コロニア語」の発見(1970年代以降)

1960年代から70年代にかけて、ブラジルにおける「日本語」は日本語教育という領域におけるコロニア語によるエスニック日本語教育モデルの脆弱化、生活言語・記述言語としてのコロニア語の隆盛という二方向への分岐が明白になり始めた。そして、この傾向は1960年代末から生成され、ブラジル・日本双方の高度経済成長などとも相俟って活発化した、ブラジル日系社会と日本とのあいだの、日本語・日本文化(特に文学)のトランスナショナルな教育構造のなかで、より鮮明なものとなっていった。この構造を通じて、日本からの日本語教育専門家や研究者の派遣、日本への日系教師・学生の研修留学など、国際交流基金や国際協力事業団といった政府系機関を介在させた形態における、本格的な日本語教育、研究体制が確立されていった。そして、こうした日本語教育の専門化や本格的な研究の展開によって、ブラジルにおける「日本語」に関する言説は一方においては日本語教育という場と、他方においてはアカデミアという世界に制限され、日系社会内においてはその重要性を喪失し、「コロニア語」は専ら生活言語、記述言語となっていった。

#### 2.4.1. アカデミアによる「コロニア語」の発見

1960年代末からの、こうした動向、特にブラジルにおける日本語研究という領域での動向 - 筆者のいうアカデミアという世界―に関しては山東 [2003] が手際よく、二つの時期に区 分し整理している。山東は1970年代を「研究者派遣による国語学・言語学的研究の時期」、1980 年代を「社会言語学的研究・日本語教育学的観点からの研究の時期」とに区分し、前者を 「日本語日本文学関係の研究者が客員教授や日本語講師としてブラジルに派遣されることが 多くなった。これに伴って、ブラジル日系人の日本語についての注目が、随想的なものだけ ではなく、学術的な見地からもなされる」ようになった時期、そして、トランスナショナル な教育システムの整備を条件として、1980年代以降には①ブラジル日系人研究者による日本 語研究の出現、②ブラジル日系人の日本語そのものや、ブラジルにおける日本語教育という 両面からの研究が展開されるようになったと整理している。こうしたトランスナショナルな 構造の確立を条件に1970年代以降、アカデミアの世界で「コロニア語」が発見されていくこ とになるのである。

日本からの専門家の中で印象記を越えて,ブラジルの日本語に関して初めて言及したのは 野元菊雄である。野元は1969年「ブラジルの日本語」という『言語生活』12月号に掲載した 論考の中で、二世以下が話す日本語に関して、①音声、②アクセント、③語彙、④文法、⑤ 表現法という5つの側面から、その特徴を概観している。このすべてを紹介することはでき ないが、文法の特徴について野元の論考を要約すれば、(1)打消しの助動詞には「ん」が 嗜好されること (2)「起きる」の命令形が「起きろ」ではなく「起きれ」が北海道ほどで はないがブラジルでも使用されていること(3)女性のことばが全くないこと(4)九州出 身移民が多いことで、その方言が文法面で影響を与えていること、などを若干の事例を提示 しながら説明している。こうして、野元以降、日本から派遣された研究者やブラジルの日系 言語学者たちが「コロニア語」を発見していったのである。

アカデミアによる「コロニア語」の発見はその初期においては、まがりなりにもブラジル 日系社会(のインテリ知識人)との接点を保有していた。例えば、最初のサンパウロ大学客 員教授となった野元や鈴木などは講演や邦字新聞への投稿などを通じて自ら「発見」した 「コロニア語 | に関する知見や将来の展望などを発表し、ブラジル日系社会のインテリ層に 影響を及ぼしていた。

この時期における言語学者による言説の中で、もっともブラジル日系社会の知識人・リー ダー層に影響を及ぼしたのは、その言語的特徴ではなく,「コロニア語」の将来を巡るもの であった。この言説は概ね悲観論であり、早晩一世の消滅とともに消え去る運命になるとい うものであった。この「消滅の危機」に瀕したコロニア語という認識は当時,日系社会の知 **識人やリーダーたちがもつ自らの「社会」や日系二、三世のアイデンティティ(日系人意** 識)に対する展望と一致し、それを強化する機能を果していった。

日系社会の知識人やリーダーたちはこうした「消滅の語り」を背景に、一方において、自 らの「社会」や移民としての体験や経験を「救出」する目的で,移民史・資料の保存,記録 の運動を組織し、他方において、自らの「社会」や子弟のアイデンティティ醸成にとって必 須と認識されていた日本語教育の充実や拡大を唱えていった。前者は集合的なレベルでは,

「ブラジル移民史料館」の建設を結果し、個別的には一世や準二世という日本語(コロニア

<sup>(77)</sup> 社会言語学、日本語学などの言語学的領域の中で、どのように〈コロニア語〉が発見されていったのか に関しては、言語学領域の専門家による研究史的整理が行なわれることが期待されよう。

<sup>(78)</sup> 日系社会のインテリ知識層の反応は概ね否定的なものであった。しかし,ブラジルの日本語におけるポ 語系外来語の多用が [日本語の変容] という観点から論じられると、それが日本語の乱れであると認識さ れ、日本の日本語の英語系外来語の氾濫批判へと向けられるというように、体系的になされていたわけで はなかった。

語)運用者による「自分史」の出版を流行させることになった。そして,後者は複数存在した日本語教育中央機関の統合-「日本語普及センター」という統括的機関の創設やそこを中心とするトランスナショナルな日本語教師養成システムの構築などを結果することになった。

しかしながら、こうした動きの中で、「コロニア語」は日系社会内部において「自らの文化遺産」として記録・保存する運動として結実することはなかった。このことの背景には日本との交流が活発化する中で、「コロニア語」=乱れた日本語、非公式的(非真正な)日本語という認識が深く浸透していたという事実が存在しているのかもしれない。「コロニア語」の記録・保存運動は社会言語学領域において、言語接触論や消滅危機言語という学問的なパラダイムが出現し、しかもトランスナショナルな専門家派遣システムを通じて、ブラジル日系人の専門家が育成されて、アカデミアの領域において80年代以降に展開されることになるのである。

ブラジルの日本語の社会言語学的研究が専門化の度合いを深めていくにつれ、専門家の用いる「言語」とブラジル日系社会との間の断絶が深まり、しかもその発表媒体がアカデミアの専門雑誌に移行し、さらにブラジル日系人研究者の論考が専らポルトガル語で発表されるようになると、アカデミアと日系社会との「言語」をめぐる交渉はほとんどなくなり、アカデミアとブラジル日系社会との接点は「ブラジルにおける日本語教育」という領域に限定されるようになっていった。

# 2.4.2. 日本語の位置―「継承語」から「外国語 | へのシフト

1950年代後半から60年代初頭にかけて、「コロニア語」による教科書製作運動を展開し、エスニック日本語教育を推進してきた日本語教育領域では、70年代以降、トランスナショナルな教師養成システム(日本からの日本語教育専門家の派遣、日系人教師の日本研修など)が確立されるに従い、「コロニア語」は完全に忘れられた存在になっていった。

すでに1970年代後半から80年代において、 ブラジルの日系家庭における日本語は消滅しつつあり、このプロセスは不可逆的なものであるという認識が強くなり始めていた。日系家庭からの日本語の消失は日本語教育の基本的なパラダイムを「継承語としての日本語」教育から、「外国語としての日本語」へと大きくシフトさせる要因として作用し、他方において、1970年代から盛んになる移民一世を中心とした訪日旅行や80年代半ばから発生する日本への「出稼ぎ」体験や、トランスナショナルな日本語教育構造の中で、日本の日本語の真正性を認知した日本語教育教師などから、自らの話す「コロニア語」と「日本の日本語」とのディスコミュニケーション、あるいは自らの話す「コロニア語」に対して、「古めかしさ」

<sup>(79)</sup> **何**えば,久山(2000) ではブラジリアの一世を対象に,日本語におけるポルトガル語借用について,音声音韻的統合や形態的統合,統語的統合といった多面的な分析を行っているが,この重要な知見はその学術用語の使用や発表媒体が日本の専門雑誌ということで,ブラジル日系社会へと還元されてはいない。

「遅れた日本語」「乱れた日本語」というレッテルを貼ることなどを通じて(グローバルな 状況の中での中央―周縁のパワー関係とも関連するが),「日本の日本語」を「真正なもの」, 「正しいもの」とするような認識を日系社会に広く流布させるように作用していったのであ る。

ブラジルにおける日本語教育のパラダイム,モデルとその変化を示したのが図表4である。

## 図表4 ブラジルにおける日本語教育のパラダイムの変化(1950ー現在)

● 1950-1970年代

移行の諸ファクター

①家庭ドメインから日本語の消失 ②コロニア社会の求心力低下 etc

(前者から後者に移行しつつも並存)

日本語教育理念

〈文化伝承〉モデル

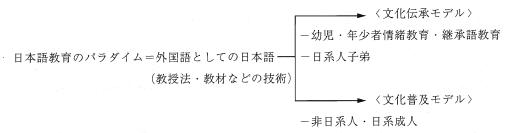
〈文化普及〉モデル

主体

日系人(特に子供)

非日系人・日系人成人

### ● 1980年代以降



1950年代から70年代にかけて、日系社会内には、それまで主流であった「継承語としての日本語教育」(〈文化伝承〉モデルによる)というパラダイムに代わって、新らたに「外国語としての日本語教育」(〈文化普及〉モデルによる)というパラダイムが家庭内使用言語としての日本語の縮小、日本ブームによる非日系人による日本語学習熱などの状況の変化に随伴して、徐々に台頭してきた。そして80年代に入り、「外国語としての日本語」パラダイムが卓越するようになった。しかしながら、このことがブラジル日系社会から継承語教育に基づく〈文化伝承〉モデルを消失させたわけではなかった。「外国語としての日本語」教育というパラダイムはブラジルにおいては、日本語教授法といった技術論や日本語学習環境の整備などとして認識されるわけではなかった。そこには常に「ブラジルにおける日本語教育

の特殊性」,より端的にいえば「ブラジル日系社会の存在」あるいは「日系児童の存在」を前提にした,移民後連綿として実践されてきたアイデンティティの模索 (エスニック日本人)という問題が,強弱の差はあるものの随伴されているのである。

現在の状況を要約的に言えば、ブラジルにおける「外国語としての日本語」というパラダイムは一方の極に『「文化伝承」手段としての日本語』というエスニック日本人モデルと密接に関わる心情的モデルを、他方の極には『文化普及手段としての日本語』という日系性を超越した技術的モデルとを配置しながら、その双方のモデルを強弱の差はあるものの内包するものであるということができよう。

#### おわりに

本稿においては、ブラジルへの日本移民が開始された1908年から現在までの約1世紀間における、「日本語」を巡る動向や主要言説を、主に史・資料を材料にしながら概観することを試みてきたが、本稿での記述や考察はあくまで筆者が現時点において持っている「見取り図」にすぎない。

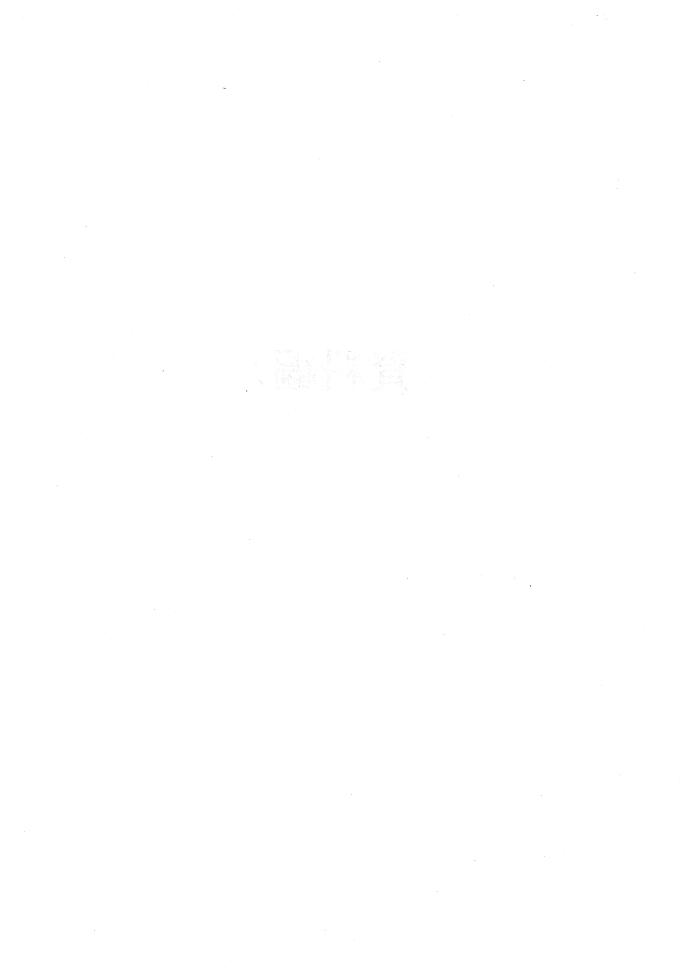
移民とともにブラジルに「旅」した日本語は、移民をめぐる様々な状況の変化の中で、あるときは「国民」形成の手段、またあるときは日本文化を伝承し、日系人としてのアイデンティティを醸成する手段として、日本の日本語や〈ブラジル語〉との様々な交渉を通じて、意味づけられ、ある機能を果たしてきた。「日本語」はいずれにせよ、日本を離れた日本人やその子弟たちが、その起源と離れた状況において、一方においてはその起源との紐帯や連続性を通じて、自らのアイデンティティや共同性の支えとして、他方においては起源との亀裂や切り離しなどを通じて、新しい生活世界や文化のあり方を創造する上での、一つの有力な実践の道具(手段)であり続けてきた。

筆者はブラジル日系人の「日本語」を巡る営為を通時的に再構成するという課題や「コロニア共通語」の研究はブラジル移民や日系人の心情,あるいは精神史の理解にとって重要かつ有効であると考えている。本稿はブラジル移民や日系人の精神史研究,「心情の人類学」的研究への、筆者なりのささやかな、最初のステップである。

<sup>(80)</sup> ブラジルにおける日本語教育の特殊性をめぐる議論は1980年代以降の「世界における日本語ブーム」という現象とも密接に関わっている。日系社会の日本語教育分野の指導者たちは,世界の日本語学習者数の動向などとブラジルにおける日本語学習者の動向とを対比することなどを通じて,ブラジルにおける日系社会の存在の特殊性が,当地における日本語学習の停滞や衰退に関連していると分析,「外国語としての日本語」や「文化普及手段としての日本語」というパラダイムへと自らのポジションを傾斜させていった。

en en la companya de la co

# 〈資料編〉



# 【ブラジル日系人の言語生活調査票】

調杏口:

調査地:
インフォーマント氏名:
調査員氏名:
<b>调</b> 查開始時間: 時 分
【個人属性 1 共通項目 社会的属性】
1) あなたの性別を教えてください。
1. 男 2. 女
2) あなたはいつお生まれになりましたか?
[ 年 月 日]
3) あなたは何世ですか?
1. 一世 2. 二世 3. 三世 4. 四世以下 5. 混血
[二世以下のケース:父 世 / 母 世]
4) あなたの国籍を教えてください。
1. 日本 2. ブラジル 3. 二重国籍 4. 帰化 5. その他[ ]
1. 日本 2. ブラング 3. 二語画編 4. が旧 3. での間 3.
5) どこでお生まれになりましたか?
「 都道府県]
[Estado de Munícipio de 植民地
(avoid) 1.
5 - A) そこには何歳までお住まいでしたか?
[ 歳]

1. 一世 2. 二世 3. 三世 4. 非日系人 5. 混血 「二世以下のケース:父世/母世] 7) 現在の職業は何ですか? (\*退職されている場合,退職前の職業は何でしたか?) [ ] (\* 8) 日本の学校には行きましたか?行った場合は最後に通った学校も教えてください。 1. はい「 2. いいえ 9) ブラジルの学校には行きましたか?行った場合は最後に通った学校も教えてくださ 6.1 1. はい「 2. いいえ 【個人属性 2 一世のみの項目 言語生活史】 10) あなたはいつブラジルに渡航されましたか? [19 年] 11) あなたが移住したときの家族構成を教えてください。 12) あなたが移住した当初, ブラジルにはどのくらい滞在する計画でしたか?

6-A) (設問6で「2. 結婚」「3. 離婚·死別」と答えた方) 配偶者の方は何世ですか?

6) ご結婚はされていますか?

「期間:

1. 未婚 2. 既婚 3. 離婚・死別 4. その他

13) あなたが最初に入植されたのはどこですか?	18) あなたは大人になったあとにポルトガル語を習ったことがありますか?
[Estado de Município de 植民地 ]	1. はい 2. いいえ
14) あなたが最初に入植されたところには日本人移民がたくさんいましたか? 1. はい 2. いいえ	$18-\mathbf{A}$ )(設問 $18$ で「 $1$ . はい」と答えた方)どういうところで習いましたか?
<ul><li>14-A) (設問14で「1. はい」と答えた方) その入植地にはどのくらいの日本人が 住んでいましたか?</li><li>人ないし家族]</li></ul>	18-B) (設問18で「1. はい」と答えた方) どのくらいの期間習いましたか? [期間: ] 18-C) (設問18で「1. はい」と答えた方) なぜポルトガル語を習ったのですか?
15) あなたが移住した当初, ガイジン(ブラジル人)と接することはありましたか? 1. はい 2. いいえ	
15-A) (設問15で「1. はい」と答えた方)それはどのようなガイジン(ブラジル 人)とどのような機会にでしたか?	<ul> <li>19) あなたは日本へ「デカセギ」に行ったことがありますか?ある場合はどのくらいの期間かも教えてください。</li> <li>1. ある [期間: ]</li> <li>2. ない 。</li> </ul>
16) あなたは移住する前, ポルトガル語がある程度わかりましたか? 1. はい 2. いいえ	<ul><li>20) (子供移民・青年移民の場合) あなたは移住後、日本学校に通ったことがありますか?</li><li>1. はい 2. いいえ</li></ul>
17) あなたは移住した当初, ポルトガル語を使いましたか? 1. はい 2. いいえ	20-A)(設問20で「1. はい」と答えた方)学校を運営していたのはどういう機関
17-A) (設問17で「1. はい」と答えた方) それはどのような人とどのような機会 でしたか?	や団体でしたか?
	20-B) (設問20で「1. はい」と答えた方) 学校にはどのくらい通いましたか? [期間: ]

V
VI
10
7
Ш
系
$\succ$
9
쁴
뺆
1
祏
鵬
調査

$20-\mathrm{C}$ ) (設問 $20$ で「 $1$ . はい」と答えた方) 学校には週に何回通いましたか?	24) あなたは日本(語)学校に通ったことがありますか?
[週 回]	1. はい 2. いいえ
20-D) (設問20で「1. はい」と答えた方) 学校ではどういうことを勉強して, ど	24-A) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校を運営
ういう行事がありましたか?	や団体でしたか?
	. [
· <u>**</u>	24-B) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校にはど
	[期間:
【個人属性 2 二世以下のみの項目 言語生活史】	
21) あなたが生まれたのは農村ですか都会ですか?農村生まれの方の場合,何才まで農	24-C) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校には週
村にいましたか?	[週 回]
1. 農村 [ オまで] 2. 都会	
	24-D) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校ではと
22) あなたが子供のころ, 家庭ではどのようなことばを話していましたか?	ういう行事がありましたか?
1. 日本語のみ	
2. 日本語のほうがポルトガル語より多い	
3. 日本語とポルトガル語半々	
4. ポルトガル語のほうが日本語より多い	
5. ポルトガル語のみ	25) あなたは大人になったあとに日本語を習ったことがあ

23) あなたが学校に入る前ともだちとはどのようなことばを使って話していましたか?

1. 日本語のみ

2. 日本語のほうがポルトガル語より多い

4. ポルトガル語のほうが日本語より多い

3. 日本語とポルトガル語半々

5. ポルトガル語のみ

			14 2.5 3.5	
	D.			
	- B 5 (\$1.5)			
1. 4	まい 2. い <i>いえ</i>		たことがありますか	?
25-A)	(設問25で「1.	はい」と答えた方)	どういうところで習 ] <sup>*</sup>	いましたか?
25-B)	(設問25で「1	はい! と答えた方)	どのくらいの期間習	いましたか?

24-A)(設問24で「1.はい」と答えた方)学校を運営していたのはどういう機関

24-B) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校にはどのくらい通いましたか?

24-C) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校には週に何回通いましたか?

24-D) (設問24で「1. はい」と答えた方) 学校ではどういうことを勉強して、ど

「期間:

25 - C)	(設問25で「1.	はい」。	と答えた方)	なぜ日本語を習ったのですか?	
					<u>-</u>
	*				

26) あなたは日本へ「デカセギ」に行ったことがありますか?ある場合はどのくらいの 期間かも教えてください。

1. ある [期間:

2. ない

#### 【家庭での言語使用】

27) あなたは現在どなたと同居していますか?

- 28) あなたは家族の方にたいして、どのようなことばで話しかけますか?
- 1. 日本語のみ
  - 2. 日本語のほうがポルトガル語より多い
  - 3. 日本語とポルトガル語半々
  - 4. ポルトガル語のほうが日本語より多い
  - 5. ポルトガル語のみ
  - 6. その他

夫/妻	123456 [	][日系/非日系]
子供	123456 [	][日系/非日系]
孫	123456 [	][日系/非日系]
父	123456 [	][日系/非日系]
母。	123456 [	][日系/非日系]
婿/嫁	123456 [	][日系/非日系]
兄弟姉妹	123456 [	][日系/非日系]

祖父	123456 [ ][日系/非日系]
祖母	123456 [ ][日系/非日系]
その他	123456 [ ][日系/非日系]

- 29) あなたは家族の方から、どのようなことばで話しかけられますか?
  - 1. 日本語のみ
  - 2. 日本語のほうがポルトガル語より多い
  - 3. 日本語とポルトガル語半々
  - 4. ポルトガル語のほうが日本語より多い
  - 5. ポルトガル語のみ
  - 6. その他

夫/妻	123456 [ ][日系/非日系]
子供	123456 [ ][日系/非日系]
孫	123456 [ ][日系/非日系]
父	123456 [ ][日系/非日系]
母	123456 [ ][日系/非日系]
婿/嫁	123456 [ ][日系/非日系]
兄弟姉妹	123456 [ ][日系/非日系]
祖父	123456 [ ][日系/非日系]
祖母	123456 [ ][日系/非日系]
その他(	123456 [ ][日系/非日系]

- 30) 夕食の席など家族全員が揃うときは、みなさん主にどのようなことばで話しますか?
  - 1. 日本語のみ
  - 2. 日本語のほうがポルトガル語より多い
  - 3. 日本語とポルトガル語半々
  - 4. ポルトガル語のほうが日本語より多い
  - 5. ポルトガル語のみ

V
VI
("
$\stackrel{\sim}{\sim}$
Ш
张
$\succ$
Ġ
間間
퍫
1
五
噩
香票
嘂

				4. まったくみない		
32−A) (設問32で「1.	ある」と答えた方)と	のような手段で	交際していますか?			
1. 手紙 2	2. 電話 3. 電子メ	イル 4.そのイ	也[ ]	35-A)(設問35で「1.よくみる な番組がとくに好きなの		る」と答えた方)どのよう
32−B) (設問32で「1.	ある」と答えた方)と	でくらいの頻度	で、連絡を取り合っ	1. 時代劇		
ていますか?				2. ドラマ		
1. 月ごと 2	2. 半年ごと 3. 年ご	と 4.数年ご	<u> </u>	3. ニュース		
				4. ドキュメンタリー		
33) あなたのお宅では新聞	引や雑誌を定期購読して	いますか?定期に	#読している場合は誌	5. その他[	]	
名など具体的に教えて	こください。そして誰が	読むのかも教えて	てください。			
1. [誌名:	][誰が:	• ]		36) あなたはブラジルのテレビ番組	をよくみますか?	
2. [誌名:	] [誰が:	]		1. よくみる		
3. [誌名:	] [誰が:	]		2. ときどきみる		
4. [誌名:	] [誰が:	]		3. ほとんどみない		
5. [誌名:	] [誰か:	]		4. まったくみない		
【メディア・娯楽と言語	吾使用】			36-A) (設問36で「1. よくみる	5」か「2.ときどきみ	る」と答えた方)どのよう
34) あなたは <b>NHK</b> の海タ	<b>ト放送を見ますか?</b>			↑ な番組がとくに好きなの	か教えてください。	
0. <b>NHK</b> がない				1. ノヴェラ・ドラマ		
1. よくみる				2. ニュース		
2. ときどきみる				3. ドキュメンタリー		
3. ほとんどみない				4. その他[	]	
4. まったくみない						

35) あなたは日本のビデオをよく見ますか?

ビデオはない
 よくみる
 ときどきみる

3. ほとんどみない

31) あなたのお宅では NHK 海外放送を見ることができますか?

32) あなたのお宅では日本のデカセギ以外の親戚とつきあいがありますか?

1. はい 2. いいえ

1. ある 2. ない

37) あなたはブラジルの日系テレビ番組をみますか?	41) あなたは日本の歌を聴きますか?
1. よくみる	1. よくきく
2. ときどきみる	2. ときどききく
3. ほとんどみない	3. ほとんどきかない
4. まったくみない	4. まったくきかない
38) あなたは NHK 短波放送や日系ラジオを聞きますか?	41-A) (設問41で「1.よくきく」か「2.ときどききく」と答えた方) どのよう
38) めなたは NHK 短板放送やロボノン4 を闻さまりが! 1. よくきく	41-A) (故向41 C   1. よくさく」が   2. こさこささく」 こ台 たたカテ このよう な歌を聞くのか教えてください。
1. よくさく 2. ときどききく	な肌を用くのが教えてください。
3. ほとんどきかない	
4. まったくきかない	
	42) あなたはカラオケに行きますか?
39) あなたは日本語の新聞を読みますか?	1. よく行く
0. 新聞をとっていない	2. ときどき行く
1. よく読む	3. ほとんど行かない
2. ときどき読む	4. まったく行かない
3. ほとんど読まない	
4. まったく読まない	42-A)(設問 $42$ で「 $1$ . よく行く」か「 $2$ . ときどき行く」と答えた方)どのよう
	な歌を歌うのか教えてください。
40) あなたはポルトガル語の新聞を読みますか?	
0. 新聞をとっていない	
1. よく読む	
2. ときどき読む	【職場・地域社会での言語使用】
3. ほとんど読まない	43) あなたは仕事上、日本語を話すことはありますか?ある場合、どのような機会に話
4. まったく読まない	すのか教えてください。
	1. 話す [機会:

2. 話さない

\	1
(	1
<	ر.
ì	=
Γ	Γ
	k
1	7
Ì	9
III HI	Щ
Ξ	ij
H	1
î	Ť
믶	Ш
周月月	K
ik	ı

1. 話す [機会:
2. 話さない
45) あなたは地域の日系団体の集まりや会合によく参加しますか?
1. 参加する 2. 参加しない
45-A)(設問45で「1.参加する」と答えた方)それはどのような団体ですか?
(複数回答あり)
1. 文化協会・自治会・村会
2. 老人会
3. 青年会
4. 婦人会
5. 文芸・スポーツ・娯楽など趣味の会 [
6. その他[ ]
45-B) (設問45で「1. 参加する」と答えた方) そこではどのようなことばを使っ
ていますか?
1. 日本語のみ
2. 日本語のほうがポルトガル語より多い

会に話すのか教えてください。

3. 日本語とポルトガル語半々

5. ポルトガル語のみ

設問45-A) 複数回答用メモ欄

4. ポルトガル語のほうが日本語より多い

- 44) あなたは仕事上, ポルトガル語を話すことはありますか?ある場合, どのような機 46) ともだちのなかに日系人は多いですか?
  - 0. ともだちはいない
  - 1. ほとんど日系人
  - 2. 日系人のほうが非日系人より多い
  - 3. 日系人と非日系人半々
  - 4. 非日系人のほうが日系人より多い
  - 5. ほとんど非日系人
  - 46-A) (設問46で1~4と答えた方) 日系人のともだちとはどのようなことばを使って話しますか?
    - 1. 日本語のみ
      - 2. 日本語のほうがポルトガル語より多い
      - 3. 日本語とポルトガル語半々
      - 4. ポルトガル語のほうが日本語より多い
      - 5. ポルトガル語のみ
  - 47) あなたの宗教を教えてください。(複数回答あり)
  - 48) あなたは宗教の集会や活動にはよく参加しますか?
    - 1. 参加する 2. 参加しない
  - 48-A) (設問48で「1.参加する」と答えた方) そこではどのようなことばを使っていますか?
    - 1. 日本語のみ
    - 2. 日本語のほうがポルトガル語より多い
    - 3. 日本語とポルトガル語半々
    - 4. ポルトガル語のほうが日本語より多い
    - 5. ポルトガル語のみ

#### 【日本語能力及びポルトガル語能力意識】

- 49) あなたはどのくらい日本語が話せますか?
  - 1. よく話せる
  - 2. だいたい話せる
  - 3. 少ししか話せない
  - 4. まったく話せない

政治や経済などのむずかしい話	1	2	3	4	
仕事の話	1	2	3	4	
日常の会話	1	2	3	4	
家庭での話	1	2	3	4	
あいさつやかんたんなことば	1	2	3	4	

- 50) あなたはどのくらい日本語を聞いてわかりますか?下にあげたものそれぞれについて教えてください
  - 1. よくわかる
  - 2. だいたいわかる
  - 3. 少ししかわからない
  - 4. まったくわからない

ラジオのニュース	1	2	3	4	
テレビのニュース	1	2	3	4	
テレビドラマ	1	2	3	4	
家庭での話	1	2	3	4	
あいさつやかんたんなことば	1	2	3	4	

- 51) あなたはどのくらい日本語が読めますか?下にあげたもの,それぞれについて教えてください。
  - 1. よく読める
  - 2. だいたい読める
  - 3. 少ししか読めない
  - 4. まったく読めない

新聞や本	1	2	3	4	
仕事の書類	1	2	3	4	٠,
雑誌や漫画	1	2	3	4	
ともだちや親戚からの手紙	1	2	3	4	
近所からの回覧やお知らせ	1	2	3	4	
ちらしや看板	1	2	3	4	

- 52) あなたはどのくらい日本語が書けますか?下にあげたもの、それぞれについて教えてください。
  - 1. よく書ける
  - 2. だいたい書ける
  - 3. 少ししか書けない
  - 4. まったく書けない

仕事の書類	1	2	3	4	
仕事相手への手紙	1	2	3	4	
ともだちや親戚への手紙	1	2	3	4	
日記	1	2	3	4	
かんたんなメモ	1	2	3	4	

- 53) あなたはどのくらいポルトガル語が話せますか?
  - 1. よく話せる
  - 2. だいたい話せる
  - 3. 少ししか話せない
  - 4. まったく話せない

政治や経済などのむずかしい話	1	2	3 ,	4	
仕事の話	1	2	3	4	
日常の会話	1	2	3	4	
家庭での話	1	2	3	4	
あいさつやかんたんなことば	1	2	3	4	

- 54) あなたはどのくらいポルトガル語を聞いてわかりますか?
  - 1. よくわかる
  - 2. だいたいわかる
  - 3. 少ししかわからない
  - 4. まったくわからない

ラジオのニュース	- 1	2	3	4	
テレビのニュース	1	2	3	4	
テレビドラマ (ノヴェラ)	- 1	2	3	4	
家庭での話	1	2	3	4	
あいさつやかんたんなことば	1	2	3	4	

- 55) あなたはどのくらいポルトガル語が読めますか?
  - 1. よく読める
  - 2. だいたい読める
  - 3. 少ししか読めない
  - 4. まったく読めない

新聞や本	1	2	3	4	
仕事の書類	1	2	3	4	
雑誌や漫画	1	2	3	4	
ともだちや親戚からの手紙	1	2	3	4	
近所からの回覧やお知らせ	1	2	3	4	
ちらしや看板	1	2	3	4	

- 56) あなたはどのくらいポルトガル語がかけますか?
  - 1. よく書ける
  - 2. だいたい書ける
  - 3. 少ししか書けない
  - 4. まったく書けない

仕事の書類	· · · · · · ·	1	2	3	4	
仕事相手への手紙		- 1	2	3	4	-
ともだちや親戚への手紙		1	2	3	4	
日記		 1	2	3	4	
かんたんなメモ		1	2	3	4	

#### 【日本語教育及びポルトガル語教育意識】

- 57) あなたはこれから日本語を習いたいと思いますか?
  - 1. はい 2. いいえ
- 57-A)(設問57で「1. はい」と答えた方) その理由を教えてください。
  - 1. 就職につながるから
  - 2. いまの仕事や専門に必要だから
  - 3. 世界や日本の最新情報を知ることができるから
  - 4. 日系人として祖先のことばを知っておきたいから
  - 5. 日本文化に興味があるから
  - 6. 日本語教師になりたいから
  - 7. その他「

- 1
- 58) あなたはお子さんやお孫さんに日本語を習わせたいですか?
  - 1. ぜひ習わせたい
  - 2. 本人が希望するなら習わせたい
  - 3. 習わせるつもりはない
  - 4. わからない
- 58-A)(設問58で「1. ぜひ習わせたい」か「2. 本人が希望するなら」と答えた
  - 方) その理由を教えてください。
  - 1. 就職につながるから
  - 2. 家業に必要だから

3. 世界や日本の最新情報を知ることができるから	【訪日経験(デカセギ経験)と言語意識】
4. 日系人として祖先のことばを知っておくのは当然だから	62) あなたは訪日経験がありますか?ある場合は何回訪日したかも教えてください。
5. 日本文化に興味をもってほしいから	1. ある [ 回] 2. ない
6. その他[	
	【以下は,設問62で「1.ある」と答えた訪日経験がある人のみの項目】
59) あなたは日系人の若い世代が日本語を学ぶことが必要だと思いますか?	63) あなたはどのような目的で訪日したのですか?
1. 必要がある	1. 観光
2. 本人の希望次第	2. 親戚訪問
3. 必要はない	3. 仕事・ビジネス
4. わからない	4. デカセギ
	5. 留学・研修
50) 地域の日本語学習の環境について,あなたはどのような問題があると思いますか?	6. その他[]
1. 日本語を学習するメリットがない	
2. いまのブラジルでは日本の影響力が少ない	64) あなたの日本語は日本で通じましたか?
3. 日本語学校や日本語教師のレベルの問題	1. 十分通じた
4. 日常的につかう機会がない	2. まあまあ通じた
5. 日系人の親が子供の日本語教育に熱心ではない	3. 少しだけ通じた
6. 日本語がむずかしい	4. 通じなかった
7. その他[	5. わからない
51) 日系人なら日本語が話せるのは当然だという意見がありますが,あなたは同意しま	65) ブラジルで話される日本語と日本の日本語とのちがいにとまどったことはありまし
すか、同意しませんか?またその理由も教えてください。	たか?あった場合はどういうところがちがったのか,どういうことにとまどったの
1. 同意する [理由:	か具体的に教えてください。
2. 同意しない [理由:	1. あった
3. わからない	具体的に:
	2. なかった

66) あなたは日本に住んだことがありますか?ある場合は、どのくらい、どこに住んだ	【コロニア語をめぐる意識】
のか教えてください。	67) あなたは家族や日系人の友人と話すとき,日本語とポルトガル語を混ぜることはあ
1. ある [期間: 都道府県]	りますか?
2. ない	1. ある 2. ない 3. わからない
66-A) (設問66で「1. ある」と答えた方) どのような目的で住んだのですか? 1. 仕事・ビジネス 2. デカセギ	68) あなたは日本語とポルトガル語を混ぜてつかうことをどう思いますか?
3. 留学·研修	
4. その他[	
$66-\mathbf{B}$ ) (設問 $66$ で「 $1$ . ある」と答えた方) 日本に住んでみて、日本語を勉強したいと思いましたか?	これで質問は終わりです。長いあいだご協力ありがとうございました(謝礼品)。
1. 勉強したいと思った	インフォーマント連絡先
2. 勉強したいとは思わなかった	住所:
3. わからない	電話:
66-C) (設問66で「1. ある」と答えた方) 日本に住んでみて,日本語は上達しましたか?	調査終了時間: 時 分調査所要時間: 時 分
1. かなり上達した	
2. 少し上達した	【備考欄】 収録時の同席者:なし・あり [誰: ]
3. ほとんど上達しなかった	収載時が同席者・なじ・めり [誰・ ]   [影響の度合い: ]
4. わからない	録音状況:良好・不良[問題点:
66-D) (設問66で「1. ある」と答えた方) 日本に住んでみて, 日本や日本人に対	インフォーマントの態度:協力(積極)的・非協力(消極)的・どちらと もいえない
するイメージは変わりましたか?	インフォーマントの日本語能力:問題なし・まあまあ・問題あり[ ]
1. 良くなった	談話収録の適性:向いている・あまり向いていない・どちらともいえない
2. 悪くなった	調査員の感想:
3. 変わらないが,日本や日本人のことを客観的に見るようになった	
4. わからない	

一层的重要 建氯磺甲烷酸 医对门下的

#### 【「ブラジル日系人の言語生活調査票」実施マニュアルー言語生活調査・調査員トレーニング用ー】

#### 1. 目的

この調査票はサンパウロ州スザノ市福博村及び同州ミランドポリス郡アリアンサ移住地における日系人の言語生活の特徴を、実態と意識という側面から捉えることを目的として作成されたものである。また、同調査票には、方向づけられた(Direcionado)談話収録を目指す設問項目も盛り込まれており、談話収録調査の一環もなすものである。

#### 2. 対象

本調査票は両地点において予め世代,年齢などを指標にして抽出された個人を対象にアプリケーションされるものである。

#### 3. 調査票の構成

調査票は以下のような構成となっている。

- 1)調査票の最初と最後には、調査者が調査日時、調査地、インフォーマント名、調査開始時刻(最初の部分)、インフォーマント連絡先(住所、電話)、調査終了時刻、調査所要時間(最後の部分)などを記入する箇所がもうけられている。
- 2) 調査票の最後尾には「備考」欄として、調査実施時の状況(第三者の存在、その影響、録音状況、インフォーマントの調査に対する態度、インフォーマントの日本語能力)を調査員が観察し記入する箇所や後に実施する談話収録の対象者として適切かどうか、また、適切だとすれば、どのような話題について談話収録すれば、良質のデータが収集される可能性があるかなど、インタビューの過程での観察や回答などを留意して記入する箇所がもうけられている。(この箇所は被調査者の前で記入するのではなく、調査終了後、調査票の清書(その日のうちに実施する)の際に記入する。)
- 3)調査設問項目には、対象者すべてを対象とするもの(設問1から9まで、設問27から68まで)、対象者が一世の場合のみに設問する項目(設問10から20)、対象者が二世以下の場合のみに設問する項目(設問21から26)がある。
  - 4)調査項目及び対象者は以下のとおりである。

	凶衣1 嗣宜宗の博成・改向・対象有	
設問の範疇	設問番号とその内容	対象者
①社会的属性	1. 性別, 2. 生年月日, 3. 世代, 4. 国籍, 5. 誕生地, 6. 婚姻上の地位, 7. 職業, 8. 学歴(日本), 9. 学歴(ブラジル)	すべての被調査者
②言語を中心とした生 活史(1)	10. 渡航年, 11. 移住時の家族構成, 12. 当初 のブラジル滞在期間 (予定), 13. 最初の入植 地, 14. 最初の入植地における日本人, 15. ガ	一世のみ
(1) 14 赛克·阿克克 (1) 14 · 阿克克	イジンとの接触, 16. 移住前のポルトガル語の知識, 17. 移住直後のポルトガル語使用, 18. 成人後のポルトガル語学習 19. 日本への	A 2
	デカセギ, 20. 日本(語)学校通学経験	

図表 1 調査票の構成・設問・対象者

<ul> <li>③言語を中心とした生</li></ul>			
家族が調査対象者. に対して使う言語, 30. 家族団らん時の言語, 31. NHK 海外放送視聴装置, 32. 日本の親戚との交際, 33. 家庭で定期購読している新聞, 雑誌  34. NHK 海外放送, 35. 日本のビデオ, 36. ブラジルのテルビ番組, 37. ブラジルの日系テレビ番組, 37. ブラジルの日系テレビ番組, 38. NHK 短波や日系ラジオ, 39. 日本語の新聞, 40. ポルトガル語の新聞, 41. 日本の歌, 42. カラオケ がル語使用, 45. 地域の日系団体の会合や活動への参加と使用言語, 47. 宗教帰属, 48. 宗教の活動への参加状況と使用言語, 47. 宗教帰属, 50. 日本語・50. 日本語・50. 日本語・50. 日本語・50. 日本語・50. 曹々での被調査者でいか。59. 若い日系人の日本語を習わせたいか。59. 若い日系人の日本語を習わせたいか。59. 若い日系人の日本語を習をめぐる問題, 61. 日系人が日本語を記をめぐる問題, 61. 日系人が日本語を記をめぐる問題, 61. 日系人が日本語を記をいう意見への態度  「⑩訪日経験と言語意識」により、63. 訪日目的, 64. 日本で日本語は通正たか,65. ブラジルの日本語と日本の日本語、66. 日本のの居住・理由・日本語と日本の日本語、66. 日本のの居住・理由・日本語と日本の日本語、66. 日本のの居住・理由・日本語と日本の日本語、66. 日本のの居住・理由・日本語と日本の日本語、66. 日本の日本・67. 日本語とポルトガル語を混ぜるか, 68. 日本での被調査者で、67. 日本語とポルトガル語を混ぜるか, 68. 日本での被調査者		庭内使用言語,23. 学齢期以前の友人との会話,24. 日本(語)学校への通学,25. 成人後	二世以下
・娯楽ドメイン— ブラジルのテレビ番組, 37. ブラジルの日系テレビ番組, 38. NHK 短波や日系ラジオ, 39. 日本語の新聞, 40. ボルトガル語の新聞, 41. 日本の歌, 42. カラオケ	④家庭での言語使用	家族が調査対象者. に対して使う言語,30. 家 族団らん時の言語,31. NHK 海外放送視聴装 置,32. 日本の親戚との交際,33. 家庭で定期	すべての被調査者
域社会ドメイン		ブラジルのテレビ番組,37. ブラジルの日系テレビ番組,38. NHK 短波や日系ラジオ,39. 日本語の新聞,40. ポルトガル語の新聞,41.	すべての被調査者
<ul> <li>告/意識)</li> <li>読解, 52. 日本語書く</li> <li>⑧ボルトガル語能力 (自己申告/意識)</li> <li>⑤日本語教育意識</li> <li>57. 日本語学習希望, 58. 子供・孫へ日本語を習わせたいか。59. 若い日系人の日本語学習の必要性, 60. 地域の日本語学習をめぐる問題, 61. 日系人が日本語を話すのは当然という意見への態度</li> <li>⑩訪日経験と言語意識</li> <li>62. 訪日経験, 63. 訪日目的, 64. 日本で日本語は通じたか, 65. ブラジルの日本語と日本の日本語, 66. 日本への居住・理由・日本語学習希望, 日本語の上達, 日本のイメージ</li> <li>⑪コロニア語をめぐる</li> <li>67. 日本語とボルトガル語を混ぜるか, 68. 日すべての被調査者</li> </ul>		ガル語使用,45. 地域の日系団体の会合や活動 への参加と使用言語,46. 友人の構成と使用言 語,47. 宗教帰属,48. 宗教の活動への参加状	すべての被調査者
(自己申告/意識)  ③日本語教育意識  57. 日本語学習希望, 58. 子供・孫へ日本語を習わせたいか。59. 若い日系人の日本語学習の必要性, 60. 地域の日本語学習をめぐる問題, 61. 日系人が日本語を話すのは当然という意見への態度  ④訪日経験と言語意識  62. 訪日経験, 63. 訪日目的, 64. 日本で日本語は通じたか, 65. ブラジルの日本語と日本の日本語, 66. 日本への居住・理由・日本語学習希望, 日本語の上達, 日本のイメージ  ①コロニア語をめぐる  67. 日本語とポルトガル語を混ぜるか, 68. 日すべての被調査者			すべての被調査者
習わせたいか。59. 若い日系人の日本語学習の 必要性,60. 地域の日本語学習をめぐる問題,61. 日系人が日本語を話すのは当然という意見への態度  ②訪日経験と言語意識 62. 訪日経験,63. 訪日目的,64. 日本で日本語は通じたか,65. ブラジルの日本語と日本の日本語,66. 日本への居住・理由・日本語学習希望,日本語の上達,日本のイメージ  ③コロニア語をめぐる 67. 日本語とポルトガル語を混ぜるか,68. 日 すべての被調査者	O	53. 会話, 54. 聴解, 55. 読解, 56. 書く	すべての被調査者
語は通じたか,65. ブラジルの日本語と日本の日本語、66. 日本への居住・理由・日本語学習希望、日本語の上達、日本のイメージ  ①コロニア語をめぐる 67. 日本語とポルトガル語を混ぜるか,68. 日 すべての被調査者		習わせたいか。59. 若い日系人の日本語学習の 必要性,60. 地域の日本語学習をめぐる問 題,61. 日系人が日本語を話すのは当然という	すべての被調査者
7 44 9 7 1 9 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		語は通じたか, 65. ブラジルの日本語と日本の 日本語, 66. 日本への居住・理由・日本語学習	すべての被調査者
			すべての被調査者

以上のように、調査票は①個人的属性一被調査者の個人的属性、言語を中心とした生活史、②言語使用実態一家庭での日本語使用実態、ドメイン(メディア/娯楽/職場/地域)における言語使用実態、日本語・ポルトガル語能力実態、③言語に対する意識一日本語教育意識、訪問経験と言語意識、コロニア語に対する意識(実態も含む)、から構成されている。

- 4) 調査票の設問―回答形式は①選択肢方式と②自由回答方式とを基本としている。②自由回答方式を採用した設問は回答の範疇がかなり多様となると予想される調査項目及び意見や考えを聞くことを目的とするものである。
- 5)設問によっては、関連質問を続けて行なうものもある。例えば設問18についてみると、成人後にポルトガル語を習ったことがあるか?を質問、「1. はい」と回答した場合には、続けて、どういうところで習ったか(18-A)、どのくらいの期間習ったか(18-B)と質問していくという構造になっている。このような場合には、( ) で「設問18で「1. は

い | と答えた方 | というかたちで続けて回答する者を特定してある。

6) 自由回答,選択肢回答の設問を問わず,複数回答が予想できる設問が存在している。例えば,設問45(地域の日系団体の集まりや集会への参加)関連の45-Aや,設問48(宗教帰属)などはこうした例である。

#### 4. 調査実施

本調査票は調査員が被調査者(調査対象者)に対して所定の質問をし、被調査者が回答するというかたちで行なわれるのが理想である。調査者はまず調査目的を被調査者に述べるとともに、この調査から得られたデータは研究目的以外には利用しないこと、プライバシーには十二分に留意する点を強調する。そして、調査員と被調査者とのやり取りを録音したい旨を伝え、了承を得る。

#### 5. 設問の解説

設問によっては聞き方が複雑なものがある。ここではこれらについてどのように聞いていくのかを示す。

### ① 設問3 (世代)

「あなたは何世ですか」という設問に対して、「私は父は一世、母は二世ですが・・・何世になりますか」といった回答が出てくる可能性があります。ブラジルの日系社会では父一世、母二世のようなケースは「三世」と算定するのが一般的ですが、日本政府はこうした場合には「二世」と規定しています。ここでは、両親の世代帰属が異なる場合には、日本政府方式のように、少ない世代の方+1世代とすることにします。つまり父=一世、母=二世の場合には、一世+1=二世とします。一世の場合には問題ありませんが、二世以下では「おとうさんもおかあさんも一世ですか」といった具合に確認していくのがいいでしょう。両親の世代帰属が異なる場合には「備考」あるいは「メモ」というかたちで、設問近くのスペースに、あるいはカード(調査対象者と設問を特定した)に、その実態について覚書をつけてください。

### ② 設問4 (国籍)

国籍は問題ないかもしれませんが、日系人がイタリア系人やドイツ系人と結婚している場合など、配偶者側の国籍を取得しているケースがありますので、留意してください。また、戦前の二世の場合、親が領事館に出生届を提出、日本国籍も取得している「二重国籍」者も多く存在していますので留意してください。また、デカセギ帰国者の中には、日本国籍への帰化者やその手続きを行なっている者もいるかもしれません。

### ③ 設問5 (誕生地)

日本人(=一世)の場合には、出身都道府県名を、二世以下の場合には州、ムニシピオ、そして植民地(移住地)を聞きます。二世以下のケースでは、両親や祖父母(父方母方あります)の誕生地も聞いておき、スペースに「覚書」「メモ」として記載しておいてください。また、5-Aでは誕生地に何歳まで住んでいたのかを設問します。言語環境の通時的な変化をみようとすると、誕生後の移動先とそこでの居住年数を調べる必要があります。もし、可能ならば設問してください。但し、移民としてかなり移動を行っていると予想されます。

### ④ 設問6 (婚姻上の地位)

教会ないし登記役場に届出がなくとも実質的に配偶関係にあるケース(内縁関係)も多いと思われます。その場合には、「既婚」と類別してください。また、設問6-Aでは、既婚、離・死別の場合に、配偶者の世代を特定してください。世代の算定は設問3と同じです。さらに、再婚の場合も存在すると思われます。これは既婚と類別されますが、再婚である状況がわかるように「メモ」ないし「覚書」をお願いします。

### ⑤ 設問7 (職業)

職業分類は非常に難しいので、ここではなるべく具体的に職業、仕事の内容、勤め先での 就業上の地位、勤め先の主要な事業内容などを質問して、記入してください。この設問は後 に範疇化します。

### ⑥ 設問8·9 (学歴)

日本,ブラジルとも学制が時代により変化しています。設問8は日本での学歴ですが,日本で学校に行ったかどうかをまず質問し,その後でどこまで(例えば尋常高等小学校何年までとか)と聞いてください。ブラジルの場合も同様に聞きます。一世の場合でも,子供移民の場合には双方で学校に行っている可能性がありますし,二世の場合でも日本に帰国して,日本の学歴を有している個人もいる可能性がありますから,こうした状況に留意してください。

### ⑦ 設問15 (ガイジンとの接触)

アリアンサ移住地の場合には、日本から直接、アリアンサに入植したケースが多いと予想されますが、福博の場合には、どこかのコーヒー農場(耕地)に配耕され、その後移動したケースが多いでしょう。コーヒー耕地では、多様な国籍の移民(特にヨーロッパ移民)、元黒人奴隷やその子や孫、さらには「カボクロ」と呼ばれたブラジル人労働者、さらにはパト

ロンなどのブラジル人などと接触している可能性が高いです。このあたりに留意してください。またコーヒー耕地では venda(売店)とか、週末とか、就労中とか、色々な機会に「ガイジン」と接触した可能性があります。

### ⑧ 設問17 (移住当初のポルトガル語の使用)

設問15とも関連していますが、移住初期の生活(就労及び日常生活)の中で、どのような 折にポルトガル語を使ったかを質問するものです。教会とか学校とか、町での買い物とか、 労働の時とか、色々な状況が考えられます。

#### ⑨ 設問18 (成人後のポルトガル語学習)

「大人」という概念が難しいですが、十八歳を一応の基準と考えてください。

### ⑩ 設問20 (日本学校への通学体験)

特に戦前期においては(福博村の場合)、移動が活発でしたから、移動先ごとに日本語学校に通った経験のある個人もいるかもしれません。つまり複数回答になりますが、こうした場合に留意してください。20-Dの設問は、学校で習っていた教科(日本語だけを習っていたわけではありません)や学校行事(正確には学校行事ではないですが、天長節、運動会、などなど)などを質問するものです。学校生活に関しては、かなり話が聞けると思われます。

### ① 設問10から設問20まで

言語をめぐる生活史(一世の場合)の設問10から設問20までは、統計処理をするものもありますが、むしろ、言語をめぐるライフヒストリーを聞くという内容になっています。これらの設問は、ライフヒストリー領域における談話収録という意図(目的)もあわせもったものです。話者によりますが、これらの質問をする中で、話者が積極的に話したい、あるいはこういう話を聞いたらよく話してくれそうだ、といったことがあったら、設問にこだわることなく、柔軟に、詳しく聞いていってもらいたいと思います。但し、調査票調査ですから、時間配分を十分に考慮してください。

### ② 設問21~設問26

設問21から26は二世以下のみを対象としたものです。一世の場合に比べて、選択肢方式が多くなっています。日本(語)学校通学の設問は一世と同様です。「大人」は十八歳を目安にしてください。設問26はデカセギの有無を問うものですが、これは後の【訪日経験(デカセギ経験)と言語意識】(設問62~設問66)とも関連しますので、この設問に続いて、設問

62から66までを質問するのも良いかも知れません。

### ③ 設問27 (同居世帯員)

ここでは現在, 誰と同居しているかを具体的に質問します。家族だけではなく, 非親族関係者 (例えば知人や友人, あるいは使用人など) が同居している可能性もありますから留意してください。

### ⑭ 設問28 (家族への話しかけの言語) 設問29 (家族からの話しかけの言語)

この二つの設問は同居を問わない家族と被調査者との間の言語使用の実態をみるものです。調査票には様々な親族関係者(続き柄)が出現していますが,家族の続柄のところに○(丸)をつけ、調査票の1~4の選択肢で話しかけの言語を聞き,その番号のところに○(丸)をつけてください。その他( )はこれら以外の親族関係者ないし非親族関係者用で( )内で続き柄,関係を特定し,その上で言語使用実態を聞きます。設問29は設問28の逆で,家族から話しかけられる言語について聞くものです。また,両設問では,その家族が日系か非日系かをそれぞれ聞いてください。祖父母,兄弟姉妹,婿/嫁はこの範疇に複数の人間が含まれる可能性があるので,その点は [ ]を使って,具体的な状況を書き込んでください。書ききれない場合には,カード(後述)に記入してください。

### ⑤ 設問32 (日本在住親戚との交際)

ここでいう親戚とは「日本在住のデカセギ以外の親戚」ということになります。ブラジルからデカセギに行っている子供、兄弟姉妹、叔父叔母などは除外することにします。

#### 16 設問33 (定期購読している新聞・雑誌)

話者の家庭で定期購読している新聞、雑誌を具体的に聞きます。その名称で言語は特定できます。そして、誰がこれらの新聞、雑誌を読むのか続けて質問してください。日本語の新聞はサンパウロ新聞、日系新聞があります。また日系新聞でもポルトガル語のJornal Nipo-Brasil といったポルトガル語の新聞もあります。

### ⑰ 設問37 (ブラジルの日系テレビ番組)

ブラジルの日系テレビ番組には Rosa Miake という女性が司会をする番組(有料 TV)があります。

#### ⑧ 設問38 (ラジオ)

日系ラジオ番組には、パウロ宮城と瀬名波美恵子が進行役を務める番組があります (ラジオ・ニッケイといいます) この放送の主要な聴取者はモジやスザノ地域の二世であるといわれています。この番組はパウロのポル語と美恵子の日本語の掛け合いのようなかたちで進行されています。

#### (19) 設問42 (カラオケ)

この設問はカラオケに行きますかというものですが、スザノ市福博村の場合には、スザノ市内や隣接するモジ市内、あるいはサンパウロ市内にカラオケ店があり、そうした場に出かける人も多いと思います。一方、アリアンサの場合には、こうした施設は存在せず、むしろ、地域の文化協会の「カラオケ部」などにカラオケをやりに行くことが多いのだろうと推測されます。また、自宅にカラオケセットを所有するお宅も多いことが予想されます。このあたりの状況も念頭に置いてください。

設問41,42では1,2と回答された方に続けて,「どのような歌を聞きますか?」(設問41-A),「どのような歌を歌いますか?」(設問42-A)と設問します。演歌,ポップス,唱歌,民謡などの範疇ないし,歌手が回答として返ってくるだろうと思われます。

#### ② 設問43 (職場での日本語使用) 設問44 (職場でのポルトガル語使用)

この二つの設問は職場あるいは仕事上の言語使用を質問するものです。今回の調査地は近郊農村と奥地農村地域であり、基本的に農業者が多いと思われます。農業という家業の場合、仕事上、接触するのは雇用している労働者への指示、生産物の販売時、生産を巡る肥料や道具等の購入時、農業共同組合の集まりのとき、フェイラのとき(スザノ市福博村の場合、生産者が Feirante として市内やサンパウロ市のフェイラ(青空市)の販売者となるケースもあるかもしれません。この場合には顧客や同業者などとの接触の機会などもあります)などが考えられます。また、スザノ市の場合には、農業の傍ら、スザノ市内で自営業(商業など)を営んでいるケースや特に青壮年層の場合には、スザノ市内の事業所や会社に勤めている賃金労働者のケースも多く存在しています。これらに関しては、使用人、顧客や仕入れ業者との接触、同業者との接触、会社・事業所の同僚や顧客、上司とのやりとりなどの機会が言語使用の場面と考えられます(勿論、これはあくまで一つのリファレンスにすぎません)。調査員はそれぞれのケースで、柔軟に、かつ詳細に場面における言語使用を聞き取ってください。

#### ② 設問45 (日系団体の活動への参加と言語使用)

この設問は調査対象者が地域の日系団体の集まりや会合に参加するかどうか、そして参加する場合には、その場でどのような言語が使用されているかを質問するものです。ここで留意するのは複数回答がある可能性があるということです。特に、世帯主や主婦の場合には、ムラの自治会(総会)や老人会、婦人会、趣味の会など多様な団体の催しや会合に出席する機会があるでしょう。この点に留意し、調査対象者が関わる日系団体とその集まり、そこでの言語使用を詳細に聞き取ってください。スペース的に記入が困難な場合には、調査対象者や設問を特定したカードなどに、その情報を記載し、調査票に添付してください。

### ② 設問48 (宗教と言語使用)

この設問は信仰する宗教とその宗教の活動への参加状況,そしてその活動における言語使用の実態を質問するものですが、ここでも複数回答に留意してください。例えば、イエの宗教と個人の信仰とが異なる場合があります。イエとしては仏教だが、自分はカトリック教といったケースです。この場合には、仏教的場面とカトリック的場面の二場面における言語使用が予想されます。アリアンサの場合にはプロテスタント系キリスト教の信者が多いと思われますが、その場合、集会や活動の主要なものはミサ、日曜学校などがあるでしょう。

#### ② | 設問49~設問56 (日本語・ポルトガル語能力意識)|

この一連の設問は調査対象者の日本語及びポルトガル語の自己能力に関する評価(意識) を設問するものです。図表内のそれぞれの場合に、よく、だいたい、少し、まったくという 選択肢で、その能力を聞いていきます。

### ② 設問57 (日本語学習希望)

この設問は将来、日本語を学びたいと思うかどうかを質問するものです。そして、「はい」と回答した人に対してはその事由も聞いていきます(57-A)この設問は選択肢ですが、回答は「三つまで」の複数回答にしたいと思います。制限をつけない複数回答の場合には、往々にして「すべて」の理由に○(丸)がついてしまう懸念があるからです。

#### ② 設問58 (子や孫へ日本語を習わせること)

58-Aの設問は四同様に、「三つまで」の複数回答にしたいと思います。

#### ② | 設問60 (日本語学習環境の問題)|

この設問の回答も「三つまで」の複数回答にしたいと思います。「その他」の場合には、

これまでのケースもそうですが、具体的に「その他」の内容を記入してください。

# ② 設問62 (訪日経験) 設問63 (目的) 設問64 (訪日時日本語通じたか) 設問65 (ブラジルの日本語と日本の日本語との違い)

この一連の設問はこれまでの訪日経験の有無,回数,目的,そして訪日時に調査対象者が話す日本語が通じたかどうかなどを質問するものです。訪日にはデカセギも含めます。設問63は複数回答です。設問65は戸惑いや違いがあったと思った場合,それはどのような違いだったのか,なぜ戸惑ったのかを具体的に聞き取るものです。デカセギ現象発生以降,かなりの日系人がこうした状況に直面していますが,その具体的な状況,内容などはほとんど明らかになっていません。調査員は可能な限り詳細にケースを収集してください。書ききれない場合には、カードを使って記入してください。

### 28 設問66 (日本在住体験と日本語)

住むという概念をどのように規定するか難しいですが、ここでは一回の訪日で三ヶ月以上 滞在したケースを居住したということにします。三ヶ月は日本政府が発行する観光査証の期 間に相当します。

#### ② 設問68 (コロニア語の認識)

この設問は日本語とポルトガル語の混在を、それぞれの個人がどのようにみなしているかを質問するものです。肯定的な見方、否定的な見方など様々な意見が出ると思います。可能な限り詳細に聞き取ってください。アイデンティティなどとも関連する設問です。

③最後は[備考欄]ですが、これは調査時の状況、インフォーマントの態度・能力、談話収録の適性、調査員の感想などを記入するもので、インフォーマントには可能な限りみせないように気をつけてください。その場で記入するのではなく、清書の際に記入するのがよいでしょう。

#### 6. 調査票の記入

面接調査の時には往々にして、きれいに(他人が読めるという意味)記入できません。調査時の記入は「下書き」で、調査票は調査時の宿舎などに帰ってから、清書することになるでしょう。清書は録音テープなどを参照しながら行なうケースもあるでしょう。自由回答方式の設問は可能な限り、調査対象者が言ったように記入してください。出来る限り自分のことばに置き換えないようにしながら記入してください。また、調査中に、色々な疑問や問題

が出現してくると思います。その際には、調査に同行するコーディネーターや夜に行なうミーティングの際に、疑問や問題をどんどん出し、その解決方(あるいは聞き方の検討など)を一緒に模索することにします。記入済みの調査票はコーディネーターに提出します。コーディネーターは記入された調査票を検討し、もし不備、疑問な点があれば、調査員に改めてその箇所の再調査を依頼することがあります。

#### 7. 調査時間

調査票は比較的設問数が多く、しかもライフヒストリー的な設問もあるので、時間がかかることが予想されます。一回の調査時間は被調査者の協力姿勢にも左右されますが、最大でも 2 時間程度が限度かと思います。MD や録音テープの録音時間は最大80~90分程度ですから、前後の挨拶や調査の説明などの部分を差し引いて、質問自体は80~90分ほどに収まるのがよいと思います。勿論、臨機応変に対応するのが基本です。

#### 8. 録音機の操作に関して

録音機の操作に関しては、録音マニュアルを事前に読み、予め個人的にテストをしていた だきたいと思います。

### 9. カードの利用について

調査票に記入できない情報を書き込みます。いつ、誰からの情報か、その情報を得たのは誰か、そして情報の内容がカードに盛り込まれます。調査票の設問を行う過程で、その設問に関連した質問や回答が出てくるものです。そうした情報は積極的にカードを使って残してください。勿論、インタビューの場で、カードを作るのではなく、そのときにはフィールドノートに、その情報を記入しておき、宿に帰ってから調査票を清書する際に、カード作成も行います。

### 【言語生活調査データ】

- 1. 言語生活調査のデータは、調査票の項目に対応させて掲載している。
- 2. 第1次データの提示順は、下記の通りである。
  - (1) アリアンサ移住区 一世 (2) アリアンサ移住区 二世
  - (3) アリアンサ移住区 三世 (4) スザノ福博村地区 一世
  - (5) スザノ福博村地区 二世 (6) スザノ福博村地区 三世 なお、被調査者の並べ方は、年齢順である。
- 3. 言語生活調査票の項目番号順(1~68)に提示し、項目の内容は簡略表記している。
- 4. 但し,調査項目のうち以下の自由回答の項目に関しては,上記の(1)~(6) の各個所の最後にまとめて提示する。回答のない場合は空欄のままにした。「15-A,17-A,18-A,18-C,20-A,20-D,20-D」(以上一世のみ項目)「24-A,24-D,25-A,25-C」(以上二・三世のみ項目)「41-A,42-A,43,44,61,61,65,68」(全世代共通項目)
- 5. 第1次データの読み方
  - ①被調査者一覧の「BA 1 M99-79」は、「Brasil (ブラジル) Aliança (アリアンサ 移住区) 1 (世代) Male (男性) 99 (年齢) 79 (通し番号)」を表し、「BS」 の「S」は「Suzano (スザノ福博村)」の意味である。
  - ②回答を数値・記号化した場合は、下に凡例を載せている。
  - ③回答のなかの記号「N」は、さまざまな事情により無回答または不明/不適切な回答など、判断不可能な場合である。なお、第2次データにおいてもこの記号を採用している。
  - ④回答のなかの「-」は、「該当せず」の場合で、回答の必要がない場合を表す。 なお、第2次データにおいてもこの記号を採用している。
  - ⑤スペースの都合上、ポルトガル語を「ポル語」と略した箇所がある。

### 言語生活調査 第1次データ

# (1) アリアンサ 一世 ( ) 一て変調器を設置する

						個人属性1	共通項	[目 社会	的属性	
調查票番号	1	2	3	4	- 5	5-A	6_	6-A	7	8
項目	性別	生年	世代	国籍	出生地/日本	出生地に何歳ま で住んだか?	婚姻 関係	配偶者 の世代	職業名(退職者)	日本での学歴(学校名)
BA1M99-79	M	1904	1	1	岐阜県	24	3	1	農業	高等小学校
BA1F91-81	F	1912	1	1	兵庫県	18	3	1	農業	女学校(高校)
BA1F89-34	F	1913	1	1	長野県	14	2	1	(農業)	N
BA1F88-33	F	1914	1	1	官城県	16	2	1	N	小学校6年
BA1F88-49	F	1914	1	1	北海道	23	3	1	主婦	尋常高等科
BA1F87-62	.F	1915	1	1	長野県	1	2	1	主婦	<b>尋常高等小学校</b>
BA1M87-63	M	1915	1	1	長野県	19	2	1	農業	農林学校
BA1F83-36	F	1919	1	1	(朝鮮)	2	2	1	(日本語教師)	小学校4年
BA1M84-57	M	1919	1	1	茨城県	12	2	1	(カフェ農園)	尋常小学校6年
BA1F84 70	F	1919	1	N	福島県	10	2	1	(農業)	小学校
BA1M83-107	M	1919	1	1	富山県	N	2	11	(牧畜)	<b>尋</b> 常小学校
BA1M82-13	M	1920	1	1	新潟県	13	3	2	(養鶏)	尋常小学校
BA1M82-101	M	1920	1	1	鳥取県	12	2	1	(農業)	尋常小学校4年終了
BA1M82-8	M	1921	1	1	惠山県	7	2	1	養蛋業	
BAJF81 - 72	F	1921	1	1	福島県	11	3	11	主婦	小学校
BA1M81-75	M	1921	1.	1	北海道	12	3	2	農業	<b>尋</b> 常高等小学校
BA1F80-14	F	1923	1	1	富山県	6	3	11	主婦	<u> </u>
BA1M79-99	M	1924	1	1	埼玉県	3	2	2	バール経営	-
BA1F79-104	F	1924	1	1	鳥取県	4	3	1	無職	
BA1F799	F	1925	1	1	富山県	9	2	1	(養蚕業)	尋常小学校3年
BA1M77-74	M	1925	1	1	北海道	.0	1	-	養鶏	尋常小学校4年
BA1F76-7	F	1926	1	4	和歐山県	5	3	1	農業	
BA1M76-22	М	1926	1	4	長野県	7	2	1	農畜産	N
BA1M76-97	M	1926	1	1	埼玉県	30	2	1	養鶏	中学4年(旧制)
BA1F76-30	F	1927	1	1	富山県	7	2	2	(養蛋業)	小学校10日間(渡航前)
BA1F74-23	F	1928	1	4	長野県	12	2	1	主婦	小学校4年
BA1M73-55	M	1929	1	1	長野県	12	2	2	(養鶏)	満州農学校
BA1M72-54	M	1930	1	1	熊本県	24	2	1	教会職員	高等小学校
BAIM71-4	M	1931	1	1	北海道	18	2	1	(養鶏)	大学中退
BA1M70-46	M	1932	1	4	北海道	0	2	2	(果樹)	
BAIM67-2	M	1935	1	4	香川県	1	2	2	果樹栽培·牧畜	
BA1M68-17	M	1935	1	4	長野県	5	2	2	農業	-
BA1F67-82	F	1935	1	1	東京都	26	3	11	舞踏家	高等学校
BA1F68-85	F	1935	1	1	北海道	23	2	1	養鶏	中学校
BA1M65-64	M	1937	1	1	熊本県	17	2	2	組合事務	中学校
BA1M60-86	M	1942	1	4	山形県	18	2	2	農業	高等学校
BAIF59-1	F	1943	1	1	福島県	13	2	2	養鶏	中学2年中退
BA1M59-83	M	1943	1	1	(台湾)	2	2	2	皮革工芸	髙等学校
BA1M51-78	M	1951	1	1	静岡県	23	2	3	農業	大学
BAIM47-76	M	1956	1	Î	福岡県	18	2	2	農業	大学
BA1M35 84	M	1968	1	1	東京都	28	2	2	農業	大学

 [只例]
 M=男性
 1=日本
 1=日本
 2=既婚
 退職者の場合

 2=ブラシル
 3=離婚・死別

 3=二重国籍
 4=その他

 4=帰化
 ( )内は日本以外の場合

# (1) アリアンサー世

	個人属性1 共通項目 社会的属性	1 1 11		人属性2 一	世のみの項目 言語生	活史
調査票番号	9 4 8	<u>  1</u>	0 I	11	12	
项目 被对象者一覧	プラジルでの学歴(学校名)	渡航年	渡航時 の年齢	移住時の 家族構成	当初のプラジル滞在 予定(永住/帰国)	(帰国の場合の) 帯在予定年数
成功 <b>終</b> 省 見い BA1M99-79	<b>₽</b>	1928	24	3	1	_
BA1F91-81		1930	18	2	わからない	わからない
BA1F89-34		1930	17	3	計画なし	計画なし
BA1F88-33		1930	16	3	2	10年
BA1F88-49		1936	23	ī	2	N
BA1F87-62		1936	21	2	2	15年
BA1M87-63		1934	19	y1	N	N
BA1F83-36		1929	10	2	N	N
BA1M84-57		1932	13	2	2	10年
BA1F84 - 70		1929	10	2		10年
BA1M83-107		1933	14	2	2	20年
BA1M82-13		1933	13	2	2	N
BA1M82-101		1932	12	2	2	10年
BA1M828	GRUPOではないが日本・ブラジル学校	1928	7	2		general constitution
BA1F81-72	GRUPO2年	1933	12	2	1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -	
BAIM81-75	and the same of th	N	N	2	2	10年
BA1F8014	GRUPO4年	1929	6	3	2	10年
BA1M79-99	GRUPO4年	1927	3	2	2	5年
BA1F79-104	GRUPO4年	1928	4	2		5年
BA1F79-9	and the second of the second o	1933	8	2		
BAIM77-74		1932	7	2	N.	N
BA1F76-7	GRUPO4年	1931	5	2	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	6年
BA1M76-22	GRUPO4年	1933	7	2		
BA1M76-97	GRUPO2~3ヶ月	1955	-29	1		ar cand a se • po la se
BA1F76-30		1933	6	2	2	N
BA1F74-23	Consider the control of the property of the control	1940	12	- 3	N N	N
BA1M73-55	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1954	2.5	1		
BA1M72-54		1953	23	2	N	N
BA1M71-4-		1956	25		1	
	GRUPO3年	1937	- 5	2	2	10年
BA1M67-2	GRUPO4年	1936	1	2	2	10年
BA1M68-17	ESCOLA PRÁTICA DE AGRICULTURA	1940	5	3	1	
BA1F67-82	anasan Samasan Adakum a 🕳 magamasan ani mgagarit	1961	26	3	2	1年
BA1F68-85	and the second s	1958	23	1	1	
BA1M65-64		1954	17	2	1	
BA1M60-86		1965	23	1	2	わからない
BAIF59-1	and the state of t	1957	14	2	1	
BA1M59-83	小学校(夜学)	1963	20 .	1	1	
BA1M51-78		1975	24	1	1	
BA1M47-76		1979	23	1	1	
BA1M35-84		1998	30	1	2	1ヵ月

[凡例] 「-」は通学経験なし

1=永住 2=帰国

1=単身

2=親世代以上を含む家族

3=親世代以上を含まない家族

調查票番号	13	14	14-A	1.5	16
啊且, 未省 勺		14	<u> </u>	<b> </b>	10
項目被対象者一覧	入植地	最初の入植地に は日本人移民が たくさんいたか	どのくらい日本人が住ん でいたか(家族/人数)	ガイジンとの 接触	移住前にポルトガル語がわ かったか
	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	1 1	1000家族	1	2
BA1P91-81	SP州ミランドポリスアリアンサ		650人	2	2
BA1F89-34	SP州ミランドポリスアリアンサ		N	2	1
BA1F88-33	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	100人	2	2
BA1F88-49	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	1.1	100人	2	2
BA1F8762	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	<u> </u>	300人	2	2
BA1M87-63	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	N	2	2
BA1F83-36	SP州ミランドポリスアリアンサ	2	10家族		2
BA1M84-57	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	300人	1	2
BA1F84-70	SP州アラダトゥパ	1	30人		2
BA1M83-107	SP州ミランドポリス第三アリアンサ		200人	1	2
BA1M82-13	SP州ミランドポリス第二アリアンサ		200人	1	2
BA1M82-101	SP州ミランドポリス第二アリアンサ		わからない		2
BA1M82-8	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	ranka eta erra ira la lakadara araktustara	2~3人	1	2
BA1F81-72	SP州ペレイラバレットチエテ移住地	1	400人	-2	2
BA1M81-75	SP州ポンペイヤファゼンダジャクチンガ	1,	3~4人	1	2
BA1F80-14	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	1	N	2	2
BA1M79-99	SP州ミランドポリス第二アリアンサ		240人	11	2
BA1F79-104	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	1	N	覚えていない	2
BA1F79-9	SP州ミランドポリス第三アリアンサ		100人	2	2
BA1M77-74	SP州リンス渋谷コーヒー園	reje ten jarellaren, eta e	10人		2
BA1F76-7	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	1	N	2	2
BA1M76-22	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	1	150人	2	2
BA1M76-97	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	00 000 01 (00 00 be	わからない	1	1
BA1F76-30	SP州ミランドポリス第三アリアンサ		N	1	2
BA1F74-23	sound and the second se	1	200人	2	2
BA1M73-55	SP州グアラサイフォルモーザ植民地	1	100人	1	2
BA1M72-54	And the second s	1	100人	1	2
BA1M71-4	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	1	300人	1	1
BA1M70-46	SP州ミランドポリスオリエンテ植民地	1, 1	50人	1	2
BA1M67-2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ		36人	2	2
BA1M68-17	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	1	200人	2	2
BA1F67-82	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	140家族	1	2
BA1F68-85	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	1	おぼえていない	2	2
BAIM65-64	PA州モンテアレグレ	1	50人	1	1
BA1M60-86	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	1	40人		. 1
BA1F59-1	SP州アラサツーバアンゼ	1	13人	2	2
BA1M59-83	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	140人	1	2
	SP州Ourinhosカンジドモッタ	2	N	1	- 2
	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	100人	1	2
	SP州ミランドポリスアリアンサ	1	80家族	1	2

	- 1 (2011年 - 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	62.50	
(凡例)		1=はい	
		2=いいえ	1=はい
		• 1 .:	2=いいえ

# (1) アリアンサー世

and the second of the second of the second	個	人属性2 一世のみ	の項目 言語	生活史	Literatura (Charles of Charles of	家庭で	の言語	吏用
調査票番号	17	18	19 20		27	28		
		ay agamani karantaran aya ayaan	the most common pays to the	Company of the Compan		家族に対	して話す	ことは
項目  成対象者一覧	CO.000000000000000000000000000000000000	大人になったあ と、ポルトガル語を 習ったか	デカセギの 経験の有無	日本(語)学校の通 学経験はあるか	現在の同居 形態	配偶者	子供	孫
BAIM99-79	2	いいえ	2	いいえ	- 6		1	1
3A1F91-81	2	いいえ	2	いいえ	6	-	1	
3A1F89-34	2	はい(ほんの短い間)	2	いいえ	3	-	1	324
BA1F88-33	2	いいえ	2	いいえ	6		1	9 7 <b>4</b> 1
BA1F88-49	2	いいえ	2	いいえ	3	-	1	
BA1F87-62	2	いいえ	2	いいえ	3	1	1	1
BA1M87-63	2	はい (N)	2	いいえ	4	1	1	1
BA1F83-36	2	はい (ほんの少し)	2	はい(60ヶ月/週6回)	5	enterior en const	-5,e	
3A1M8457	a hayana na 1. Ambana	はい (N)	2	いいえ	3	10 (15 mm) 1 mm/m	1	100 m / 1 m / 1 m
3A1F84-70	2	いいえ	**************************************	いいえ	3	awipina na haifi ngaya na na	1	
BA1M83-107	nang menglesa pada	いいえ	22	いいえ	3		1	1
BA1M82-13	22	いいえ		いいえ		and the state of t	1	1
BA1M82-101	2	いいえ	2	はい(18ヶ月/週5回)	4	1	1	5
BAIM82-8	2	いいえ	2	はい (96ヶ月/週6回)	3	1	1	1
BA1F81-72	2	いいえ	2	はい(24ヶ月/週6回)	1		1	-
BA1M81-75	1	いいえ	- 2	いいえ	5	<u> </u>	1	1
BA1F80-14	2	いいえ	2	はい (60ヶ月/週6回)	5		2	M
BA1M79-99	2	いいえ	- 2	はい (72ヶ月/週6回)	3	2	4	5
BA1F79-104	2	いいえ	2	はい(48ヶ月/週5回)	4	and a polynomia strategy one o		-
BA1F79-9	2	いいえ	2	はい(24ヶ月/週6回)	3	The second second	1	1
BA1M77-74	1	いいえ	2	はい(12ヶ月/週6回)	5	-	-	2,532
BA1F76-7	2	いいえ	2	はい(72ヶ月/週6回)	***************************************		100000000000000000000000000000000000000	
BA1M76-22	2	いいえ	2	いいえ	3	2	2	4
BA1M76-97	2	いいえ	2	いいえ			Service Const	1
BA1F76-30		いいえ	An	はい(36ヶ月/週6回)	2			1
BA1F74-23	2	いいえ		いいえ	and Indian	2	2	2
BA1M73-55	2	いいえ	2	いいえ	2	1		
BA1M72-54	2	はい(5ヶ月)	2	いいえ	3		5	4
BAIM71-4	1	はい(3ヶ月)	2	はい (72ヶ月/週1回)	2	-		-
BA1M70-46	1	いいえ	2	いいえ	1	2	3	-
BA1M67-2	2	いいえ	2	はい(48ヶ月/週2回)	3	1	ac-	-
BA1M68-17	2	いいえ	2	いいえ	2	3	-	-
BA1F67-82	1	いいえ	. 2	いいえ	5	-	1	1
BA1F68-85	2	いいえ	2	いいえ	2	. 1	-	
BA1M6564	1	いいえ	2	いいえ	2	3	1-	2000 <u>0</u> 0
BA1M60-86	1	はい (15ヶ月)	2	いいえ	1	1	1	-
BA1F59-1	2	はい(12ヶ月)	2	いいえ	3		1	3
BA1M59-83	2	はい(4ヶ月)	2	いいえ	1		1	
BA1M51-78	1	いいえ	2	いいえ	1	1	1	311
BA1M47-76	2	いいえ	1(12ヶ月)	いいえ	1	1	1	
BA1M35-84	2	はい(60ヶ月)	2	いいえ	1	1	1	11/4

(凡例)	1=はい	「はい」の場合、	1=ある (期間)	「はい」の場合、	1=核家族	
	2=いいえ	(学習期間)	2=ない	(学習期間/	2=夫婦	1=日本語
	La L	Service of the consequence of the con-		週間通学回数)	3=直系家族	2=日本語のほうが多い
				s de la composición del composición de la compos	4=拡大家族	3=日本語とポル語が半々
					5=単身	4=ポル語のほうが多い
					6-7-01h	5=ボルトカル語

	nous Sept. Herein			a service and the	家庭での言語使用	Specificação de 1958 Protesta e esta configeração	NUMBER OF THE SECOND	record works to	an armeey or a
調査票番号	orama nari-siste ya Libera Kadaliraka	and a second free	na marijaran a	29					
	lako a a				and the particular of the particular consequences of the control o	家族か	ら話しか	けられ	ることば
項目 被対象者一覧	父/母	嫁/媦	兄弟姉妹	祖父母	その他	配偶者	子供	搽	父/母
BA1M99-79	-	- 6		-	ំ 📲 ខែការប	-	1	2	
BA1F91-81	-	) - (	-	57 g 2 <mark>4</mark>		)	1	1.000	48 - G.
BA1F89-34	-	1 1	<u>.</u>	-	je i ≟ i jezera	-	1	1.48	750 <u>-</u> 79
BA1F8833				,	<b>-</b>	-	-	-	
BA1F88-49	page territoria.		n	San San San		unta mandalahan sa	1		-
BA1F87-62	anta i su a di Kapanian		azarang) 🕳 arangg		and the same of th	1	1	1	
BA1M87-63	e per la comita de la comita del comita de la comita del comita de la comita del la c	ay - initia			espera compercionario de la compensación de la comp	11	1	1	
BA1F83-36		a francis Samuella	ostopenski i		and the control of th	-	on the work was	-	
BA1M84-57	-	1		-		1	1		
BA1F84-70						1	1	-	-
BA1M83-107	-	1	- 1	Telegraphic Control		1	1, 1		
BA1M82-13	-	1	-	-		-1	1	4	•
BA1M82-101	-	-	- 199	-		11	1	5	
BA1M82-8		1		-	<u> -                                   </u>	1	1	1	
BA1F81-72		- :	- 3		- 2/2		1	46	do to fail
BA1M81-75			. ⊇ibulik	-	<u> </u>		: 1	1	13.16 3.55
BA1F80-14		·	-	ad no stance			4		<u> </u>
BA1M79-99	-	非日系5				2	4	5	
BA1F79-104			1		義妹3, おい2, おいの子供3, おいの嫁3			a lastronia	
BA1F79-9		1				11	1	1	
BA1M77-74	According to the	englise i i i n <u>a</u> ni si nijinan	aya i jara alimataha					<del>-</del>	-
BA1F76-7		and the second second second			<u> </u>	<u> </u>			-
BA1M76-22		2/2				2	2	4	-
BA1M76-97	A CONTRACTOR OF THE		segra v se v se v se v se se v se	** <del>**</del> ***		1	1	1	
BA1F76-30	-	-	-	•	-1	11		-	
BA1F74-23	-	2/2	- 1,31	-		2	2	4	
BA1M7355	-	-	-			1		-	
BA1M72-54	-	5	- Lat. 36	5 4 54 7 7.	<u> -                                   </u>	1	5	5	
BA1M71-4	-	-		-		11		1 4 1	D- 97
BA1M70-46				-		2	3		- 551.4
BA1M67-2	母1			-		1	<del>-  </del>	<u> </u>	母1
BA1M68-17 BA1F67-82			•			4 -	1	1	-
BA1F68-85	-	- <del>,</del> <del></del>		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		1		ia Tauta	
BA1M65-64		-				3			-
BA1M60-86			o en syn o en syn		* 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	1	1.4	
BA1F59-1	•	1	-	-	-	1	1 1	4,5	-
BA1M59-83	*	-	-	-	-	1	1	-	•
BA1M51-78	-	• 373				1	1	~	-
BA1M47-76	48.4.1.3	-	· .	. g c <b>-</b> , 1160	and a second	1	1	-	-
BA1M35-84	-100 <del>-</del> . 1445	+ +	- N	entriki <del>a</del>	- ·	11	1	_	

(凡例)

「非日系」とは、 「非日系の線/婿」の意味である

1=日本語

2=日本語のほうが多い

3=日本語とポル語が半々

4=ポル語のほうが多い.

5=ポルトガル語

				での言語使用		·	・娯楽と言語使		
調査票番号			29	i pi i	30	31	32	32-A	32-B
	家族	から話	しかけられ	れることば					
項目被対象者一覧	嫁/婿	兄弟 姉妹	祖父母	その他	家族全員がそろう ときの使用言語	NHKの 視聴	日本の 親戚との つきあい	日本の親戚と の交際手段	日本の親戚2 の連絡頻度
BA1M99-79	-	-	-	-	1	- 1	1	1	3
3A1F91-81	-	-	è -	-	1	1	1	2	2
BA1F89-34	1	-			1	1	1	2	3
BA1F8833	-	-	à.	A . (*)	1	2	1	1	a- 3.,
BA1F88-49	1	-	· -		1	1	1	1	3
BA1F87-62	-	-	): <u> </u>		1	1	1	2	2
BA1M87-63	J2 -	-		-	3	1	. 1	2	2
BA1F83-36	•	-	. <b>.</b>	-	-	1	1	1	$\sim 1$
BA1M84-57	3	-	}: • !	-	1	2	2	- 1	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •
BA1F84-70	1	-	A -	-	1	2	2		•
BA1M83-107	₹ <u>1</u>	-	- ·	-	1	2	1	1	2
BA1M82-13	1	-	-	· · ·	3	1	2		•
BA1M82-101				1 <b>-</b> 1	3	1	1	1	2
BA1M82-8	1	-	-		1	2	2	V 88 8 -	-
BA1F8172	R.M.	-	-	- 1	1	11	1	1	3
BA1M81-75	-	-	-	3 - 1	1	11	1	2	N
BA1F80-14			₹ <b>-</b>	<u> </u>	2(娘が近くにいる)	1	1	2	2
BA1M79-99	非日系5	-	-	0 - 1	4	2	2	_	
BA1F79-104	おいの嫁5	2	-	養妹2, おい5, おいの子供5	4	N	2	00:440	-15170
BA1F799	1	-	<b>-</b>		1	2	2	•	-
BA1M77=74		i -	-		1	1	1	1	4
BA1F76-7	-	-	· -	7 - 1	-	1	1 1	2	3
BA1M76-22.	2/2		-	-	4	1	1	2	2
BA1M76-97	-	<u> </u>	-		2	1	1	2	4
BA1F76-30	-	<u> </u>	<u> </u>	<u> </u>	1	2	2	-	-
BA1F74-23	3/3	<u> </u>			3	1	1	2	3
BA1M73-55	-		-		1	1	1	2	4
BA1M7254	5	-	-	-	5	2	2		-
BA1M71-4	-			-	3	1	2		
BA1M70-46	-		<u> </u>		2	1	1	11	N .
BA1M67-2	-	<u> </u>	<u> </u>		11	2	1	2	3
BAIM68-17	-	<u> </u>	<u> </u>		3	2	1	2	2
BA1F67-82		<u> </u>	<u> </u>	91 1	1	1	1	2	4
BA1F68-85	-	-	<u> </u>		1	1	1.20	2	4
BAIMGS=64	· -	<u> </u>	<u> </u>		3	2	2	-	-
BA1M60-86	•	-		_ :	1	1	1	9/ Ag 2 m 20	2
BA1FS9-1	3	-	į •	_	4	1	2	•	- received the second second
BA1M59-83	-		T -	-	1	1	1	3	1
BA1M51-78	() ·	<u> </u>	F		1	1	1	2	3
BA1M47-76	-	-	i	•	I	1	2		e e e e e e e e e e e e e e e e e e e
BA1M35-84	-	-	T -		1	1	1	3	1

[凡例]		ay yan ayu yan anc hac hac hac ma anc and an and ank an an and and and and the	1=ある	5	1=月ごと
	-5	1=日本語	2=ない	\	2=半年ごと
		2=日本語のほうが多い	1=できる	1=手紙	3=年ごと
		3=日本語とポル語が半々	2=できない	2=電話	4=数年ごと
		4=ポル語のほうが多い		3=電子メー/	ν .
		5=ポルトガル語		4=その他(具	(体的に)

F14	対策を表現している。 メディア・娯楽。	メディア・娯楽と言語使用						
調查票番号	33	34	35	35-A				
項目	新開雑誌の誌名	NHKを みるか	日本のビデオ を見るか	日本のピデオ/どの番組 が好きか				
被対象者一覧へ	- た/年間 / 立芸事科	4	4	<u></u>				
BAIF91-81	ニッケイ新聞/文芸春秋	+ 4	4	1 988 768 768				
	サンパウロ新聞/のうそん	+-i-	1	N				
BA1F88-33	リンパリロを同用ノのアでん	1 4	1 4					
Control base to be a second to the second	ニッケイ新聞/ブラジルの新聞名称不明	1 1	4	•				
BA1F87-62	ニッケイ新聞/ンブンルの制団石が下り	<del>  1</del>	4	* #35 + DECEMBER				
	ニッケイ新聞/ESTADO/文芸春秋	<del>                                     </del>	2	5(スポーツ)				
BA1F83 - 36	*	<del>                                     </del>	2	2				
	サンパウロ新聞	1.0	4	2 1 2 2 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2				
BA1F84-70	*	1 0	4					
	ニッケイ新聞/O DIÁRIO	1 0	2	5(相撲)				
	ニッケイ新聞/FOLHA/NOVA/ガリレオ/GLA	1 2	3	C. E. C. C.				
- Life Control of the Part of	ニッケイ新聞/のうそん/ESTADO/VEJA	1 1	1	1 355				
	ニッケイ新聞/ESTADO	0	2	1				
BA1F81-72		1 1	2	5(ふしぎ発見)				
BA1M81-75	*	1 4	4	± <b>2</b> € 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1				
	のうそん/DOHO(仏教)	1 1	3	•				
BA1M79-99		1 0	2	5(戦争映画)				
BA1F79-104		3	4					
BAIF79-9	ニッケイ新聞/ESTADO	$\frac{1}{0}$	2	1 2 2 2 2 2 2				
et in the control of	ニッケイ新聞/文芸春秋	<del>                                     </del>	2	3				
BA1F767		<del>  1</del>	2	2				
	DIÁRIO REGIONAL/サンパウロ新聞	+	3					
BA1M76-97	サンパウロ新聞/文芸春秋	1 1	3	: <b>*</b> 7358				
BA1F76-30	*	0	1 2	2, 3, 4				
BA1F74-23	*	1	3					
BA1M73-55	*	1 1	2	2				
BA1M72-54	*	4	1	1,5(歌)				
	ニッケイ新聞/FOLHA/文芸春秋	1 1	3	<b>-</b> 4 138€ 34.				
	DIÁRIO DE SÃOPAULO	1	3					
BA1M67-2		0	1	1.				
	ESTADO/ニッケイ新聞/のうそん	0	2	5(サスペンス・スポーツ)				
BA1F67-82	ニッケイ新聞/文芸春秋/婦人雑誌	2	2	4				
BA1F68-85	ニッケイ新聞/FOLHA	1	3					
BAIM65-64		0	1	5(音楽)				
BA1M60-86	ニッケイ新聞	1	3	• 1982				
BA1F59-1	* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *	- 1	2	5(歌番組)				
BA1M59-83	ニッケイ新聞/文芸春秋/週刊朝日	2	1	N				
BAIM51-78	ニッケイ新聞/週刊ポスト/文芸春秋/少年マガジン/婦人の友	3	2:	5(映画)				
BA1M47-76		2	3					
BA1M35-84	週刊アサヒノ週刊ポストノマガジン/ビッグコミック	1	2	2				

[凡例] [*	k」は購読せずのク	<b>アース</b>		1=時代劇
			0=ない	2=ドラマ
			1=よくみる	3=ニュース
			2=ときどきみる	4=ドキュメンタリー
			3=ほとんどみない	5=その他(番組名)
			4-キッケくみない	•

				娯楽と言語		·		
調查票番号	36	36-A	37	38	39	40	41	42
項目		プラジルのテレビ/ どの番組がすきか	プラジルの日 系テレビ番組を		日本語の新聞を読むか	ポルトガル 語の新聞	日本の歌を聞くか	CONTROL OF THE REAL PROPERTY.
被対象者一覧	NC & HOM-	たらと 解解なっ ショウ・	見るか	くか	halse mestry.	を読むか	Shirth.	101170
BA1M99-79	4		4	4	11	4	3	4
BA1F91-81	4		4	4	4	4	4	- 4
BA1F89-34	4	-	4	4	4	4	2	3
BA1F88-33	2	2	4	4	4	4	4	4
BA1F88-49	3	1	4	3	1	4	3	1
BA1F87-62	3	-	4	4	1	N	1	4
BA1M87-63	3	• 1	4	4	1	4	2	4
BA1F83-36	3		4	4	2	4	1	4
BA1M84-57	1	1	4	1	1	0	2	- 4
BA1F84 - 70	4	* ***	4	4	2	0	2	4
BA1M83 107	1 - 1	2	4	4	1	4	3	3
BA1M82-13	2	2	44	4	11	4	3	4
BA1M82-101	3	•	4	3	1	4	1	3
BAIM82-8	3	•	4	1 1	1	4	1	4
BA1F81 - 72	4	-	2	1	2	4	2	4
BA1M81-75	4		4	4	2	4	3	4
BA1F80-14	11	2	4	4	4	3	1	4
BA1M79-99	1	1, 2	4	4	1	3	1	3
BA1F79-104	1	1, 2	4	4	4	1	3	4
BA1F79-9	2	1	4	1	1	4	. 1	4
BA1M77-74	4	to w	4	2	1	1 4	2	4
BA1F76-7	4		4	4	4	0	2	3
BA1M76-22	1	2	4-4-4	4	1	4	1	3
BA1M76-97	3	2	4	4	1	4	2	4
BA1F76-30	1	1, 2	4	4	0	0	1	4 .
BA1F74-23	2	1, 2	4	4	2	3	1	3
BA1M73-55	3		4	4		vevsmith4 mag	1	1
BA1M72-54	i market i un <b>1</b> mereken m	1, 2, 4(映画)		22	2	3	1 1	4
BA1M71-4	2	2	4	4		1-2-1-	1	4
BA1M70-46	1	2	4	4	4	1	2	2
BA1M67-2	2	2	4	4	**************************************	1	1	2
BA1M68-17		2, 3	4	4	2	1 1	1 2	2
BA1F67-82	4		. 4	4	1	4	2	4
BA1F6885	2	2	4	4	2	4	3	4
BA1M6564	1	2		4		-3	1	1
BA1M60-86	1	2	4	4	1	0	2	4
BA1F59-1	2	4(料理番組)	4	4	0	0	2	4
BA1M59-83	4		4	N		44	2	4
BA1M51-78	3		4	·		4	3	4
BA1M47-76	4	and the second s		4	2	4	2	4
BA1M35-84	3	and an arrange of the second processors	4	3		3	2	4

(凡例)	右37	1=ドラマ	0=ない	parameter provides to	market of the control	the expression property and the property of
\$2 11 5 4 10 10 10	凡例参照→	2=ニュース	1=よくみる		en a la mara en la seguir sueve par le pr	1=よく
		3=ドキュメンタリー	2=ときどきみる		1.36.3	2=ときどき
		4=その他 (番組名)	3=ほとんどみない		0=もって/とってない	3=ほとんどなし・
			4=まったくみない		1=よく聞く/読む	4=まったくなし
					2=ときどき聞く/読む	•
					3=ほとんど聞かない/読まな	VI
					4=まったく聞かない/読まない	<b>(</b> )

			職場·地域社	会での言語使用	
調査票番号	43	44	45	45-A	45 – B
項目 被対象者一覧	仕事上, 日本語 を話すか	仕事上、ポルト ガル語を話すか	地域日系団体また は日系の集まりへ の参加	日系団体または日系の集まりの	どのようなことばを使 うか
数对来有一克\ BA1M99-79	1	1	2	*	
BAJF91-81	1	2	1 2	<b>.</b>	102-1033
BA1F89-34	i	2	2	*	2-38-303
BA1F88-33	1	Ň	l n	*	20,43344 0.49
BA1F88 49			<del>                                     </del>	カラオケ会	1-05-5
BA1F87-62		-	1 2	*	
BA1M87 63	2	1	<u>î</u>	自治会·文教·村会	1
BA1F83 - 36	i i	2	<del> </del>	老人会、アリアンサ連合会/俳句の会	1
BA1M84-57	1 1	2	l i	自治会・文教・村会	1
BA1F84-70	i	2	2	<del>                                    </del>	
BA1M83-107	2	1	l i	自治会·文教·村会/県人会支部会	1.94.24.74.
BA1M82-13	i i	1	2	*	<u> </u>
BA1M82-101	î	1	ī	自治会・文教・村会	1
BA1M82-8	1	2	1	自治会·文教·村会	3 3 4 4 4 4 4
BA1F81-72	i i	2	1	冠婚葬祭	2
BA1M81-75	1	2	2	*	
BA1F80-14	1	N	2	*	- 322-33
BA1M7999	1	1	1	自治会·文教·村会	3
BA1F79-104	2	2	2	*	
BA1F79-9	1	2		ゲートボール会	1
BAIM77-74	1	2	2	*	
BA1F767		1	2	*	-
BA1M76-22	1	man and the same has		自治会・文教・村会/ゲートボール会	1 2 1
BA1M76-97		2	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	自治会・文教・村会	1000
BA1F76-30	N.L.			and the second s	
BA1F74-23	provide manager to associate or age			ゲートボール会	2
BA1M73-55	2	1		自治会·文教·村会	
BA1M72-54		1		and the second s	
BA1M71-4	2		m mar i san familia ancienta de la companione de la compa	自治会・文教・村会	
BA1M70-46	vaga o sagaran <b>j</b> a sagaran sa			自治会・文教・村会	
BA1M67-2	· · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1		自治会·文教·村会	2
BA1M68-17	2		er er er som skrifterer er en en en er	自治会·文教·村会	2
BA1F67-82	1	a v i 🚺 v i s region	war war well war a sec	日本語学校	
BA1F68-85	<b>1</b>	<b></b>		婦人会	1
BA1M65-64	1	1 1		自治会・文教・村会/カラオケ会	2
BA1M60-86	1.	1	1	自治会·文教·村会	1
BA1F59-1	and any other in ¶ one is a second	1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -		婦人会	1
BA1M59-83	100	o versos <b>I</b> meneralie	1	自治会·文教·村会/日本語学校	1
BA1M51-78	i i i i i i i i i i i i i i i i i i i	2	2	- 1	
BA1M47-76	Î	2	2		
BA1M35-84	i i	N	1	野球体育部会	2

(凡例)		1=参加する	「*」は参加せず	1=日本語
<b>.</b>	1=話す	2=参加しない		2=日本語のほうが多い
	2=話さない			3=日本語とボル語が半々
				4=ポル語のほうが多い
				5=ポルトガル語

### (1) アリアンサー世

		職場·地域社	会での言語使用		
調査票番号	46	46 – A	47	48	48-A
項目	日系人のともだちは多いか	日系人のともだちとは どのことばで話すか	宗教	宗教活動・集会への参加	宗教活動での言語
<u>被対象者一覧\</u> BA1M99-79	1	1 . 1	プロテスタント	2	
BA1F91-81	1	i	プロテスタント	2	
BA1F89-34	1	1	生長の家	2	1 1017 <b>-</b> (0.04 50.05
BA1F8833	1	N	主義の家なし	<u> </u>	
BA1F88-49	i	1	プロテスタント	1	1
BA1F87-62	i i	l i	プロテスタント	i i	1
BA1M87-63	i	ì	プロテスタント	i	1
BA1F83-36	i	l i	カトリック	ĵ.	- 1
BA1M84-57	3	î	仏教	2	<del>                                     </del>
BA1F8470	3	l i	カトリック	2	
BA1M83-107	i i	i	仏教	2	1910 1011 1011
BA1M82-13	l i	2	仏教	2	
BA1M82-101	1	1	仏教	1	1
BA1M82-8	1	<u> 1                                   </u>	仏教	2	
BA1F81 - 72	i i	l i	プロテスタント	i	1
BA1M81 75	1	† 1	プロテスタント、仏教	2	-
BA1F80-14	1	l 1	仏教	2	
BA1M79-99	1		仏教	1	1
BA1F79-104	1	1	仏教	1	-1200
BA1F79-9	1	1 1	仏教	2	
BA1M77-74	i i	l ī	プロテスタント	2	1 1
BA1F76-7	ī	1	仏教	2	The second secon
BA1M76-22	1	2	仏教	1	1 1
BA1M76-97	1	3	仏教	2	- 1000
BA1F76-30	1	1	仏教	2	-
BA1F74-23	1	2	仏教	2	
BA1M73-55	1		なし	radiologic (transport of transport of the filter of the fi	
BA1M72-54	4	2	なし	era nindruale impaete cha successo superiori sprejatan	e e de comunicación de la comun
BA1M71-4	T T		プロテスタント	2	
BA1M70-46	2	2 6	プロテスタント		1
BA1M67-2		3 3 1	カトリック	2	•
BA1M68-17	1	2	仏教	2	
BA1F67-82	2	1	プロテスタント	2 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -	
BA1F68-85	1	1	仏教	2	-
BA1M65-64	2	3	仏教	2	
BA1M60-86	1	2	なし		5
BA1F59-1	1	1 1	仏教	1 1	1
BA1M59-83	2	2	プロテスタント	2	
BA1M51-78	2		仏教	2	
BA1M47-76	N	i water or a law of 1 miles of the first	仏教	2 400 1000	
BA1M35 84	2	3	仏教	2	

(凡例) 0=ともだちはいない1=ほとんど日系人2=日系人のほうが多い3=日系人と非日系人が半々4=非日系人のほうが多い5=ほとんど非日系人

1=日本語 2=日本語のほうが多い 3=日本語とボル語が半々 4=ポル語のほうが多い 5=ポルトガル語 1=参加する 2=参加しない ←左46-A 凡例参照

	L		机物 敬辞		日本語	能力意識					
調查票番号			49			. 50					
		日本	語の話す能	力		日本語の聞く能力					
項目				家庭で		ラジオの	テレビの		家庭で		
	政治経済	仕事の話	日常会話	の話	あいさつ	ニュース	ニュース	テレビドラマ	の話	あいさつ	
被対象者一覧				0786			^		D Z BC		
BA1M99-79	1	1	1 .	1	1	1	1	1	1	1.0	
BA1F91-81	1	11	1	1	1	1	11	1	1 4	1	
BA1F89-34	2	1	1 2	1	1	3	2	2	1	1.48	
BA1F88-33	4.	4	4	4	2	4	4	4	4	2	
BA1F88-49	2	1	1	1	1	1	11	1 1	1	1	
BA1F87-62	2	11	1	1	11	1	1	1	1	1	
BA1M87-63	11	1	1	11	1	1	11	1	1	1	
BA1F83-36	2	1	1	1	1	1	1	1	11	1	
BA1M84-57	1	1	11	11	1	11	1	11	11	1	
BA1F84-70	3	3	2	1	1	.3	3	3	1	1	
BA1M83-107	11	1	11	1	11	1	11	1	1	1	
BA1M82-13	2	2	2	1	11	2	2	2	1	1	
BA1M82-101	11	1	11	11	11	11	11	11	1	1	
BA1M82-8	1	11	1	1	11	1	1	1	1	1	
BA1F81-72	11	1	11	11	1	1	11	11	11	11	
BA1M81-75	N	1	1	1	11	1	1	1	1	1	
BA1F80-14	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1 2	
BA1M79-99	2	11	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1F79-104	3	2	1	1	1	1	1	1	1	*1"	
BA1F79-9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1M77-74	1	1	1	1	1	1	1	4 1	1	135	
BA1F76-7	1	1	1 .	1	1	1	1	11	1	1	
BA1M76-22	1	1	1		11	1		1	1	1	
BA1M76-97	1	1	1	1	11	1	11	1	1	1	
BA1F76-30	3	3	2	1	1	2	2	1	1	1	
BA1F74-23	3	3		1	1	2	2	11	1	1	
BA1M7355	1	1	1	1	1	1		1	1	1	
BA1M72-54	3	1	1		1	2	2	3	1	1	
BA1M71-4		1		1	1	1	1	11	1	1 1	
BA1M70-46	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	
BAIM67-2		1	1	1	11	1	1	1	1	1	
BA1M68-17			1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1F67-82		la calagrada	1	1	1		1	1	1.	1.0	
BA1F68-85	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1M6564	ade milane	iw par larger	1		1	1	1	1	1	1	
BA1M60-86	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1F59-1	3	1	1	1	1	2		2	1	1	
BA1M59-83	1	1	1	1	- 1		aria a <b>L</b> asaras		1	1	
BA1M51-78		1					1		1	1	
BA1M47-76	1	1		1			1		1	1	
BA1M35-84	- I-		1		1	1	1		1	4.1	

(凡例)

1=よくできる 2=だいたいできる 3=少ししかできない 4=まったくできない

					日本語	能力意識	支				
調查票番号		5.6	5	1	52						
	(0)()-86		日本語の	読む能力		n Sant	日本語の書く能力				
項目被対象者一覧	新聞·本	仕事の 書類	雑誌·漫画	友達・親戚 の手紙	回覧・お知らせ	ちらし・ 看板	仕事の 書類	仕事相手 への手紙	友達や親戚 への手紙	日記	メキモ
BA1M99-79	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA1F91-81	1	1	1	1	1	1	11	1	1	1	1
BA1F89-34	4	4	4	4.	4	4	4	4	4	4	4
BA1F88-33	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
BA1F88-49	1	1	1	1	1	1	3	2	2	2	1
BA1F87-62	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA1M8763	1	. 1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA1F83-36	. 1	1	1	1	1	1	1	1	11	1	1
BA1M8457	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA1F84 - 70	3	3	-3	2	2	2	4	3	2	2	2
BA1M83-107	1	1	1	1 1	1	1	1	1	1	1	1
BA1M82-13	1	1	1	1	1	1	N	N	1	1	1
BA1M82-101	1	1 1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA1M82-8	1	1	1	1 1	1	1	2	2	2	1	1
BA1F81-72	1	1	1	1	1	1	1	1 1	1	1	1
BA1M81-75	1	1	11	11	1	1	3	3	3	3	3
BA1F80-14	2	3	2	1	1	1	4	4	11	1	1
BA1M79-99	1	1	11	1	11	1_1_	2	1 1	11	1	1
BA1F79-104	3	3	3	1	1	1	3	3	3	2	1
BA1F79-9	. 1.	· 1	1	1	1	1	N	N	1	1	1
BA1M77-74	1	1	1	11	1	1	1	1	1	1	1
BA1F76-7	1	2	1	1	1	1	2	2	2	2.	2
BA1M76-22	1	1	1 1	1	1	1	1	1 1	1	1	1
BA1M76-97	1	1	1	1	11	1	1 1	1	1	1_1_	1
BA1F76-30	1	3	1	1	1	1 1	1	2	1 1	1	1
BA1F74-23	2	2	1	1	1	1	2	2	2	2	1
BA1M73-55	1	1	1	11	1	1	1_1_	11	1	1	1
BA1M72-54	2	2	1	2	2	2	3	2	2	2	1
BAIM71-4	1	1	1 1	1 1	1	1 1	1 2	1 2	$\frac{1}{2}$	1 2	2
BA1M70-46	2	1	2	1	1	2		$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	·
BAIM67-2	1	11	1	1 1	1	1 1	1 2	$\frac{1}{1}$	1	1 1	1 1
BA1M68-17	1	$\frac{1}{1}$	1 1	1 1	$\frac{1}{1}$	1 1	1 1	+ 1	1 1	1	1
BA1F67-82	1	1	1	CONSTRUCTION PROPERTY.		1 4 10 10 10 10 10	14 ST. 10 ST. 10 ST.	7 7 20 10 20 20 20		restational and	- 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1
BA1F68 - 85	2	2	2	1	1	1	2	2	2	2	2
BA1M65-64	11	1	1.	1	11	1	1	1	1	1_1_	1_1_
BA1M60-86	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	1
BAJF59-1	1	2	1	1	1	1	3	3	1	1	1
BA1M59-83	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA1M51-78	1	1	1	2 1	1	1	1	1	1	1	1
BA1M47-76	1	1	1	1	1 1	1	1	o processor in the second	in major 1 marian	1	1
BA1M35-84	1	1	1	1	1	1	1 1 2	1	1	1	1

[凡例]

1=よくできる 2=だいたいできる 3=少ししかできない 4=まったくできない

					ボルトガノ	語能力意!	戦				
調查票番号			53			54					
		ポルトカ	ル語の話す	卜能力		ポルトガル語の聞く能力					
項目 被対象者一覧	政治経済	仕事の話	日常会話	家庭で の話	あいさつ	ラジオの ニュース	テレビの ニュース	テレビドラマ	家庭で の話	あいさつ	
BA1M99-79	4	1	3	4	1	4	4	4	3	1	
BA1F91-81	4	<del>- 4</del> -	2	N	3	N	N	N	N	4	
BA1F89-34	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
BA1F88-33	4	4	4	4	4	4	4	4	4	6.4	
BA1F88-49	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	
BA1F87 = 62	4	4	2	2		4	4	4	4	1 1	
BA1M8763	2	1	1	1	1	2	2	2	1	1	
BA1F83-36	4	4	3	3	3	3	3	3	3	1	
BAIM84-57	3	3	. 1	1	1	2	2	2	1	1 1	
BA1F84-70	4	4	4	4	1	4	4	4	4	1	
BA1M83-107	4	2	1	1	1	3	3	3	2	1 1	
BA1M82-13	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	
BA1M82-101	3	3	2	1	1	3	3	3	1	1	
BAIM82-8	4	4	4	4	3	2	3	3	2	2	
BA1F81-72	4	4	4	4	1	4	4	4	4	7 FAL	
BA1M81-75	4	3	3	2	1	4	4	4	2	1	
BAJF80-14	4	2	2	2	1	. 3	2	2	2	1	
BA1M79-99	4	1	1	1	1	3	2	3	1	1	
BA1F79-104	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1F79-9	4	4	4	4	2	2	2	2	2	1	
BA1M77-74	4	3	3	3	3	4	4	4	3	2	
BAIF76-7	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	
BA1M76-22	2	1	1	1	1	2	2	2	1	1	
BAIM76-97	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	
BA1F76-30	4	4	3	2	2	3	3	2	2	1	
BA1F7423	4	4	3	3	1	3	3	3	3	1	
BA1M73-55	4	2	2	2	1	2	2	2	3	1	
BA1M72-54	. 3	2	2	2	1	2	2	2	2	1	
BAIM71-4	2	2	2	2	1	2	2	2	1	1	
BA1M70-46	2	1	2	1	2	2	2	1	2	2	
BAIM67-2	1	1	1	1	1 1	1	1	1	1	1.50	
BA1M68-17	2	1	1	1	11	1	1	1	1	1	
BA1F67-82	4	4	4	3	1	4	4	4	- 3	1	
BA1F68-85	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1	
BA1M6564	2	1	1	1	1	1	<b>1</b> 1	1	1	1	
BAIM60-86	4	3	3	3	3	3	3	3	2	1	
BA1F59-1	4	3	2	2		3	2	2	1	1	
BA1M59-83	4	3	2	2	1	3	3	3	2	- (1.5)	
BA1M51-78	4	4	3	4	3	4	4	4	N	3	
BA1M47-76	4	2	3	3	1	4	4	4	3	1	
BA1M35 84	2	2	2	2	2	3	3	3	2	1	

(凡例)

1=よくできる 2=だいたいできる 3=少ししかできない 4=まったくできない

# (1) アリアンサー世

The second secon			4 12 3		ポルトガ	レ語能力	了意識				***************************************	
調查票番号	A 2 a 2	94 /4 <u>44 - 14 /</u> 94	5.	5	7 1. 2	To the state of th	56					
	GARAGE SA	and and a second	ポルトガル語	の読む能力	aller on the country for	· barrens	ポルトガル語の書く能力					
項目被対象者一覧	新聞·本	仕事の 書類	雑誌·漫画	友達・親戚 の手紙	回覧・お知らせ	ちらし・ 看板	仕事の 書類	仕事相手 への手紙	友達や親戚 への手紙	日記	メモ	
BA1M99-79	4	4	Maria da Maria de Aresto d	4	3******	2	4	4	4	3	N	
BA1F91-81	N	N	N	3	N	- 2	N	N	N	N	3	
BA1F89-34	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
BA1F88-33	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
BA1F88-49	4	4	4	4	3	3	4	4	4	4	4	
BA1F87-62	4	4	4	4	4	2	4	4	4	4	4	
BA1M87-63	3	2	3	3	1	1	3	3	3	3	3	
BA1F83-36	4	3	4	3	3	3	4	4	3	3	3	
BA1M84-57	2	2	2	3	1	1	2	2	3	3	1	
BA1F84-70	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
BA1M83-107	. 3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	
BA1M82-13	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	
BA1M82-101	2	3	2	2	2	1	2	2	2	2	1	
BA1M82-8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1F81-72	4	4	4	2	2	2	4	4	4	4	2	
BA1M81-75	4	4	4	4	4	2	4	4	4	4	4	
BA1F80-14	3	3	3	2	2	2	3	3	2	3	2	
BA1M7999	3	3	3	2	2	2	4	. 3	3	3	3	
BA1F79-104	3	2	2	1	1	1	2	1	1	1 - 7	1	
BA1F79-9	4	4	4	4	4	3	4.	4	4	4	4	
BA1M77-74	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	
BA1F76-7	2	2	2	2	2	1	3 .	3	2	2	2	
BA1M76-22	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	
BA1M76-97	1	1	1	1	1	1	4	4	4	4	4	
BA1F76-30	3	N	3	3	2	1	4	4	4	4	4	
BA1F74-23	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
BA1M73-55	4	3	3	1	2	2	4	4	4	4	1	
BA1M72-54	4	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	
BA1M71-4	2	2	2	2	2	1	4	3	3	3	2	
BA1M70-46	1	1	1	2	2	2	2	2	2	1	1	
BA1M67-2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
BA1M68-17	2	1	1	<u> </u>	1_1_	1	1 1	2	1	2	1	
BA1F67-82	4	4	4	4	3	2	4	4	4	4	3	
BA1F68-85	4	3	3	3	2	2	4	4	4	4	2	
BA1M65-64	2	2	2	1	1	1	2	2	1	1	1	
BA1M60-86	4	3	3	2	2	2	4	4	4	4	2	
BA1F59-1	3	3	3	1	1	1	4	4	4	4	2	
BA1M59-83	3	3	3	2	2	1	4	3	3	3	2	
BA1M51-78	4	4	4	3	3	2	4	4	4	4	3	
BA1M47-76	4	4	4	4	3	3	4	4	4	4	4	
BA1M35-84	3	3	2	2	2	1	3	3	2	3	1	

(凡例)

1=よくできる

2=だいたいできる

3=少ししかできない

4=まったくできない

. Angele galan i seleta a par Salanda			本語及びポルトガル	
調查票番号	57	57-A	58	58-A
項目被対象者一覧	これから日 本語を習 いたいか	これから日本語を習いたい理由	子供・孫に日本語を 習わせたいか	子供・孫に日本語を習わせたい理由
BA1M99 - 79	2		2	4
BAIF91-81	2		ĺ	4
BA1F89-34	2		3	
BA1F88-33	2	l	4	<del>-</del>
3A1F88-49	2		i	4
BA1F87-62	2	<u> </u>	i	4.5
BA1M87-63	2		1	6(日本語を残したい)
BA1F83-36	1	3. 4. 5	i	6(日本人の値をしていて日本人の血が流れているか
BA1M84-57	1	5	3	CHAPOSING CHAPOSING DELVICE ON
BA1F84 - 70	2	<u> </u>	i	6(若いうちに何でもやるべきだ)
BA1M83-107	2	<u> </u>	1	6(親子で日本語でしゃべってくれればよいと思う)
BA1M82-13	2		2	6(よりよい生き方を考えるため、心のあり方に自信を持つため
BA1M82-101	2		1	6(同じ年頃の人がみな日本語学校に通っているから
BA1M82-8	2		i	1, 3, 4
BA1F81-72	2		1	2, 3, 4, 5
BA1M81-75	2		1	14 To the second
BA1F80-14	1	3, 4	1	1,6(孫が言うから)
BA1M79-99	2		i i	
BA1F79-104	2	-	1	
BA1F79-9	1	7(日記を書く時、漢字が書けないから)	1 1	1, 4, 5
BA1M77-74	1	7(年をとったのでボケ防止に)	1	4, 5
BA1F76-7	2	- · ·	2	[1
BAIM76-22	2		2	5,6(日本人のよさをつかんで)
BA1M76-97	2		1	6(気持ちの面でつながりをもてるから)
BA1F76-30	2		2	4,6(自分と会話ができるようになる)
BA1F74-23	2	1	2	4
BA1M73-55	2	8 1 A 12 <del>-</del> 1 13	1	[4
BA1M72-54	2		2 6	1, 2, 3
BA1M71-4	2	-	1	4, 5
BA1M70-46	1	3, 4, 5	. 1	3, 4, 5
BAIM67-2	2	•	1	3, 4, 5
BA1M68-17	2	- 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1	1	6(日本人の顔しているから)
BA1F67-82	2	•	1	4, 5
BA1F6885	2	y de la companya de	2	6(日本語を覚えているといい。孫と日本語で会話できたらいい)
BA1M6564	2	<u>.</u>	1.	2, 4, 5
BA1M60-86	2	-	1	5,6(日系人を自覚。日本語を話さないとブラジル人。 変わらなくなる)
BA1F59-1	1	7(難しい漢字を覚えたい)	1	4
BA1M59-83	2		1.	4, 5
BA1M51-78	1	7(忘れないように)	i	4, 5
BA1M47-76	1	5	i i	
BA1M35-84	1	5	i	3, 4, 5

[凡例]	1=はい	1=就職につながる	1=ぜひ習わせたい	1=就職につながる
	2=いいえ	2=いまの仕事・専門に必要	2=本人が希望するなら	2=いまの仕事・専門に必要
	•	3=最新情報知れる	3=習わせるつもりなし	3=最新情報知れる
•		4=日系人の祖先のことば	4=わからない	4=日系人の祖先のことば
		5=日本文化への興味	** <b>!</b>	5=日本文化への興味
		6=日本語教師希望		6=その他(具体例)
		7=その他(具体例)		,

######################################	日本語及びポルトガル語教育意識				
調査票番号	59	60	61		
項目 被対象者一覧	日系の若い世代が日本語を 学ぶのは必要か	地域日本語学習環境の問題点	日系人なら日本語が 話せるのは当然か		
BA1M99-79	1	7(ない)	1		
BA1F91-81	1	7(わからない)	2		
BA1F89-34	4	7(わからない)	3		
BA1F88-33	4	7(わからない)	3		
BA1F88-49	1	3			
BA1F87-62	1	7(子供の意欲が薄い)	1		
BA1M87-63			1		
BA1F83-36	and marked and a single 1	5 company and the control of the con	2		
BA1M84-57	2	4, 6	2		
BA1F84-70	adding a factor of the state of	4	1		
BA1M83-107	<u> </u>	5	2		
BA1M82-13	rinaria regularity autoria, ama amana a <b>2</b> menara menara menara di diasa	4 is a sum to the constraint of the property of the constraint	1		
BA1M82-101	where the part is a common tank $\prod_{i \in \mathcal{I}_i} \mathcal{I}_i$ where is trajective in $\mathcal{J}_i$ is	7(わからない)	1		
BA1M82-8	radional a traffic quadrania catraminament del filònica meneral come estre e a strafficación	6 Alexandri (VI) alexandri (VI) alexandri (VII) alexandri (VII) alexandri (VIII) alexandri	1		
BA1F81-72	producer company of the common formation persons of the contract contract of the contract of t	[4, 6 collegement among the following and a summer of the collegement	2		
BA1M81-75	entrophysiologic propriesso, significant of the control of the con	7(ない)	AND RESIDENCE OF THE PROPERTY		
BA1F80-14	sage in reading to the section of th	7(わからない)	1		
BA1M79-99	1	5,7(親の意識が下がり日本語を家庭内で使わない)	1		
BA1F79-104	1	7(ない)	1		
BA1F79-9	and the second section of the	6,7(ブラジル語は書けるが話せない)	1		
BA1M77-74	de la companya de la	1, 2, 4			
BA1F76-7	2	6	1		
BA1M76-22	1;	7(ない)	3		
BA1M76-97	1	7(親の意識改革が必要)	1		
BA1F76-30	2	5, 7(ない)	1		
BA1F74-23	1	7(ない)	1		
BA1M73-55	1	7(ない)	1		
BA1M72-54	1	1, 3, 5	1		
BA1M71-4	1	7(日系人として誇りを持たない)	2		
BA1M70-46	1	3, 5	1		
BA1M67-2	1	3, 4, 5	1		
BA1M68-17	2	1, 3, 4	, 3		
BA1F67-82	1	4	1		
BA1F68-85	2	4, 5, 6			
BA1M65-64	2	5, 6, 7(教師に対する報酬) 1			
BA1M60-86	1	2, 4, 5			
BA1F59-1	1	5, 6			
BA1M5983	1	1, 4, 5	И		
BA1M51-78		4,7(混ぜて使う)	1		
BA1M47-76	and the comment of the comment of the	4,5			
BA1M35-84	2	1, 2, 4, 5 man or proper and prop			

(凡例) 1=必要 2=本人の希望しだい 3=必要ない 4=わからない 1=メリットがない 2=日本の影響力少ない 3=学校・教師のレベル問題 4=日常的に使わない 5=親が日本語教育に熱心でない 6=むずかしい

7=その他(具体例)

1=同意する 2=同意しない 3=わからない

調査票番号	62	63	64	65	66
阿旦赤面々	02	33	<del>                                     </del>		200
~ 項目			material material	プラジルの日本語と日	
	訪日経験	訪日目的	日本語は日本で	本の日本語のちがい	日本在住経験
女对象者一覧			通じたか	はあったか	
A1M99-79	ある(1回)	親戚訪問	1/32/1	2	ない
A1F91-81	ある(2回)	便威訪問、日本とブラジル交流があった頃	1 3 3 3 5 5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2	ない
A1F89 - 34	ある(1回)	親威訪問	Together	2	ない
A1F88-33	ない	-	100 violence (12)	-;	• 47 July 1
KA1F88-49	ない	-	- 3		
BA1F87-62	ある(1回)	観光, 親戚訪問	1	2	ない
3A1M87-63	ある(2回)	観光	1	1:	ない
A1F83-36	ある(1回)	観光, 親戚訪問	1 31	1	ない
3A1M84-57	ある(1回)	観光, 親戚訪問	1 ,	2	ある(4ヶ月/茨城)
3A1F84-70	ない	- Table September 1997 - 1999 - 1999			1 100 = 100
3A1M83-107	ある(1回)	観光、親戚訪問、墓参り	i i a markin <b>1</b> marking m	2	ない
3A1M82-13	ない	Segmentalistic and control of the co			
A1M82-101	ない	paggagan, anarogonorado, y hidesardesar 👚 — 50 discresor - e escar - e e cadi		ere en	er o sandringen garage en
RA1M82-8	ある(1回)	富山県の訪問団と親戚訪問	Constitution which provide Charles are sense.		ない
IAIF81-72	ある(1回)	親戚訪問	n voca i sa		ない
SA1M81-75	ある(2回)	仕事・ビジネス	s community of the section of the se		ない
tA1F80-14	ある(1回)	観光, 親戚訪問		<u>, a que para la para como 2</u> en en acomena de seco	ない
3A1M79-99	ない	appropriate to a contraporario of the dispersion of the contraction of	and the second section of the second	alangsi i i i ing kalamatan da ang kalamatan	
BA1F79-104	ない			Andrew Company	
BA1F79-9	ない		gana aya galegia a kan	egy and designed to provide the second and the seco	and the following state of the
3A1M7774	ある(2回)	仕事・ビジネス			<i>1</i> さい
3A1F76-7	ある(1回)	親威訪問	1	2	けない
3A1M76-22	ある(2回)	村の招待	1	2	tsvi
3A1M7697	ある(1回)	基参り	1	1	ない
3A1F76-30	ない				1 4 700 176 176
BA1F74-23	ある(2回)	親戚訪問, 村の招待	1	2	ない
3A1M73-55	ある(2回)	観光, 親戚訪問	1	2	ない
1A1M72-54	ない	<del>-</del>	7 <b>-</b> 0 0 1	-	
3A1M71-4	ある(3回)	親戚訪問	1	1	ある(3ヶ月/北海道)
3A1M70-46	ない	_	The A. Paris	-	1.74 - 1.791.67
3A1M67-2	ない	-		-	35-48 33 (4)
BA1M68-17		親戚訪問	1	2	ない
A1F6782	ある(10回)	親戚訪問,仕事・ビジネス	1	1	ない
BA1F68-85	ある(1回)	親戚訪問		······································	ない
3A1M65-64	ない	-	-	-	•
3A1M60-86	ない	(B) A B B B B B B B B B B B B B B B B B B		 	** 20 20
BA1F59-1	ある(1回)	観光	1 2 3 3 3	1	ない
CONTRACTOR OF THE PERSON NAMED IN COLUMN 1	ある(5回)	親戚訪問、仕事・ビジネス	1 4 4	1	ある(24ヶ月/東京)
3A1M51-78	_	親戚訪問、仕事・ビジネス	1	2	ない
3A1M47-76		親戚訪問、デカセギ	1 1	1	ある(12ヶ月/佐賀)
3A1M35-84		新婚旅行	1	1	ない

 [見例]
 「ある」の場合, (訪日回数)
 1=おまり通じた
 「ある」の場合, (在住期間/在住地)

 2=まあまり通じた
 2=なかった
 (在住期間/在住地)

3=すこしだけ通じた 4=通じなかった 5=わからない

### (1) アリアンサー世

The process of the Control of the Co		コロニア語をめぐる意識			
調査票番号	66-A	66-B	66-C	66-D	67
項目					
	日本在住目的	日本在住時に日本語を勉強したいと思ったか		日本へのイメージの変化はあったか	
被対象者一覧	STANDARD CONTRACTOR AND	aliente acomeio e des forces estados de la comercia de la leg	en a consegue de la c		
3A1M99 79 3A1F91 81				-	1 2
BA1F89 - 34	dagga ang sada masa at an ara ara ara ara ara	Andrew Control of the			2
BA1F88-33					3-40-20-20-20-20-20-20-20-20-20-20-20-20-20
BA1F88-49	- Control of the Cont	-			1
BA1F87-62					I
BA1M87-63					I approved
BA1F83-36	pagar garagaran ay ra 😎 asar ta sasar marakan sana	en 1986 e 19. Japan i en 1986 por Milionopor de Esperante de 1986 per en 20	And a construction of the		2
BA1M84-57	N	2	3	3	2
BA1F84-70	IN .	2	3	3	1
BA1F84-70 BA1M83-107	imaka yana wikito √o an a yasten da k	and the commence of the commen			1
BA1M82-13		entre de la composition della		-	1 1
BA1M82-101		·			1
BA1M82-8	-		- 0. 0.00		1
BA1F81-72		-	ļ ————————————————————————————————————		2
BA1M81-75	-				1
					<u> </u>
BA1F80-14 BA1M79-99				-	1
BA1F79-104					1
BA1F79-9		*		_	1
BA1M77-74					2
BA1F76-7	_	_	<del>                                     </del>	-	i i
BA1M76-22		•	-		i
BA1M76-97			<del>                                     </del>		<u> </u>
BA1F76-30	ADMINISTRAÇÃO DE CONTRACTOR AND ANTICONO	-	_	_	2
BA1F74 - 23		•	-		1
BA1M73-55		-	<u> </u>	-	î
BA1M72-54		_			i i i i i i i i i i i i i i i i i i i
**********	親戚訪問	N	N	2	1
BA1M70-46	-	-	-	-	1
BA1M67-2		4	- 3.3		1
BA1M68-17	-	+	-	-	1
BA1F67 82	-			- No. 18	1
BA1F68-85	-	-	-	* : *: *: *: *: *: *: *: *: *: *: *: *:	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
BA1M65-64	-	-	-	-	1
BAIM6086					1
BA1F59-1	-	······································	•	-	1
Angre, at the contract of the	皮革工芸の技術習得	2	4	3	1
BA1M51-78		-			2
BA1M47-76	デカセギ	2	3	2	1
BA1M35-84		-	-		1

 [只例]
 1=思った
 1=かなり
 1=ある

 2=思わなかった
 2=すこし
 2=ない

 3=わからない
 3=ほとんど
 1=良くなった
 3=わからない

 4=わからない
 2=悪くなった
 3=変わらないが、客観的になった

 4=わからない
 4=わからない

	個人属性2 一世言語生活史		
調査票番号	15-A		
項目			
被対象者一覧	どのようなガイジンと、どのような機会に接触があったか		
	カマラーダ。		
BA1F91-81	and the state of t		
BA1F89-34			
BA1F88-33	ネゴシオ		
BA1F88-49			
BA1F87-62	and the second second and the second		
BA1M87-63			
BA1F83-36			
BA1M84-57	プラジル人の子供と話したり遊んだりしたとき		
BA1F84-70	移住地に来た人		
BA1M83-107	労働者として雇用したブラジル人と仕事中に		
BA1M82-13	プラジル人の雇い人, 原始林開拓時		
BA1M82-101	日本人に頼まれて仕事をしていたカボクロと		
BA1M82-8	ことばがわからず、ブラジル人カマラーダと喧嘩していた		
BA1F81 - 72			
	監督, 住人, 隣人, 労働者		
BA1F80-14			
	カボクロ,カマラーダという階級的に低い人たちで自分たちの労働者として接していた		
BA1F79-104			
BA1F79-9			
BA1M77-74	ブラジル学校		
BA1F76-7			
BA1M76-22			
BA1M76-97			
BA1F76-30	農場の使用人・労働者。会話はなかった		
BA1F74-23			
BA1M73-55	プラジル人仕事仲間,パトロン,農場で		
BA1M72-54	道端で、買い物で		
BA1M71-4	ガイジンのコロノ		
BA1M70-46	プラジル学校, 植民地の非日系ブラジル人労働者		
BA1M67-2			
BA1M68-17			
BA1F67-82	農場に来るブラジル人。美術館傾斜		
BA1F68-85	To the second se		
	仕事中は話しをすることはなかったが,夜や祝日を利用して,青年たち10人ぐらいのグループを作って,ブラジル人		
BA1M6564	の各家庭を回って、ブラジル語を覚えていった。ブラジル人と交流したいという希望があった。ブラジルの方言やブラジルの文化を覚え、ブラジル人社会に容け込んでいった		
BA1M60-86	日本人パトロンの下で働くエンプレガーダと		
BA1F59-1			
BA1M59-83	  小学校の夜学。生徒は皆ブラジル人だった		
BA1M51-78			
BA1M47-76	仕事をするとき労働者と		
BA1M35-84	野球関係		
DATINGS-64	Sal with the No.		

	個人属性2 一世言語生活史
調査票番号	17-A
「項目	76 D. W. W. 190 L. L. L. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.
被対象者一覧	移住当初、どのような人とどのような機会にポルトガル語を使用したか
BA1M99-79	
BA1F91-81	
BA1F89-34	
BA1F88-33	
BA1F88-49	
BA1F87-62	
BA1M87-63	
BA1F83-36	
BA1M84-57	ブラジル人の子供と話したり遊んだりしたとき
BA1F84-70	and the state of t
BA1M83-107	労働者に対し、単語を並べるだけで、マンダしていた
BA1M82-13	
BA1M82-101	Experience of the second of th
BA1M82-8	The state of the s
BA1F81-72	
BA1M81-75	監督, 隣人
BA1F80-14	
BA1M79-99	andow policy with the control of the
BA1F79-104	AND SERVICE CONTROL OF THE SERVICE CONTROL OF
BA1F79-9	
BA1M77-74	プラジル学校
BA1F76-7	
BA1M76-22	
BA1M76-97	
BA1F76-30	
BA1F74 - 23	
BA1M73-55	
BA1M72-54	the second secon
BA1M71-4	カルトリオ
BA1M70-46	非日系の子どもたちと植民地内のブラジル学校で
BA1M67-2	
BA1M68-17	
BA1F67-82	お店で買い物をするとき。旅行中
BA1F68-85	
BA1M6564	仕事中は話しをすることはなかったが、夜や祝日を利用して、青年たち10人ぐらいのグループを作って、ブラジル人の各家庭を回って、ブラジル語を覚えていった。ブラジル人と交流したいという希望があった。ブラジルの方言やブラジルの文化を覚え、ブラジル人社会に溶け込んでいった
BA1M60-86	隣のファゼンダに日本から来ていた人がいてそこにレイチをとりにいくときなどに
BA1F59-1	
BA1M59-83	
BA1M51 - 78	友人
BA1M47-76	
BA1M35-84	

	個人属性2	一世言語生活史
調査票番号	<u> </u>	18-C
7		
	大人になってから、どういうところでポルトガル語	大人になってから、なぜポルトガル語を学習したか
	を学習したか	707 (19 a) (a) 3) a (19 ) (32) abb ( ) [ 10 ) (2)
BA1M99-79		
BA1F9181 BA1F8934		
BA1F88-33		
BA1F88-49		
BA1F87-62		
BA1M87-63	夜学。 ブラジル人の教師	勉強したかったが,昼間は働いていたので夜学に通った
BA1F83-36		子供たちが育っているころだったから
BA1M84-57	独学で書かれた本で勉強した	ポルトガル語を知っていたほうが交渉できる
BA1F84-70		Companies and the Companies of Section 1995 and
BA1M83-107	the second of the second secon	
BA1M82-13		
BA1M82-101		and the second of the second o
BA1M82-8		
BA1F81-72		
BA1M81-75		
BA1F80-14		
BA1M79-99	provided to the second of the	
BA1F79-104	71 7	
BA1F79-9		
BA1M77-74	war ingan nganangan kanap agas a wawasanganawan ing ji sa iliyanan ing sa iliyana iliyana sa iliyana sa iliyan	
BA1F76-7	The second secon	and the control of th
BA1M76-22		
BA1M76-97		
BA1F76-30		
BA1F74-23		
BA1M73-55		The state of the s
BA1M72-54	夜学。第一アリアンサ内のブラジル学校	仕事に役立つ
BA1M71-4	東京の力行会	
BA1M70-46		
BA1M67-2		
BA1M68-17		The state of the s
BA1F67-82		Annual Programmer (a) in the control of the control
BA1F68-85		
BA1M65-64		
BA1M60-86	日本の力行会, ブラジルではパトロンが夜教えてくれた	日本では、ブラジルに着いてブラジル語を話せないと何かあっ
BA1F59-1	夜学。アンゼ耕地(ファゼンダ)が日本人のポルトガル	プラジルに来た以上、ポルトガル語を覚えなければならないと
	語教師を招聘 よ 労けの本労	思った プラジルに来たから
BA1M5983 BA1M5178	小学校の夜学	ノノマルド大にから
BA1M31-76		
	No. object to No. 11 Nov.	N = 1 - 2
BA1M35 - 84	道,街頭,日常生活	必要に迫られて

調査票番号		一世言語生活史 20-D
調宜宗备亏	20-A	20-0
<b>)</b> 項目	子供移民・通学した日本(語)学校はどういう機関	子供移民・通学した日本(語)学校ではどういう勉強を
被対象者一覧	だったか	したか
BA1M99-79		
BA1F91-81		
3A1F89-34		
3A1F88-33		
3A1F8849	20 14 15 15 15 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16 16	
BA1F87-62	— на вънка до на траниция на	
BA1M87-63		
BA1F83-36	第三アリアンサ自治会	歴史, 地理, 国語, 歌, 遊戲, 絵
3A1M84-57		
3A1F8470		
3A1M83-107		
BA1M82-13		
3A1M82-101	地区の日本語学校	国語, 算術
BA1M82-8	日本人会·富山村	国語, 算術, 絵画, 歌, ブラジル語(ブラジル人教師)
BA1F81 - 72	ブラジル学校に併設	ポルトガル語、読み書き、絵、歌、歴史、地理、体育
BA1M81-75		
BA1F80-14	第三アリアンサ日本語学校	
BA1M79-99	第二アリアンサ日本人会	日本語, 地理, 歴史, 算術, 理科, 日本から来た教師
BA1F79-104	第二移住地日本語学校	日本語, 地理, 歷史, 算術, 清掃
BA1F79-9	日本人会・富山村	国語, 算術, 絵画, 歌, ブラジル語(ブラジル人教師)
DA13477_74	チエテの学校、ブラジル拓殖連合会	国語, 算術, 修身, 図画, 唱歌、
BA1F76-7	第二アリアンサ日本語学校	国語, 算術, 歷史, 歌
BA1M76-22	オー/ // マノ日不昭丁以	昔の教科書、絵画、歌
BA1M76 97	The Control of the Co	
BA1F7630	第三アリアンサ尋常小学校。教師は日本で教師経験あり	
BA1F74-23		
BA1M73-55		
BA1M72-54		
BA1M71-4	入植地の教会の日曜学校	<b>聖書</b>
BA1M70-46	the contract of the state of th	
	夜学。地区に師範学校出の先生がいた	国語読本(一の巻-二の巻), 算術を少々
BA1M68-17		
BA1F67-82		
BA1F68-85	the course of the contract of the course of	
BA1M65-64	· The state of th	
BA1M60-86		
BA1F59-1	Andrew construction to the control of the control o	A CONTRACTOR OF THE STATE OF TH
BA1M59-83		
BA1M51-78	Parameter and the second of the control of the cont	
BA1M47-76		
BA1M35-84		

	個人属性2 一世言語生活史	メディア・娯楽と言語使用
調査票番号	20-D	41-A
項目	子供移民・通った日本(語)学校では、どういう行事があったか	どのようか日本の歌をきくか
被对象者一覧	1 の多人 塩 カビローハー・サス くは、こ グ・ハーテル の カル・	C-7-2-7-4-7-4/CC (V
BA1M99-79		
BA1F91-81		l H o F
BA1F89-34 BA1F88-33		昔の歌
BA1F88-49		流行歌、美空ひばり
BA1F87-62		復和
BA1M87-63		昔の流行歌
BA1F83-36	天長節, 入植祭, 演芸会	唱歌
BA1M84-57		影をしたえて、酒は飲んだか、ため息
BA1F84-70		昔の歌
BA1M83-107		
BA1M82-13		(RESERVACIONE)
BA1M82-101	行事はなし	AND AND THE SAME OF THE SAME O
	運動会,入植祭,盆踊り,村芝居	演歌
	運動会、お祭り、クリスマス、パスコア	美空ひばり
	連剔去、お奈り、クリハマハ、ハベー)	天全の行り
BA1M81-75		演歌、美空ひばり
BA1F80-14	元旦には教育勅語を読む。天長節には運動会,紀元節,入植祭	民謡、浪花節、村田ひでお
BA1F79-104		紅白歌合戦
	運動会, 入植祭, 盆踊り, 村芝居	演歌
		Programme and the second secon
BA1M77-74 BA1F76-7	교로스	(in the second
BA1M76-22		
BA1M76-97	MAA, AC, AS ELVE OF AS ESTABLISHED AND A SECOND OF ASSESSMENT OF ASSESSM	民語
	天長節, 入植祭, 踊り	演歌 4
BA1F74 - 23		のど自慢
BA1M73-55		<b>演歌</b>
BA1M72-54		昔の歌、たばたよしお、おかはるお、しょうじたろう
BA1M71-4		昔の流行歌
		のど自慢、紅白歌合戦
BA1M70-46		
BA1M67-2		演歌
BA1M68-17		詩吟
BA1F67-82		井上ヨウスイ,ユーミン
BA1F68-85		
BA1M65-64		演歌
BA1M60-86		RAS CONTRACTOR OF THE PROPERTY
BAIF59-1		演歌
		すべて、合唱曲、歌曲
BA1M59-B3 BA1M51-78		ファン、ロ・日田、 <b>秋</b> 田
BAIM51-76		フォークソング
		The state of the s
BA1M35-84		ポップス, サザンなど

	メディア・娯楽と言語使用	職場・地域社会での言語使用
調査票番号	42-A	43
~~	energy and a few developments of the second	en and the state of the state o
被対象者一覧	カラオケでどのような歌をうたうか	仕事上の日本語使用は、どういう機会か
BA1M99-79	grander glicken, y og på er glanderske kredet og pærkk gjelikke stylleten sjølikke end og klicke på e	日常
BA1F91-81		会話は全部日本語
BA1F89-34	and the second of the second o	
BA1F88-33		
BA1F88-49	ellen in der versche der der sterne in der versche der	
BA1F87-62		
BA1M87-63	Construction of the Constr	
BA1F83-36	aggar 2 - 1 - 19 y seil maratin - 10 was allowed during supplying the more in the contract of	生徒
BA1M84-57		日本人の組合の人と交渉するときのみ
BA1F84 - 70		日系の夫の父母
BA1M83-107		
BA1M82-13	Approximate the second of the	日系の息子
BA1M82-101		· ·
BA1M82-8		日系の息子・孫
BA1F81-72		
BA1M81-75		
BA1F80-14		
BA1M79-99	we age to the age we come to the content of the content of the content of	バールでの日本人客とは日本語で
BA1F79-104		
BA1F799	generation of the control of the con	
BA1M77-74	and the second second property of a period company of a fact of a second second contract of a second	
BA1F76-7		日系の主人, 日系運送業者
BA1M76-22		相手による
BA1M76-97		全て日本語
BA1F76-30		170+
BA1F74 - 23	演歌	日系の夫
BA1M73-55	JA RIV	
BA1M72-54		教会の日本人牧師
BA1M71-4		· 在中国的特别是一种国际企业中,不管的一种国家企业的企业的企业。
BA1M70-46		産業組合の事務所の人
BA1M67-2		
BA1M68-17	都はるみ	
BA1F67-82		
BA1F68-85		家族と。卵を買いに来る日系人と
BA1M65-64	演歌	上役の人、組合の人、お客さんには一世二世が多い
BA1M60-86		家族と
BA1F59-1		日系二世の夫
BA1M59-83		日本語教師として
BA1M51-78		連絡
BA1M47-76		農作業で子供たちと
A STORY OF THE STORY		日本語のみ
BA1M35-84		HTPV°

	職場・地域社会での言語使用
調查票番号	44
/項目	
被対象者一覧	仕事上のポルトガル語使用は、どういう機会か
BA1M99-79	カマラーダを使うとき
BA1F91 —81	English and American and Americ
BA1F89-34	and the second of the second o
A1F88-33	The second of th
BA1F88-49	
A1F87-62	and the control of th
BA1M87-63	
3A1F83 - 36	
BA1M84-57	the second of th
3A1F84 - 70	
3A1M83-107	ヴァケイロと
IA1M82-13	ブラジル人の使用人、ネゴシオの際
A1M82-101	カマラーダ、肥料を買う業者、仲買人
IA1M828	
BA1F81-72	
A1M81-75	
A1F80-14	
	バールの客の95%は非日系ブラジル人、5%が日系人、日系人でも二世とはポルトガル語でしゃべる
A1F79-104	The state of the s
A1F79-9	the same of the sa
A1M77-74	
	ガイジンの使用人
	ブラジル人の使用人
IA1M76-97 IA1F76-30	
A1F74-23	The second section is a second
	ブラジル人の雇い人、養鶏場で
BA1M72-54	ブラジル人の雇い人
9A1M71-4	プラジル人のカマラーダ、商談ネゴシオの際、役所で書類を作る場合
3A1M7046	(鶏卵運送業)配達先、同業の運転手と道路情報の交換
A1M67-2	カマラーダ7名, コンプラドール
BA1M68-17	使用人,町で仕事の交渉するとき
A1F67-82	友達
A1F68-85	餌やり、卵遷びをするプラジル人と
BA1M65-64	プラジル人、日系人でも日本語が話せない人
BA1M60-86	トランスポルテのブラジル人
IA1F59-1	ガイジンエンプレガードと少し会話
3A1M59-83	音楽のアドヴァイスを受けるとき。弦楽器の講習を受けるとき。弓場に興味のあって弓場を訪ねるブラジル人と話すとき
A1M51-78	
A1M47-76	AND THE PROPERTY OF THE PROPER
	プラジル人が来たとき

	日本語教育及びポルトガル語教育意識
調査票番号	61
項目	「日系人なら日本語を話すのは当然だ」という意見に同意する理由
被対象者一覧	
BA1M99-79	日本語を使わなければ日系人ではない
BA1F91-81 BA1F89-34	The second control of
BA1F88-33	
BA1F88-49	
BA1F87-62	日本語を教えたほうがいい
BA1M87-63	日本人なら日本語を話し、日本文化がブラジルに取り入れられるぐらいにならないと、日本人という意識が薄れる
BA1F83-36	
BA1M84-57	ting and the state of the state
BA1F84-70	日本語しか話せない人と話ができるし、やはり日本人だから
BA1M83-107	
BA1M82-13	押し付けるごとはできないが,日本語を学んでほしい
BA1M82-101	日本人だから
BA1M82-8	
BA1F81-72	
BA1M81-75	当たり前・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
BA1F80-14	日本人の顔をしているから
BA1M79-99	日本文化の吸収は日本語を通じて行われるから
BA1F79-104	日本人だから
RA1F799	and the first of the property of the control of the
BA1M77-74	当然
BA1F76-7	孫と日本語で話したい。ガイジンの嫁が日本語を話してくれるのがうれしい
BA1M76-22	
BA1M76-97	ことばは心を結ぶもの
BA1F76-30 BA1F74-23	日本人だから英語より日本語を勉強したほうがよい。自分がポルトガル語を勉強しなかったことを後悔しているから 日本人だから日本語を話せたほうがよい
BA1M73-55	ロータ人にから日本語を記せては、からない。 ことばを話せないと、日本の伝統的な誇り、大和魂が身につかない。
BA1M72-54	日本人同士で話すときや日本に行くときなどに役にたつ。アリアンサのような日本人が多いところでも役に立つ
BA1M714	
BA1M70-46	ドイツ系人は今もきちんとドイツ語を話している。日系人も日本のことを聞かれたら日本語で説明できるよう日本語を話せたほ
	うがいい
BA1M67-2 BA1M68-17	日本人の顔をしていれば、日本語を話せないのは恥。読み書きはできなくてもいい
BA1F67-82	ブラジルは多国籍、そのなかで日本人の血を受けているのだから、日本人としての文化を身につけるためにも言語は必要
BA1F68-85	日本人の顔をして日本語が話せないと、日本人とあったときなど本人があとで困る
BA1M65-64	日本語を話すことは先祖の文化ついで行くということ。日本語を話さなければだめだという自覚をもつべき。日本人の顔をしていて日本語が話せないのは不様だ。父母が日本語を話すという。日本語を勉強する良い環境がそろっているから。その条件/環境を利用すればよい。日本語の勉強は自分のためにも良い。ブラジルの文化/環境に流され、日本文化が薄れるのは悲しい。日本語を話せないと日系人とはお別れということになる
BA1M60-86	
BA1F59-1	日本人の子孫、日系人は、見かけは日本人だし、日本語を話してほしい
BA1M59-83	
BA1M51-78	日系人として当然。日本文化に興味を持ってほしい
BA1M4776	The state of the s
BA1M35-84	

and the second s	日本語教育及びポルトガル語教育意識
調査票番号	61
H-122-71 III V	CONTROL OF THE CONTROL OF THE PROPERTY OF THE
項目 被対象者一覧	日系人なら日本語を話すのは当然だ」という意見に同意しない理由
BA1M99-79	SOLD STATE OF THE
BA1F91-81	The Control of Control of the Contro
BA1F89-34 BA1F88-33	
BA1F88-49	年寄りの考えはそうだが、ブラジルで育ったらブラジル人で、日本語だけ話すわけには行かない
BA1F87-62 BA1M87-63	
BA1F83-36	当然だとは思っていないが,意志を持って子供に日本語を継がせたい
BA1M84-57	知らなくても仕方がない。ブラジルで暮らすのに必要ではないし、親が熱心にならなくても良い
BA1F84 70	だんだん国際結婚が増えているから日本語を話せるのは当然ではなくなっている
BA1M82-13	たがにが国際が特別ができたくく。かから日本のも即でからいも当所であるからとく、と
BA1M82-101	
BA1M82-8	
BA1F81-72	当然だとは思わないが話してくれたらうれしい
BA1M81-75	Control of the Contro
BA1F80-14	Section 2 Sectio
BA1M79-99 BA1F79-104	
BA1F79-9	and the second of the second o
BA1M77-74	
BA1F76-7 BA1M76-22	
BA1M76-97	
BA1F76-30	
BA1F74-23	
BA1M73-55	
BA1M72-54	
BA1M71-4	これまでの日系社会の子弟教育は,日本人としての誇りや日本精神を伝えなかった点で,まちがってきた。そういう状態で,いまさら日本語を話せないのはだめだとはいえない
BA1M70-46	
BA1M67-2	
BA1M68-17	[1] 그리아, 블로크 전 경기 (1) 마이크 (1) 마이크 (1) 마이크 (1) (1) 프로그 (1) 마이크 (1) 마이
BA1F67-82	
BA1F68-85	
BA1M6564	
BA1M60-86	本人のやる気しだい。時間や環境にもよる
BA1F59-1	
BA1M59-83	
BA1M51-78	Experience of the second of th
BA1M47-76	機会,メリット,必要な条件がない
BA1M35-84	話せたほうが良いとは思うが必要性がない。日本語を覚えてほしいが意欲がわかないものに押し付けるのもよくない

	訪日経験(デカセギ経験)と言語意識
調査票番号	65
項目	訪日中に感じたブラジルの日本語と日本の日本語との違い
被対象者一覧	切り土に限したノブンバジュ中間にリキジュー中間との種で
BA1M99-79	
BA1F91-81	
BA1F89-34 BA1F88-33	- (호텔 전환 전환 기계 전환
BA1F88-49	
BA1F8762	以同年273 - ブルブハルとかみ、も、株に雑誌のカセカ十年が入れたがい
BA1M87-63	外国語が入っていて分からなかった。特に雑誌のカタカナ語がわからない
BA1F83-36	日系の夫のふるさとの福島に行ったときは方言がわかりにくかった。東京ではそういうことはなかった
BA1M8457	The second section of the second seco
BA1F84-70	
BA1M83-107	
BA1M82-13	
BA1M82-101	Library Control of the Control of th
BA1M82-8	
BA1F81-72	(1)
BA1M81-75	
BA1F80-14	and the commence of the commen
BA1M79-99	
BA1F79-104	
BA1F79-9	
BA1M77-74	
BA1F76-7	
BA1M76-22	and the second of the second s
BA1M76-97	英語が入りすぎて意味がわかりにくい。敬語が少なく子供のことばづかいが悪い
BA1F76-30	And the state of t
BA1F74-23	Provided the second of the sec
BA1M73-55	
BA1M72-54	
BA1M71-4	日本の日本語の中に,丁寧さがなくなったように感じた
BA1M70-46	
BA1M67-2	
BA1M68-17	
BA1F67-82	日本では日本語のみだが、ブラジルでは多少単語が混ざる
BA1F68-85	ポントとかプラジル語を混ぜてしまった。プラジル語のほうが短くて楽なので。ことばによってはプラジル語になる。足のサイズの呼び名が変わっていて驚いた
BA1M65-64	
	remonent of the property of th
BA1M60-86	
BA1F591	ポルトガル語を混ぜて話してしまい、日本の人がわからずに困った
BA1M59-83	ことばが変わった。女学生ことば、遊びことばが野放しになっていて節操がない
BA1M59-03 BA1M51-78	CCIANTANIZATIO 外下工CCIA, 起してCIAN AIMON A Z ST SPIRATO
BALM47-76	若い世代の人のことばとの差を感じた。感嘆詞が多い
	를 보았다. 그리고 1000 HOLD HOLD HOLD HOLD 전략을 납치하다. 캐럴터 사고 고등으로는 그렇게 되는 사람이 되어 걸어 모든 모든 바람이 다하는
BA1M35 - 84	<b>若者語</b>

er i i ezer mani ve inakien	コロニア語をめぐる意識
調查票番号	68
` 項目	
被対象者一覧	日本語とポルトガル語を混ぜることをどう思うか
BA1M99 - 79	あまり混ぜないほうがよい
BA1F91-81	あまりよくない。日本語を話すときは日本語だけ、ブラジル語のときはブラジル語だけのほうがよい
BA1F89 34	仕方がない
BA1F88 33	
BA1F88-49	できれば混ぜないほうがいいが、簡単なことば、um,dois,bom diaなどは混ざる。日本人と話すには日本語がやはり必要。時と場合によってはブラジル語も必要だが、普段の付き合いなどは日本語で通している
BA1F87-62	変だとは思わない。意識しなくても出る
BA1M87-63	意識はしていない。身近なことばはポルトガル語のほうがわかりやすい
BA1F83-36	当たり前ではないかと思う。細かい表現をするときはポ語、育った環境のことを話すときは日本語。子供たちが話しているのを聞くと、意識では、日本語からポルトガル語への切り換えがないようだ
BA1M84-57	邦字新聞に入っているカタカナ語がわからない
BA1F84-70	もちろん全部完全に話せることに越したことはないが、相手が混ぜても分かるならそれでもいいと思う。お互いそれが当たり前になっているところもある
BA1M83-107	日本に行ってもコロニア語が出る。間違っているとは思うが、とりかえできるものではない
BA1M82-13	時と場所、立場による。ブラジルにいる日本人なら混ぜるのは当然。ブラジル語のことばや言い方の端々、こまかいことばか りに気をとられていたら、もとの日本語がだめになってしまう
BA1M82-101	自然にブラジル語が混ざる
BA1M82-8	日本語は難しいから、知らないことばをブラジル語でいうのは自然なこと
BA1F81-72	流暢な人は混ぜるのはおかしいというが特に悪い気はしない。弓場勇は日本語を使えといったが、ブラジルにいるのだから ポルトガル語を使わなければならないし,それは日本語を無視することにはならない。どっちも使えると良い
BA1M81-75	変には思わない、混ぜないと話せない。ブラジル語になっている日本語もあれば日本語になっているブラジル語もある
BAIF80-14	自分のポルトガル語がつまくないので混ぜて話す
BA1M79-99	ブラジルではブラジル語を混ぜたほうがわかりやすい
BA1F79-104	ブラジル語を自然に混ざる。良いとも悪いとも思わない
BA1F79-9	知らないうちに混ざるもので、とくに意識はしない。アルモッサと朝ごはんは違う気がする。ジャンタはいわない。日本語を話せない縁は「ご飯よー」とい が、「ご飯」ということはがいい。 夕飯というと孫に笑われ、孫が自分のポルトガル語を実うのがしゃくに触るから、こちらは日本語ばかりしゃべる 「でごさ」と、フェストンドル
BA1M77-74	ブラジルにいるから当然
BA1F76-7 BA1M76-22	意識していない。自然に
	慢性になっていて、疑問に思わない
BA1F76-30	自然に混ざっていて、気づかない
BA1F74-23	自然に出てしまう
BA1M73-55	選ぜないで話すことはできるが、言いなれていることばを使ったほうがみんなに分かる。下手に日本語に直すと分からなくなる
	慣れているし話しやすい。日本語の単語がすぐに出てくるときもあるし出てこないときもある。一世同士でも混ざることはある
BA1M72-54	し、そのほうが向こうにもわかりやすい コロニア語は生活言語として使えばいい。親しみのあることば、二世三世がコロニア語や、逆に片言の日本語・日本語交じり
BA1M71-4	のポルトガル語を話してほしいという希望がある
BA1M70-46	日本にも方言があり、ポルトガル語交じりの日本語もそういうものではないか。公式の場では別だが、お互いに言いたいことが通じればいい。日本語は残したほうがいいし、日本語がなくなれば、日本文化は伝えられない
BA1M67-2	二世語。ブラジルで生活する以上,自然で,いい悪いの問題じゃない。日本の日本語とも違和感はない
BA1M68-17	自然に混ざる。意思が通じればよい
BA1F67-82	日本語で話すときはなるべき正しい日本語でブラジル語は混ぜないほうがよい。ブラジル語で話すときはブラジル語で
BA1F68-85	周りは皆二世だから混ざっても仕方ない
BA1M65 64	自然に混ざっている。自分は一世だが二世になったつもりになる。地方弁みたいなもの
BA1M60-86	いいこと。日本語の発音は少し硬いが、コロニア語はブラジル語も混ざって音楽的になる
BA1F59-1	いいことだと思う
BA1M59-83	名詞はやむをえない。特に悪い印象はないが、程度による
BA1M51-78	悪い印象
BA1M47-76	仕方ない
	ブラジルに日本語には、ポルトガル語からの直訳がある。野球を投げる、方言、関西の洗濯物を寄せる、など弓場語には昔

	個人属性1 共通項目 社会的属性									
調査票番号	1 2 3 4		4	5	5-A	6	6-A	7		
項目被対象者一覧	性別	生年	世代	国籍	出生地/ブラジル	出生地に何歳 まで住んだか?		配偶者 の世代	職業名(退職者)	
BA2M7368	M	1929	2	3	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	74	2	2	牛飼い	
BA2F72-67	F	1930	2	3	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	25	2	2	主婦	
3A2M71 95	М	1931	2	3	SP州ミランドポリスアリアンサ	71	2	2	畜産業	
3A2M71-102	M	1931	2	3	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	71	2	2	養鶏	
3A2M69-10	M	1933	2	3	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	23	2	2	牧場	
3A2M68-69	М	1935	2	2	SP/HPereira Bareio	28	2	2	農業	
BA2M66-11	М	1936.	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	66	2	2	果樹栽培	
3A2F67-25	F	1936	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	67	2	2	校長	
3A2F66-103	F	1936	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	23	2	2	主婦·農業	
3A2M65-5	М	1937	2	2	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	65	2	2	養鶏と牧畜	
3A2M64-87	М	1938	2	2	SP州パライーゾ	5	2	2	農業	
3A2F63-37	F	1939	2	2	SP/n Narinha	26	2	2	農業・果樹	
3A2F63 77	F	1940	2	2	SP州ミランドポリスアンドラジーナ	15	1		養鶏	
3A2F61-21	F	1941	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	61	2	2	(小学校の教師)	
3A2M60-48	M	1942	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	60	2	2	果樹·蔬菜	
3A2F61-92	F	1942	2	2	SP州ミランドボリス第三アリアンサ	28	2	1	主婦	
3A2M61 105	M	1942	2	2	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	61	2	2	養鶏・RECRIAÇÃO	
3A2M60-16	M	1943	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	60	2	2	農業	
BA2F59 - 88	F	1943	2	2	SPMPRESIDENTE BERNARDES	20	$\frac{2}{2}$	2	主婦	
BA2M58-29	M	1944	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	58	2	2	農業	
BA2F57-27	F	1945	2	2	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	57	2	2	主婦	
3A2F57 - 94	F	1945	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	24	2	2	主婦	
BA2M55 66	· M	1947	2	N	SP州ミランドポリス	56	2	2	養鶏	
BA2F55 73	F	1947	2	2	SP/HGuaraçaí Formoza	8	11		農業	
BA2F54-106	F	1948	2	2	SP州ラヴィンニャ	5	2	2	養鶏・RECRIACĂ	
BA2M52-53	M	1950	2	2	SP州ミランドポリスオリエンテ植民地	10	1		農業	
3A2F52-108	F	1950	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	18	2	2	果樹・牛	
3A2M51-32	M	1952	2	2	SP州ミランドポリス第二アリアンサ	51	1		主婦・母の世話	
3A2F50-65	F	1952	2	2	SP/HGuaracaí	9	2	2	養鶏	
BA2M49-109	M	1953	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	49	2	2	果樹·牛	
BA2F48-111	F	1954	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	48	1		主婦・農業	
BA2F46-110	F	1956	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	46	3	4	牛の委託飼育	
BA2F44 - 80	F	1959	2	2	SP州ミランドポリスアリアンサ	44	2	i	農業	
BA2M43-59	M	1960	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	43	1 2	3	農業	
3A2F42-47	F	1961	2	2	SP/MRincão	11	$\frac{2}{2}$	2	主婦	
3A2F42-47 3A2M39-42	M	1963	2	2	SP州ミランドポリス第三アリアンサ	15	2	4	養鶏	
3A2M39-42 3A2F36-56	F.	1966	2	3	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	N	2	-2	農業	
3A2P30=30 3A2M35=39	M	1967	2	2	SP州ミランドポリス第一アリアンサ	35	2	2	果樹·畜産	
3A2F35 60	F	1967	2	2	SP州レジストロ	2	2	3	果樹栽培·卸	
3A2F33 60 3A2M33 58	M	1969	2	N	SP州ミランドポリス	33	2	N	農業	
BA2F26-40	F	1977	2	2	SPM Jundiapeba	2	2	3	主婦	
BA2F26-40 BA2M24-91	M	1977	2	2	SP州ミランドポリス	24	1	<del>                                     </del>	養鶏	

 (凡例)
 M=男性
 1=日本

 F=女性
 2=ブラジル

 3=二重国籍

 4=帰化

 5=その他

1=未婚 ( )内は, 2=既婚 退職者の場合 3=離婚・死別 4=その他

	<b>*************************************</b>		個人属性2 二世以	下のみの項目 言語	生活史
調査票番号	9	21	22	23	24
項目被分類者一個	ブラジルでの学歴(学校名)	生まれたところ(農村/都会)		学校に入る前、とも だちとはどんなこと はで話していたか	日本(語)学校の通学 経験はあるか
- Commission of the Commission	ESCOLA DO COMÉRCIO	農村 (0.5才)	1	3	いいえ
BA2F72-67	GRUPO	農村 (25才)	1	1 1 100	いいえ
BA2M71-95	GRUPO4年	農村 (71才)	1	2	はい(60ヶ月/週1回)
BA2M71-102	GRUPO4年	農村 (71才)	1	1	いいえ
BA2M69-10	GRUPO4年卒業	農村 (68才)	1	<b>1</b> 1	いいえ
BA2M68-69	IDEAL植民地学校	農村 (28才)	2	4	いいえ
BA2M66-11	ESCOLA MUNICIPAL3年	農村 (66才)	2	1	いいえ
BA2P67-25	ブラジル学校	農村 (67才)	1	1	はい(96ヶ月/週6回)
BA2F66-103	GRUPO4年	農村 (66才)	1	1	はい(36ヶ月/週2回)
BA2M65-5	GRUPO4年	農村 (65才)	1	1	はい(60ヶ月/週1回)
BA2M64-87	GRUPO4年	農村 (5才)	1		はい(24ヶ月/週4回)
BA2F63-37	GRUPO4年	農村 (26才)	5		はい(18ヶ月/週5回)
BA2F63-77	小学校	農村 (63才)	1	307 <b>1</b>	はい(96ヶ月/週6回)
BA2F61-21	大学	農村 (63才)		i da de la companio de proposicio proporcio de la companio de proposicio de la companio de proposicio de la companio della companio de la companio della companio de la companio della com	いいえ
BA2M60-48	SENAC	農村 (60才)		35, <b></b>	いいえ
BA2F61-92	GRUPO4年	農村 (28才)	1	1 <u>1</u>	はい(24ヶ月/週1回)
BA2M61-105	GRUPO4年	農村 (61才)	na depois 10 m na 10 m Maria del maria 1	1	И
BA2M60-16	COLEGIAL	農村 (60才)		N	はい(48ヶ月/週1回)
BA2F59-88	GRUPO4年	農村 (20才)	3	#5	いいえ
BA2M58-29	小学校	農村 (58才)	1	1	はい(36ヶ月/週1回)
BA2F57-27	小学校	農村 (57才)	1.		いいえ
BA2F57-94	GRUPO4年	農村 (24才)	<b>1</b> 1	1	いいえ
BA2M55-66	FACULDADE RUI BARBOSA	農村 (56才)	3	4	いいえ
BA2F55-73	小学校4年	農村 (55才)	1	1	はい(72ヶ月/週5回)
BA2F54-106	GRUPO4年	農村 (23才)	1	5. L.	いいえ
BA2M52-53	GINÁSIO8年	農村 (52才)	2	4	はい(12ヶ月/週1回)
BA2F52-108	GRUPO4年	農村 (18才)		alektorus aspi <b>l</b> em y diden	いいえ
BA2M51-32	GINASIO	農村 (51才)	2		はい(36ヶ月/週2回)
BA2F50-65	FACULDADE SÃO BENTO	農村 (9才)	2	3	はい(12ヶ月/週2回)
BA2M49-109	短期大学	農村 (49才)	3	5	はい(48ヶ月/週1回)
BA2F48-111	GRUPO	農村 (48才)		1	はい(96ヶ月/週6回)
BA2F46-110	GRU <b>P</b> O4年	農村 (46才)		1	いいえ
BA2F44 80	ESCOLA ESTADUAL DE 10. E	農村 (44才)		2 n who seems are a summary of the same of	はい(144ヶ月/週6回)
BA2M43-59	FACULDADE	農村 (43才)		1	はい(24ヶ月/週1回)
BA2F42-47	大学	都会	<b>*</b>	April and American Sameral and and a second	はい(2ヶ月/週1回)
BA2M39-42		農村 (39才)	1.000	1	はい(84ヶ月/週3回)
BA2F36-56	GRUPO4年	農村(N才)	3	4	はい(36ヶ月/週2回)
	Técnico eletrônico	農村 (35才)	2	N	はい(96ヶ月/週3回)
BA2F35-60	2o.grau	農村 (36才)		1	はい(36ヶ月/週2回)
BA2M33-58	2o.grau 農業学校	農村 (33才)	3	5	はい(12ヶ月/週1回)
BA2F26-40	2o.grau	農村 (2才)	4	5	いいえ
BA2M24-91	COLEGIO 3年終了	農村 (24才)	1	1	はい(72ヶ月/週3回)

凡例	「農村」の場合,		「はい」の場合、
	(居住年数)		(学習期間/
		1=日本語	週間通学回数)
		2=日本語のほう	が多い

3=日本語とポル語が半々 4=ポル語のほうが多い 5=ポルトガル語

							家庭での	つ言語	吏用		
調査票番号	25	26	27	(3.2		.,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		28	V-7	747-00-0	7,475
				家族に対して話すことば							
項目被対象者一覧	大人になったあと, 日本語を習ったか	デカセギの経験 の有無	現在の同居 形態	配偶者	子供	孫	父/母	嫁/婿	兄弟 姉妹	祖父母	その他
BA2M73-68	いいえ	ない	1	2	2	-	-	-	-		
BA2F72-67	はい(180ヶ月)	ない	1	1	1	-		-	-		
BA2M71-95	いいえ	ない	1	1	5	-	- 3	77-	-		-
BA2M71-102	はい(24ヶ月)	ない	4	3	3	3	- 1	3	1		
BA2M69-10	いいえ	ない	2	2	-	-	-	-	-	-	
BA2M68-69	いいえ	ない	2	2	-	T 97000007	-	-	· -	-	0.8. = 15
BA2M66-11	いいえ	ない	1	3	3	-	-	-	3 <b>-</b>		-
3A2F67-25	いいえ	ない	1	. 5	5	-		-			134
BA2F66-103	いいえ	ない	4	3	3	3	-	3	1		
3A2M65-5	はい(72ヶ月)	ない	1	1	3	-	100000	-		-	-
BA2M64-87	はい(12ヶ月)	ない	3	2	4	2	-	2	() =	-	
BA2F63-37	いいえ	ない	3	1	3	1		4	-	-	
BA2F63-77	はい(36ヶ月)	ない	5	- C 20 -	-	-	-	-	-	-	pare-
BA2F61-21	いいえ .	ない	2	4	-	-	-	-	-	祖父4	-
BA2M60-48	はい(12ヶ月)	ない	4	3	4	-	1/1	-	3	-77	-
BA2F61-92	いいえ	ない	1 1	1	1	-		-		T	Corn-
BA2M61-105	はい(36ヶ月)	ない	4	5	5	3	母1	-	-	T -	200au <b>-</b> (47
BA2M60-16	はい(12ヶ月)	ない	2	3	-	-	1 -	-	-	-	100 T 100
BA2F59-88	いいえ	ない	3	2	2	2	-	2	-	T -	-
BA2M58-29	はい(48ヶ月)	ない	1	3	3	A4-87-A13		-	-		
BA2F57-27	はい(120ヶ月)	ない	1	2	2	-	-	-	-	-	100
BA2F5794	いいえ	ない	2	3		-	-	-	-	10.5	-
BA2M55-66	はい(36ヶ月)	ない	1	4	4	-	3 - 3	-	-	-	
BA2F55 - 73	いいえ	ない	5	-	<b>i</b> -	-	<b>i</b> -	<b>i</b> -	1	<b>i</b> -	姪1
BA2F54 - 106		ない	4	4	5	3		71.7 <sub>12,</sub> 1,740.40.			義母1
BA2M52-53	いいえ	ない	1 4	-	-	-	母:2		4	-	義嫁3
BA2F52-108	いいえ	ない	1 1	2	1	-	1 - 1	7.2	1 2 2 2 2 2	10000	1648 - 16
BA2M51-32	いいえ	N	6		Alex Section	24-06-07-22	母1		a diam'i in timedi	1 00 ( 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	20.70°-08
BA2F50-65	はい(12ヶ月)	ない	1	4	4	Ι-		T -	-	1	-
BA2M49-109	はい(10ヶ月)	ある(24ヶ月)	1	3	4	-	-	-	-	-	-
BA2F48-111	いいえ	ない	3	-	-	( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( (	父1	T -	-		
BA2F46-110	いいえ	ない	6	-	7 -	-	父1	-		4. <del>-</del>	-
BA2F44-80	いいえ	ない	1	2	2	-		-		-	
BA2M43-59	いいえ	ない	3	4	3	t -	母2		-	-	
BA2F42-47	いいえ	ある(14ヶ月)	1 1	5	4	1-	- 5	-	30.20		-
BA2M39-42	いいえ	ない	1 1	非日系5	2	1		-	-	-	-
BA2F36-56	いいえ	ない	2	2	<del>  -</del>	1 -	-			-	
BA2M35-39	いいえ	tavi	1 1	4	4			-	e negover, je sako n La		8808-0
BA2F35-60	はい(6ヶ月)	ある(69ヶ月)	3	1 4	2	-	1/1	<b>†</b> -		1 -	-
BA2M33-58	はい(18ヶ月)	ある(66ヶ月)	1 1	5	5	1 -		1 -	1 -	7	-
BA2F26-40	はい(6ヶ月)	ある(54ヶ月)	3	5	4	<b>†</b> -	-	-	-	199	義父母
BA2M24-91	レルオ	tevi	1 1	<del>                                     </del>		<b>†</b> -	1/3	1	1	r place of the	

(凡例)	「はい」の場合, (学習期間)	「ある」の場合, (期間)	1=核家族 2=夫婦	「非日系」とは、	11=日本語
	•	1 09/1/20	3=直系家族	「非日系の配偶者」の意味	2=日本語のほうが多い
		الأسام أراك والمحابيج	4=拡大家族		3=日本語とポル語が半々
			5=单身		4=ポル語のほうが多い
			6=その他		5=ポルトガル語

	# 148 TO					庭での言語	使用		
調査票番号					29				30
			3	は族から話	しかけら	れることば	,		
項目 被対象者一覧	配偶者	子供	孫	父/母	嫁/婿	兄弟姉妹	祖父母	その他	家族全員がそろうときの 使用言語
BA2M73-68	2	2	-	T -	-	-	-	-	2
BA2F72-67	1		_	<b>1</b> -	-	-	t - t	-	1
BA2M71-95	1	5	5	<del>                                     </del>	<b>—</b>	-	t - t	-	1 5
BA2M71-102	3	4	5		5.	1			2
BA2M69-10	2	1 - 1	-	<b>_</b>	I -		1 - I		2
BA2M68-69	2	1 - 1		1	<b>1</b> -		1		2
BA2M66-11	3	3	-	<b>-</b>	-	-			3
BA2F67-25	5	5	1						5
BA2F66-103	3	4	5		5	1.	- 1		2
BA2M655	3	3			<del>.</del>				3
BA2M64-87	2	4	4		2	San San San San	- F		3
BA2F63-37	1	4	4	ani mana Bana ana	5	andara Antonia	a and Same		4
BA2F63-77	L <del> j</del>		-		-		1 - 1		
BA2F61-21						and inches		and the safety and the	2
BA2M60-48	3	4_	·	1/1	<del>-</del>	3	1 - 1		4
BA2F61-92	1	2	-						1
BA2M61-105	4	5	5	母1					5
BA2M60-16	4		<u></u>	-	-				4
BA2F59-88	2	3	3		3	a Care da		Livery of court	3
BA2M58-29	3	4				<del></del>			3
BA2F57-27	2	4	. J. tal		-				2
BA2F5794	3				-		-	-	3
BA2M55-66	4	4			-	-	- [		44
BA2F55-73	in a second				-	1		妊1	1
BA2F54-106	5	5	4	-		a i a q <del>a</del> a ii a	I - T	義母1	5
BA2M52-53	(a ( <del>-</del> , aa)	- 1		母1	-	3		義嫁3	3
BA2F52-108	1 . 1	5	- La -	1					3
BA2M51-32	L	-100		₽1		E			1
BA2F50-65	4	4			-				4
BA2M49-109	3	5							3
BA2F48-111		- ,	- 1	父1	-	-		<u></u>	1
BA2F46-110		,	i -	父1			-		. 1
BA2F44-80	2	2			-		-	<u>-</u>	2
BA2M43-59	4	4	-	母1	<b>i</b> - 1		<b>- 1</b>	-	3
BA2F42-47	5	5							4
BA2M39-42	非日系5	2	-				l - 1	-	5
BA2F36-56	2	1 - 1		a rate para di Sala di			3	-	2
BA2M35-39	4	4	. See Trake	3 E			- 1		5
BA2F35-60	5	4		1/1	-				2
BA2M33-58	5	5	-	-	-				5
BA2F26-40	5	4	J. A.S		-	-	I - I	義父母4	4
BA2M24-91		1 - 1	-	1/2	-	-	I - I	-	2

[凡例]

「非日系」とは、 「非日系の配偶者」の意味である

1=日本語

2=日本語のほうが多い

3=日本語とポル語が半々

4=ポル語のほうが多い

5=ポルトガル語

				メディ	ア・娯楽と言語使用
調査票番号	31	32	32-A	32-B	333
項目被対象者一覧	NHKの 視聴	日本の親戚とのつきあい		日本の親 戚との連絡 頻度	新開雑誌の誌名
BA2M73-68	1	1	2	3	ニッケイ新聞/FOLHA/SELEÇÕES
BA2F7267	2	1	2	3	ニッケイ新聞/FOLHA/SELEÇÕES
BA2M71-95	2	2 -	-		*
BA2M71-102	1	2	-	-	O DIÁRIO
BA2M69-10	1	2		-	ニッケイ新聞
BA2M68-69	2	2		-	ニッケイ新聞/のうそん/朝蔭/百万人の福音GOSPEL
BA2M66-11	2	2	-	-	ESTADO
BA2F67-25	2	2	-	- 1	FOLHA
BA2F66-103	1	2	-	-	O DIÁRIO
BA2M65-5	2	2		- "	<b>▼</b> 7. 0 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
BA2M64-87	2	2		-1, .	
BA2F63-37	2	2	-	• :	
BA2F63-77	1	1 1	2	2	
BA2F61-21	2	1	2	4	FOLHA/VEJA/GLOBO RURAL/NATUREZA/SAÚDE
BA2M60-48	1	1	(1)	4	ESTADO/ニッケイ新聞
BA2F61-92	1	1 1	1	N	ニッケイ新聞
BA2M61-105	2	1	1	2	ESTADO/サンパウロ新聞
BA2M60-16	2	1	3	4	FOLHA/VEJA/GLOBO RURAL/NATUREZA/SAÚDE
BA2F59-88	2	2	-	-	*
BA2M58-29	2	2	-	-	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
BA2F57-27	2	1	2	2	
BA2F57-94	2	2	- 1	<del></del>	
BA2M55-66	2	2	-		ESTADO
BA2F55-73	1	2	-	1 -	週刊アサヒ/婦人の友/文芸春秋/週刊ポスト/週刊ジャーナル
BA2F54-106	2	1	1 1	3	ESTADO/サンパウロ新聞
BA2M5253	1	2	T - 10.	<b>i</b> -	FOLHA/サンパウロ新聞
BA2F52-108	2	2	<b>-</b>	-	
BA2M51-32	2	2	<b>i</b>	<b>.</b>	
BA2F50-65	2	2	t -	l -	ESTADO
BA2M49-109	2	1	2	2	O DIÁRIO
BA2F48-111	1	1	1	3	ニッケイ新聞/少年マガジン/週刊ポスト/文芸春秋/ビッグコミッ
BA2F46-110	1	2		233.4	ニッケイ新聞
BA2F44-80	1	1	2	3	ビッグコミック/ニューモラル/文芸春秋
BA2M43-59	2	2			
BA2F42-47	2	2	-	P 10 -2	FOLHA/ニッケイ新聞
BA2M39-42	2	2	-	-,	ÉPOCA/GLOBORURAL/AVICULTURA INDUSTRIAL
BA2F36-56	2	2	1 - 10	<u> </u>	*
BA2M35-39	2	2	- 3	I -	FOLHA/ニッケイ新聞
BA2F35-60	2	2		-7	*
BA2M33-58	2	1 -	2	3	JORNALNIPPO-BRASIL
BA2F26-40	2	2	1 -	7	* 1
BA2M24-91	2	2	1	•	ニッケイ新聞/VEJA

[凡例]		1=ある	. 1844	1=手紙			「*」は購読	せずのク	アース	***************************************	
	ing producti	2=ない	April 18	2=電話		20.0					
279	- 140da			3=電子メール	レ		1=月ごと				
1.00	1=できる			4=その他(身	【体的に)		2=半年ごと				
	2=できない	Δ.		popularity in			3=年ごと				
Salat - Na	Albert 6						4=数年ごと				

				メディア	・娯楽と言語使用			
調查票番号	34	35	35-A	36	36-A	37	38	39
項目被対象者一覧	NHKを みるか	日本の ビデオを 見るか	日本のビデオ/どの 番組が好きか	プラジル のテレビ を見るか	ブラジルのテレ ビ/どの番組 がすきか	プラジルの日 系テレビ番組 を見るか	NHK/日系ラ シオを聞くか	日本語の新聞を読むか
BA2M73-68	2	4	Jac (AM 45) (Bis	1	2	4	4	3
BA2F72-67	4	4	(192 × 55 + 51 + 1937)	4	-	4	4	1
BA2M71-95	0	3		1	2	4	4	4
BA2M71-102	3	3	2,5(歐)	1	2	4	2	4
BA2M69-10	1	4	-	- 2	2	4	4	1
BA2M68-69	0	2	3,5(移民関連)	1	2, 4(移民関連)	3	4	1
BA2M66-11	0	0		a7 1	1	4	4	0
BA2F67-25	4	4	•	1	2	4	4	4
BA2F66-103	1	2	2,5(歌)	10.1	1, 2	. 4	4	4
BA2M65-5	0	2	N	1	2	3	4	0
BA2M64-87	0	2	5(音楽)	1	2	4	4	0
BA2F63-37	4	2	5(歌番組)	1	2	4	4	3
BA2F63-77	2	1	4	3	<u> </u>	. 4	4	2
BA2F61-21	0	3	31 D380 aD+U+U3V+U4	9754 <b>1</b>	1, 2, 3	4	4	0
BA2M60-48	2	2.	5(アニメ)	A 1831	2, 4(農業, 映画)	3	4	2
BA2F61-92	3	4	- 40000	1	1	4	4	3
BA2M61-105	0	2	A 2 2	2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2	4	- 4	4
BA2M60-16	0	4	overene at a	4.521	1, 2, 3	4	4	0
BA2F59-88	0	2	5(音楽)	1	1	4	4	0
BA2M58-29	0	2	1	2	2, 3	4	4	2
BA2F57-27	3	3	+	1	2, 4(料理)	4	4	0
BA2F57-94	0	3	~	1	1	4	4	0
BA2M55-66	0	3	- 0.0	1	2	4	3	0
BA2F55 = 73	2	2	* 4 R	3	<b></b>	4	4	2
BA2F54-106	0	2	2	1	1, 2	4	4	4
BA2M52-53	1	3		8 0 1	1, 2	4	4	4
BA2F52-108	4	3		1	1, 2	4	4	3
BA2M51-32	0	4	-	3	2	4	4	4
BA2F50-65	Ö	3		1	4(スポーツ)	4	1 4	n n
BA2M49-109	0	4		1	2	4	4	4
BA2F48-111	2	2	5(スポーツ)	-1	2	4	3	1
BA2F46-110	1	4	-	1	1, 2, 4(スポーツ)	4	4	4
BA2F44-80	2	2		3	-	4	4	2
BA2M43-59	0	2	5(音楽)	1	2	4	4	0
BA2F42-47	0	2	5(子供)	1	2, 4(健康)	4	4	4
BA2M39-42	4	2	5(歐番組)	7.1451	2	4	4	4
BA2F36-56	0	0	-	1	2	4	4	0
BA2M35-39	4	3	-	11	2	4	4	4
BA2F35-60	0	1	2	1	2	4	4	0
BA2M33-58	0	4	A Description of the	1	2	4	4	0
BA2F26-40	4	2	4	1	1	4	4 .	4
BA2M24-91	0	3	N	1	4(サッカー)	4	4	3

[凡例]		1=時代劇	←左34	10.75	←左34	
	0=ない	2=ドラマ	凡例参照	1=ドラマ	凡例参照	0=もって/とってない
	1=よくみる	3=ニュース		2=ニュース		1=よく聞く/読む
	2=ときどきみる	4=ドキュメンタリー		3=ドキュメンタリー	er j	2=ときどき聞く/読む
	3=ほとんどみない	5=その他(番組名)		4=その他(番組名)	).	3=ほとんど聞かない/読まない
	4=まったくみない			•	,	4=まったく聞かない/読まない

				職場・地域社会での言語使用						
調査票番号	40	41	42	43	44	45	45-A			
被対象者一覧	ポルトガル 語の新聞 を読むか	日本の歌を聞くか	カラオケ に行くか	仕事上, 日本語を 話すか		地域日系団体または日系の集まりへの参加	日系団体または日系の集まりの種類			
BA2M73-68	1	4	4	2	1	1	自治会·文教·村会			
BA2F72-67	4	1	1	1	1	1	婦人会			
BA2M71-95	4	1	3	2	1	1	自治会·文教·村会			
BA2M71-102	1	1		1	1	1	自治会·文教·村会			
BA2M69-10	0	1	4	2	1	2				
BA2M68-69	0	2	4	1	1	1	自治会·文教·村会			
BA2M66-11	4	3	- 4	1	2	2	*			
BA2F67-25	1	4	4	2	1 4	2	*			
BA2F66-103	1	1	1	2	2	1	婦人会			
BA2M65-5	0	1	4	1	1	1	自治会·文教·村会			
BA2M64-87	2	1	1	1	1	1	自治会·文教·村会			
BA2F63-37	3	1	1	1	1	1	婦人会/カラオケ			
BA2F63-77	3	2	4	1	1 1	2	*			
BA2F61-21	0	2	4	2	1 1	1 1	婦人会			
BA2M60-48	milion of transfer	1.41	3	2	1	1 1	自治会・文教・村会/野球会			
BA2F61 - 92	0	1	4		The second second second	2	日伯云"又教"孙云/ 野球云			
BA2M61-105		3	4		Zaranaja - <b>1</b> monte et 2	1	自治会·文教·村会			
BA2M60-16		1	3	2	1/2000/00/00/00/00/00/00/00/00/00/00/00/0	The second secon	•			
	2			2		<del></del>	自治会·文教·村会			
BA2F59-88		1	1	lings and parallel	olymorasom <del>-</del> sharman	1 1	婦人会			
BA2M58-29	2	2	4	2			自治会·文教·村会			
BA2F57-27	0	1	4	Property and the second	1		婦人会			
BA2F57-94 BA2M55-66	1	2	4	2	1	1	婦人会 自治会·文教·村会			
		3			I am and Thomas and	2	口(0本) 入权(1) 本			
BA2F55-73		<del></del>		1		<del></del>	(A) 1 (A)			
BA2F54-106	1	3	4	2		to the contract of the firm when	婦人会			
BA2M52-53	1	2	4	2	1		自治会·文教·村会			
BA2F52-108	2	2	4	2	2	<u> </u>	婦人会			
BA2M51-32	2	3	4	1	2	marina in marina 1 tambétan a armo	自治会·文教·村会			
BA2F50-65	descende 1 de la company	3	3	2		ha mana 1 minara	婦人会			
BA2M49-109		1	4	2		1	自治会·文教·村会			
BA2F48-111	3	3	4	J1	1 1	1	自治会・文教・村会/運動会/のど自慢の会			
BA2F46-110 BA2F44-80	3	1	4	2 1	1	2 2				
BA2M43-59	4	2	2	2		and the second of the second second	自治会·文教·村会			
***************************************	2	$\frac{2}{2}$	1	2			日本語学校			
BA2F42-47	L						口本語子仪 *			
BA2M39-42	3	4	4	1	1	1 2	The state of the s			
BA2F36-56	1	4	4	1	1		自治会·文教·村会/婦人会			
BA2M35-39	2	3	4	1	1	1	自治会·文教·村会/日本語学校			
BA2F35-60	0	1	3	2	1 1	1	婦人会/バザー会			
BA2M33-58	1	3	3	2	1	1	農業の集まり			
BA2F26-40	2	1	4	-	ļ <u></u>	1	自治会·文教·村会			
BA2M24-91	0	2	2	1	1	1	青年会			

2 Ali Chara I		San et Color			State College (1997) of the college	er i kristivkan a takulis. Nafat istori
(凡例)		25, 3, 3, 3, 5, 5, 10 Like years (1, 1, 1, 1)		1=参加する	「*」は参加せず	
	-	1=よく	1=話す	2=参加しない		
		2=ときどき	2=話さない			
		3=ほとんどなし				
		4=まったくなし				

	(vietensko orig	職場·地域社	会での言語使用	Ŧ		- 3
調査票番号	45-B	46	46-A	47	48	48-A
項目 被対象者一覧	どのようなことばを使うか	日系人のとしたちは多いか	日系人のともだ ちとはどのこと ばで話すか	宗教	宗教活動・集 会への参加	宗教活動での言語
BA2M73-68	1. 1. a	1	1	カトリック	2	
BA2F72-67	1	1	1	カトリック	1	1.5
BA2M71-95	1	1	2	カトリック	2	1000
BA2M71-102	3	1	1	仏教	1	1 1 1
BA2M69-10		1	3	仏教	2	2,500,60
BA2M68-69	2 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -	1	2	カトリック	1	2
BA2M66-11		1 +	4	仏教	2	T
BA2F67-25		4	5	カトリック	2	-
BA2F66-103	3	1	3	カトリック	1	5
BA2M65-5	3	i	3	仏教	2	
BA2M64-87	2		5	仏教	2	e Yellory = A
BA2F63-37	1		1	なし		
BA2F63-77		The second of th		プロテスタント	1	1
BA2F61-21	3	3	$\mathbf{I}$	プロテスタント		2
BA2M60-48	3	3	3 0000000000000000000000000000000000000	プロテスタント	1	1
BA2F61-92			2	プロテスタント	A	1
BA2M61-105	The state of the s	Lagran I (2) in the company of the second of	A	なし		2 120 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
BA2M60-16	4		3 - 1 - 1 - 1 - 1 - 3 - 1 - 1 - 1 - 1 -	プロテスタント	2	200
BA2F59-88	2	en e	2	仏教	2	restant produces
BA2M58-29	3 3 2 2 2 2 2 2		3	カトリック、仏教	1	1, 1
BA2F57-27	2	100000000000000000000000000000000000000	2	仏教		2
BA2F57-94	2		2	カトリック、仏教	en e	5, 1
BA2M55-66	2	2	4	カトリック	2	-
BA2F55-73		ranga ing maga aki sa manang aki sa mana	2	プロテスタント	2	ay of any angles of the species
BA2F54-106	2.022		100.00 · 10.3 · 10.00 · 10.00	カトリック	2	
BA2M52-53	4	2		なし	<u>.</u> .,,,,,,,,	
BA2F52-108	1		and the state of t	仏教		CETTON OF THE STATE OF
BA2M51 - 32	2		2	なし		
BA2F50-65	2		2	カトリック	2	S. Leithead Co.
BA2M49-109			5	仏教		1
BA2F48-111	2	2	2	プロテスタント	2	1 3
BA2F46-110	<u> </u>	- 3	3	カトリック		4. 1 also 5 2 al
BA2F44 - 80		2	3	プロテスタント	2	Ascerta to 3
BA2M43-59	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	4	4	エヴァンジェリカ	1.50000000	2
BA2F42-47	2 - 1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (1000 (100) (100) (100) (1000 (100) (10		4	カトリック	2	<del>l Í</del>
BA2F42-47 BA2M39-42		**************************************	<del></del>	カトリック	2	1
BA2F36-56		3	1 1	プロテスタント	ı î	5
BA2M35-39	1/3		4	なし		<del>                                     </del>
BA2F35-60	1/5		5	カトリック	2	1
BA2M33-58	1/3	2	4	なし		44.00.200
BA2F26-40	4		5	カトリック	2	5 7 2
Section of the last section in	4	1	1 4	なし		1
BA2M24-91	4	<u> Larramania da la Larramana di Sarahan</u>	<u> </u>	1 40	<u> </u>	4

[凡例]	1=日本語	0=ともだちはいない	1=日本語	1=参加する	←左46-A
	2=日本語のほうが多い	1=ほとんど日系人	2=日本語のほうが多い	2=参加しない	凡例参照
	3=日本語とポル語が半々	2=日系人のほうが多い	3=日本語とボル語が半々	•	•
	4=ポル語のほうが多い	3=日系人と非日系人半々	4=ポル語のほうが多い		
	1	4=非日系人のほうが多い	5=ポルトガル語		
		5=ほとんど非日系人			

(2) アリアンサ 二世

			787 S		日本語	能力意識				
調查票番号			49					50	科格	
		日本	語の話す能	力		Si Olika	B	本語の聞く能	力	
項目 被対象者一覧	政治経済	仕事の話	日常会話	家庭で の話	あいさつ	ラジオの ニュース		テレビドラマ	家庭で の話	あいさつ
BA2M73 = 68	1	1	1	1	1	1	1	- 1	1	1
BA2F72-67	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA2M71-95	4	1	1	1		1	1	1	1	1
BA2M71=102	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA2M69-10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
BA2M68-69	3	3	1	1	1 1	1 1	1	1	1	1
BA2M66-11	3	2	2	1	1 1	2	2	2	1	1
BA2F67-25	3	3	2	2	1 1	3	2	2	2	2
BA2F66-103	3	2	1	11	1	3	3	3	1	· 1
BA2M655	2		ar and all are success	1	1	2	2	2	1	1
BA2M6487	3	1	a electrical descriptions	- Legentra 1 er galen	1-,1		an Arthrodon		N	1
BA2F63 37	1	11	1	1	1		1	1	1	1
BA2F63-77	1	1	1	1	o o o o o o o o o o o o o o o o o o o	1-1-	Section 1		1	1
BA2F61-21	3	2	2	2	2	2	3	24	2	2
BA2M60-48	3	2	2	1	n management (	2	2	2	11	2
BA2F61-92	in the many	2	2	2	2	2	2	1	1	1
BA2M61-105	3	11	1	100001000		2	2	2	2	2
BA2M60-16	2		1		11	1		1	1	1
BA2F59-88	3	2	2	1	1		1	2	1	1
BA2M58-29	2	22	2	2	1	1-1-	1	1	1	1
BA2F57-27	3-000	2	2	id constitution		2	2	energia de la filosofia de la como de la com	2	1
BA2F57-94	3	2	1	one concernations of	r <b>1</b>	3	-3	2	on on the Land of the contract	1-
BA2M55-66	4	4	2	2	1	3	2	3	2	1
BA2F55-73	~~~~ 1 ~~~	1 1	1	1	11			1	1	-1
BA2F54-106	3	1	1000	1.000		3	3	3.	1-1-1	1
BA2M52-53	3	2	2	2	2	3	3	2	2	2
BA2F52-108	3	2	1.1	1	11	2	2	2	1	1
BA2M51-32	3	2	1 1	1	1	3	3*****	3	1	1
BA2F5065	. 4 .	3	2.	2	1	4	4	4	2	1
BA2M49-109	3	1	1	1	1	1 1	(* 1 - 1	1	1	1
BA2F48-111	1	1	1	1	1	1	1 1	1	1	1
BA2F45-110	3	3	1	1	1	2	2	2	1	1 .
BA2F4480	3	1	1	1	1	2	2	1	1	1
BA2M43-59	3	2	2	2	2	3	3	3	2	2
BA2F42-47	4	3	3	2.	2	4	4	3	2	3
BA2M39-42	3	2	1	11	11	3	3	3	1	1
BA2F36-56	2	2	1 1	11	1 1	2	2	2	1	1
BA2M35-39	4	3	2	1	2	3	3	3	1	1
BA2F35-60	3	1	1	1	1 1	2	2	1	1	1
BA2M33-58	3	2	1	1	1 1	3	2	1 1	1	1
BA2F26-40	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3
BA2M24-91	3	2	2	2	1 1	3	3	2	2	1 1

[凡例]

1=よくできる 2=だいたいできる 3=少ししかできない 4=まったくできない

	<u> </u>		48	Nijerija ja j	日本語	能力意識	戦				
調查票番号			5	1			1.0		52	30 W E	. 14
	1.582 h	106.5	日本語の	読む能力				日本	語の書く能力		
項目被対象者一覧	新聞·本	仕事の 書類	雑誌·漫画	友達・親戚 の手紙	回覧・お知らせ	ちらし・ 看板	仕事の 書類	仕事相手 への手紙	894000000000000000000000000000000000000	日記	メモ
BA2M73-68	3	3	3	3	3	2	4	4	4	4	4
BA2F72-67	2	2	2	1	1	1	2	2	1	1	1
BA2M71-95	4	3	3	2	2	2	4	4	4	2	1
BA2M71-102	3	2	2	1	1	1	3	3	3	3	2
BA2M69-10	2	2	2	1	1	1	4	4	1	1	1
BA2M68-69	1	1	1	1	1	1	3	2	2	1	1
BA2M66-11	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
BA2F67-25	4	4	4	3	4	3	4	4	4	4	4
BA2F66-103	4	3	3	2	2	2	4	4	3	3	1
BA2M65-5	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2
BA2M64-87	3	2	2	2	2	2	···-1	1:	1	N	1
BA2F63-37	2	2	*********** <b>2</b> *************	2	2	1	N	- N	2	2	1
BA2F63-77	1	1	1 1	1	1	1		1		1	1
BA2F61-21	2	3	2	2	2	2	4	4	3	3	3
BA2M60-48	3	3	2	2	2	1	3	3	3	2	2
BA2F61-92	2	2	1	2	1	1	3	2	2	2	2
BA2M61-105	4	4	4	4.	3	3	4	4	4	4	2
BA2M60-16	2	2	2	1	1	1	N	1	1	1	1
BA2F59-88	3	3	3	3	3	3	2	2	1	2	1
BA2M58-29	2	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1
BA2F5727	2	2	www.de.1streek.com		2	1	- 3	3	3	2	1
BA2F57-94	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4
BA2M55-66	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
BA2F55-73	51				1	1	N	1	1	1	1
BA2F54-106	4	3	4	2	2	2	4	4	3	3	1
BA2M52-53	4	4	2	3	2	3	- 3	3	3	3	3
BA2F52-108	3	3		3	3	2	4	4	3	4	1
BA2M51-32	4	4	4	4.	4	4	4	4	4	4	4
BA2F50-65	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4
BA2M49-109	4	4	4	3	3	3	4	3	2	2	1
BA2F48-111	11	1	1	1,	1	1	1	1	1	1	1
BA2F46-110	3	3	3	3,	3	3	4	4	4	4	2
BA2F44-80	2	2		<b>1</b>	1.00	1	3	2	romania pro regiones	1.00	1
BA2M43-59	4	4	4	4.	4	4	4	4	4	4	4
BA2F42-47	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
BA2M39-42	4	4	2	3	4	2	4	4 .	4	4	2
BA2F36-56	3	2	2	2	1	1	3	3	3	3	3
BA2M35-39	4	4	4	N	3	2	4	4	4	4	3
BA2F3560	. 3	3	2	1	2	2	3	3	2	2	1
BA2M33-58	3	3	2	2	3	2	2	2	2	2	. 1
BA2F26-40	4	4	4	. 4	4	4	4	4	4	4	4
BA2M24-91	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	1

(凡例)

1=よくできる 2=だいたいできる 3=少ししかできない 4=まったくできない

(2) アリアンサ 二世

			39.32.13	用語名於 中国	ホルトスノル	語能力意識						
調査票番号			53			54						
1.16	養の確認	ポルトガ	ル語の話す	上能力	10.5%		ボルト	ガル語の聞く	能力			
項目	政治経済	仕事の話	日常会話	家庭で の話	あいさつ	ラジオの ニュース	テレビの ニュース	テレビドラマ	家庭で の話	あいさつ		
被対象者一覧\ BA2M73-68	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
BA2F72-67	3.	3	1	1	1 1	2	2	2	1	1		
BA2M71-95	3	1 1	1	1	1 1		1	$\frac{1}{1}$	1 0	1		
BA2M71-102	3	1	1	1	1	$\frac{1}{1}$	1	1	1	1		
BA2M71-102 BA2M69-10	1	1 1	1	1	1	1	1	1 1	1	1		
BA2M68-69	2	2	1	1	1 1	1 1	1	1	1	1		
BA2M66-11	4	1 1	1	1	<del>  1</del>	<del>  1</del>	1	1	1	1		
BA2F67-25	1 1	$\frac{1}{1}$	1	1	1	1 1	1	1 1	1	1		
		<del>  1</del>	1	1	1	<del>  1</del>	1	1	1	1		
BA2F66-103 BA2M65-5	2	$\frac{1}{1}$	1	1	$\frac{1}{1}$	1	1	<del>                                     </del>	1	1.0		
BA2M65-5 BA2M64-87	2	1 1	1	1	1 1	1	1	1 1	1	1		
BA2F63-37	4	$\frac{1}{2}$	3	2	1	N	1	<del>                                     </del>	1	1		
	4	l Ž N	3	2	3	3	3	3	3	1		
BA2F63-77					1	1	1	1 1	1	1		
BA2F61-21	1	1 1	1	1	1	<del>                                     </del>	1	1 1	1	1 1		
BA2M60-48	1 1	1 3	3	- 2	2	2	2	1 1	1	<del>  i</del>		
BA2F61-92	3	1 1	1	1	$\frac{1-\frac{2}{1}}{1}$	1 1	1	<del>                                     </del>	1	1		
BA2M61-105		1 1		1	1 1	H 1	1	1 1	1	1		
BA2M60-16	2		1	1	1 1	$\frac{1}{1}$	1 1	<del>                                     </del>	1	1 1		
BA2F59-88	2	1 1	1 1		1 1	1	1 1	1 1	$\frac{1}{1}$	1 1		
BA2M58-29	3	1	<b>}</b>	1	<u></u>	$\frac{1}{2}$	2	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{1}$	+ 1		
BA2F57-27	3	3	2	11	1 1	·	<del> </del>	<del>-</del>	1	$\frac{1}{1}$		
BA2F57-94	2	1	1	1	1	11	1	1	1	+		
BA2M55-66	1	1	1	1 :	1	1	1	1	1	1		
BA2F55-73	2	1	1	. A 1 2	1	2	1	1	1	1		
BA2F54-106	2		1	1		1	1	1	1	1		
BA2M52-53	1	1	.,	1	1	1	1	1	1	1		
BA2F52-108	4	3	1	1	1	2	2	2	2	1		
BA2M51-32	2	1	1	1	1	2	2	3	1	1		
BA2FS0-65	2	1.0		1	1	1	11	1	1	1		
BA2M49-109	1	1			1	1	1	1	1	1		
BA2F48-111	1	1	, m. 4 align a <b>1</b> considera in	-1-m1 (	1		1	1	1	1		
BA2F46-110	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
BA2F44-80	3	1	1	1	1	3	3	2	1	1		
BA2M43-59	1	1	1	1	1 <b>1</b>	1	1	1	1	1		
BA2F42-47	1		1.00	1		1	1	1	1	1		
BA2M39-42	2	1,		1	1			1	1	1 1		
BA2F36-56	1	y 1 , ne y - 2-1 <b>1</b> ne envene	1	1	1	1	1	1	1	1		
BA2M35-39	1	11		1	1			1	1 1	1		
BA2F35-60	1	1	1 - fine	1	1		1	1	1	1		
BA2M33-58	1	1		- Maria 11/200	16	1	11	1	1	1		
BA2F26-40	1	1	1		1	1		1	1.	1		
BA2M24-91	1	1 1	1		1	1			1	1		

[凡例]

1=よくできる 2=だいたいできる 3=少ししかできない 4=まったくできない